

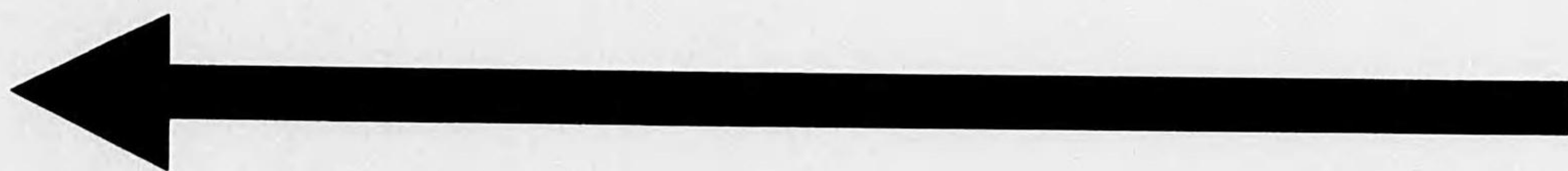
522-189ㄅ

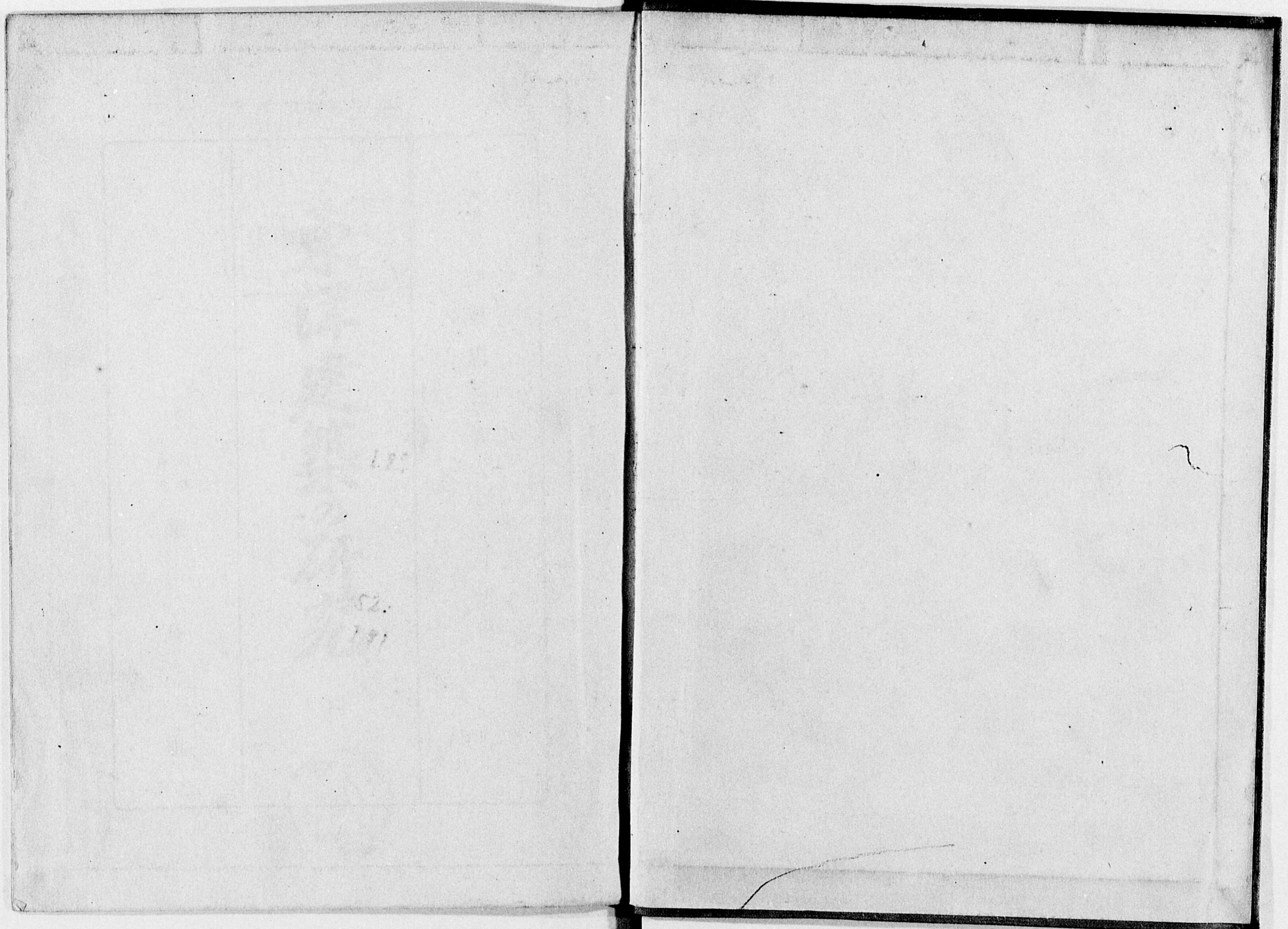


1200500745250



始



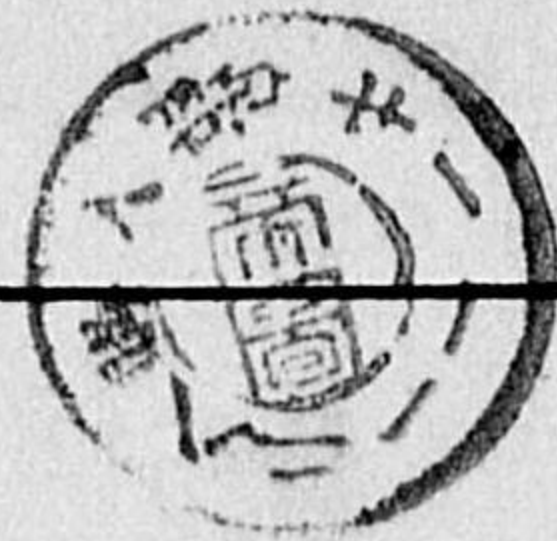


522
I-89

工學博士 伊東忠太著

東洋建築の研究

下



株式會社

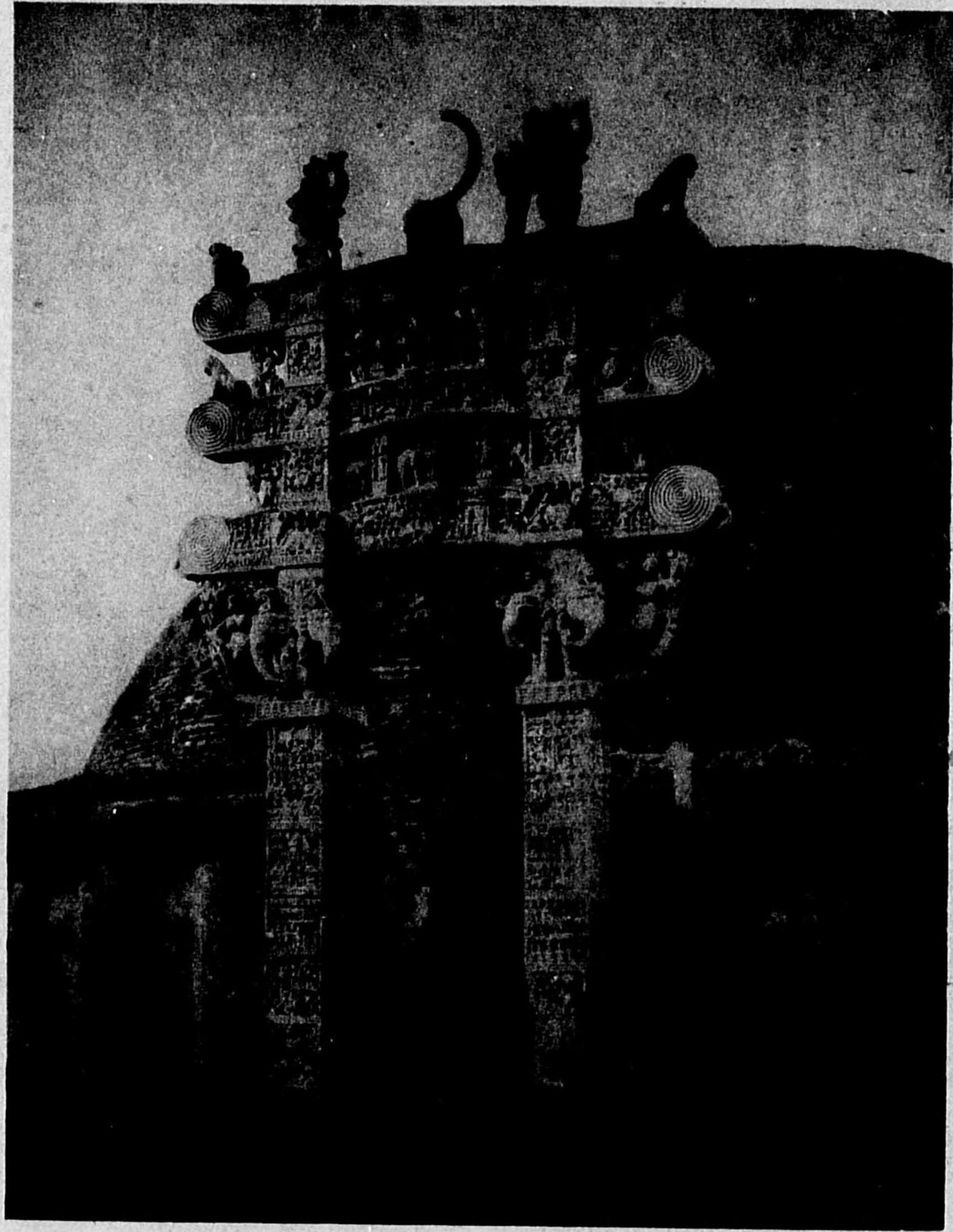
龍

吟

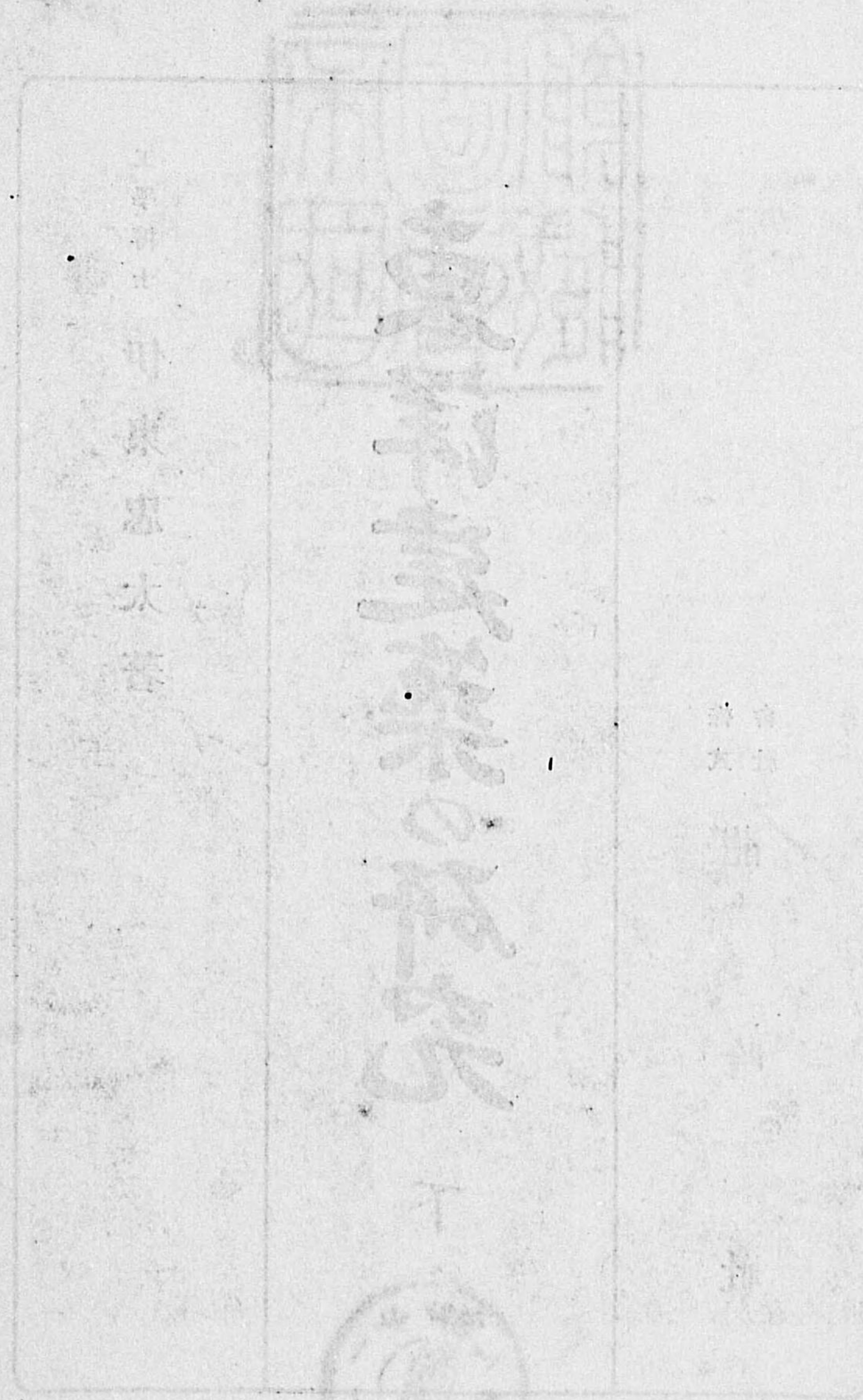
社

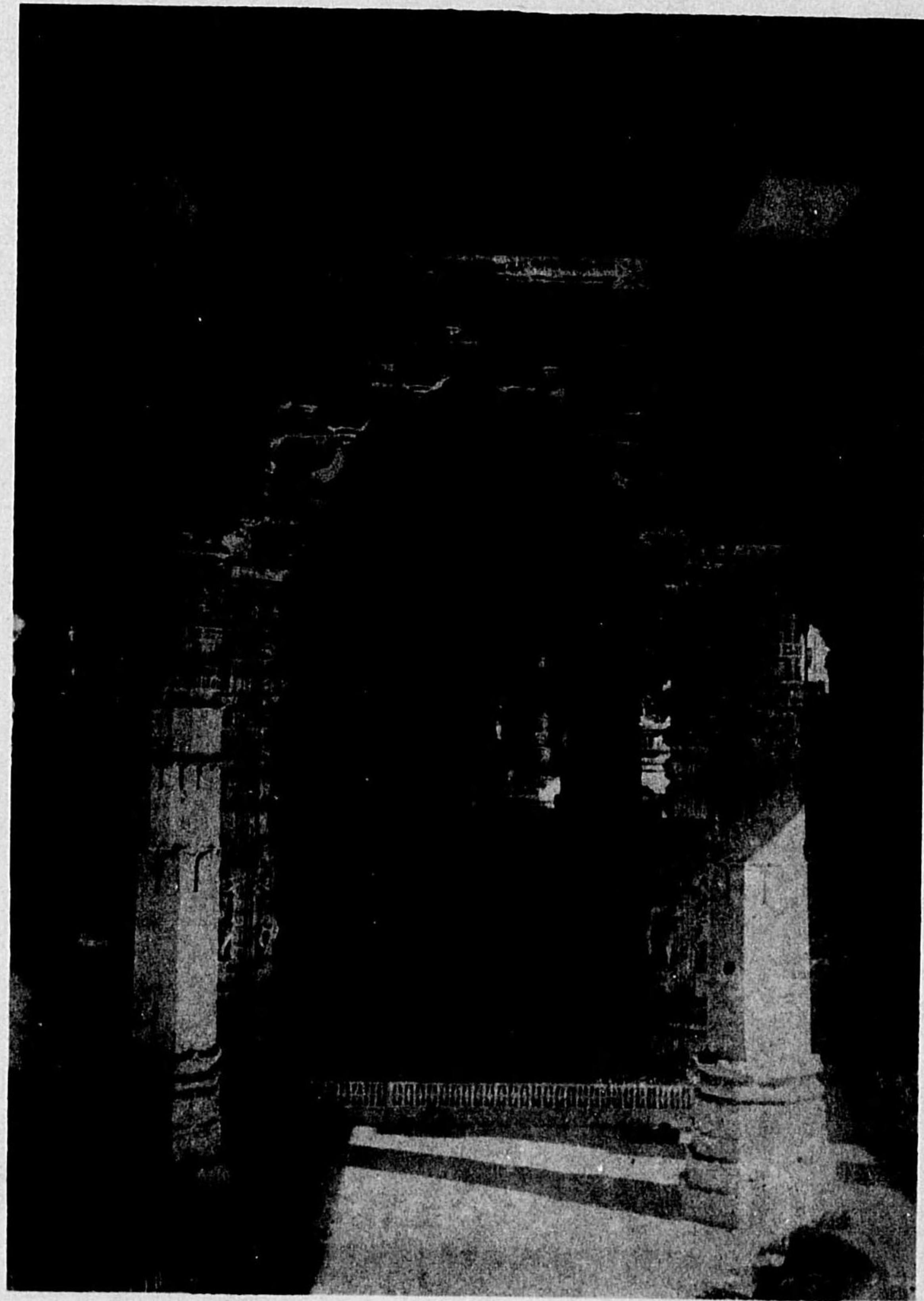
18.1

52
18.1

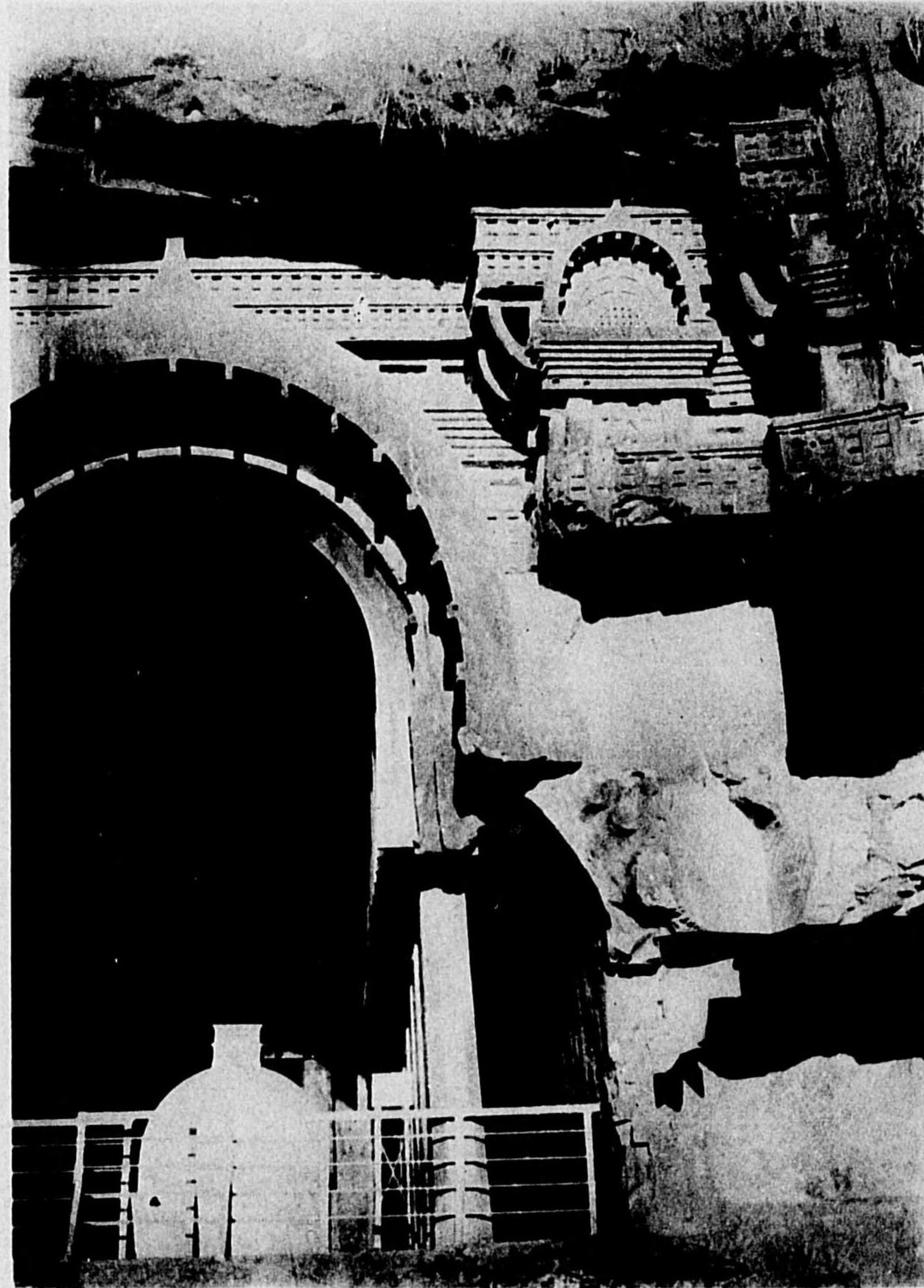


門北塔大の—チ—ナ度印 圖一一七第





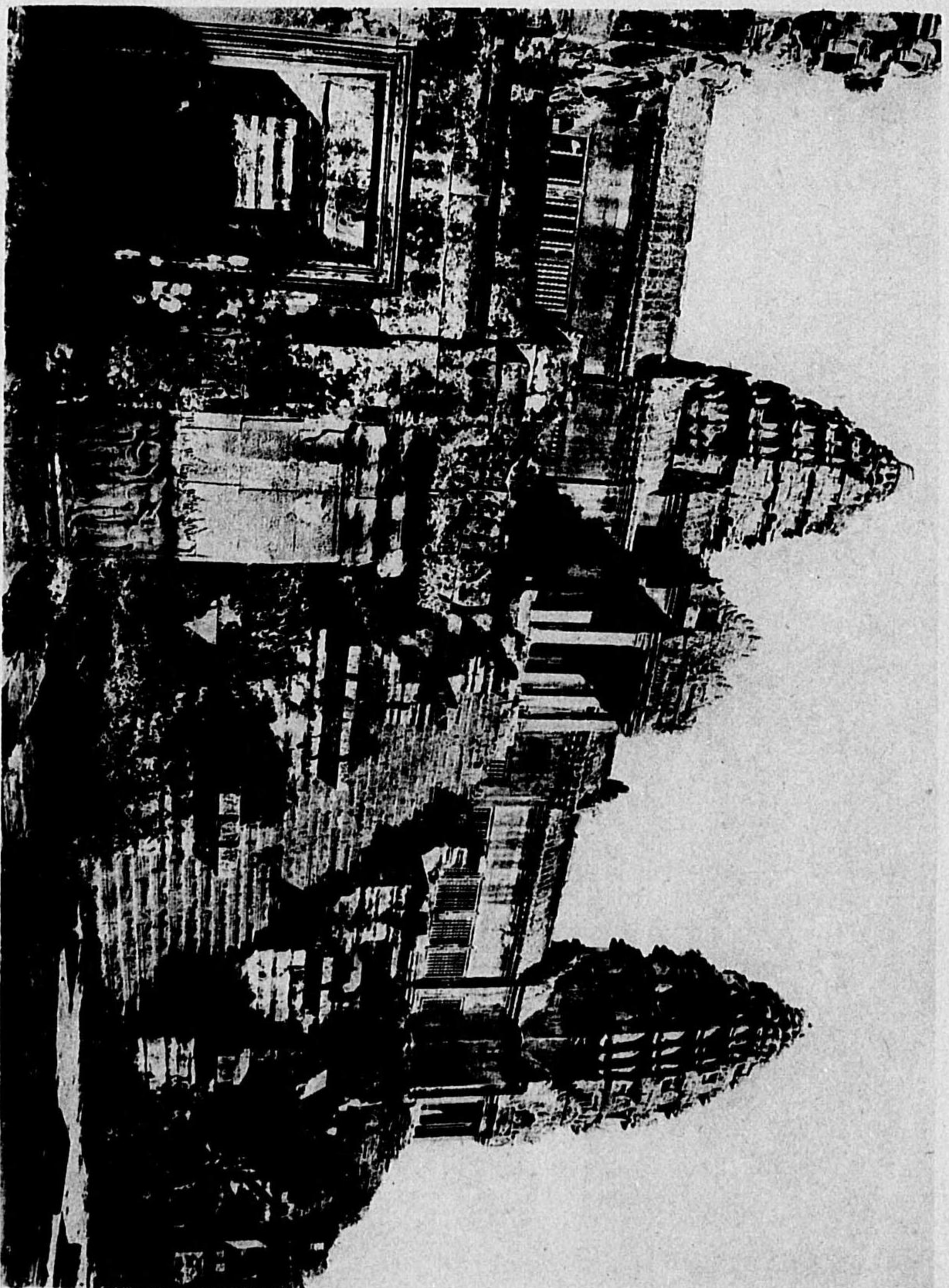
部内堂祠ラ-パヤラ山-ブア度印 圖二一七第



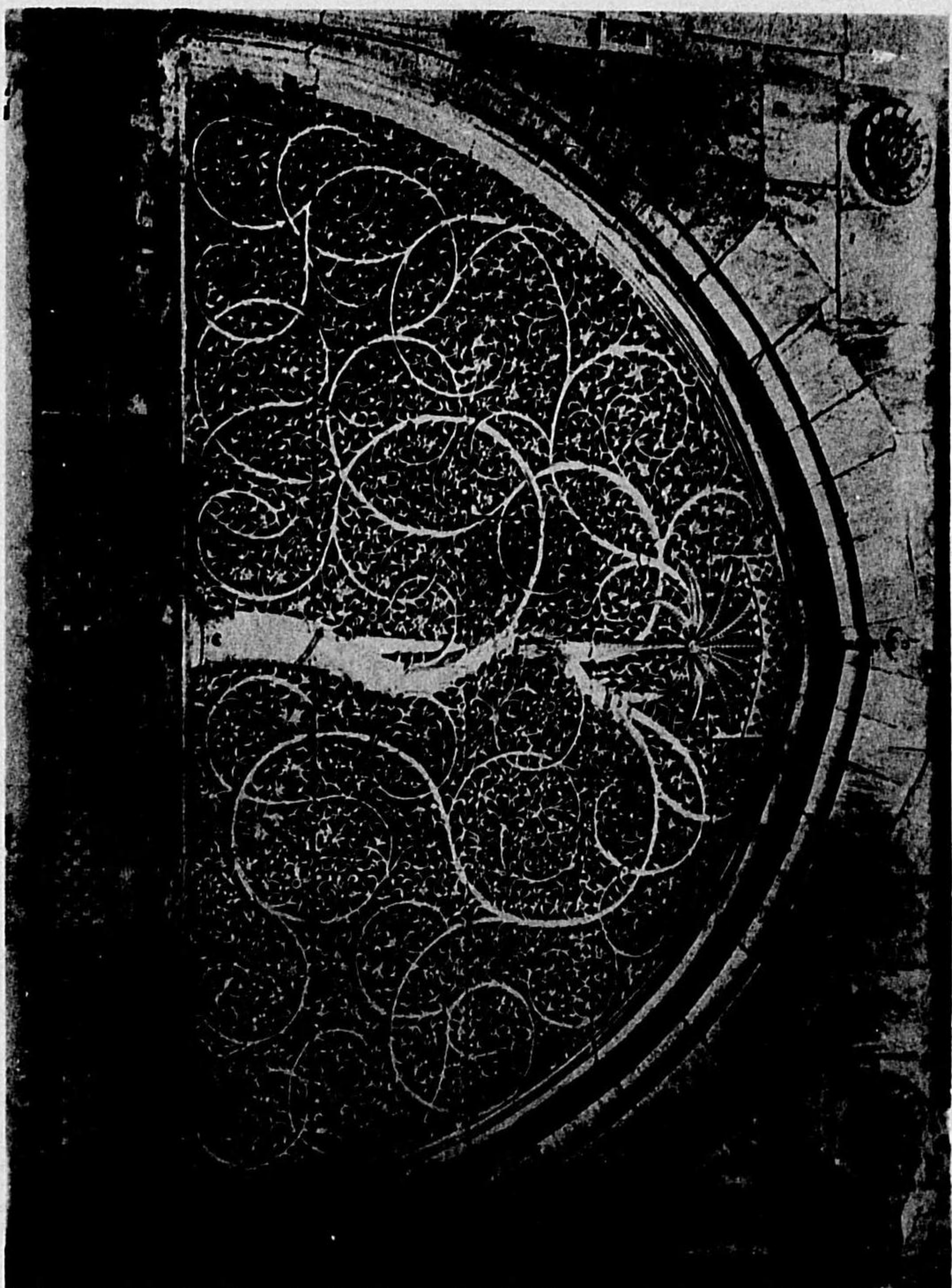
而前提支のヤジバ度印 圖三一七第



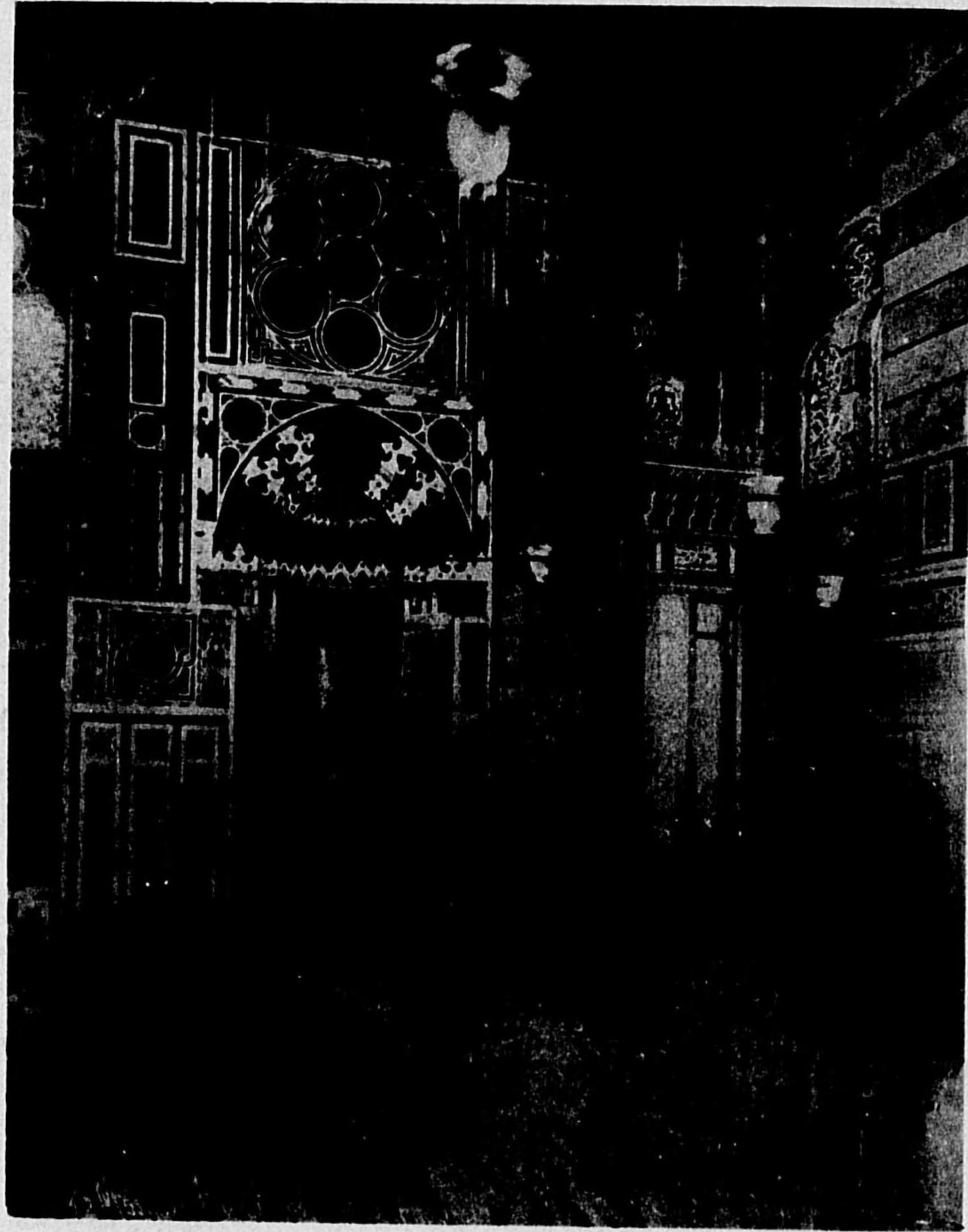
部一の垣玉トーフルーバ度印 圖四一七第



面 前 廊 三 第 ト ツ ソ ル コ ソ フ 塞 埔 東 圖 五 一 七 第



危拜禮寺ニズルボルエロイカ及埃(甲) 圖六一七第



様女飾装式トーラーヤ○ジグ度印(乙) 圖六一七第

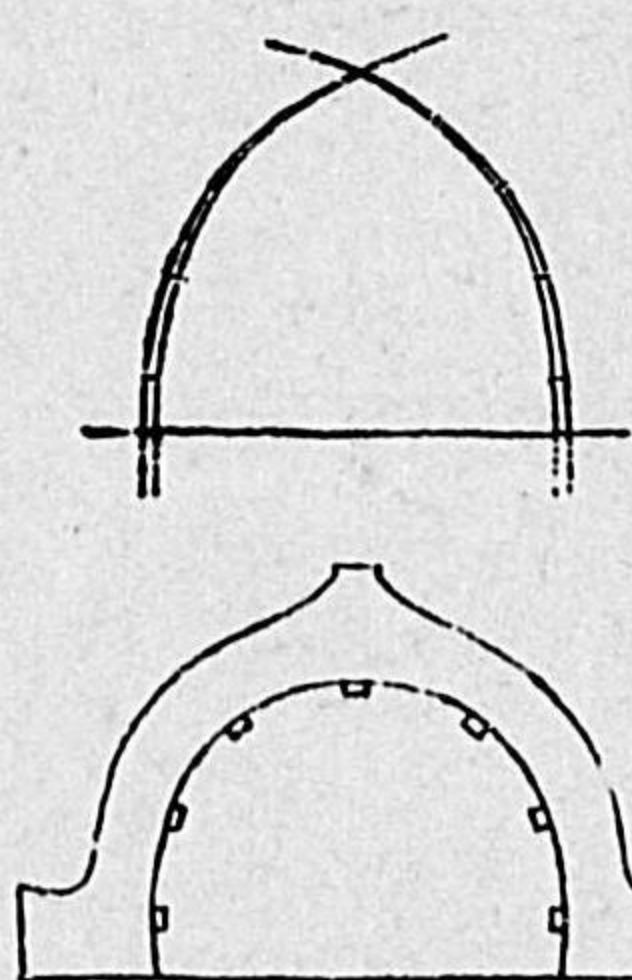
(寺ドワイイサ・ギン ド・メダローア)



塔大の耶伽陀佛度印 圖七一七第

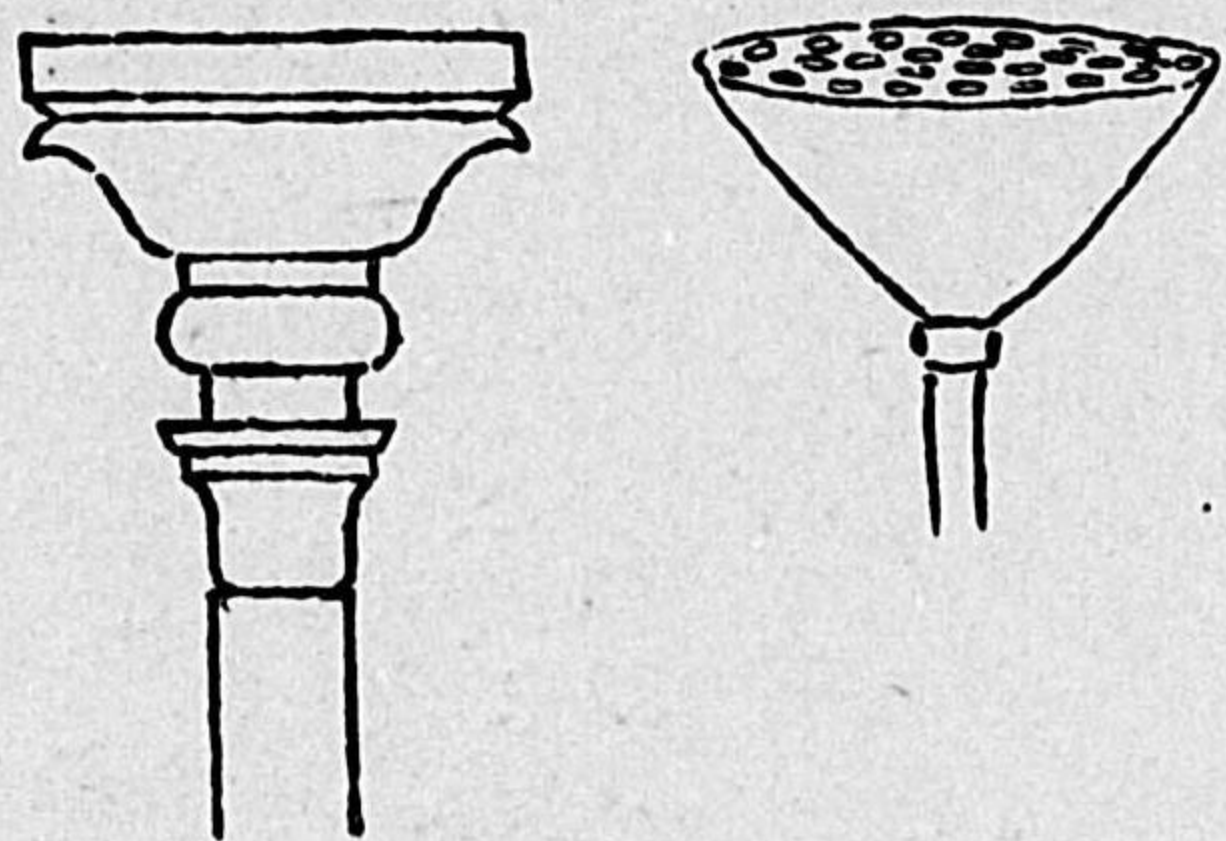
(1) 圖附史築建度印

印度式尖拱圖



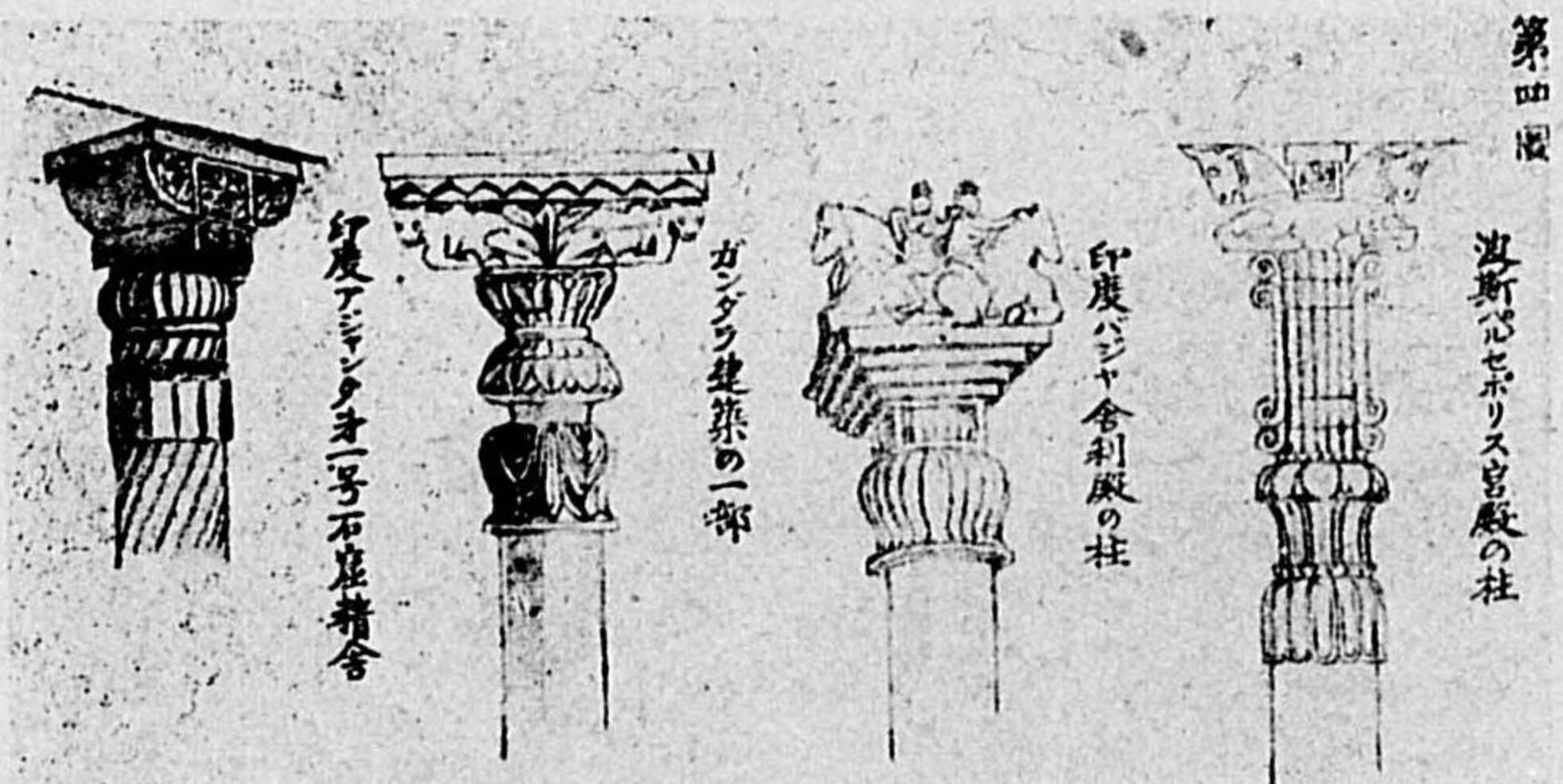
第七一八圖

第七一九圖



圖〇二七第
柱築建度印の説氏ルエウハ

→ 第七二一圖
印度古建築に残る柱四種



第四版

波斯ルネリス宮殿の柱

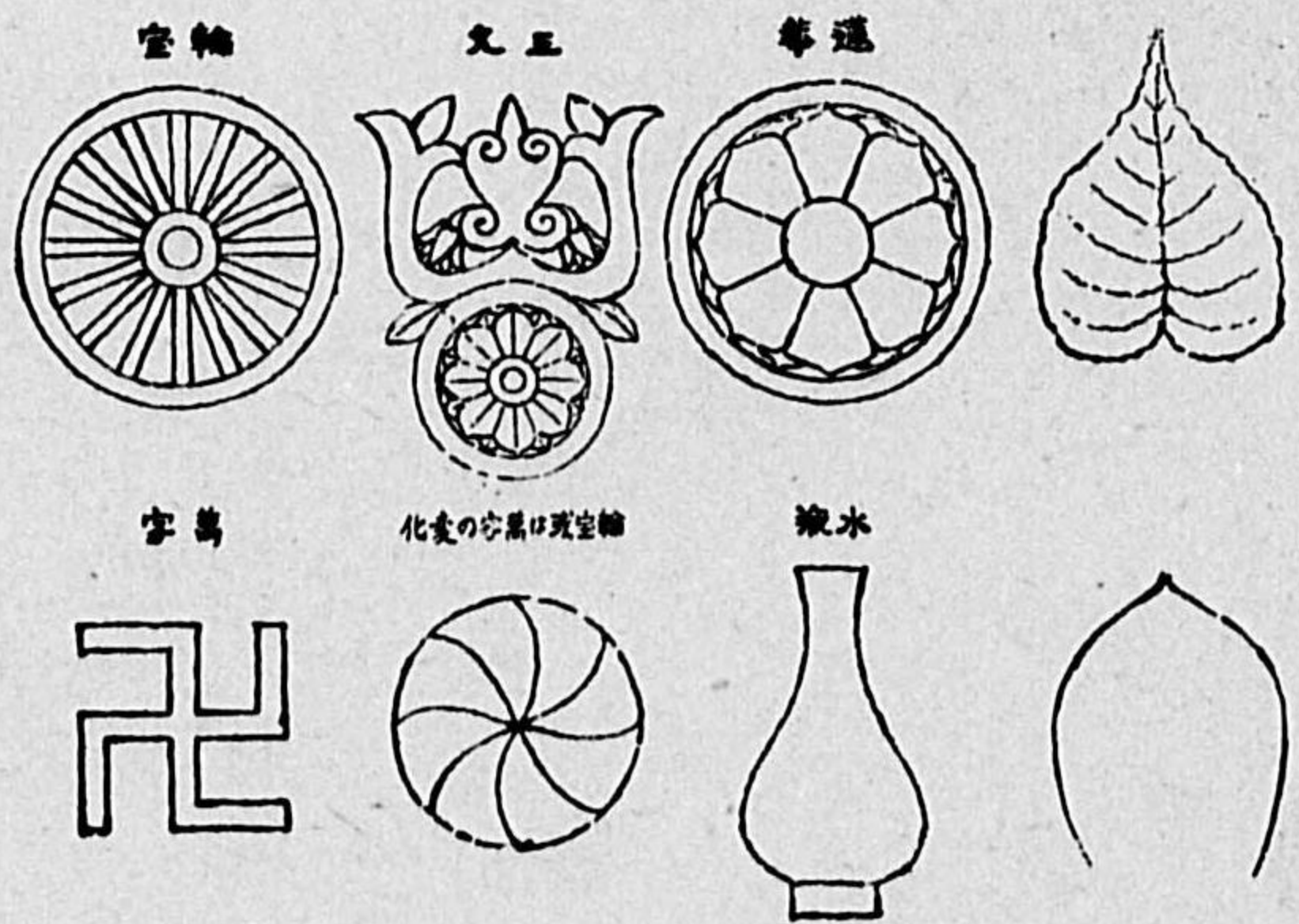
印度バヤ舍利殿の柱

ガングラ建築の部

印度のミナタキ子石塔精舎

← 第七二二圖

建築の細部に現れたる印度信仰の表象



蓮華の葉

蓮華

蓮華

化臺の心葉は蓮華

字萬

空輪

文五

華蓮

(3) 圖附史築建度印



種三頭柱の柱石玉育亞圖六二七第

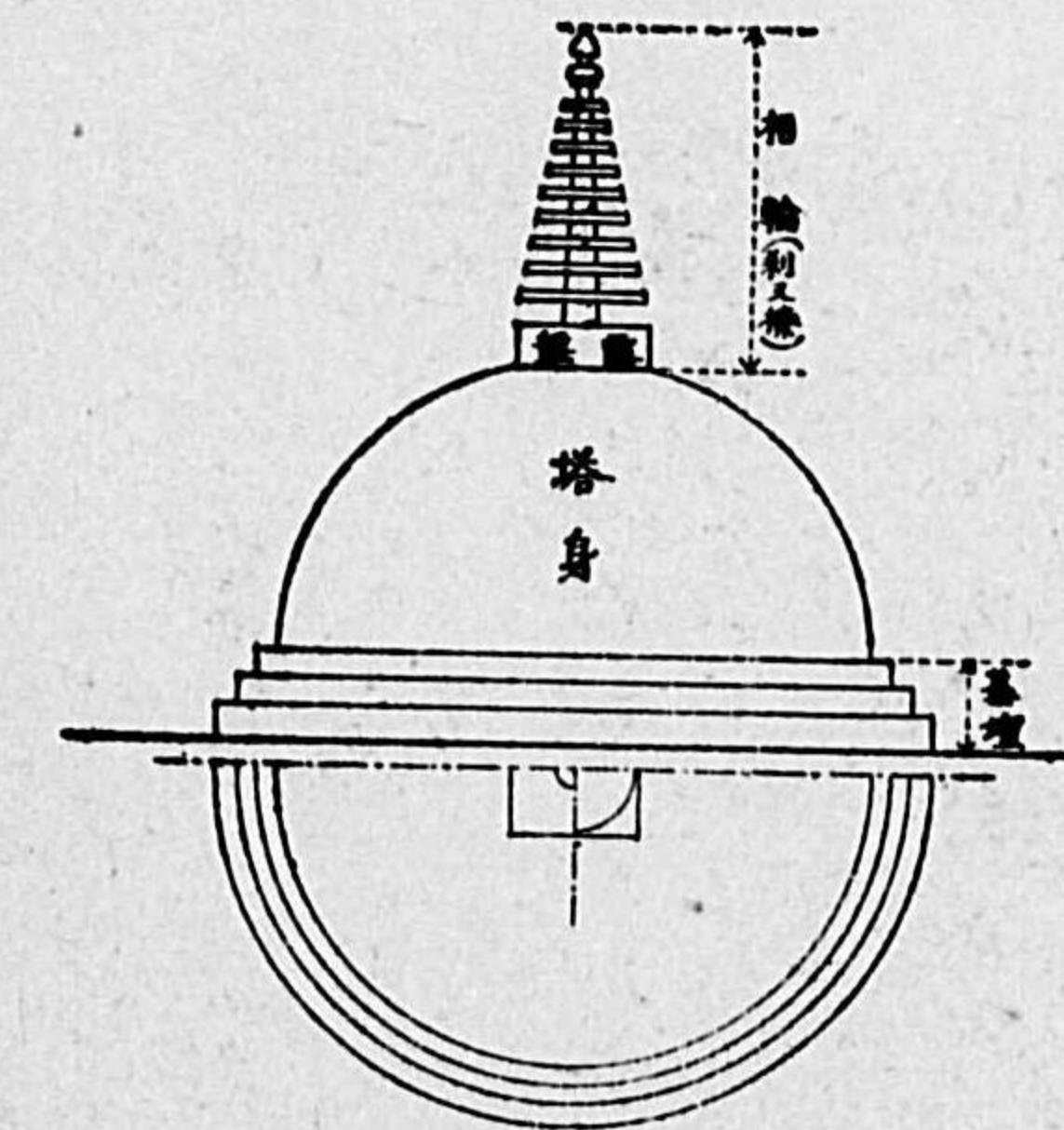
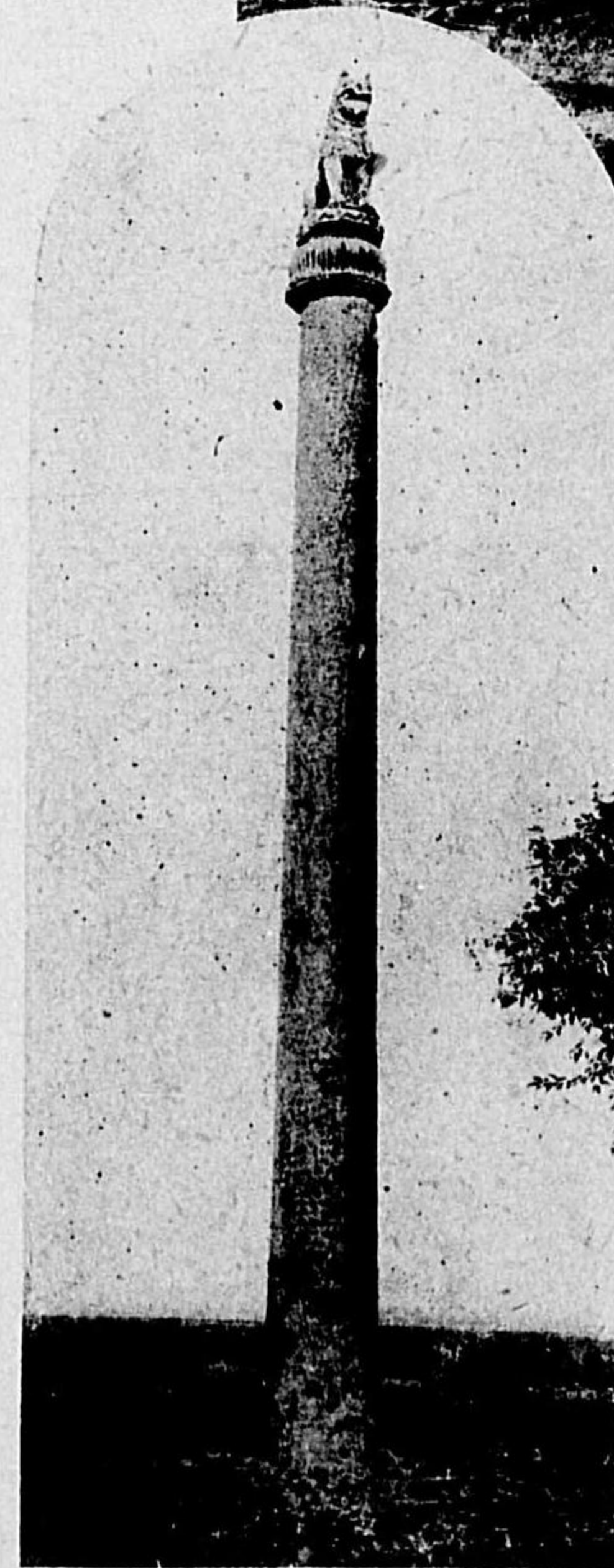


部一の垣玉トーフルーバ圖七二七第

(2) 圖附史築建度印



址古の苑野鹿圖三二七第



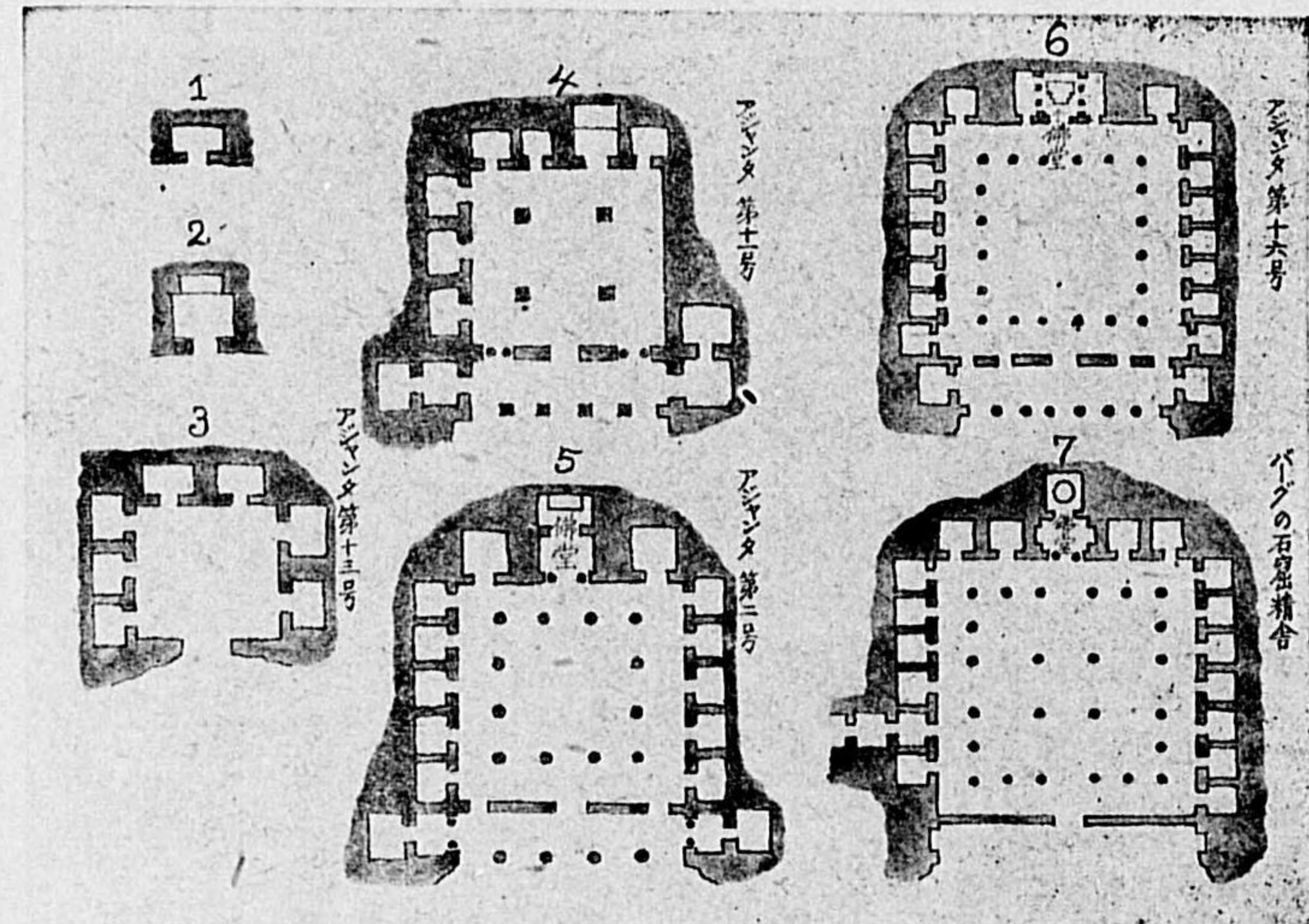
型原の塔度印圖四二七第

圖五二七第

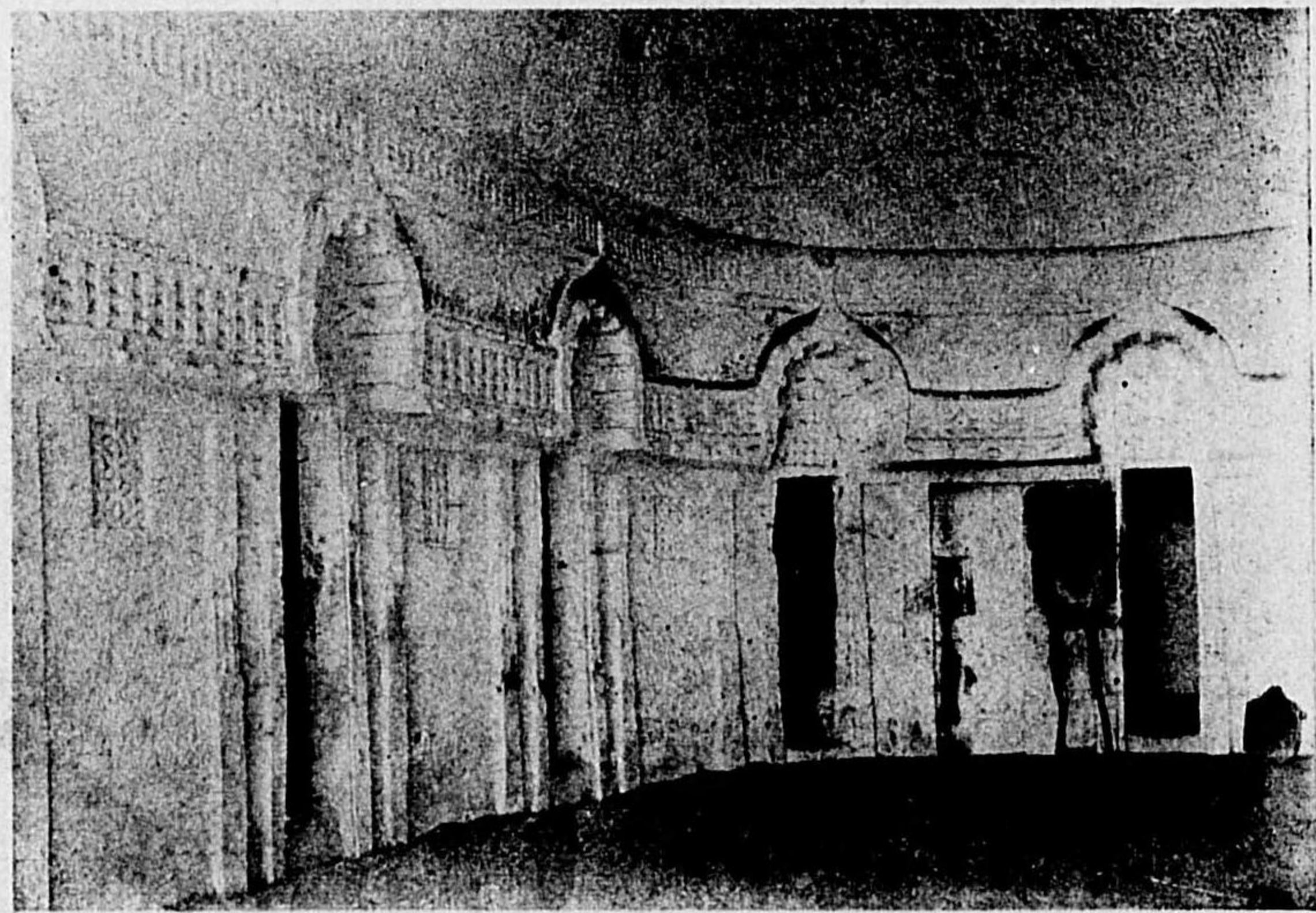
のフルガンダナ・アリウラ

柱石玉育亞

(5) 圖附史築建度印

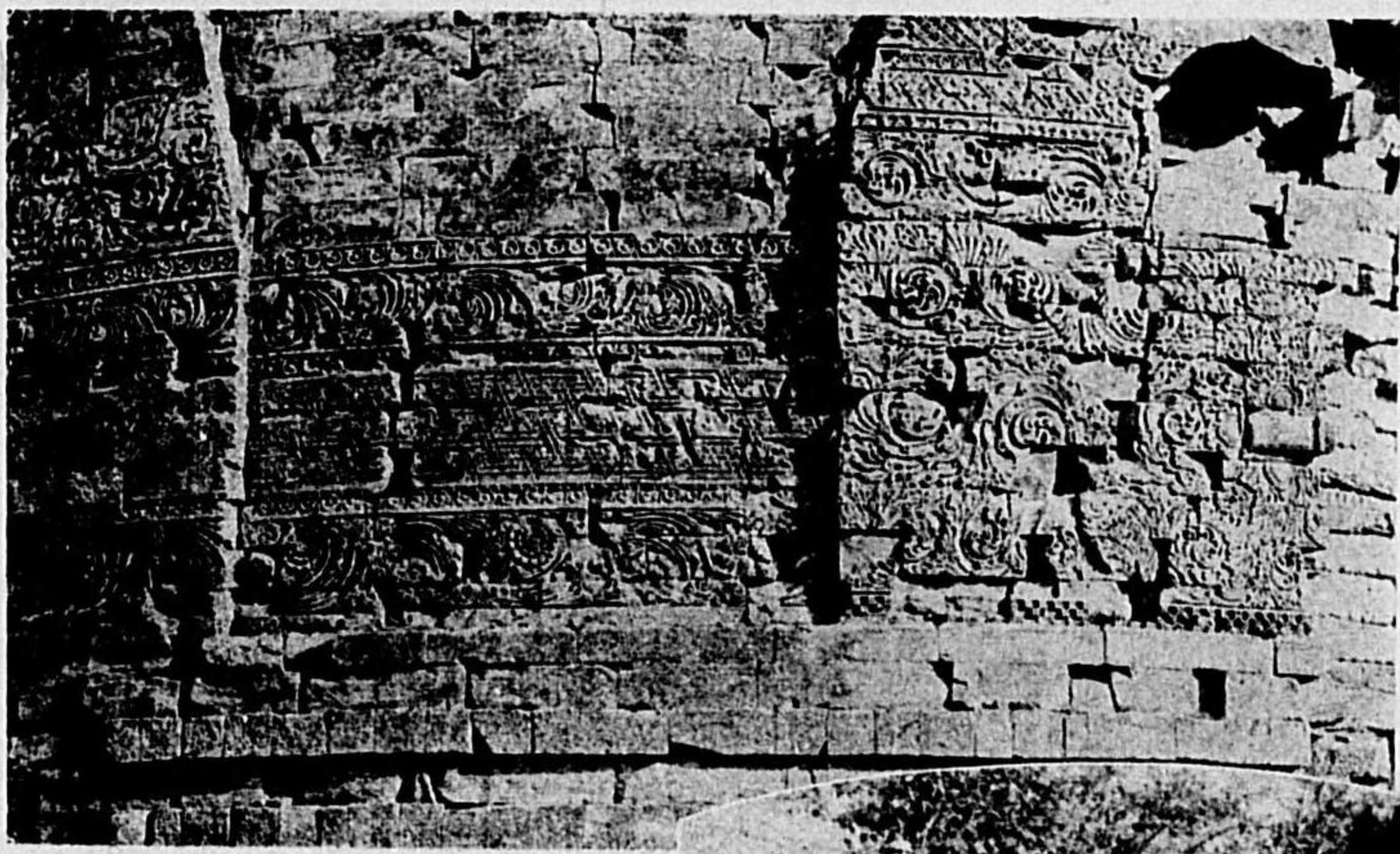


圖面平令精種各圖一三七第



舍精のサドベ圖二三七第

(4) 圖附史築建度印



圖八二七第 (上)

塔大のーチンーサ

圖九二七第 (中)

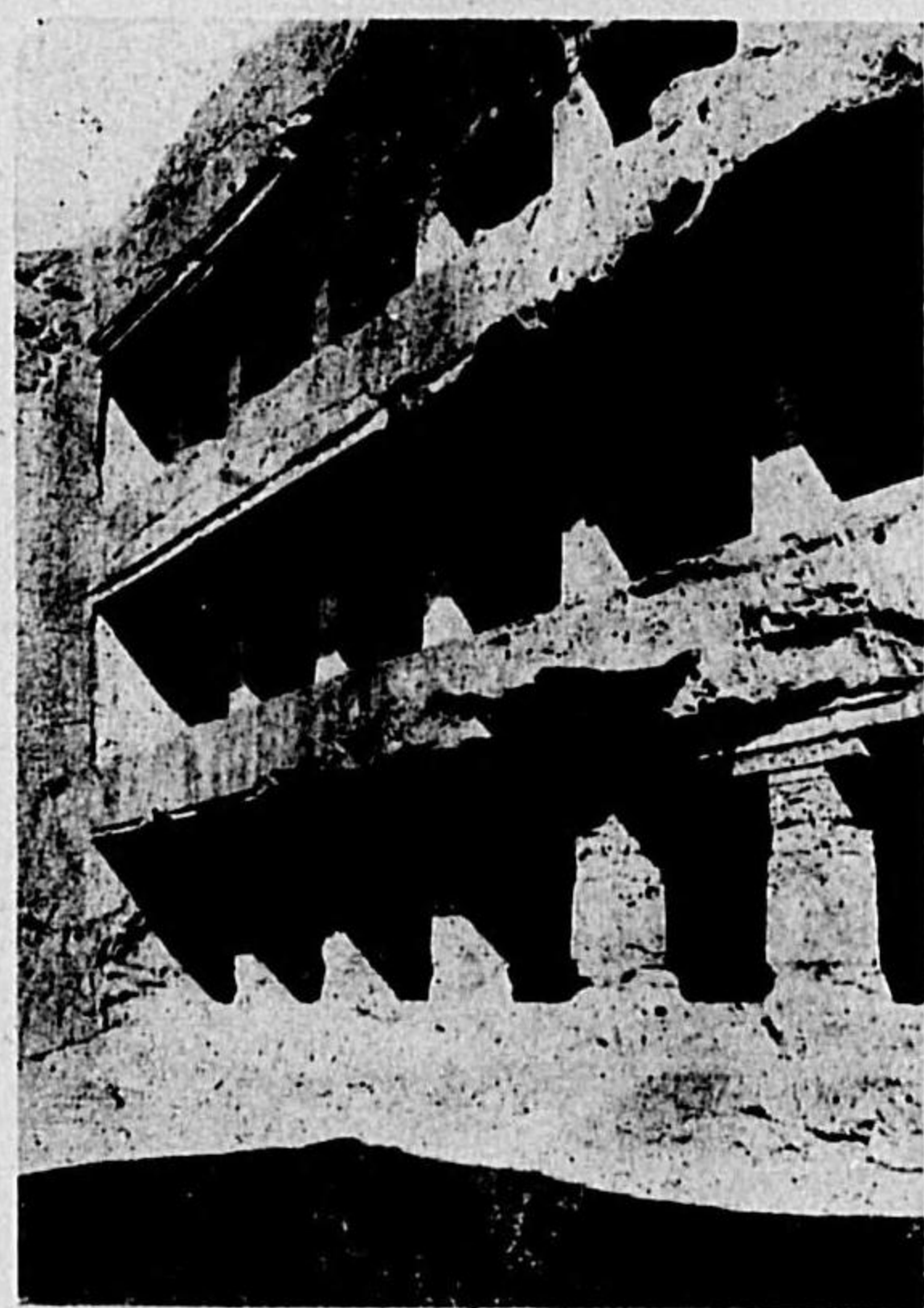
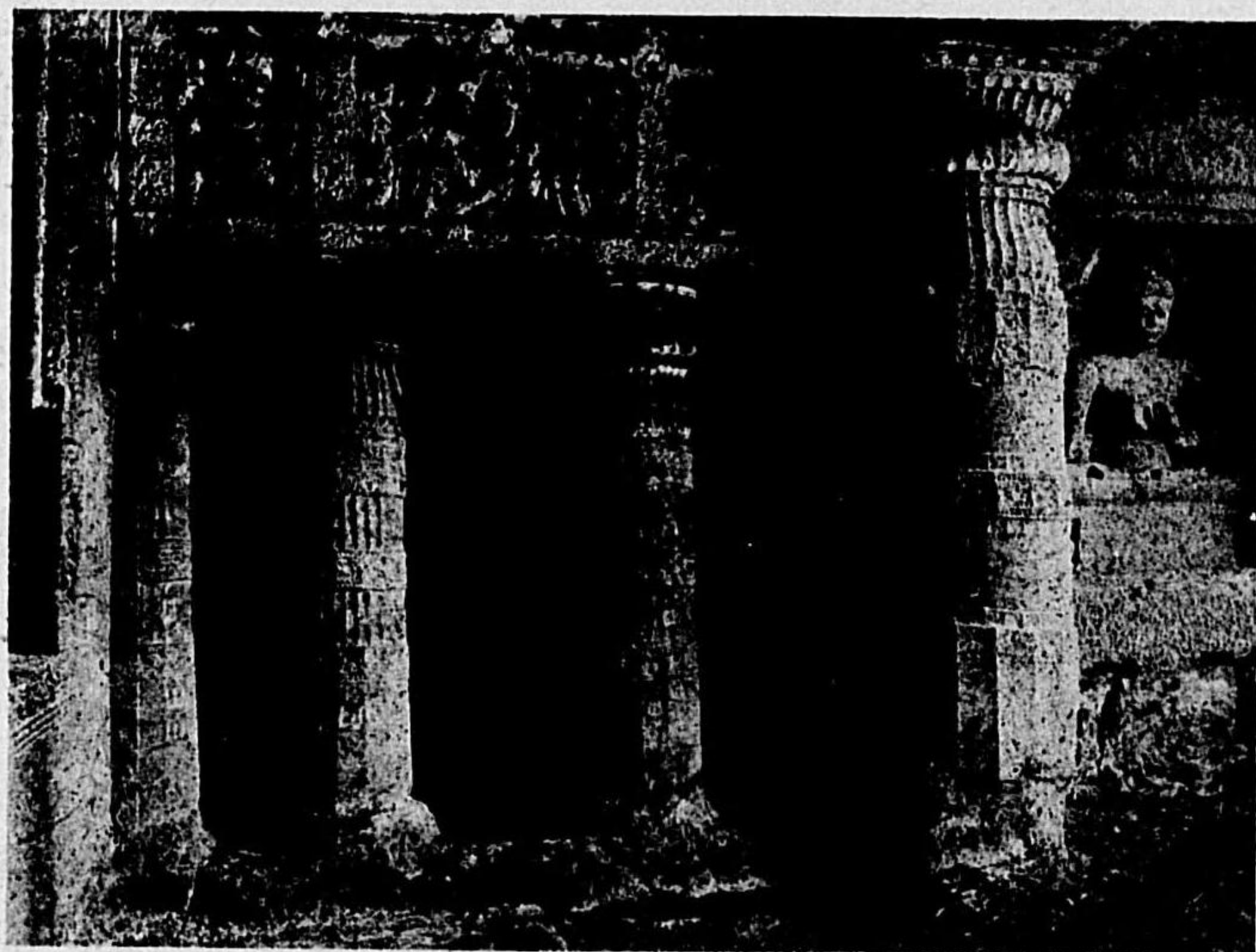
様文の面表塔大の苑野鹿

圖〇三七第 (下)

塔養供の耶迦陀佛

(7) 圖附史築建度印

第七五六圖
ルワンウエリ塔平面圖



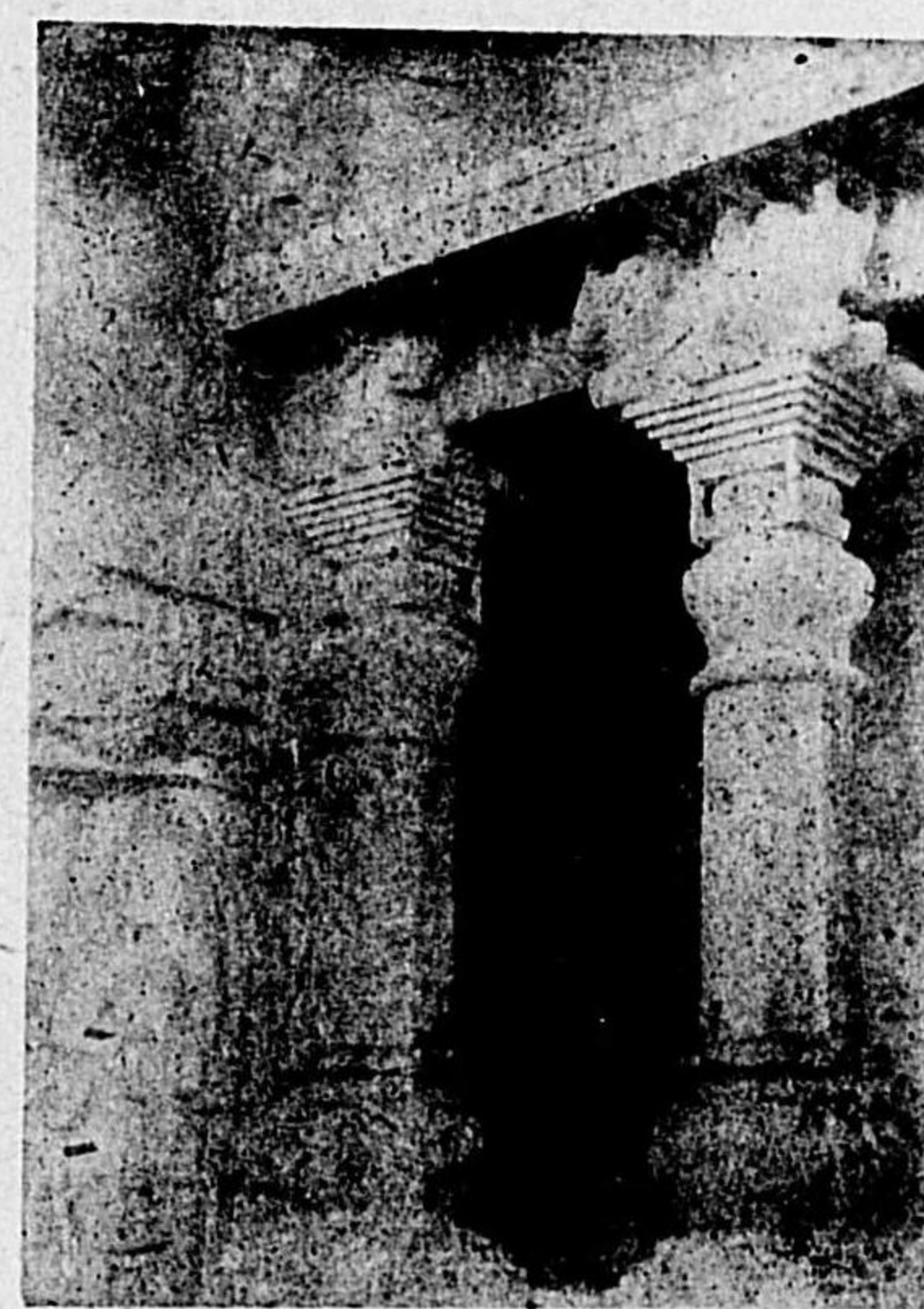
↑ ルタンチのラーロエ 圖八三七第

← 圖七三七第
篆文内窟舍精號二第タンヤジア

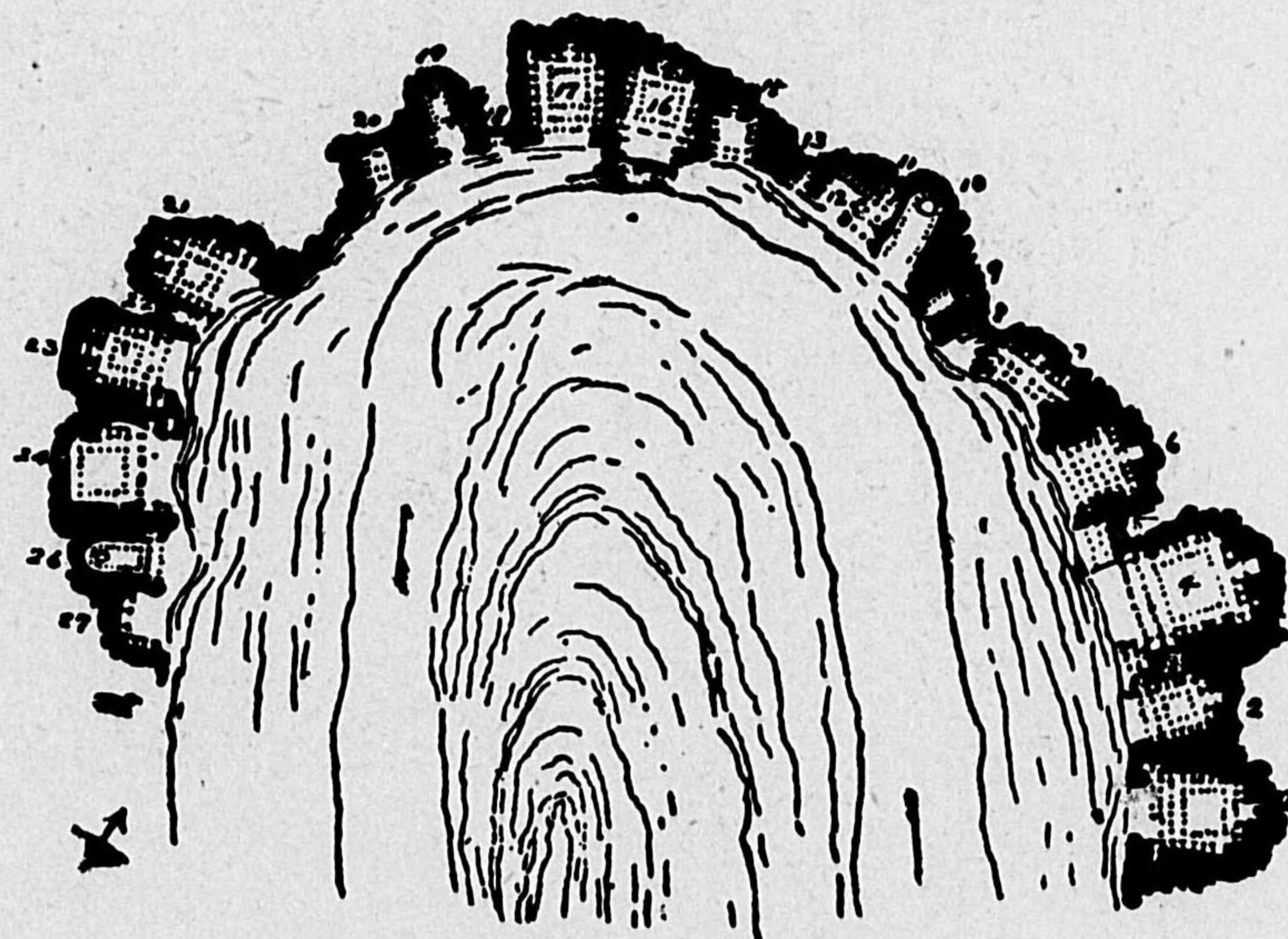
(6) 圖附史築建度印



圖四三七第
舍精ラトブミターゴのクシーナ



舍精ナベハナのクシーナ 圖三三七第

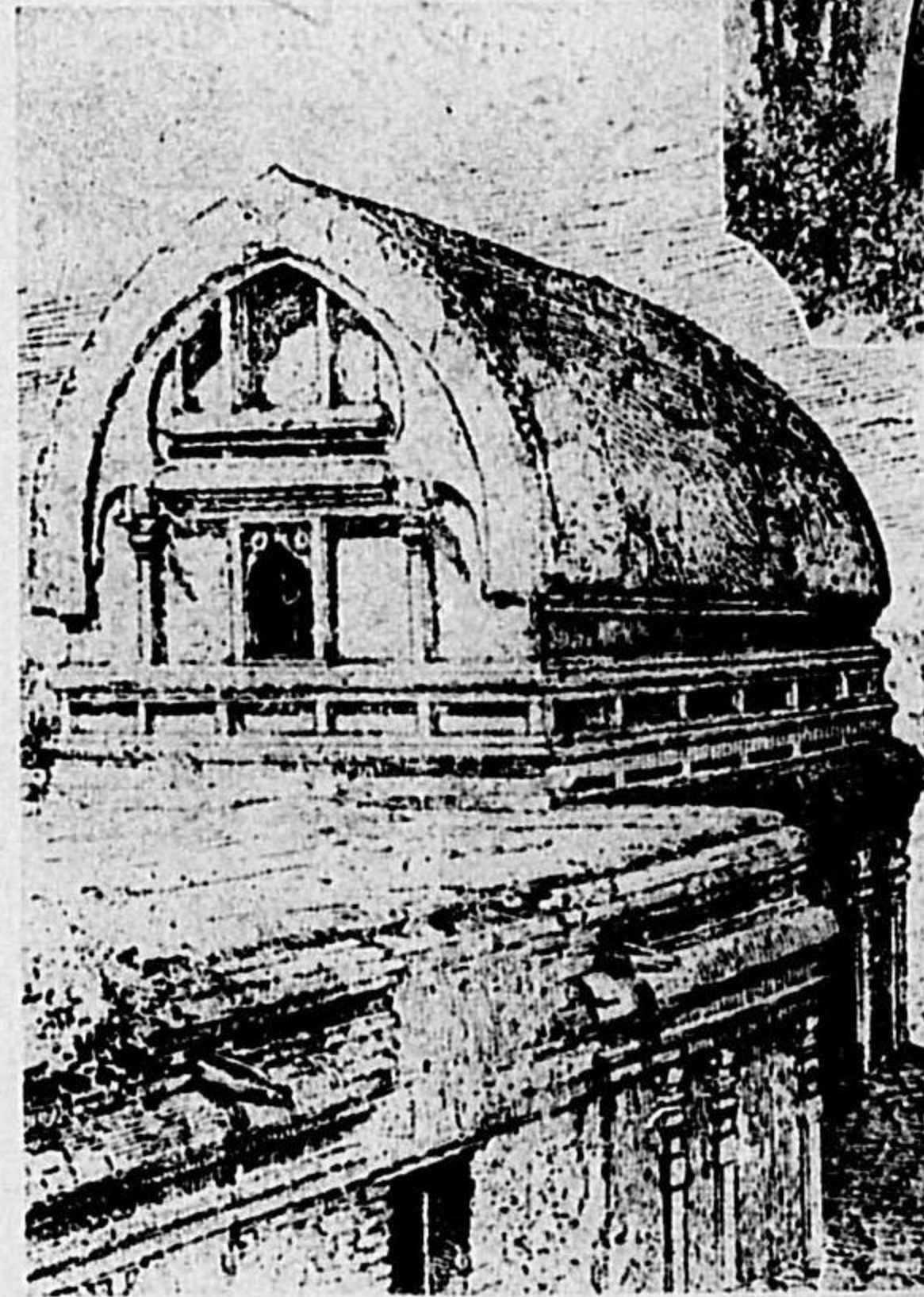


圖置配窟石タンヤジア 圖五三七第

(9) 圖附史築建度印



圖二四七第 ↑
口人の窟シリ・スマロ

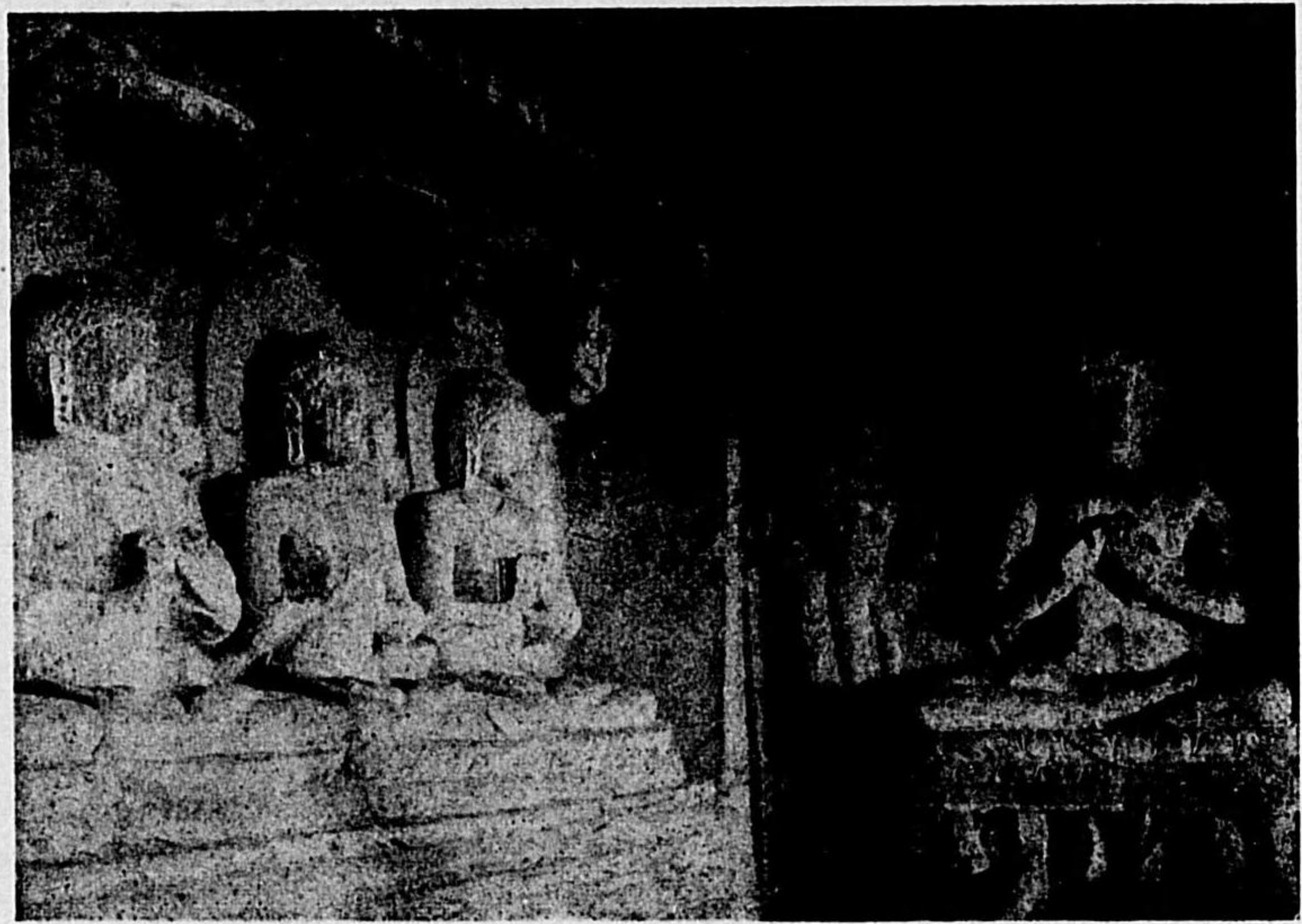


圖一四七第 ↑
柱支のルーテ

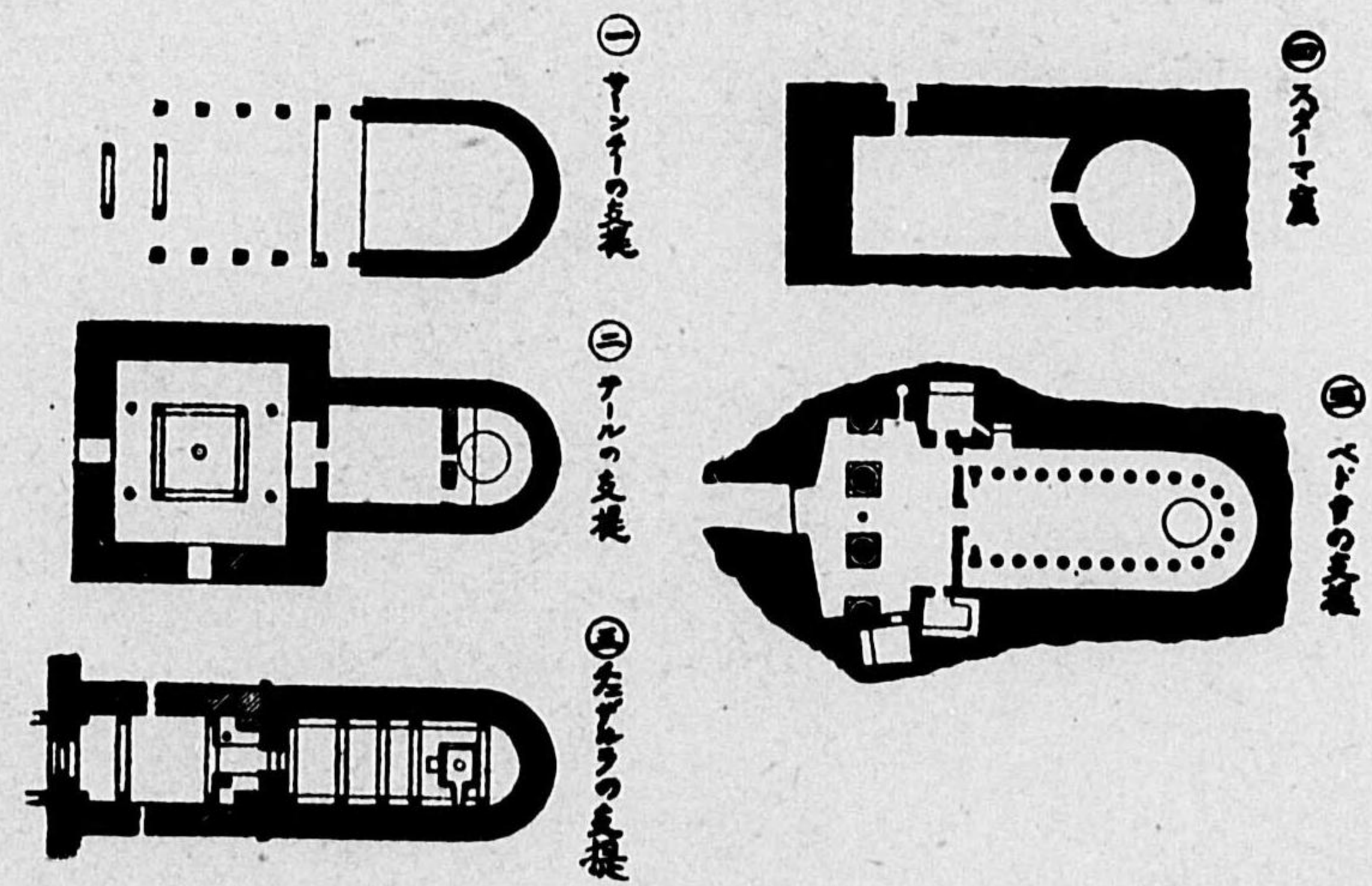


圖三四七第 →
面前提支のサドベ

(8) 圖附史築建度印



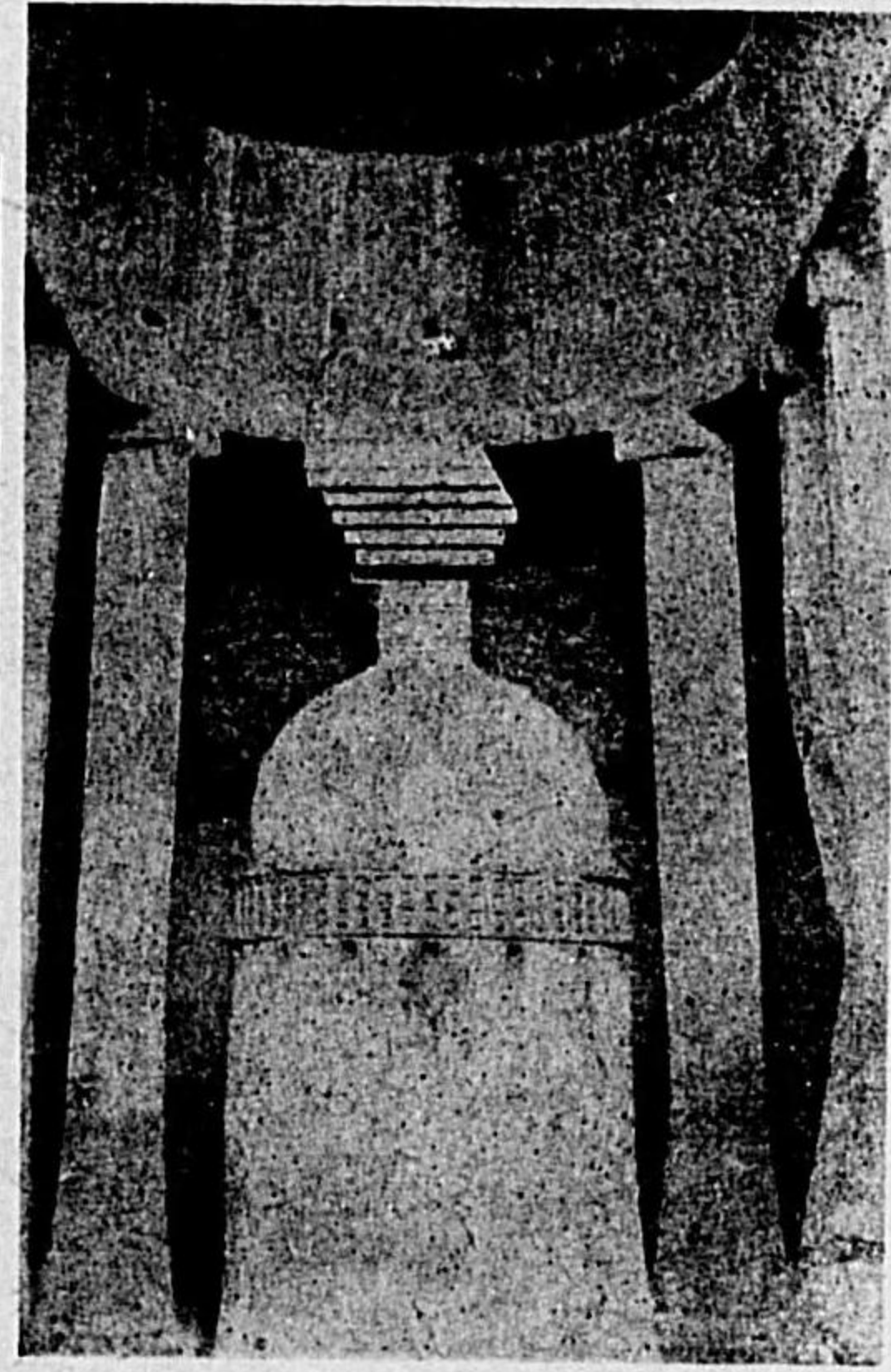
像佛層三第ルナンチ 圖九三七第



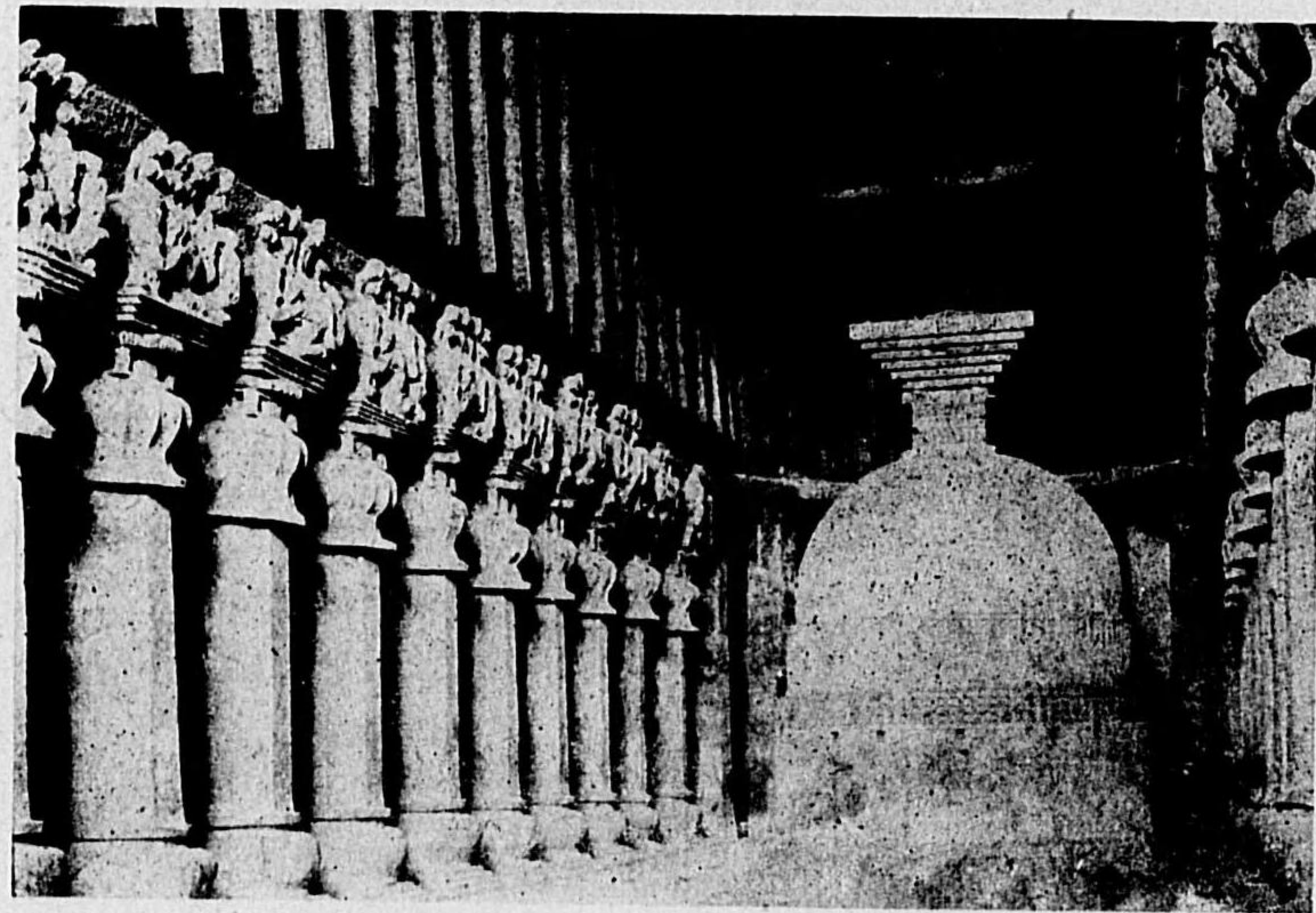
種五圖面平の提支 圖〇四七第

(11) 圖 附 史 築 建 度 印

面前提支のラルーカ 圖八四七第



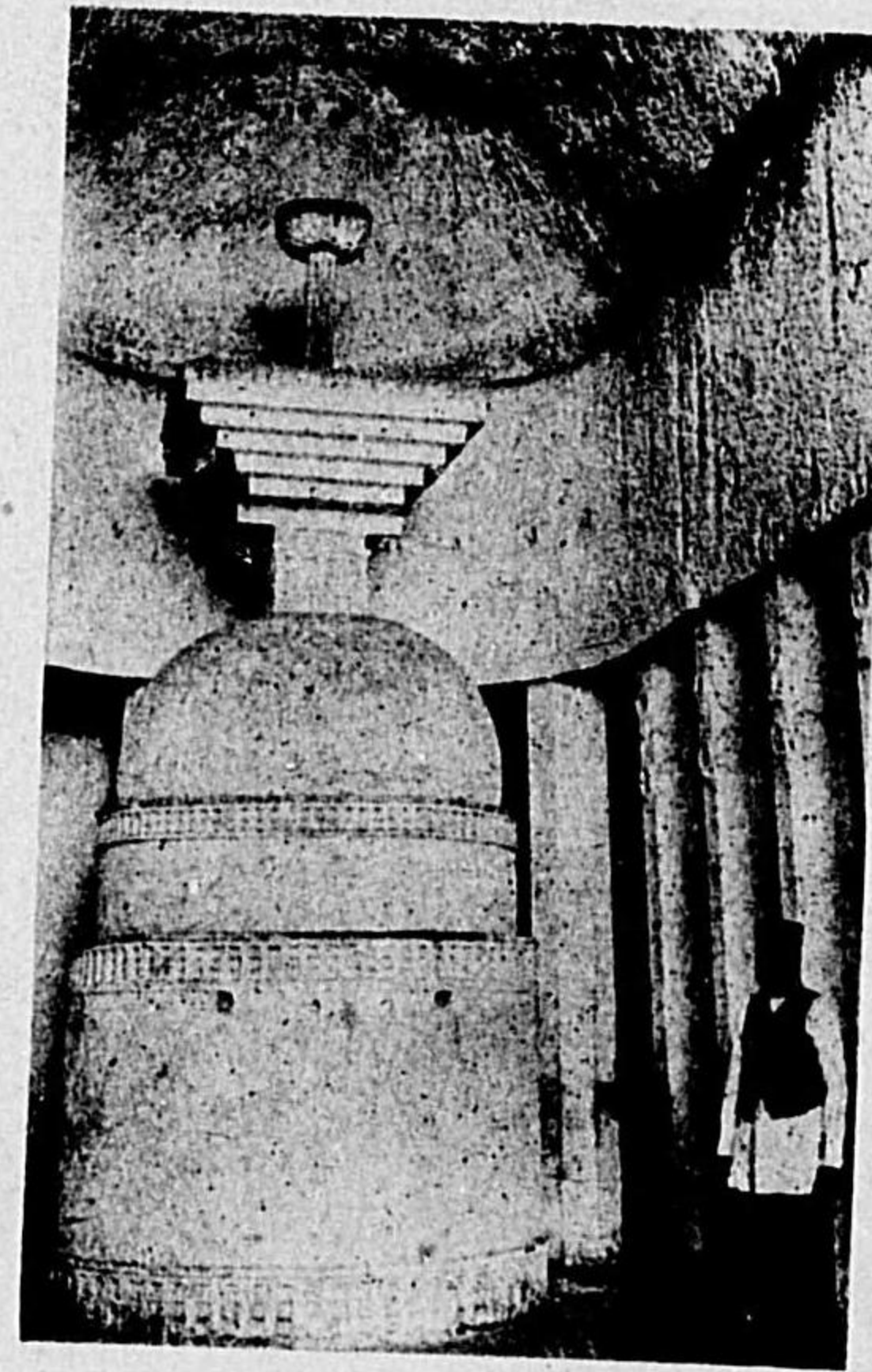
部内提支のクレーナ 圖六四七第



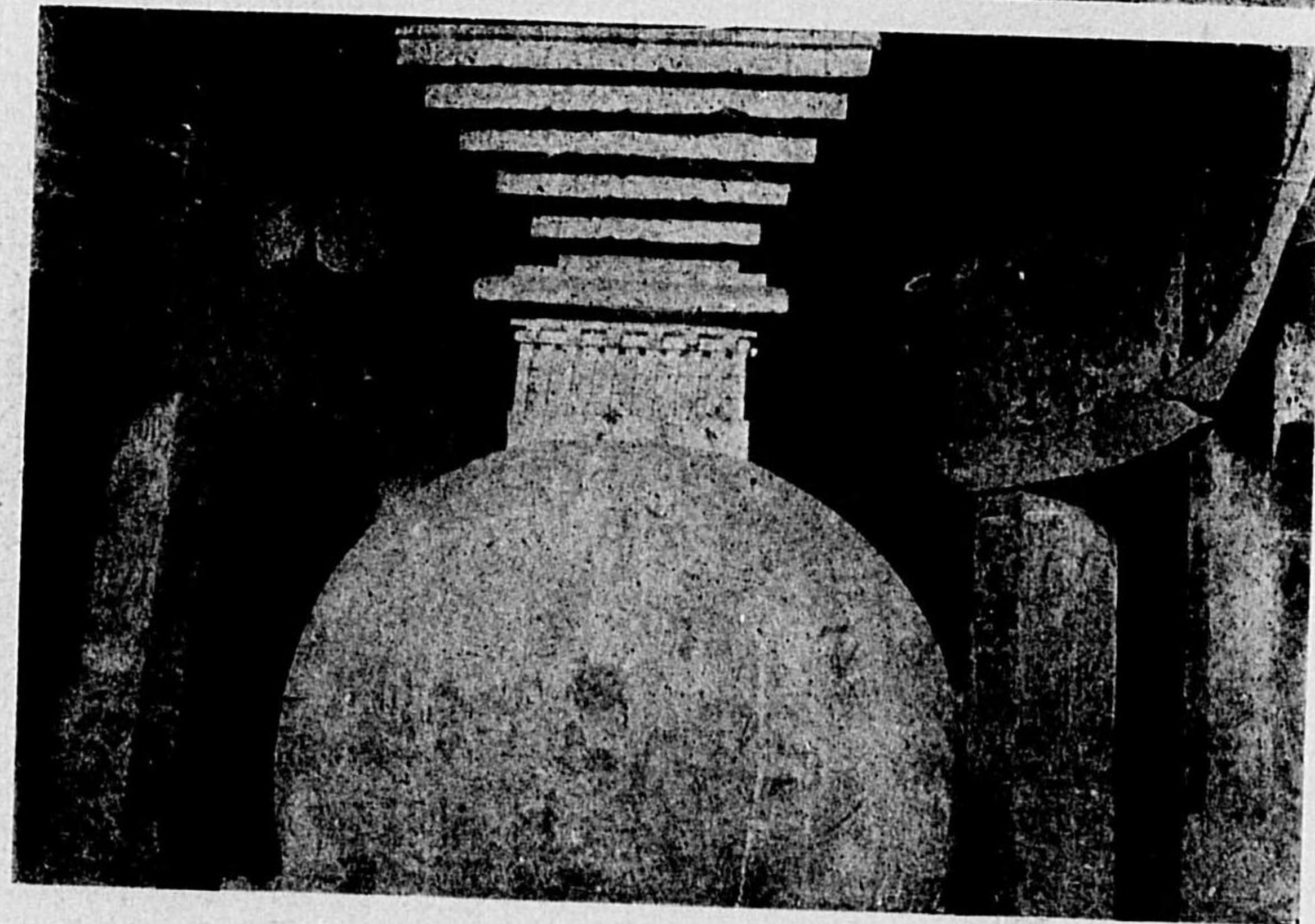
部内提支のラルーカ 圖九四七第

(10) 圖 附 史 築 建 度 印

面前提支のクレーナ 圖五四七第 ↓

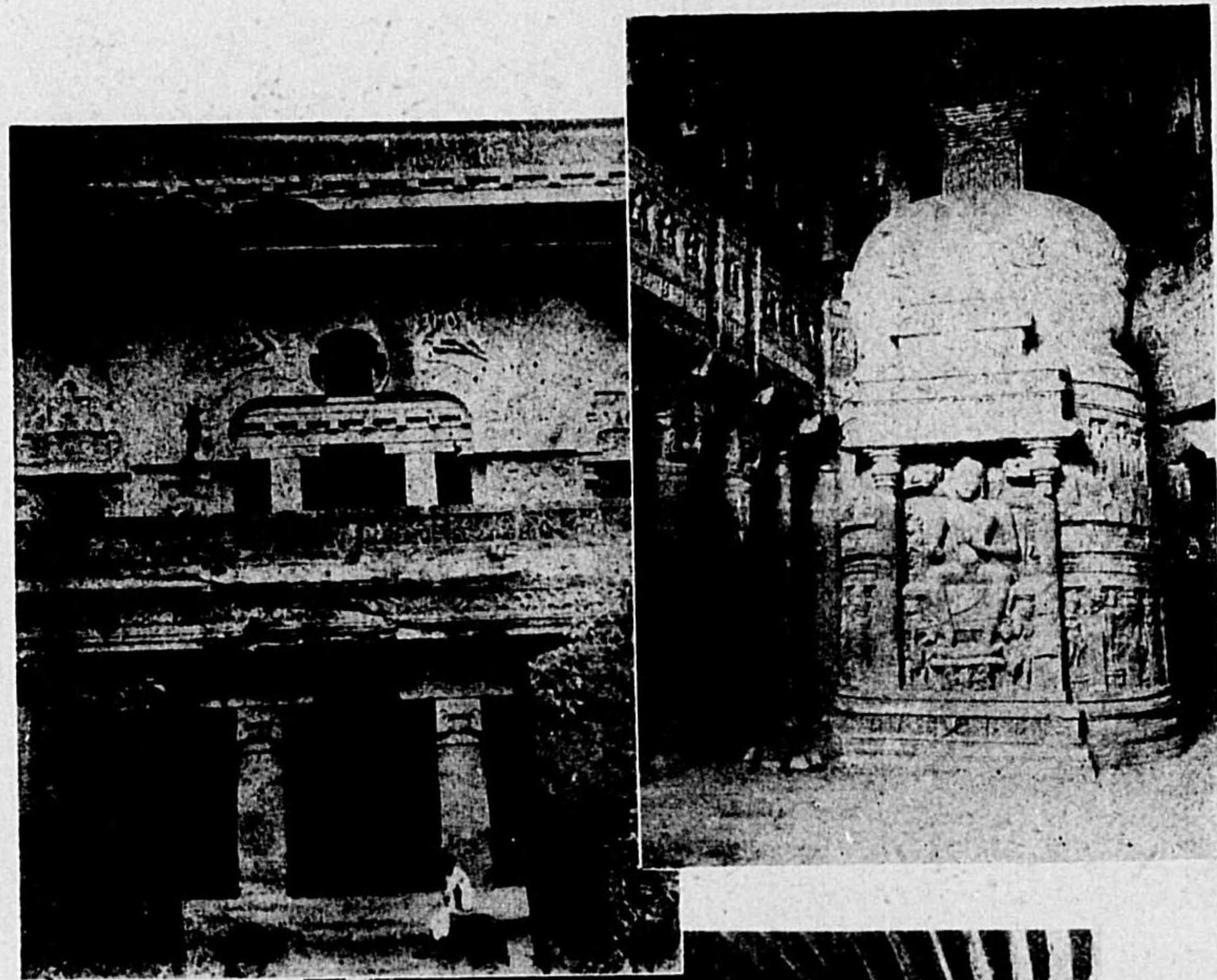


部内提支のサドベ 圖四四七第 ↑

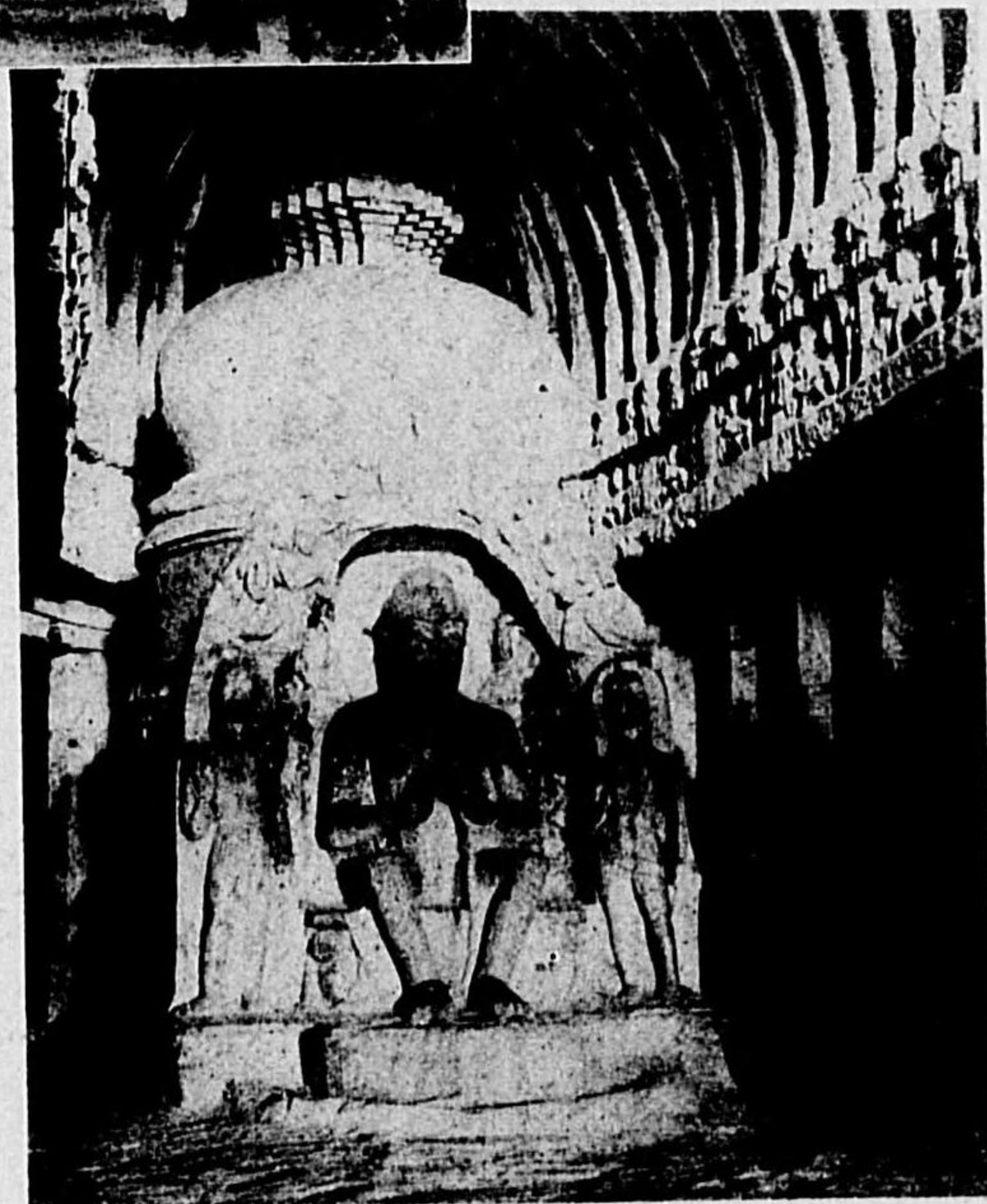


部内提支第十第メンヤジア 圖七四七第

(13) 圖附史築建度印

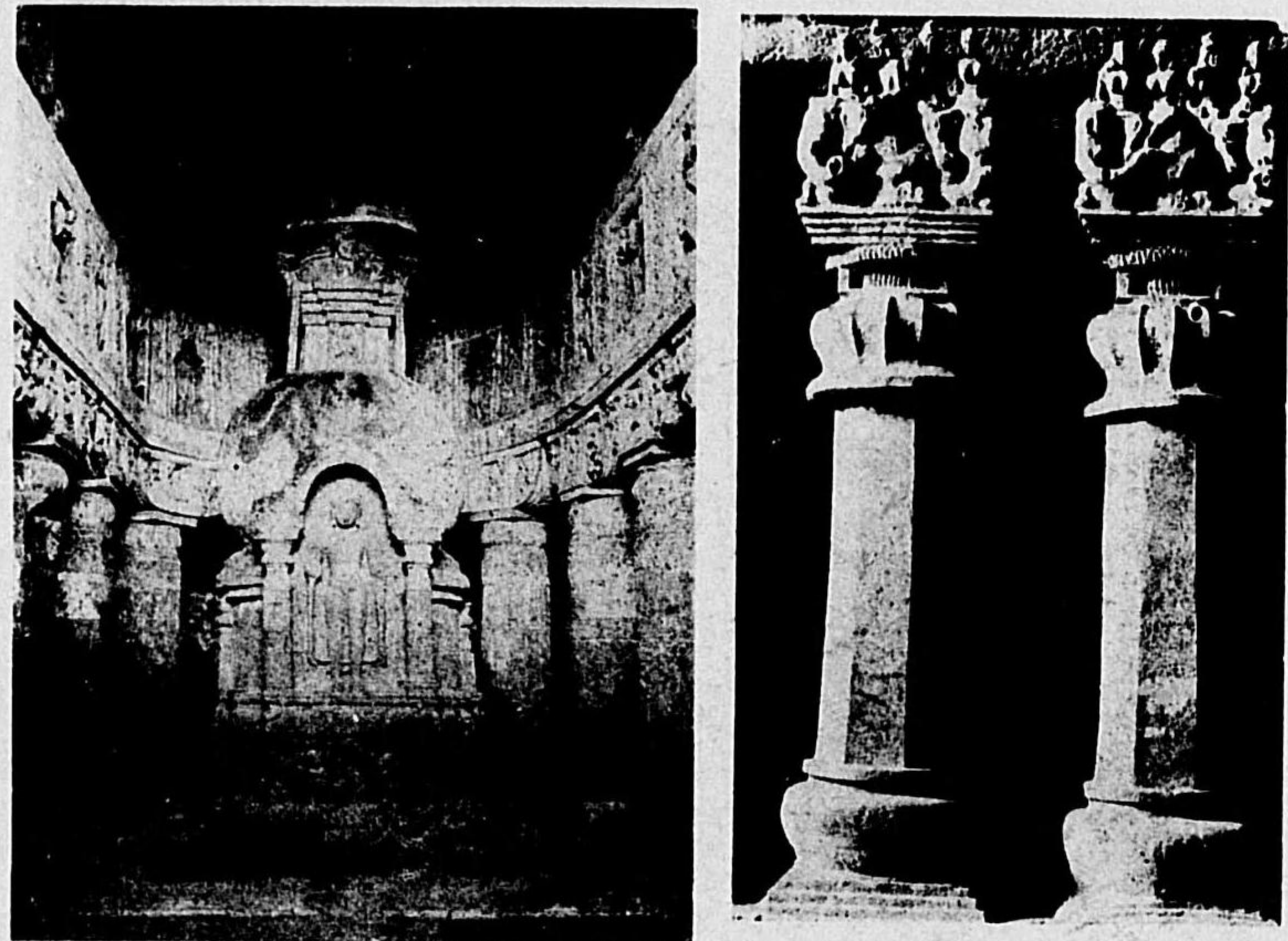


圖四五七第 ↑
首毘ラーロエ
而前提支摩羯
圖五五七第 →
首毘ラーロエ
部内提支摩羯



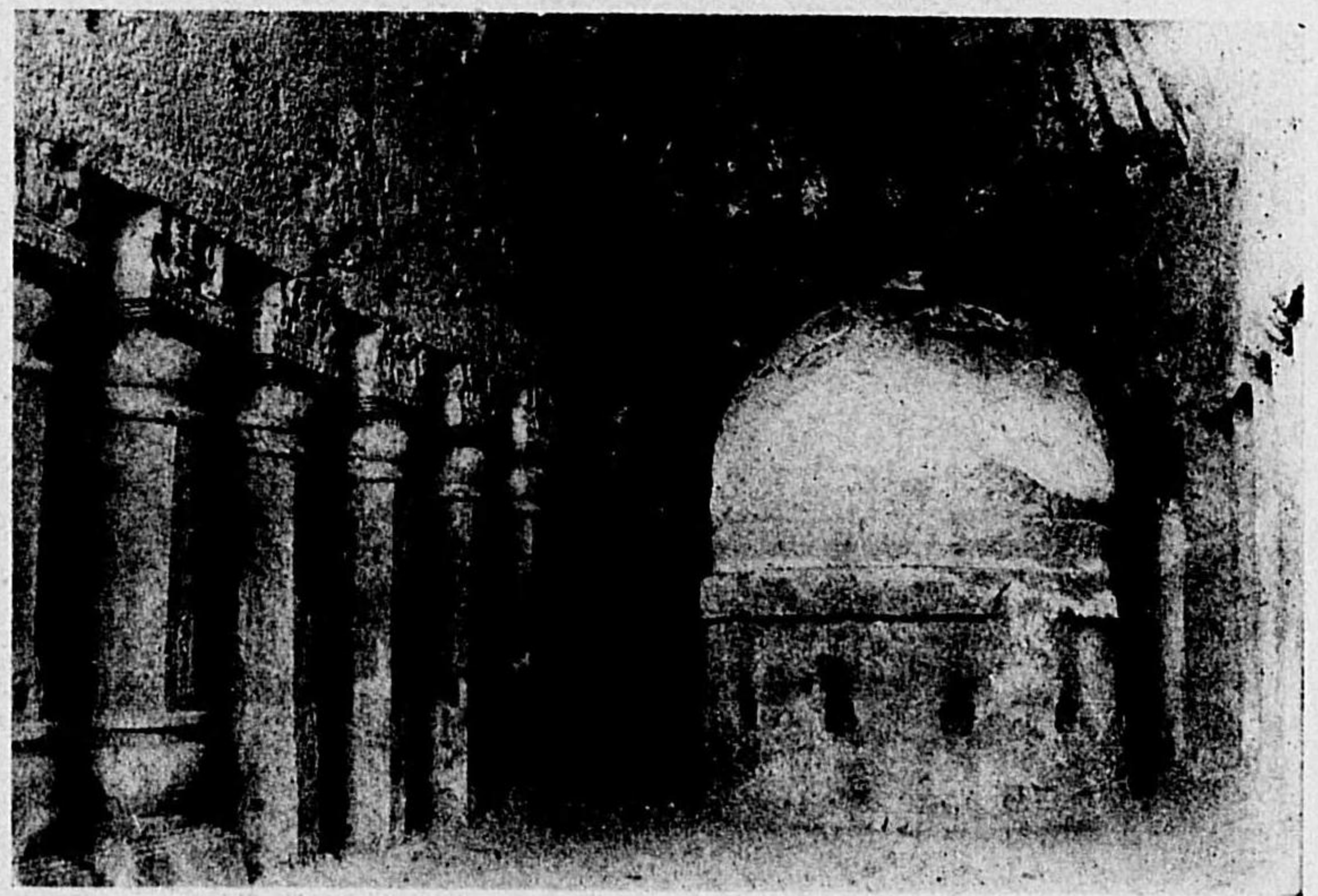
↑ 第七五三圖
アジヤンタ第二十六號支提内部

(12) 圖附史築建度印



部内提支號九十第タンヤジア 圖二五七第

柱の提支のラルーカ 圖〇五七第



部内提支のリネカ 圖一五七第

(15) 圖附史築建度印



塔の山畏無 圖九五七第 ↑

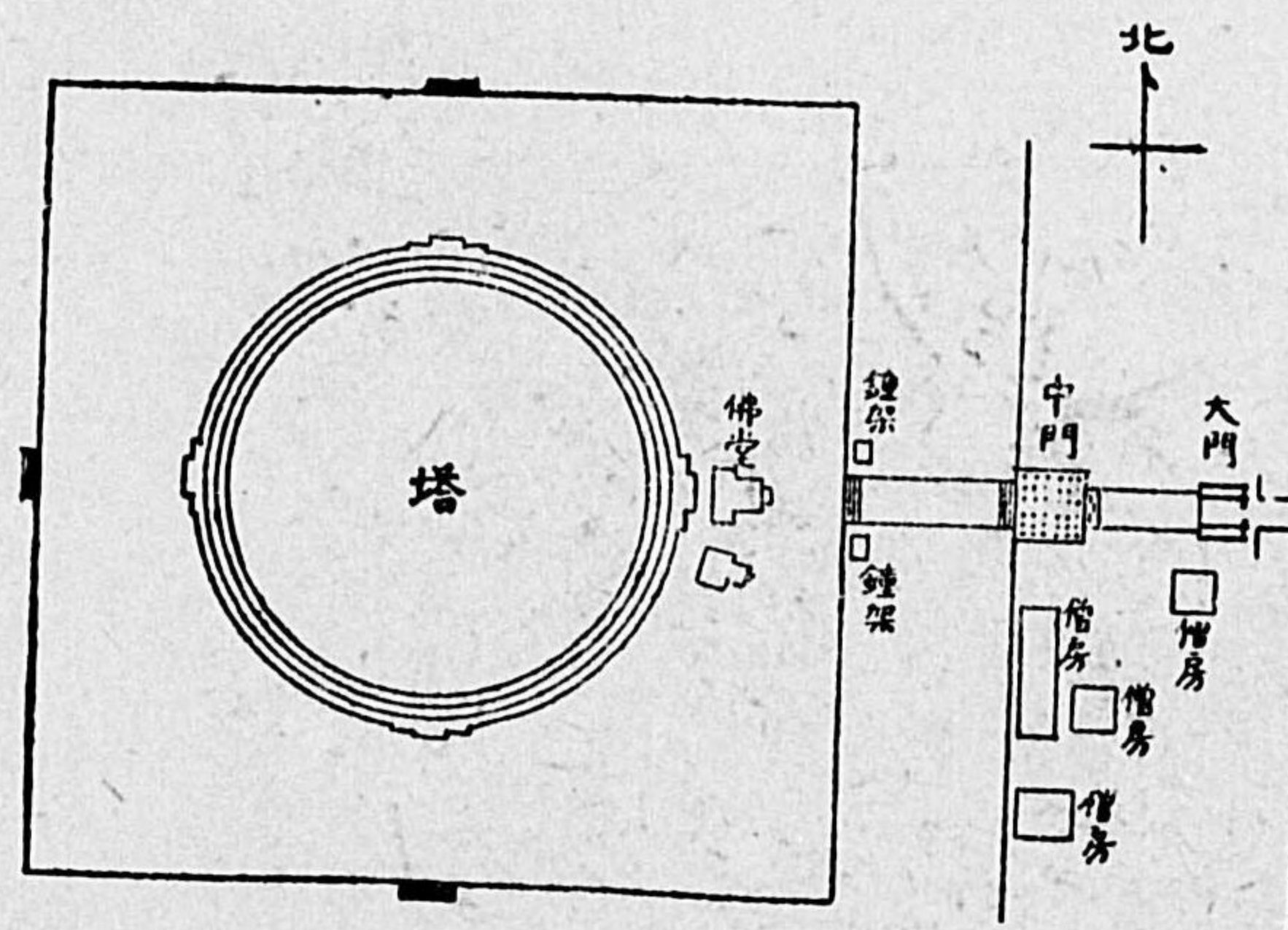


↑ 塔のマラバツ 圖一六七第

← 塔の寺園祇 圖〇六七第



(14) 圖附史築建度印



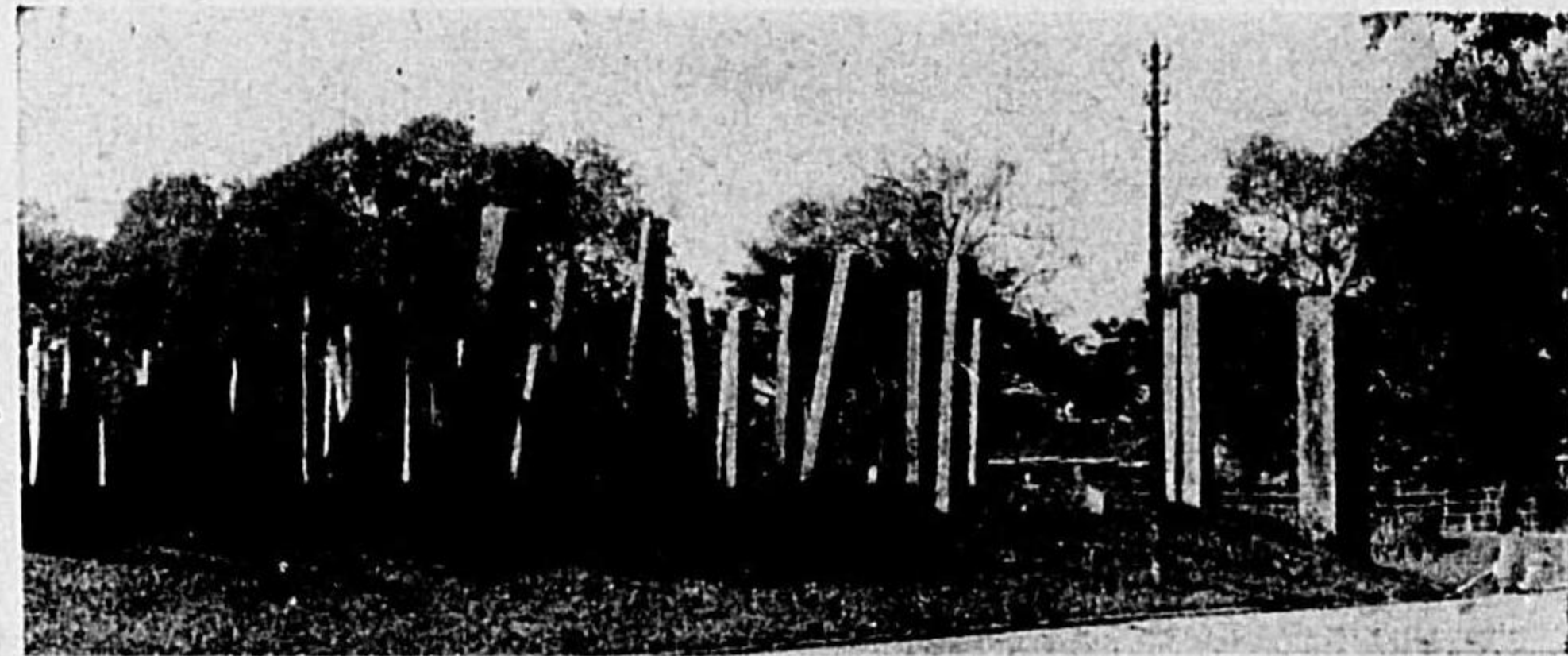
0 100 1000 300 300R

部下塔リエウンツル 圖八五七第 ↓



圖七五七第 ↑
面正塔リエウンツル

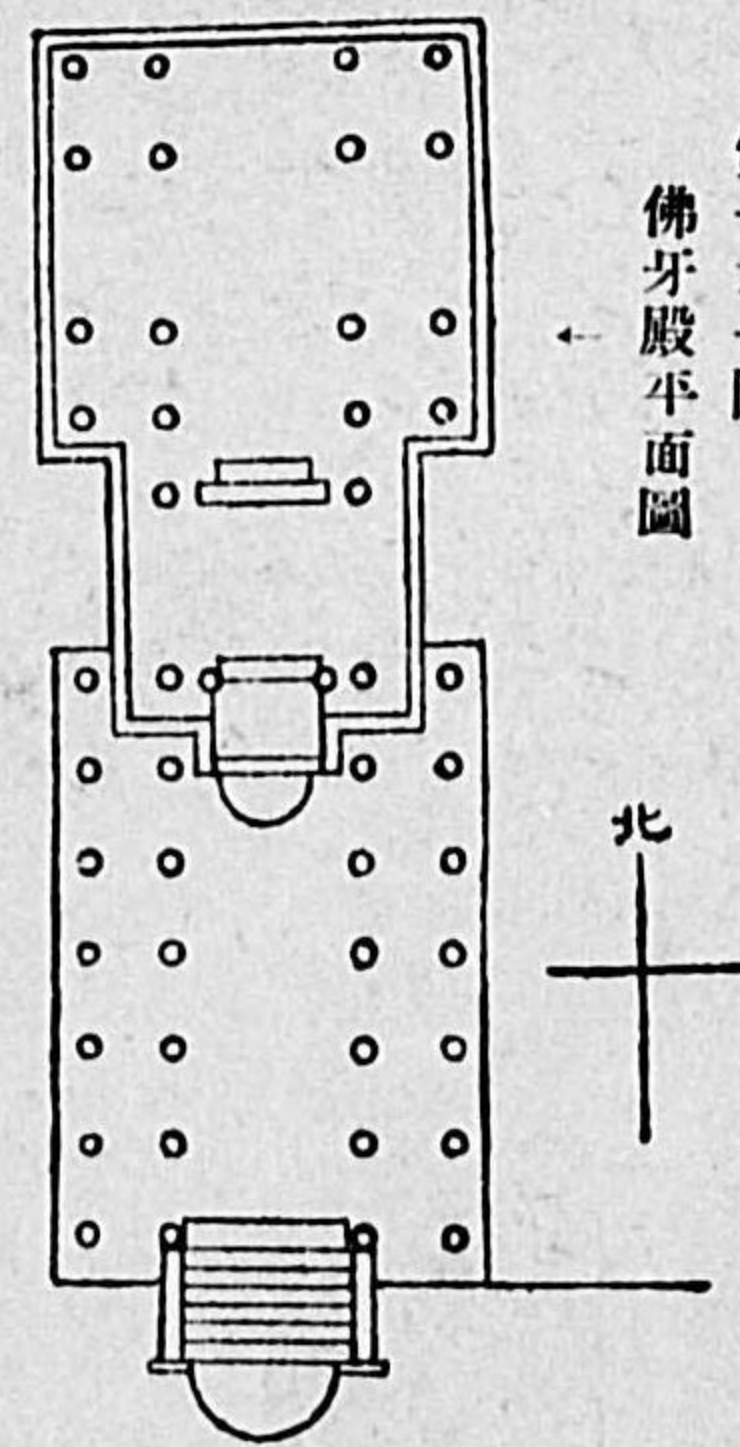
(17) 圖附史築建度印



← 第七五圖
マハーウイハラの遺址



第七六圖
佛牙殿の遺址



第七七圖
佛牙殿平面圖

← 第八六圖
菩提樹入院口

(16) 圖附史築建度印



→ 第七二圖
イスルムニの塔



↑ 第七三圖
塔のマランラ

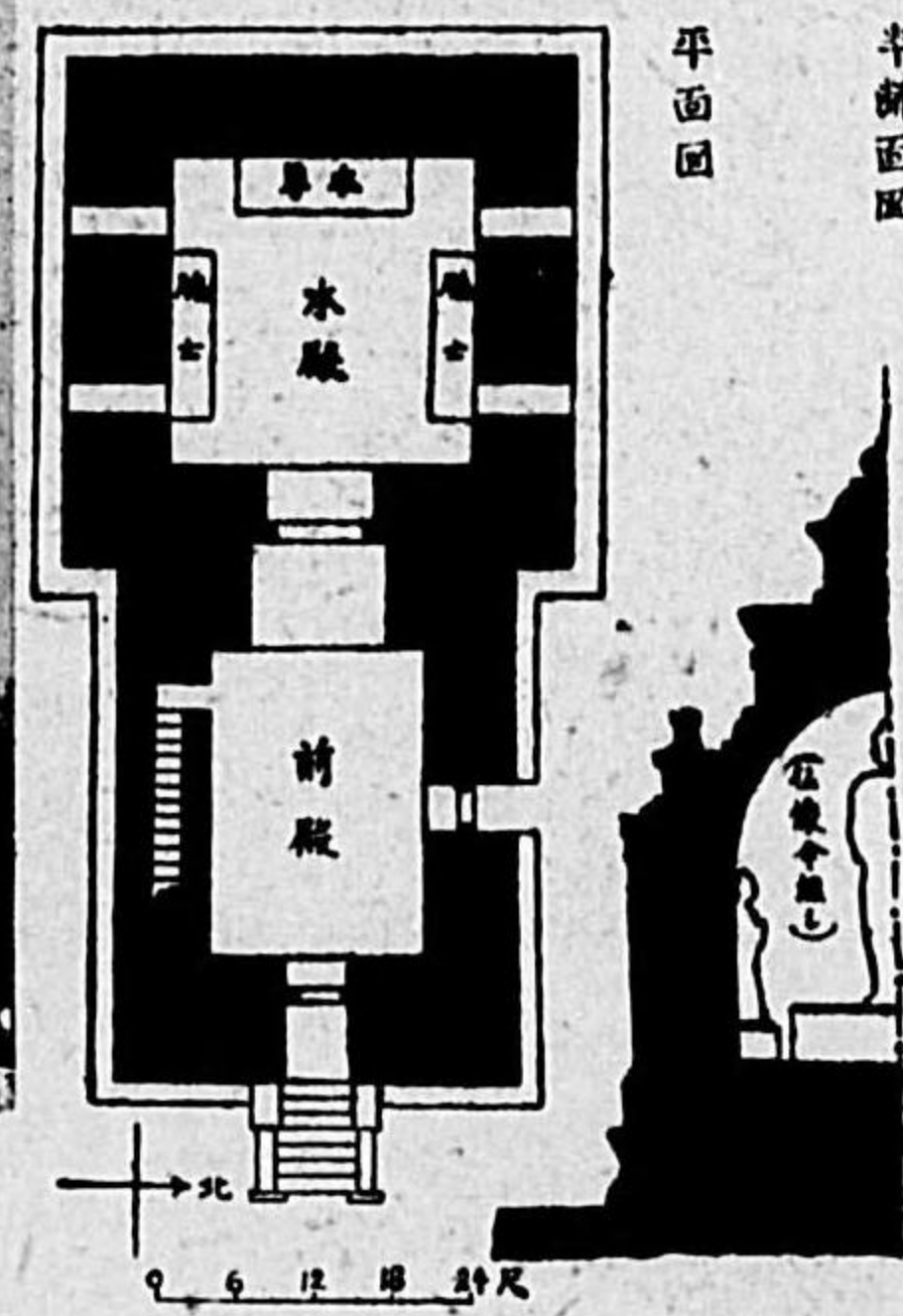


→ 第七四圖
塔のレタンヒミ

(19) 圖附史築建度印



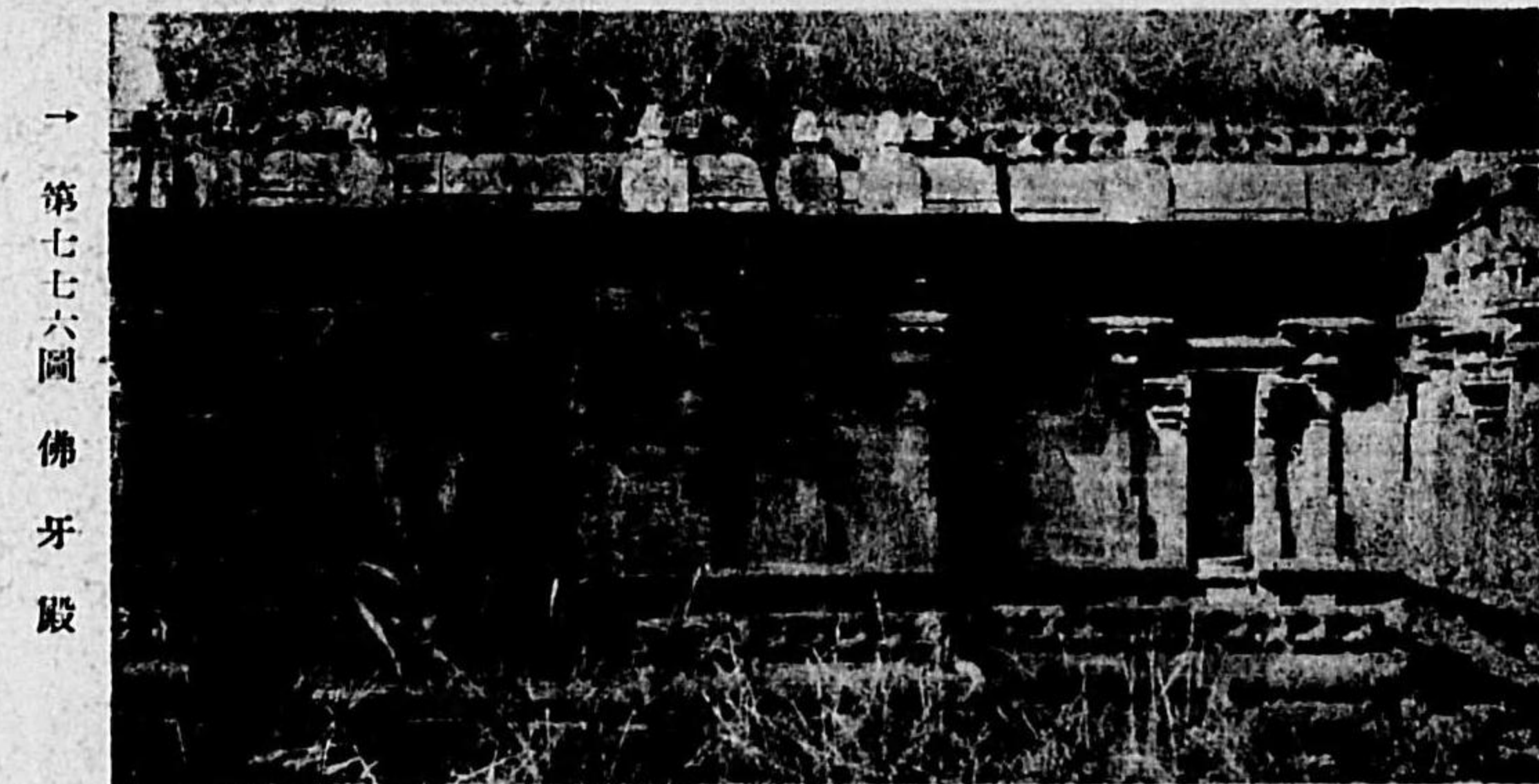
寺 園 紙 圖三七七第 ↓



面側のラハイヴ・チツへ 圖五七七第 ↓



↑ 第七七四圖 ヘツチ・ツイ
ハラの平面、断面圖



→ 第七七六圖 佛牙殿

(18) 圖附史築建度印



(池水貯) ナクボのソロイセ 圖九六七第



ゲダ・テツワ 圖一七七第



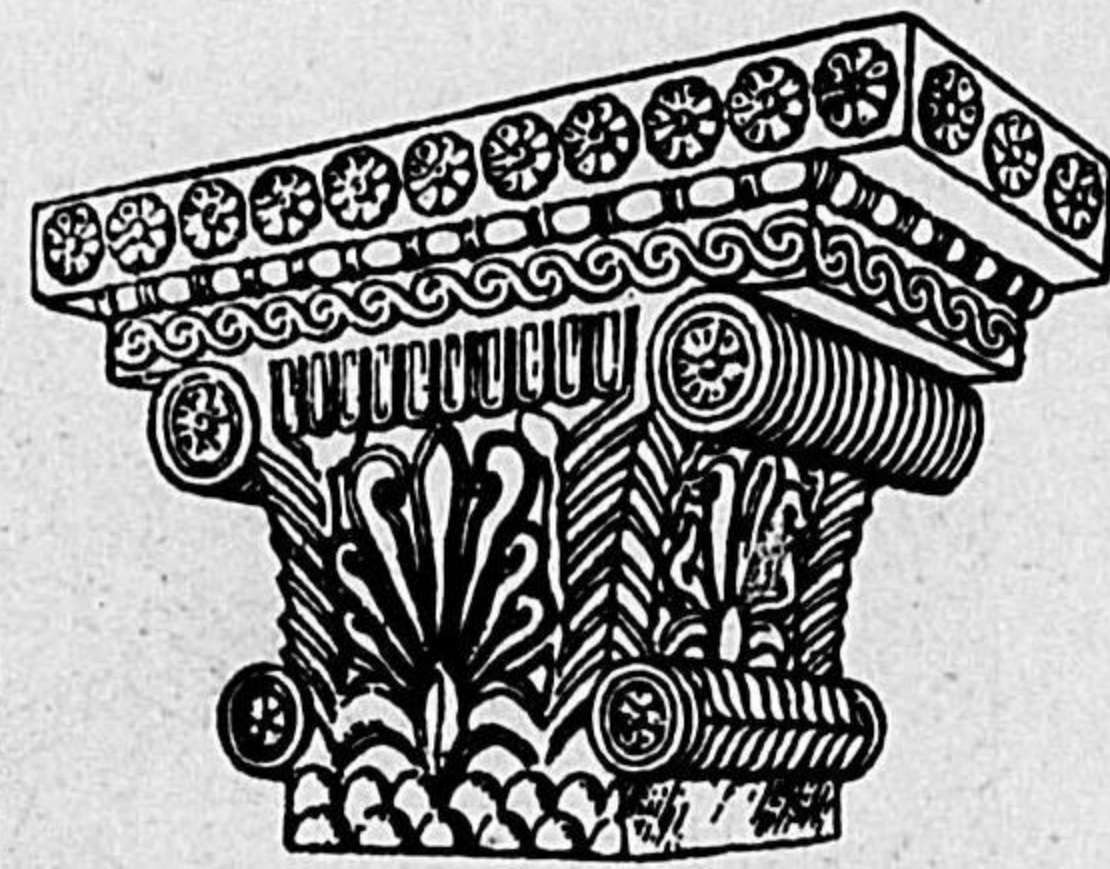
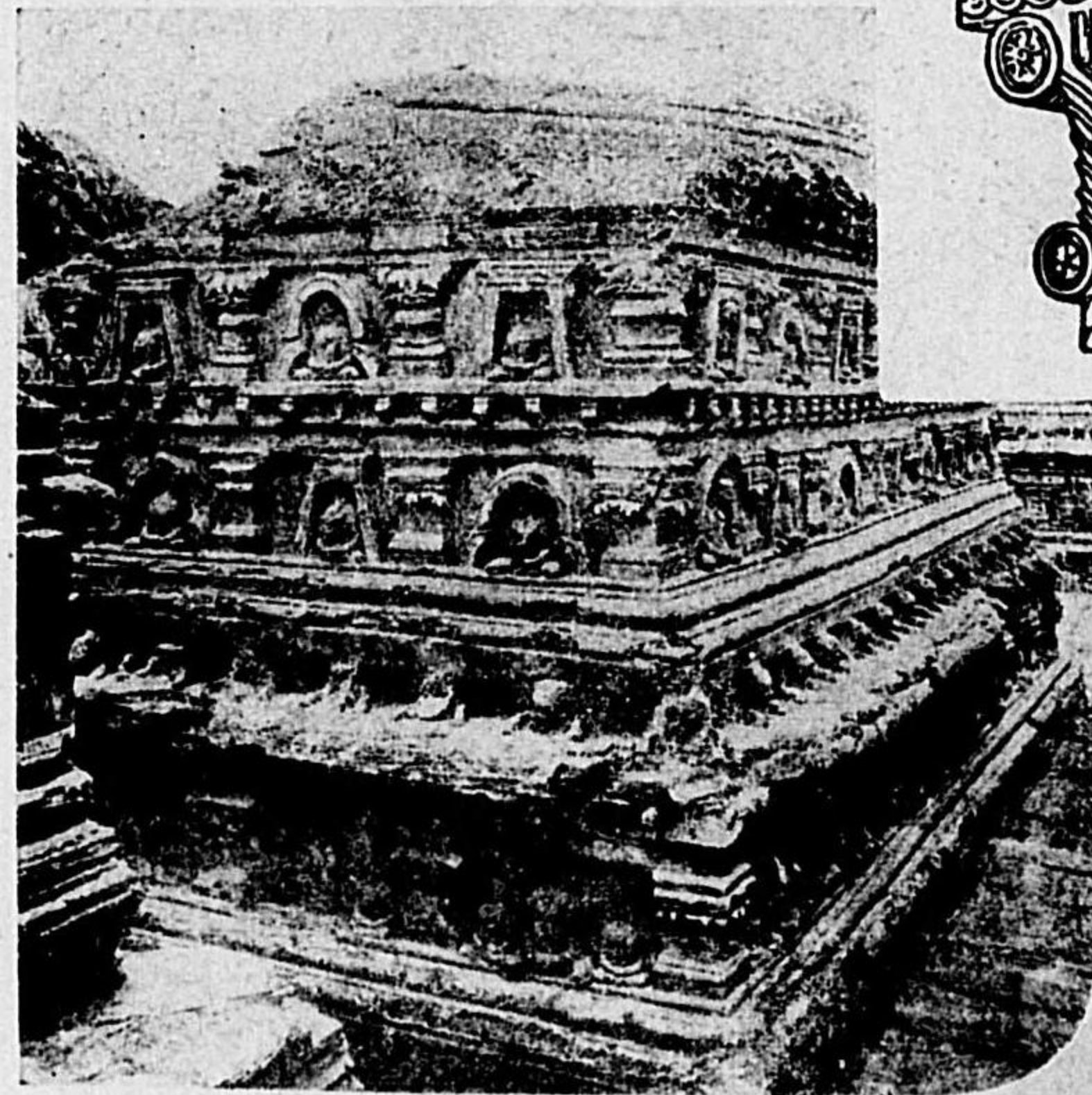
塔トッコンラ 圖〇七七第



ラハイヴルガ 圖二七七第

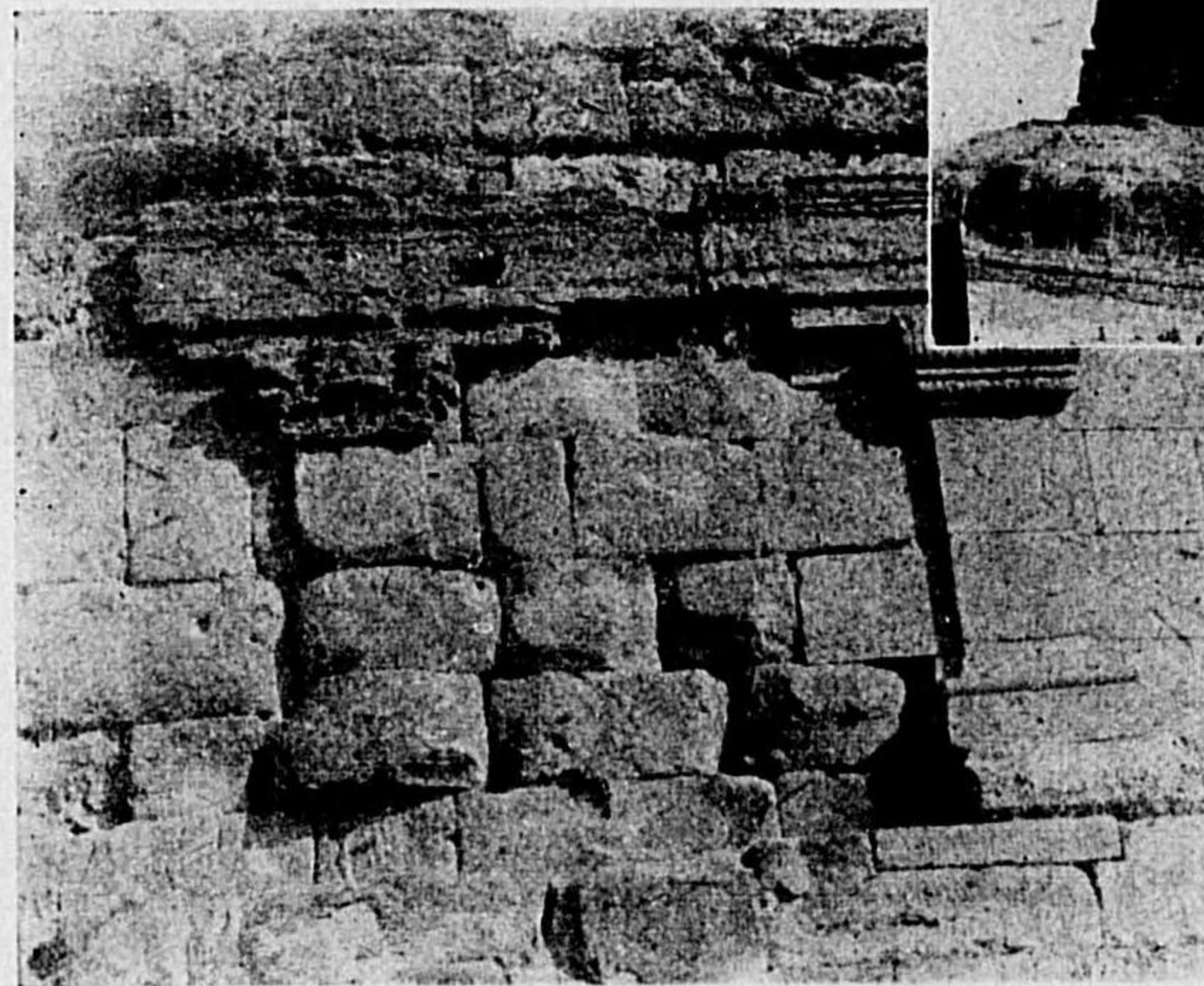
(21) 圖附史築建度印

塔のトウジスマ・リア 圖二八七第 ↓



圖一八七第 ↑
頭柱土出ナトバ

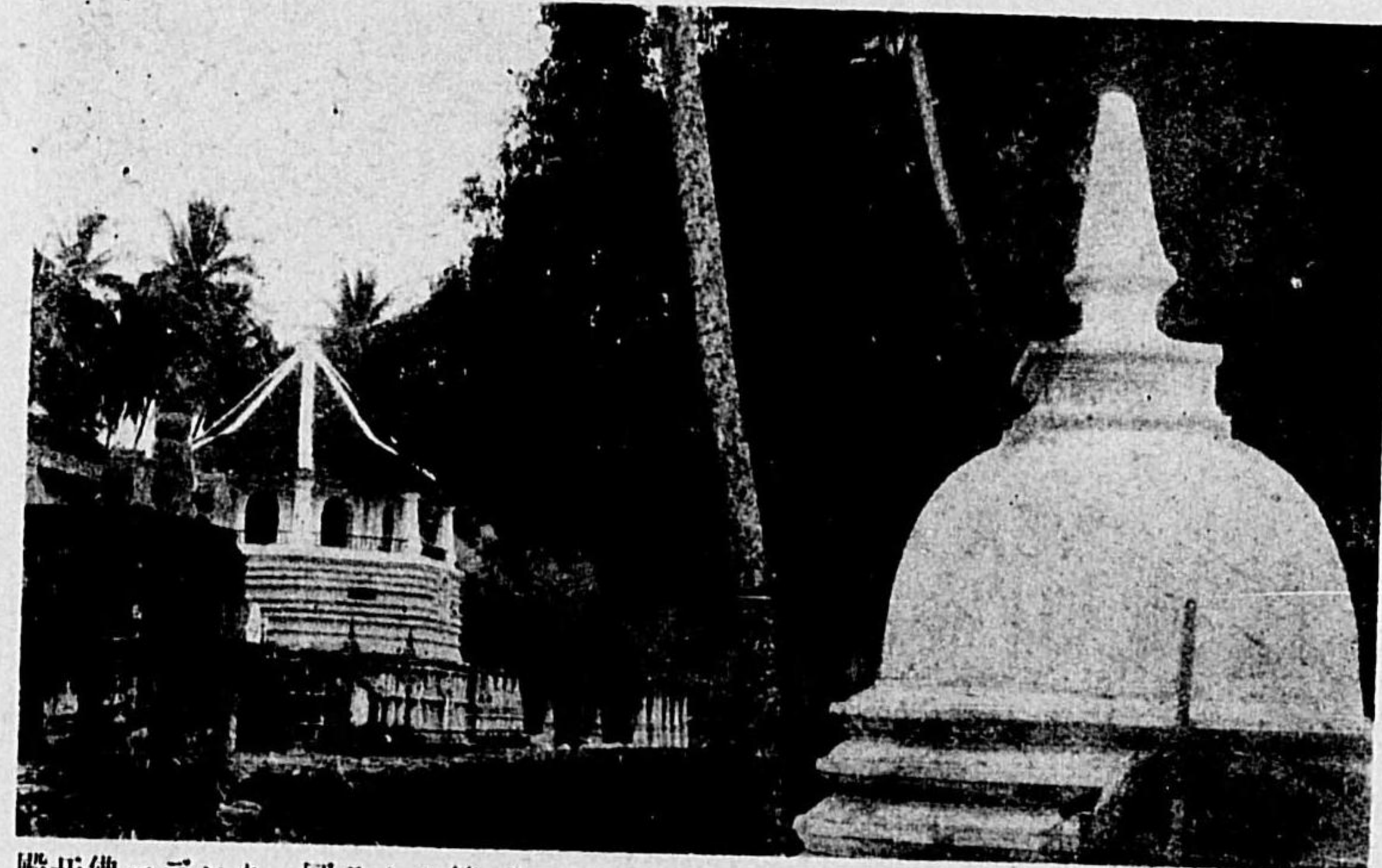
部細塔のラアキンマ 圖四八七第 ↓



↑
圖三八七第
塔のラアキンマ



(20) 圖附史築建度印

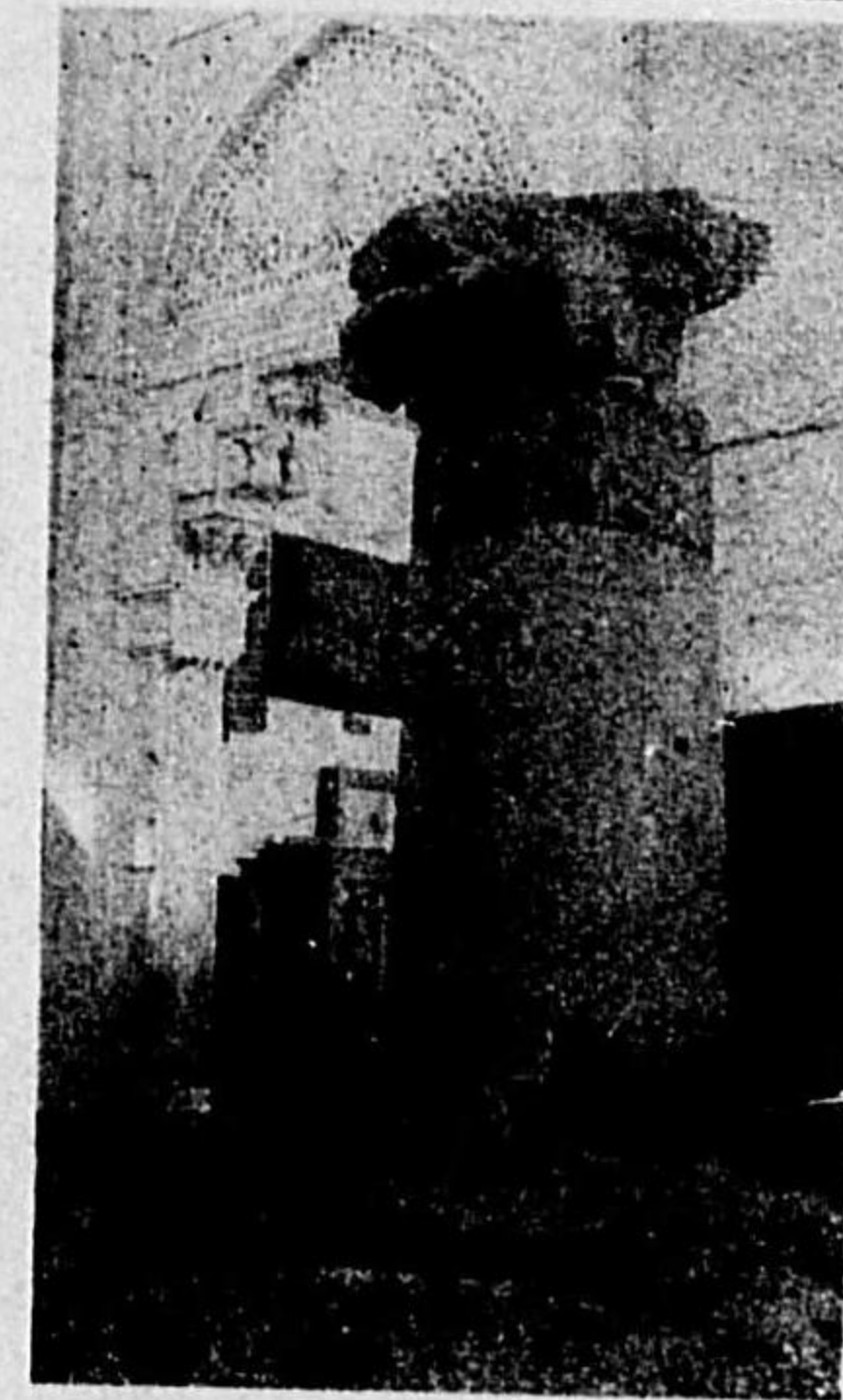


殿牙佛ーデンカ 圖八七七第 ↑

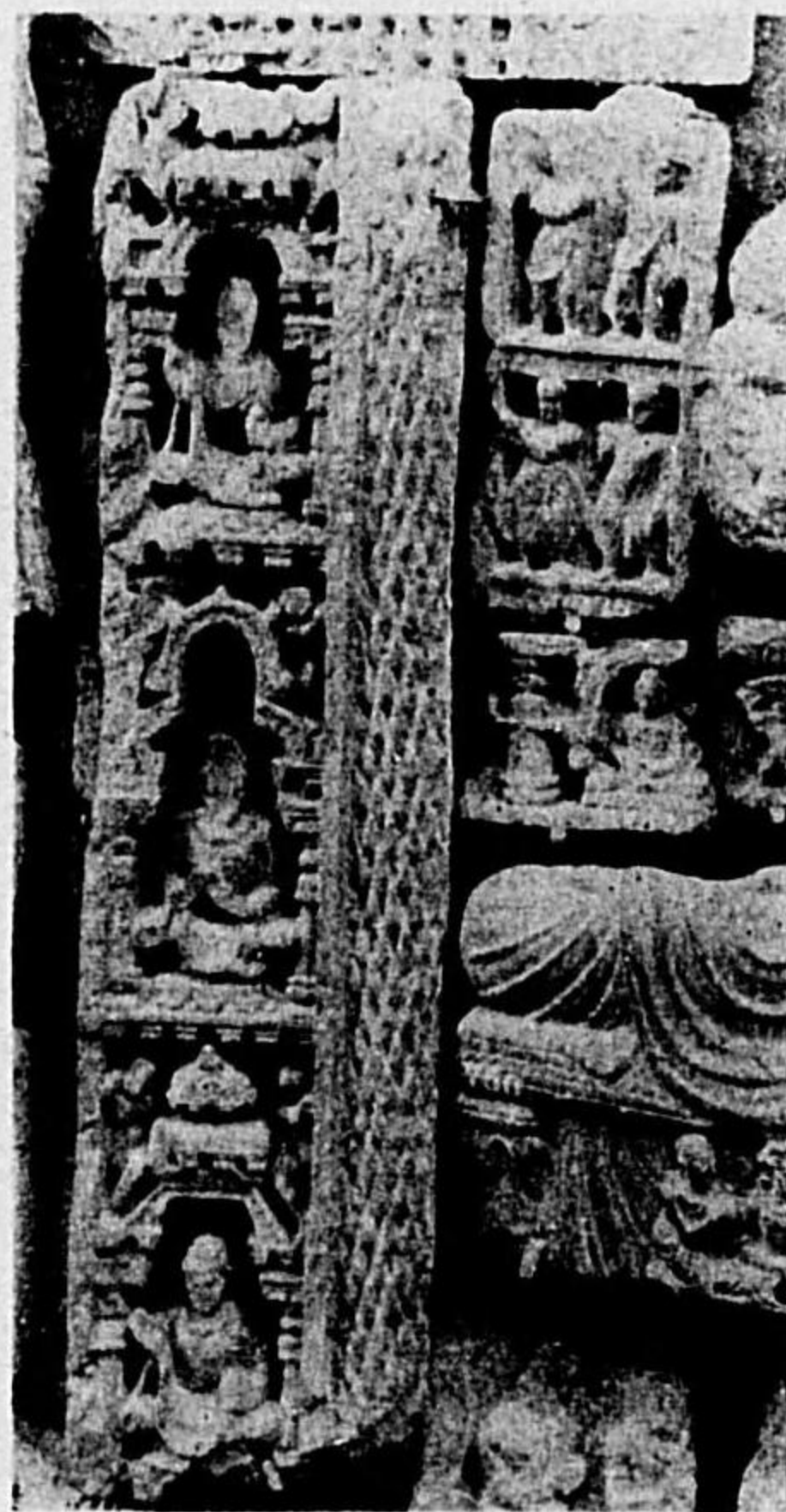
圖七七七第 ↓
ダサラブ・ルーハマ・トーサ



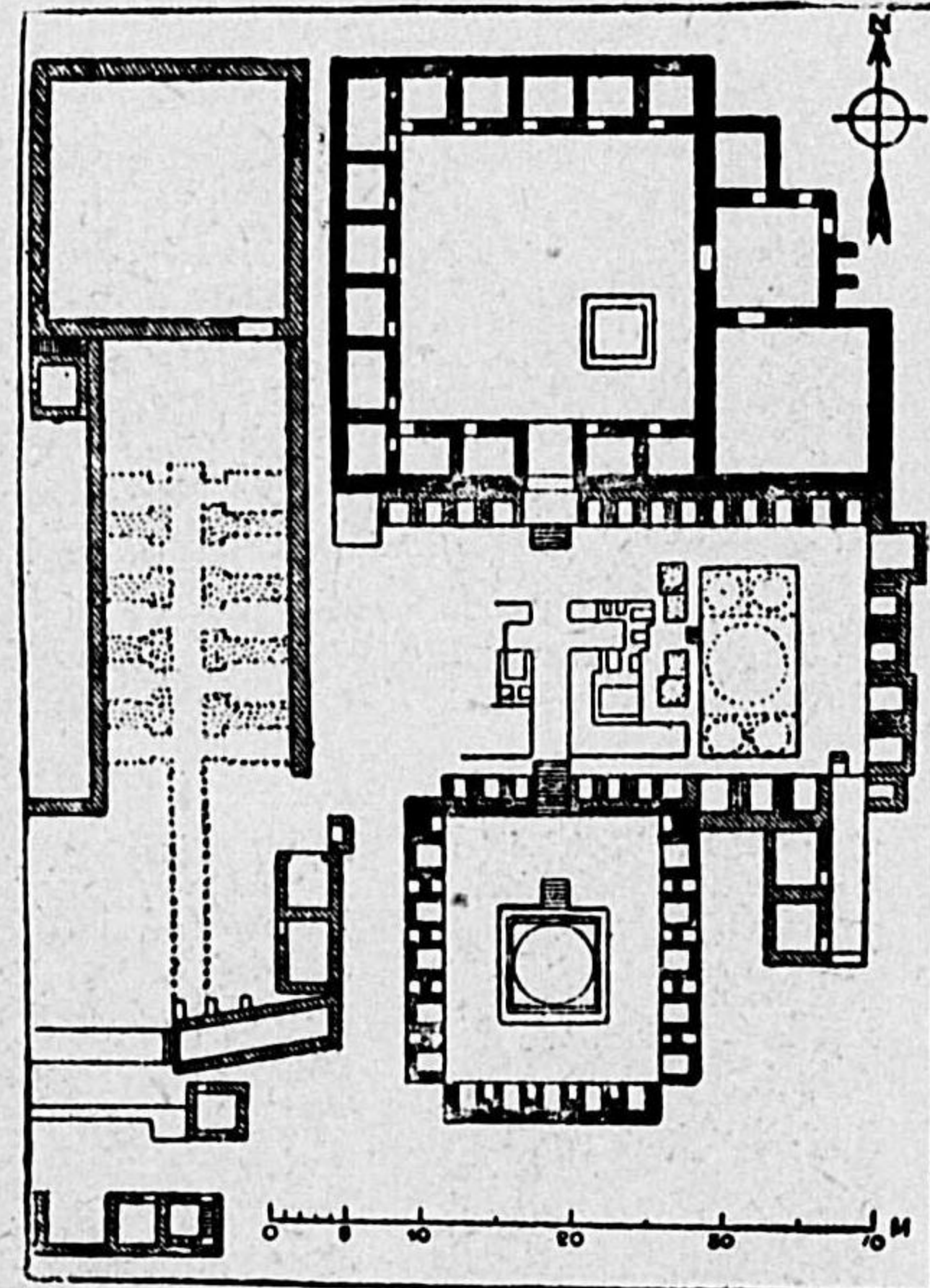
↑ →
第七八〇圖
第七七九圖
共にガンダラの柱頭



(23) 圖附史築建度印



片殘刻彫羅駄健 圖一九七第

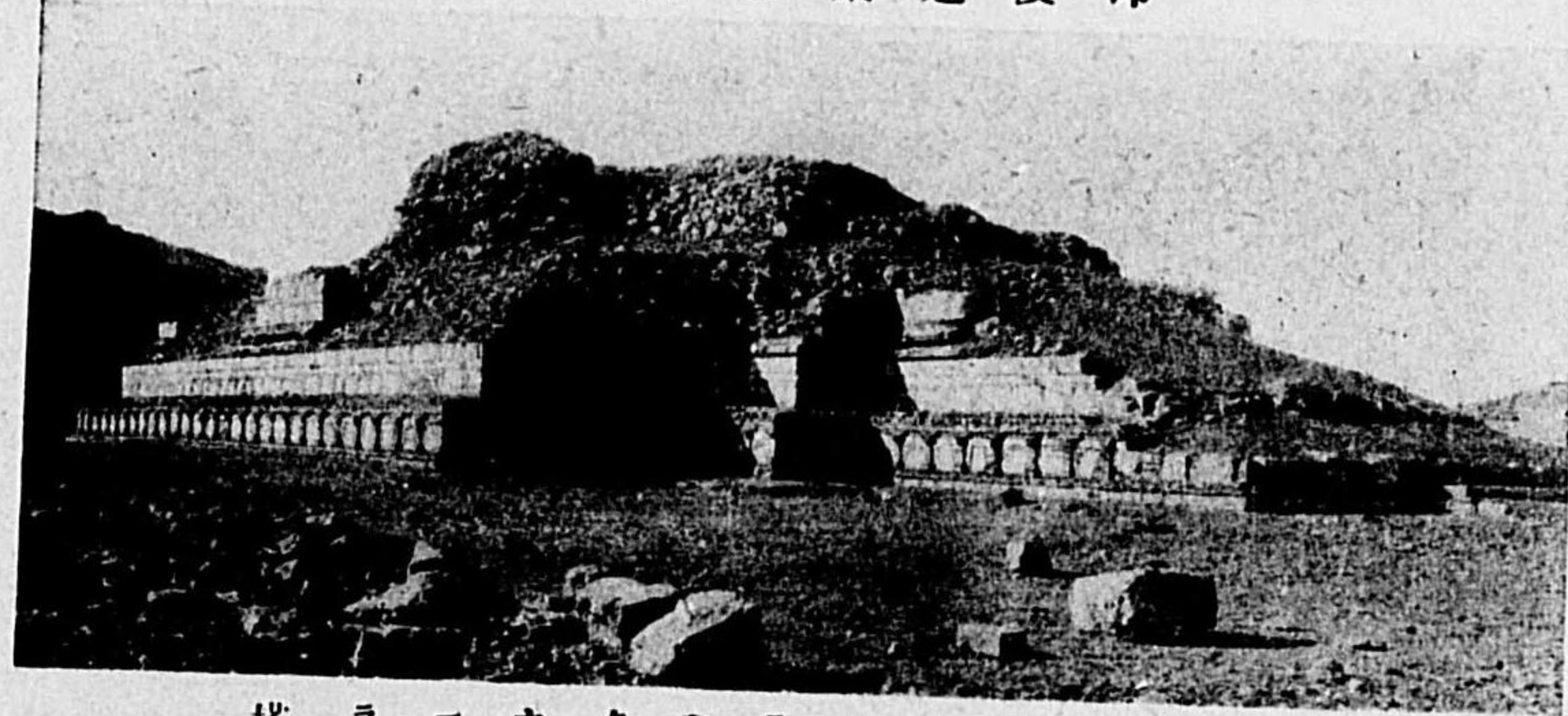


圖面平舍精のイハバ・チクダ 圖九八七第

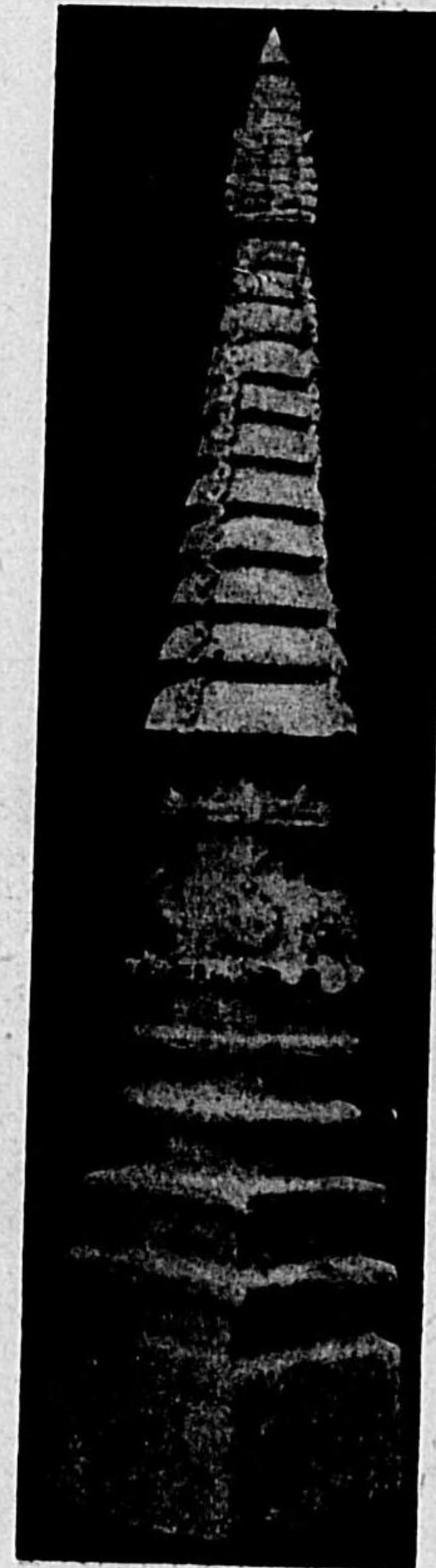


狀現の舍精イハバ・チクダ 圖〇九七第

(22) 圖附史築建度印



塔ラーナクのラシキダ 圖五八七第



(左下) 圖六八七第
離雀のラシキダ
塔小の屬所塔

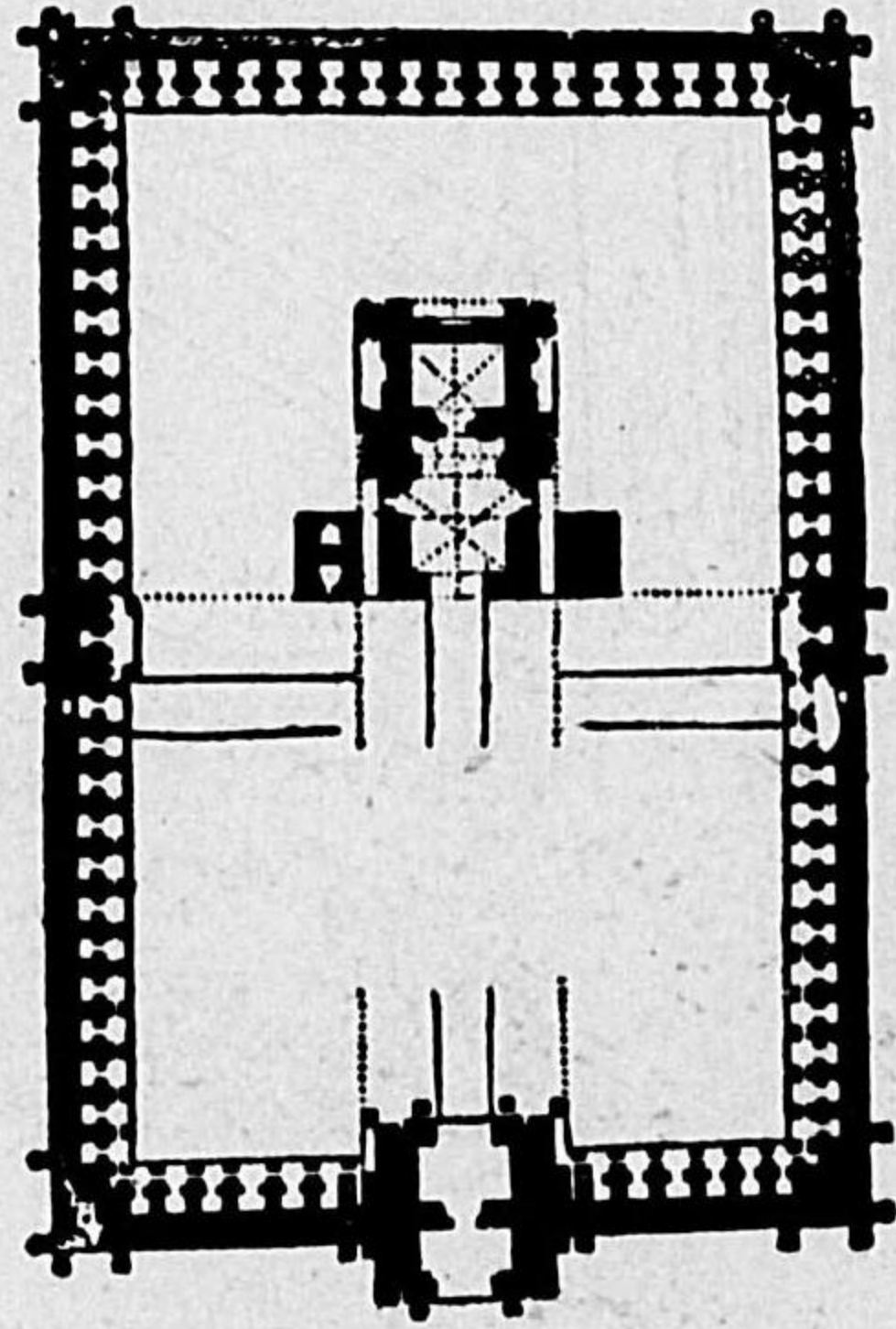
(央中) 圖七八七第
モ・ラーヒのラシキダ
塔小の庭中舍精ゾーラ

(右下) 圖八八七第
トラウダ方地度信
塔の近附ルー



(25) 圖附史築建度印

圖九九七第 ↓
圖面平堂祠ドンタルマ

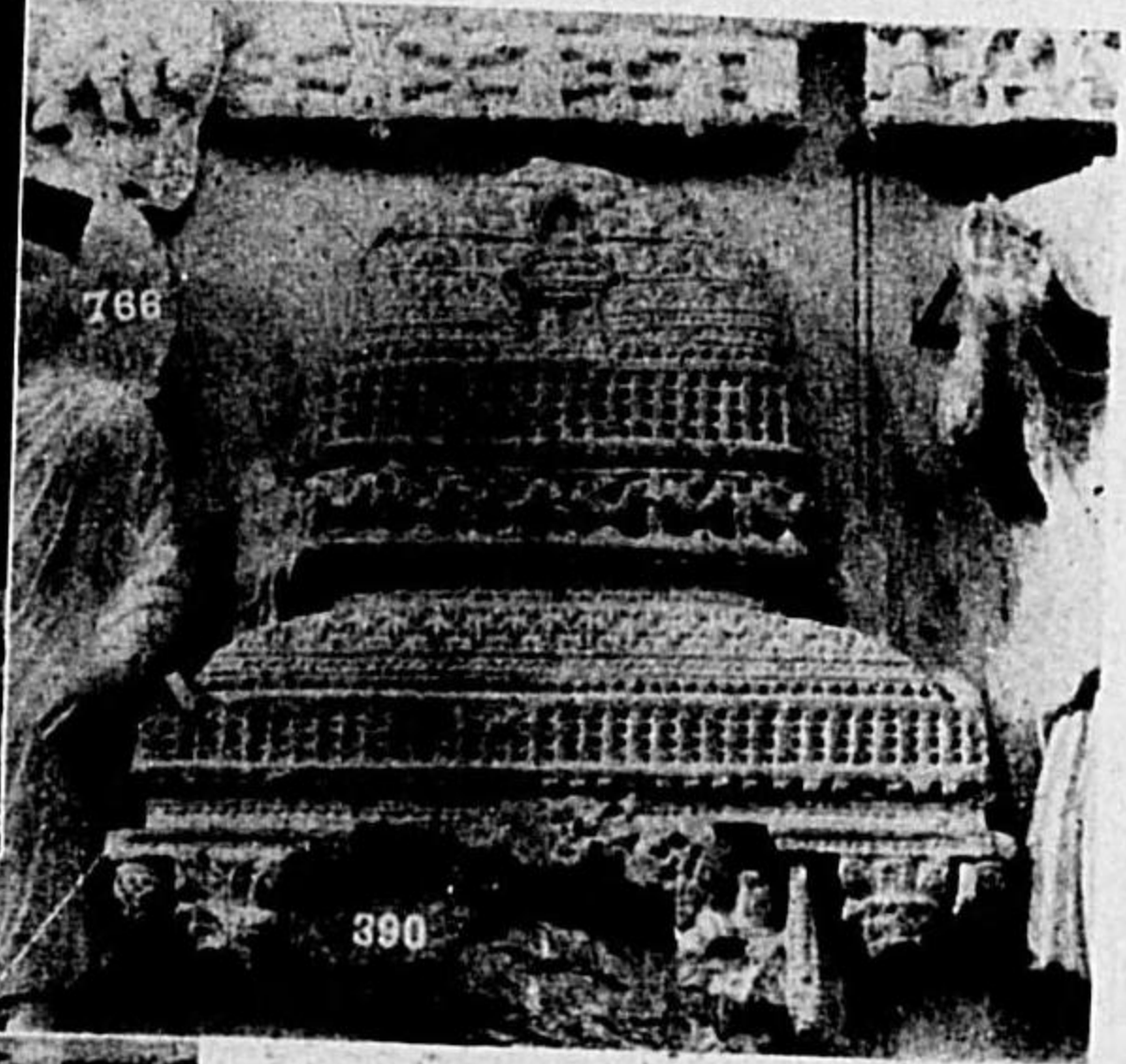


片殘刻彫羅馱健 圖六九七第



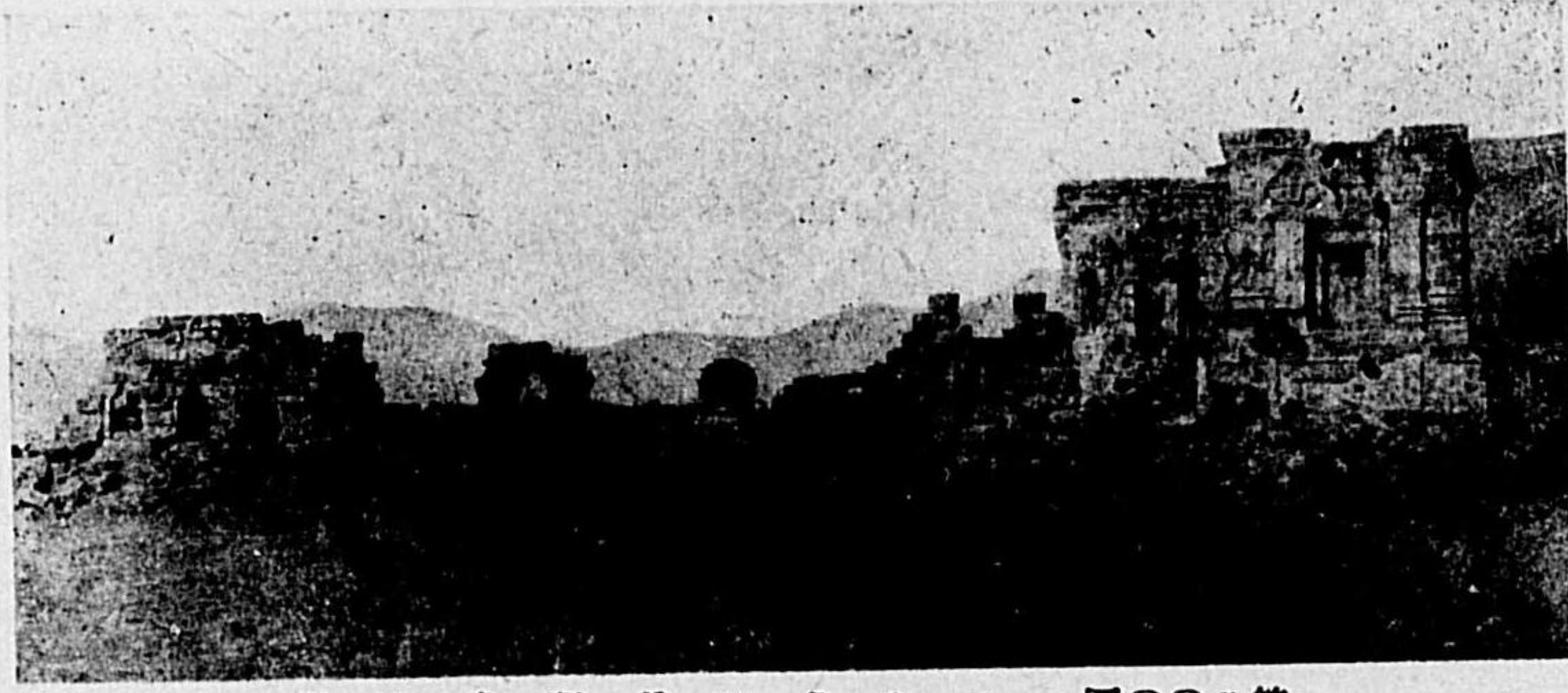
(24) 圖附史築建度印

← 圖二九七第
圖三九七第
片殘刻彫羅馱健

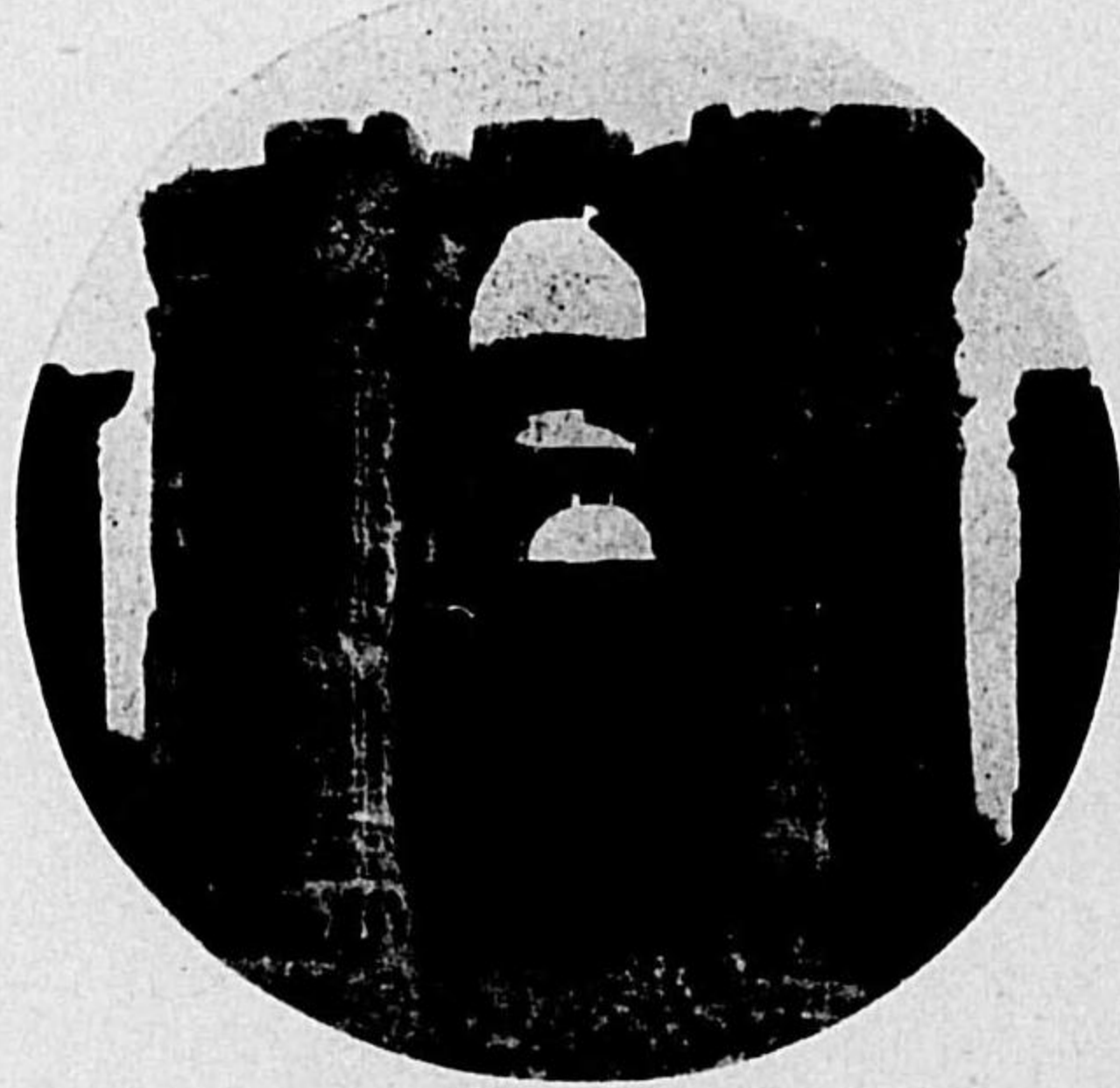


圖五九七第 ↑
(生誕) 片殘刻彫羅馱健
圖四九七第
(薩菩) 片殘刻彫羅馱健

(27) 圖附史築建度印



景全堂祠ドンタルマ 圖〇〇八第

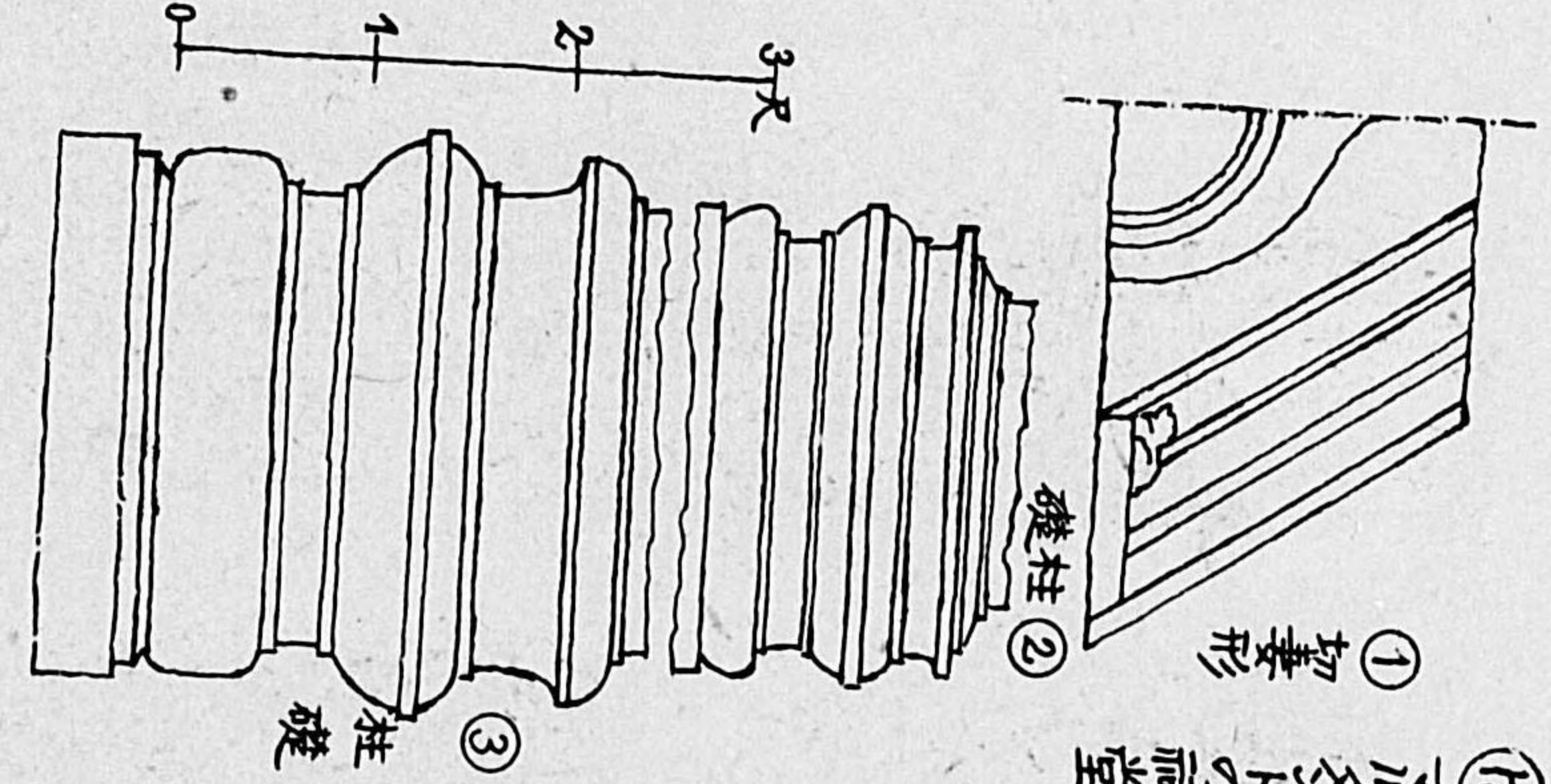


面正堂祠ドンタルマ 圖一〇八第

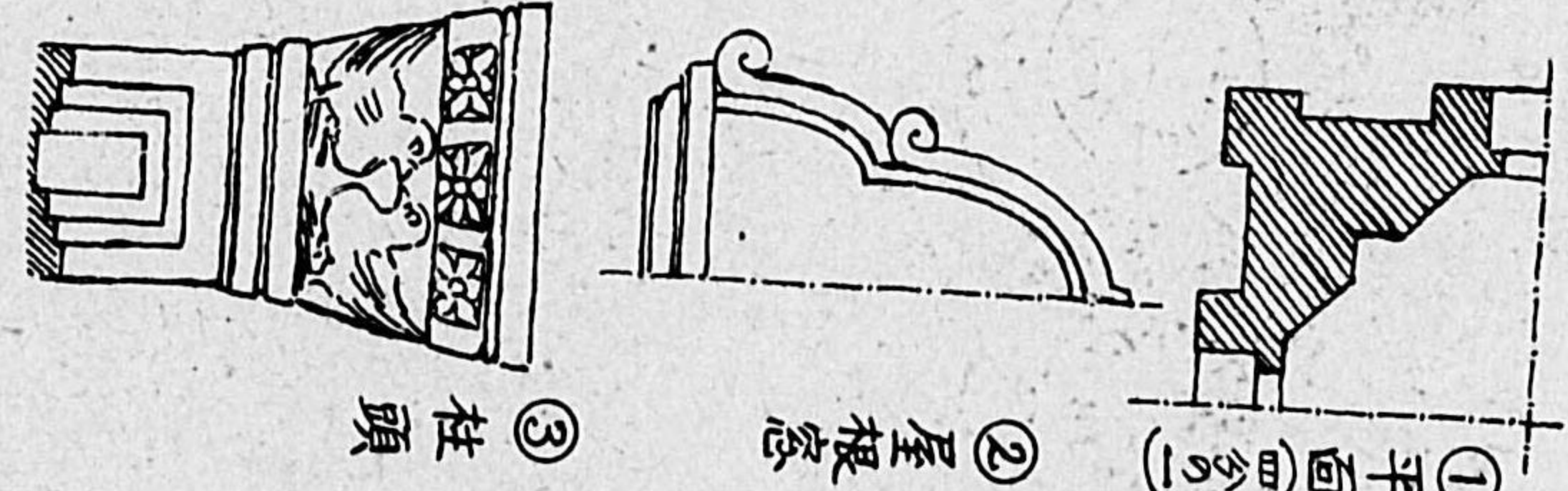


圖三〇八第 ↑
堂祠のチツエイバ
→ 圖二〇八第
面内廊廻ドンタルマ

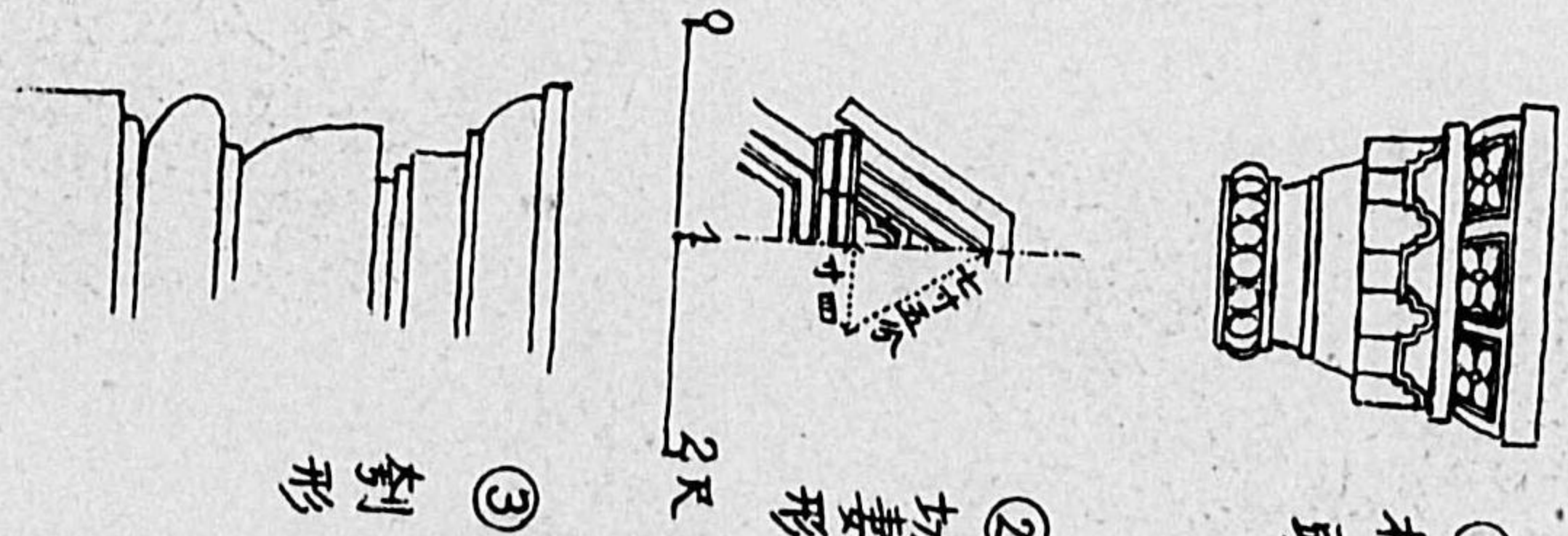
(26) 圖附史築建度印



⑤ アムダムの祠堂



④ パルタムの祠堂



⑥ アツシキールの祠堂

七九八圖 カシミール建築細部の手法

(29) 圖附史築建度印

圖七〇八第
のクーダラ
院寺のーレ

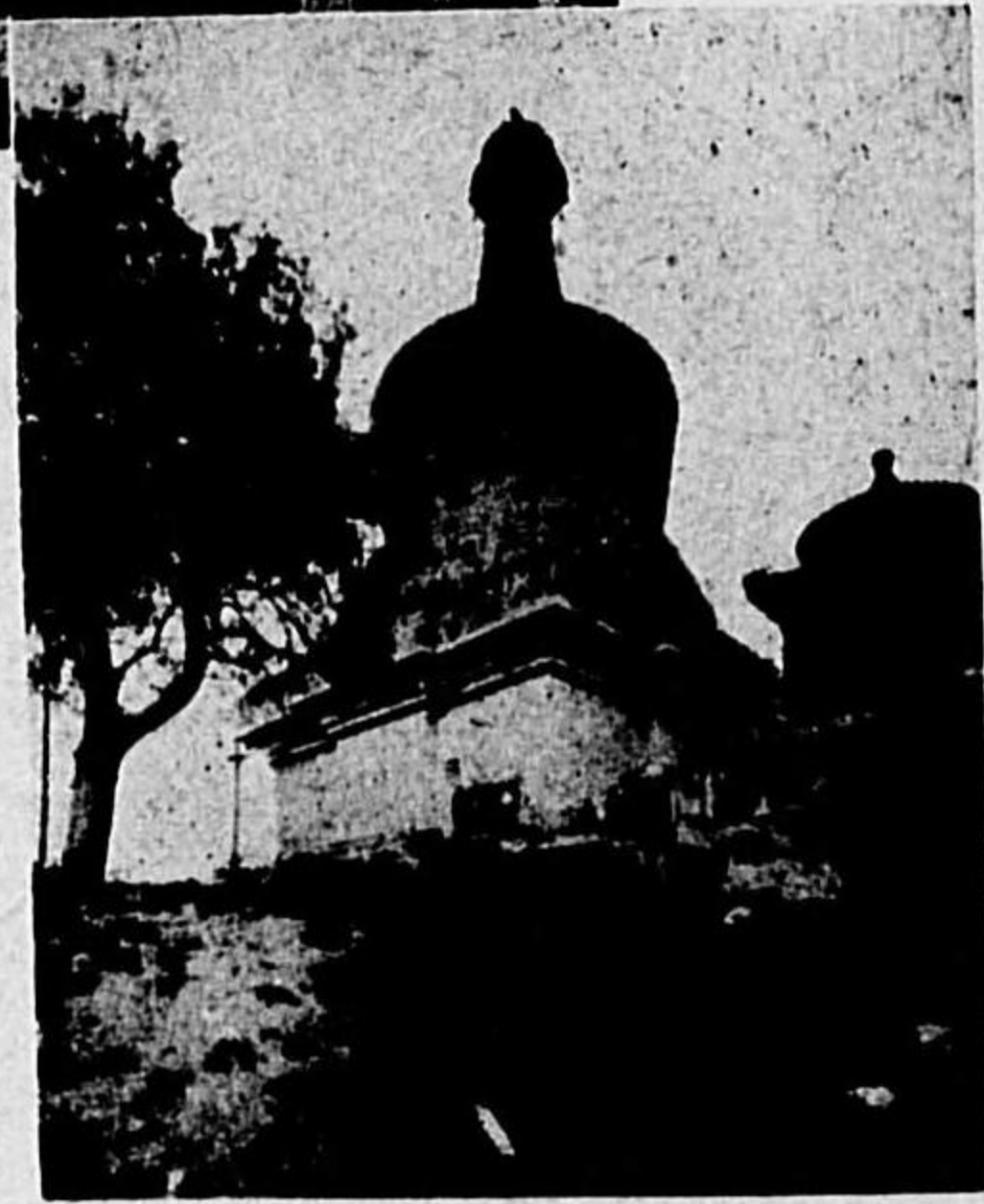


↓ 圖〇一八第
塔小の内殿華實城禁紫京北

圖八〇八第
山南山臺五
塔の寺樂極



↓
圖九〇八第
城禁紫京北
塔の寺永安



(28) 圖附史築建度印

堂祠のルヤニバ 圖六〇八第

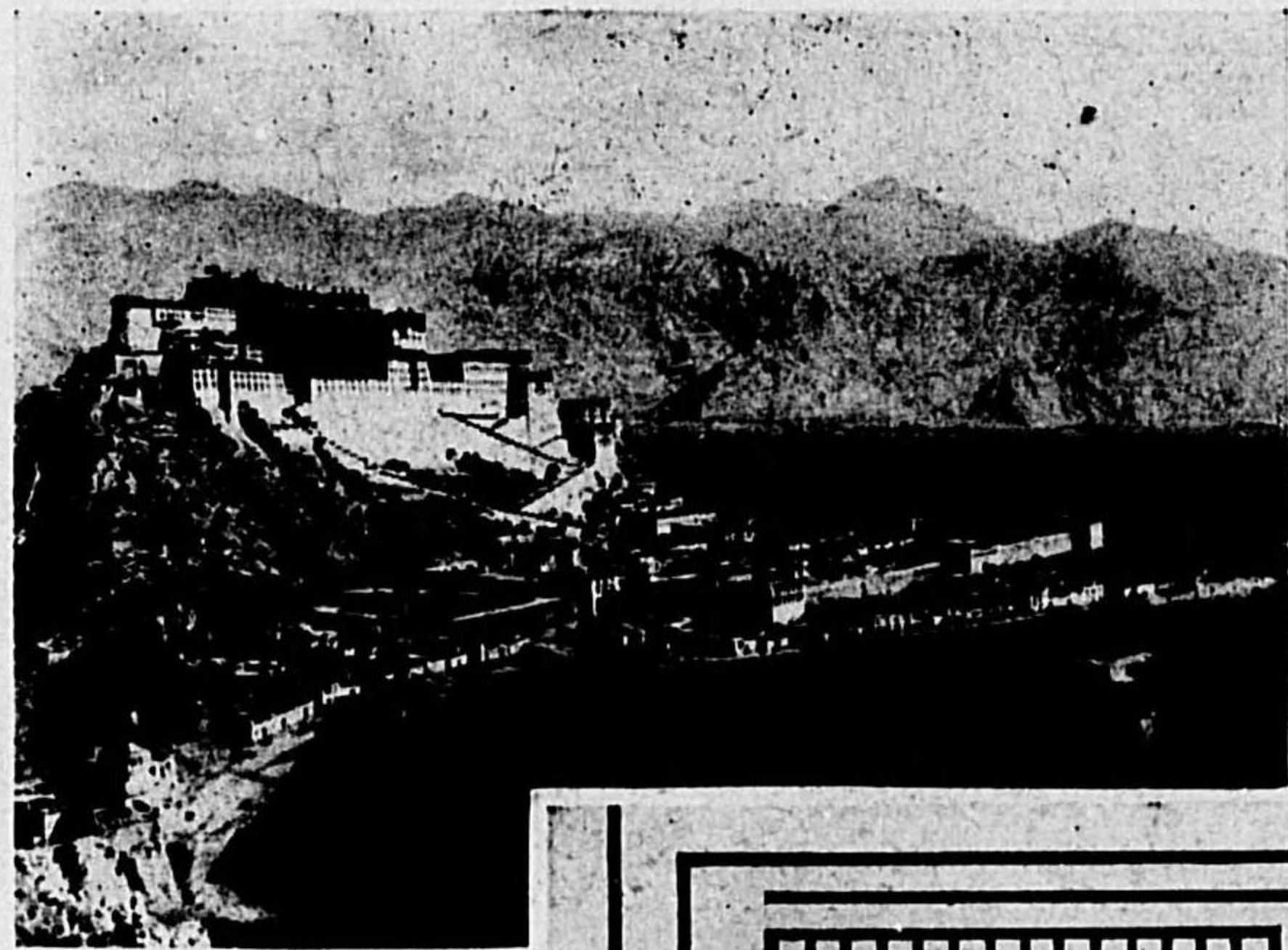


↑
堂祠のンタレドンバ 圖四〇八第

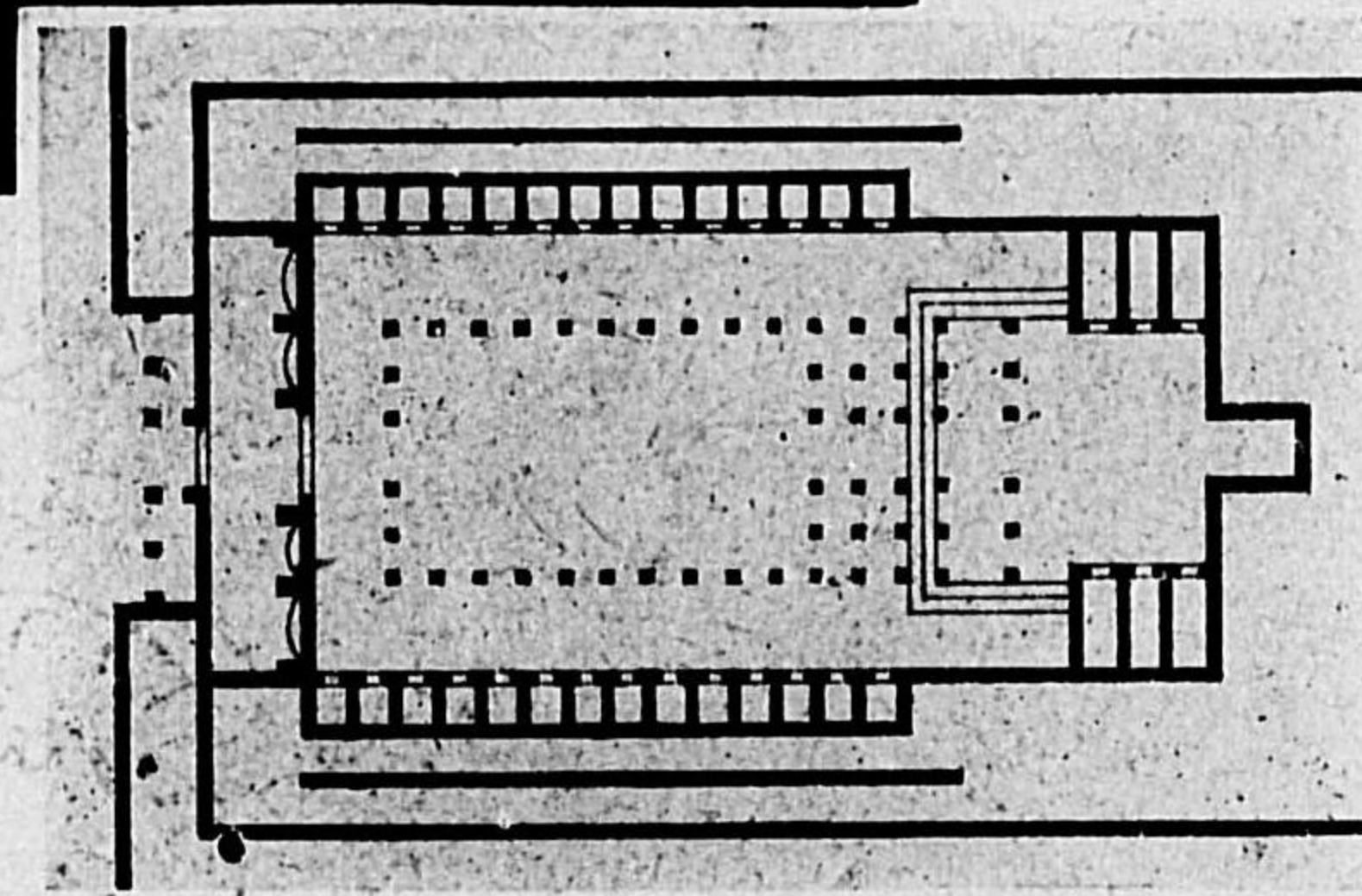
↓ 堂祠のンタバ 圖五〇八第



(31) 圖 附 史 築 建 度 印

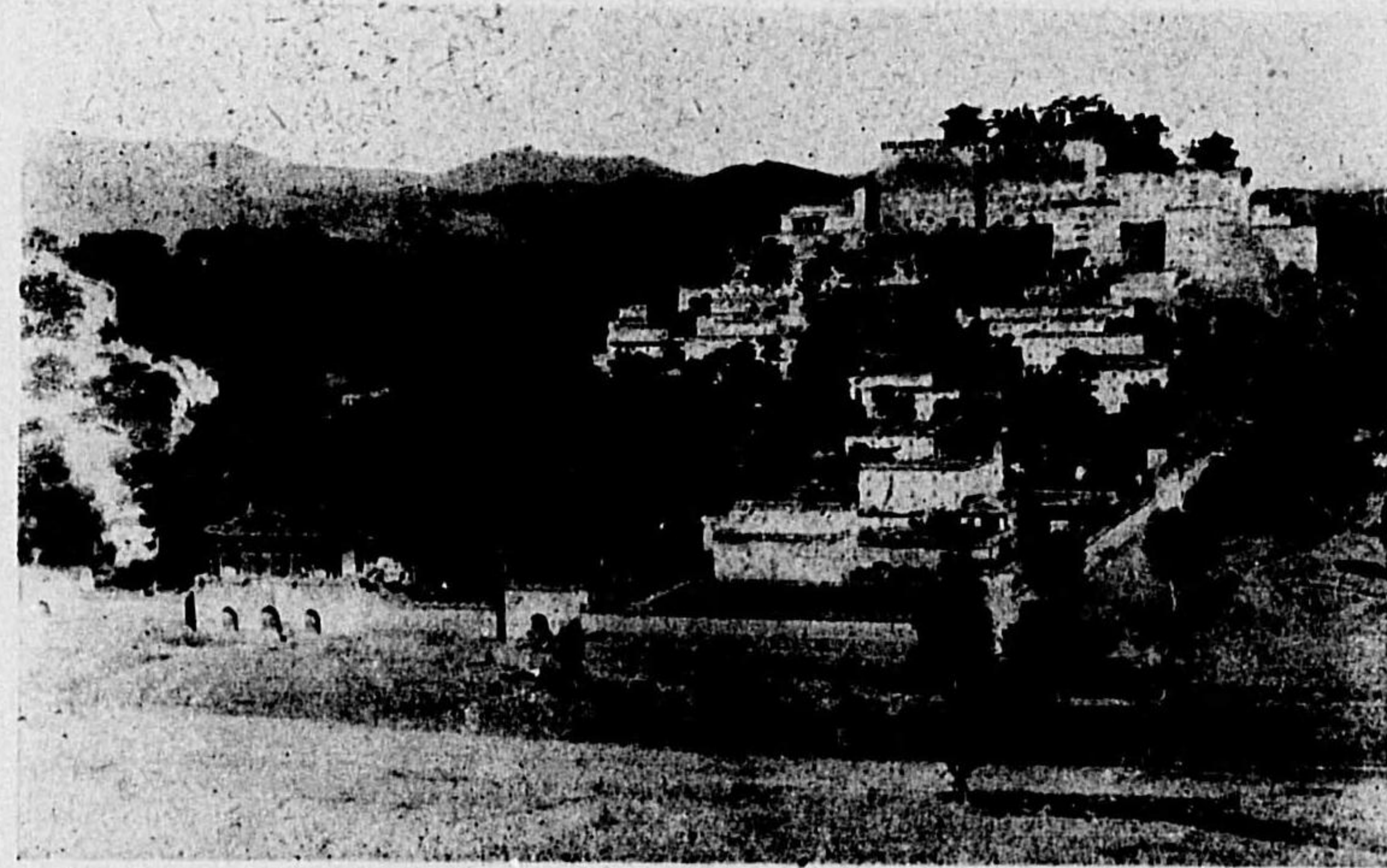


第八一四圖
ラハサ布達拉の
噠喇喇麻の伽藍



圖五一八第 →
噠の拉達布サハラ
圖面平蓋伽喇喇賴

圖六一八第 ↓
喇拉達布の宮離河熱



(30) 圖 附 史 築 建 度 印



第八一圖
ラダークのレー市の全景



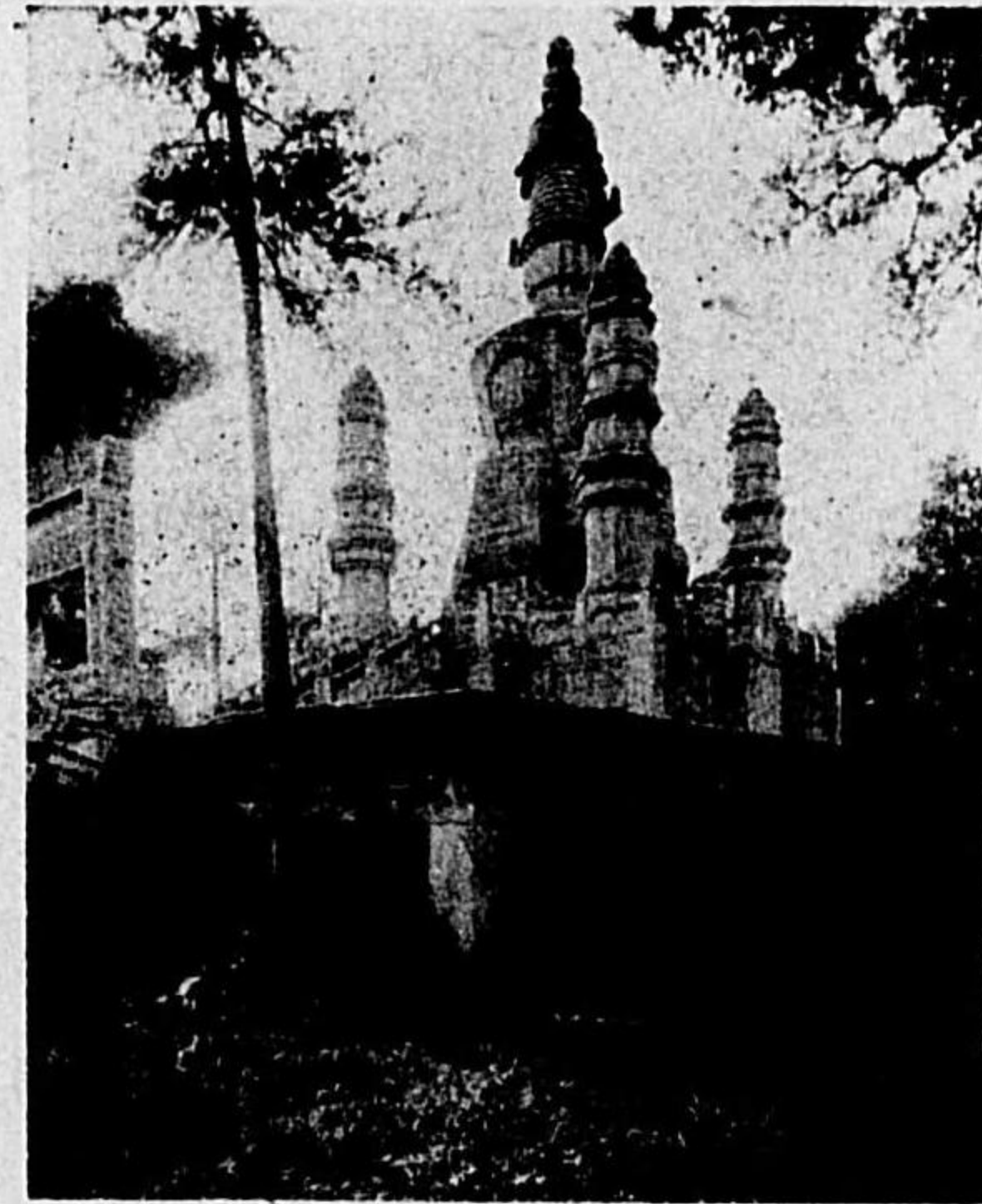
↓ 圖二一八第
のナルア・クーダ
寺グアツ・ムス



← 圖三一八第
のレ・ターダ
門 貌 狻 の 宮 王

(33) 圖附史築建度印

圖三二八第 ↓
ソオガトバルーパネ
祠ニ一アウバ・イウデ



圖〇二八第 ↑
墓の喇喇禪斑寺黃京北

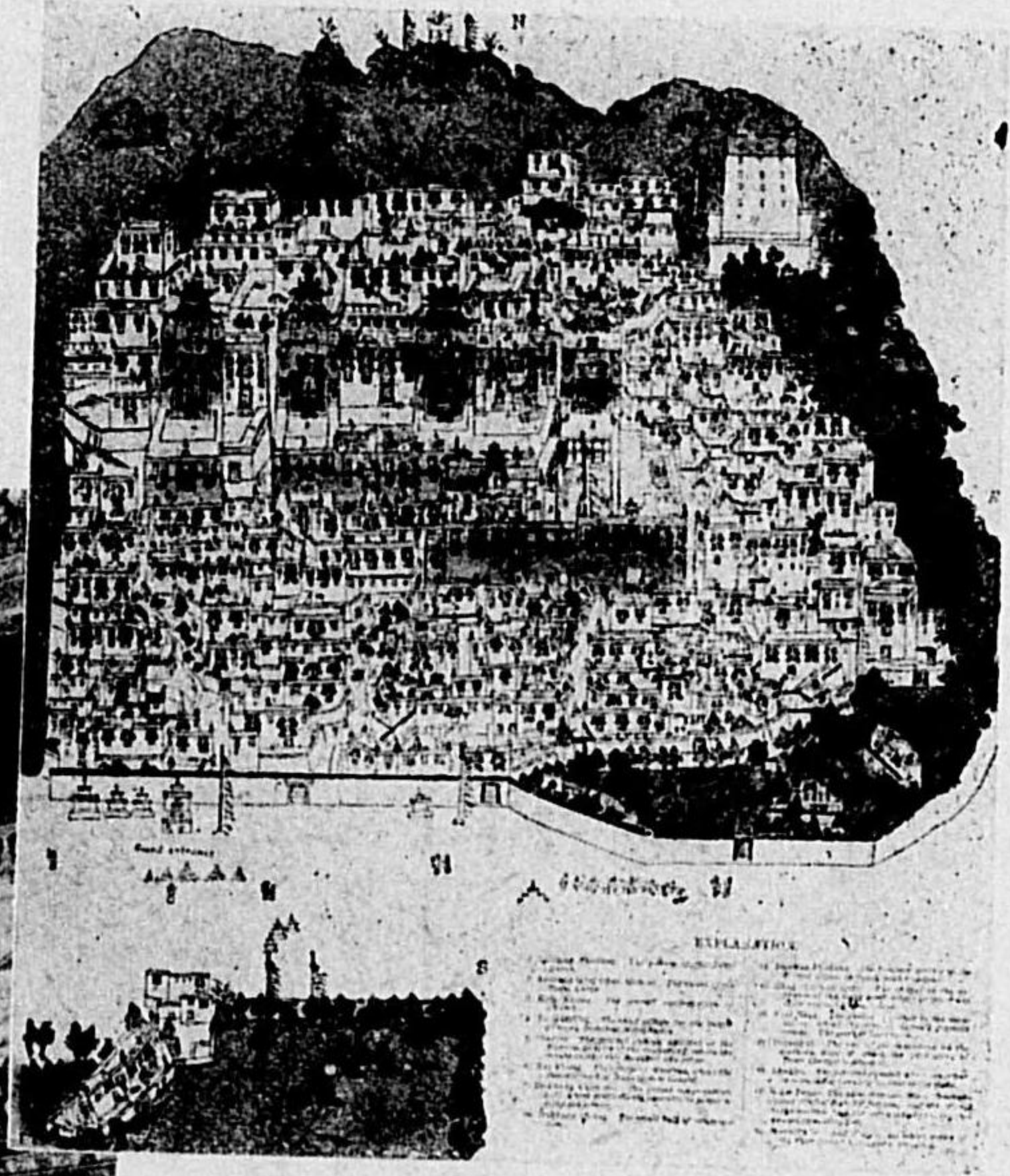
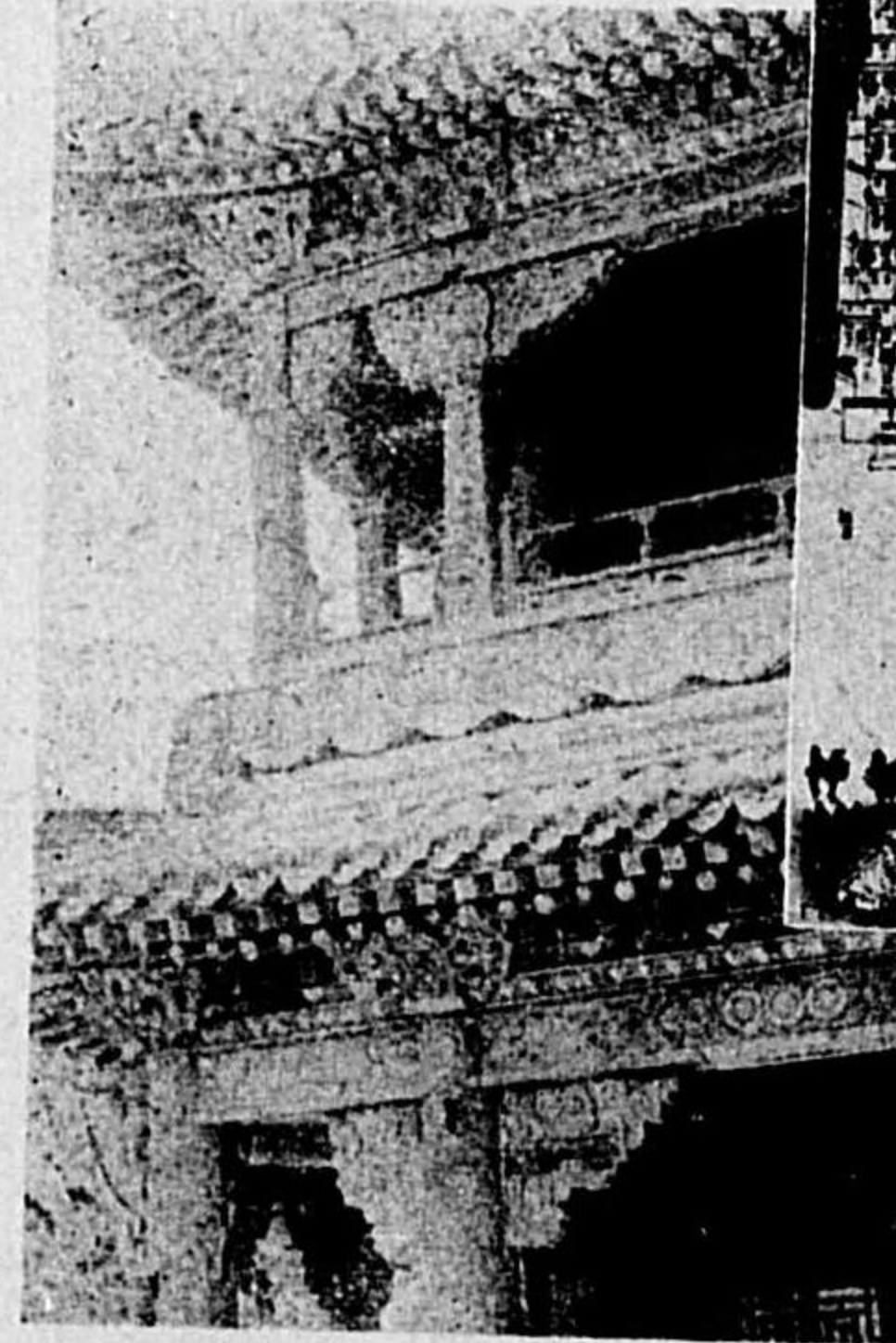
圖一二八第 →
圖の寶八

圖二二八第 ↓
街大市ンダバ ルーパネ



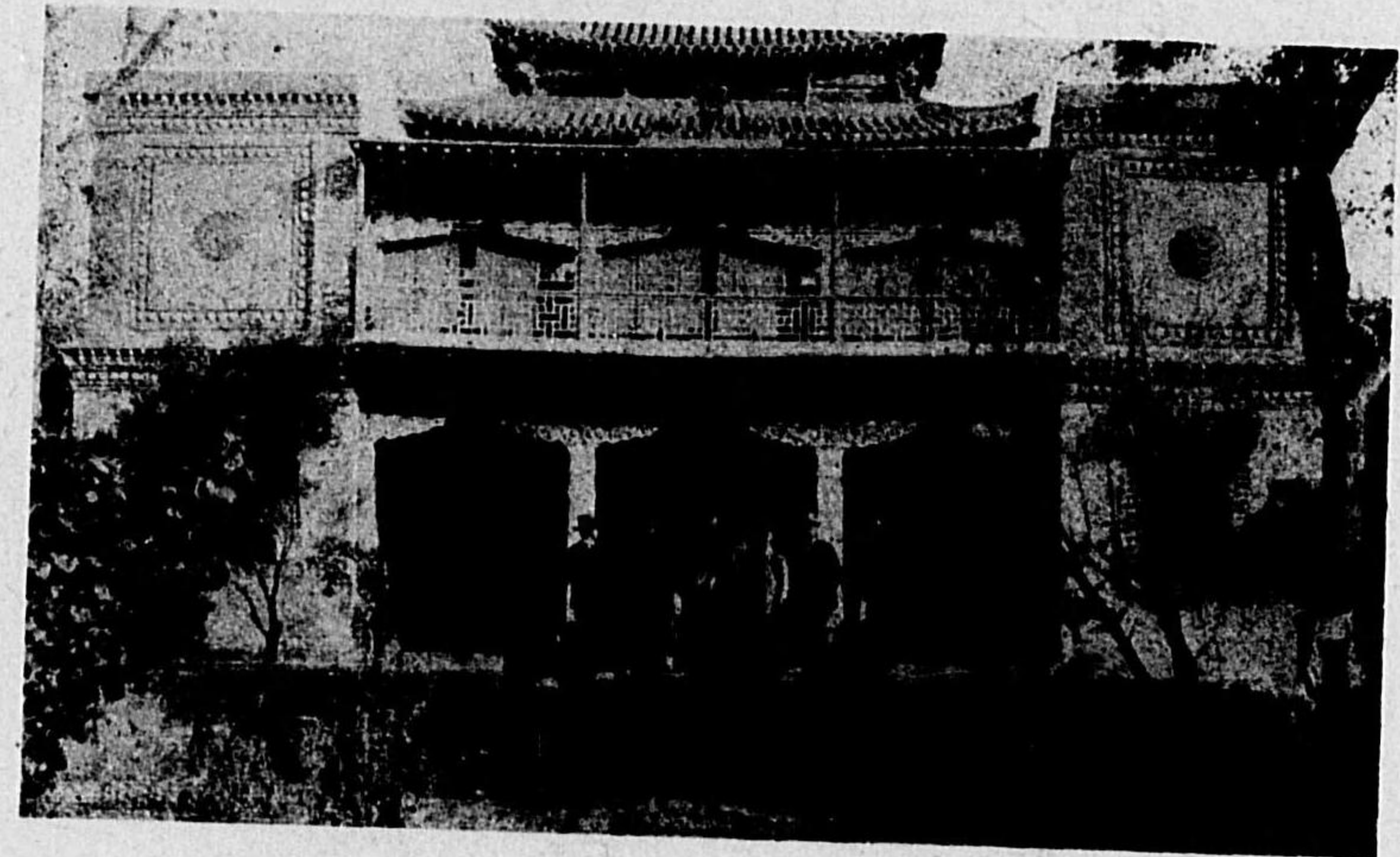
(32) 圖附史築建度印

圖八一八第 ↓
廟喇喇、隨寺黃西京北



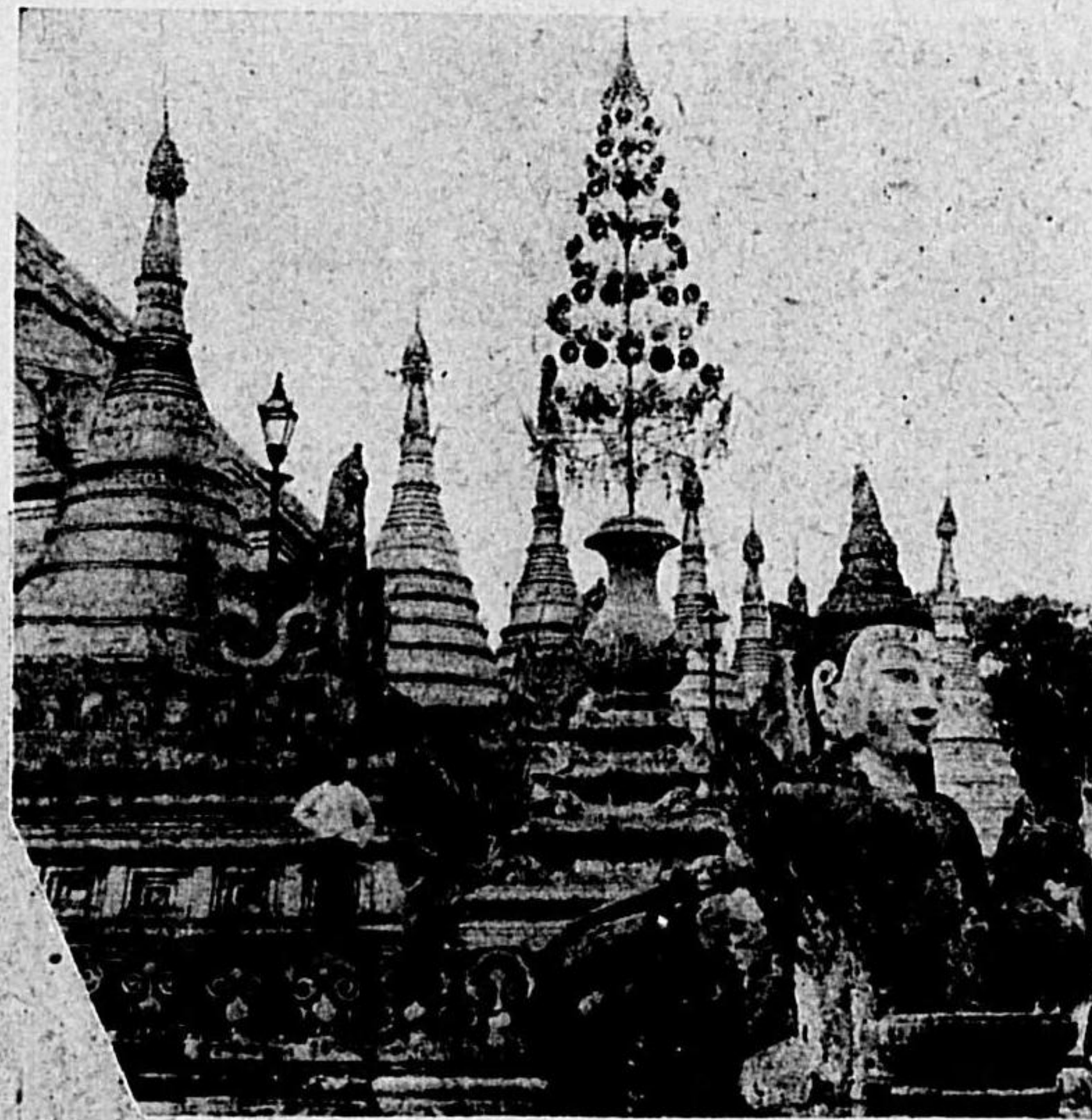
↑ 藍伽布倫什札エツガシ 圖七一八第

↓ 廟喇喇の屯代陶古蒙 圖九一八第

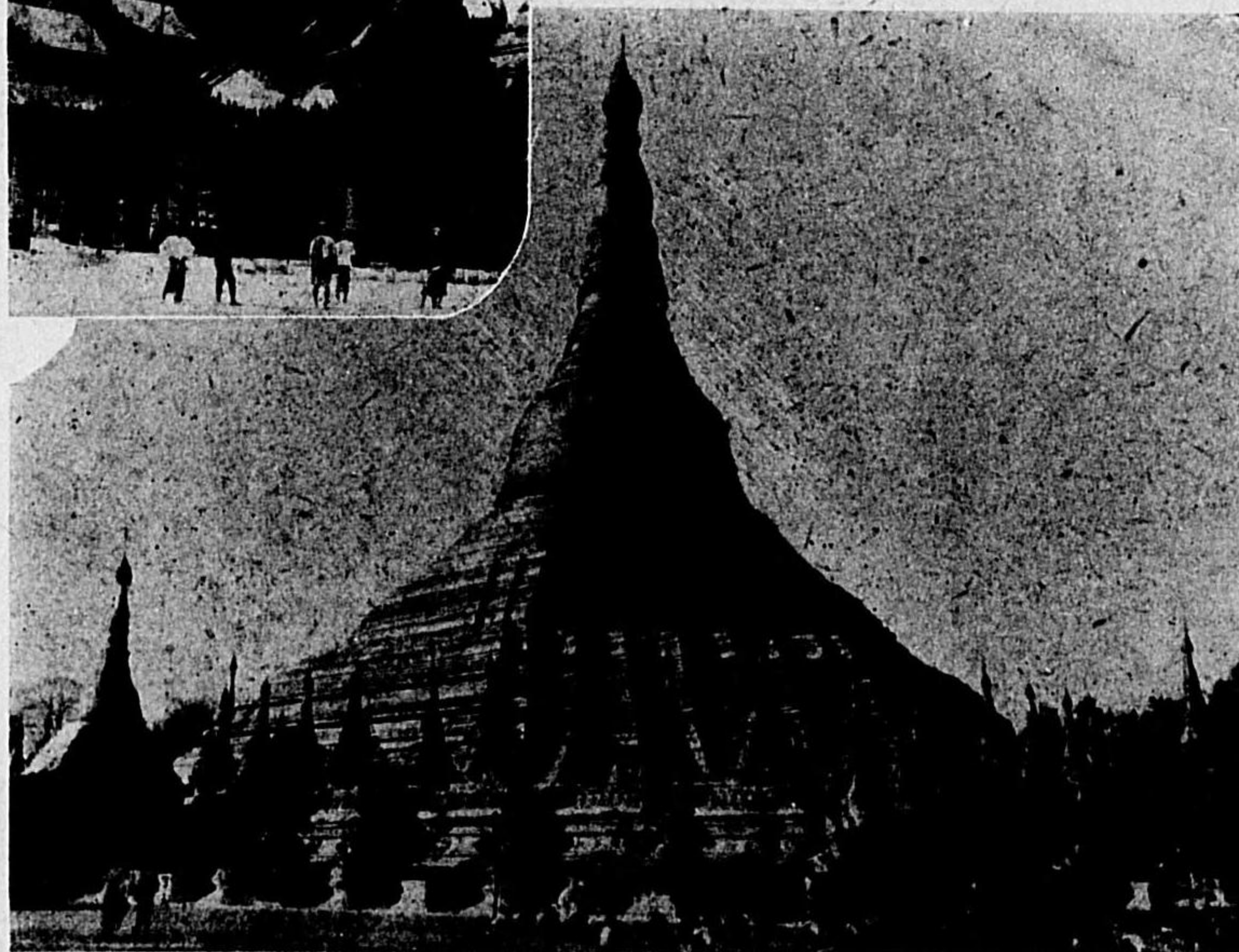


(35) 圖附史築建度印

圖八二八第 →
 ダエユシ ンーゲンラ
 都基の塔ンゴ
 圖九二八第 ↓
 ダエユシ ンーゲンラ
 トツサヤイバのンゴ

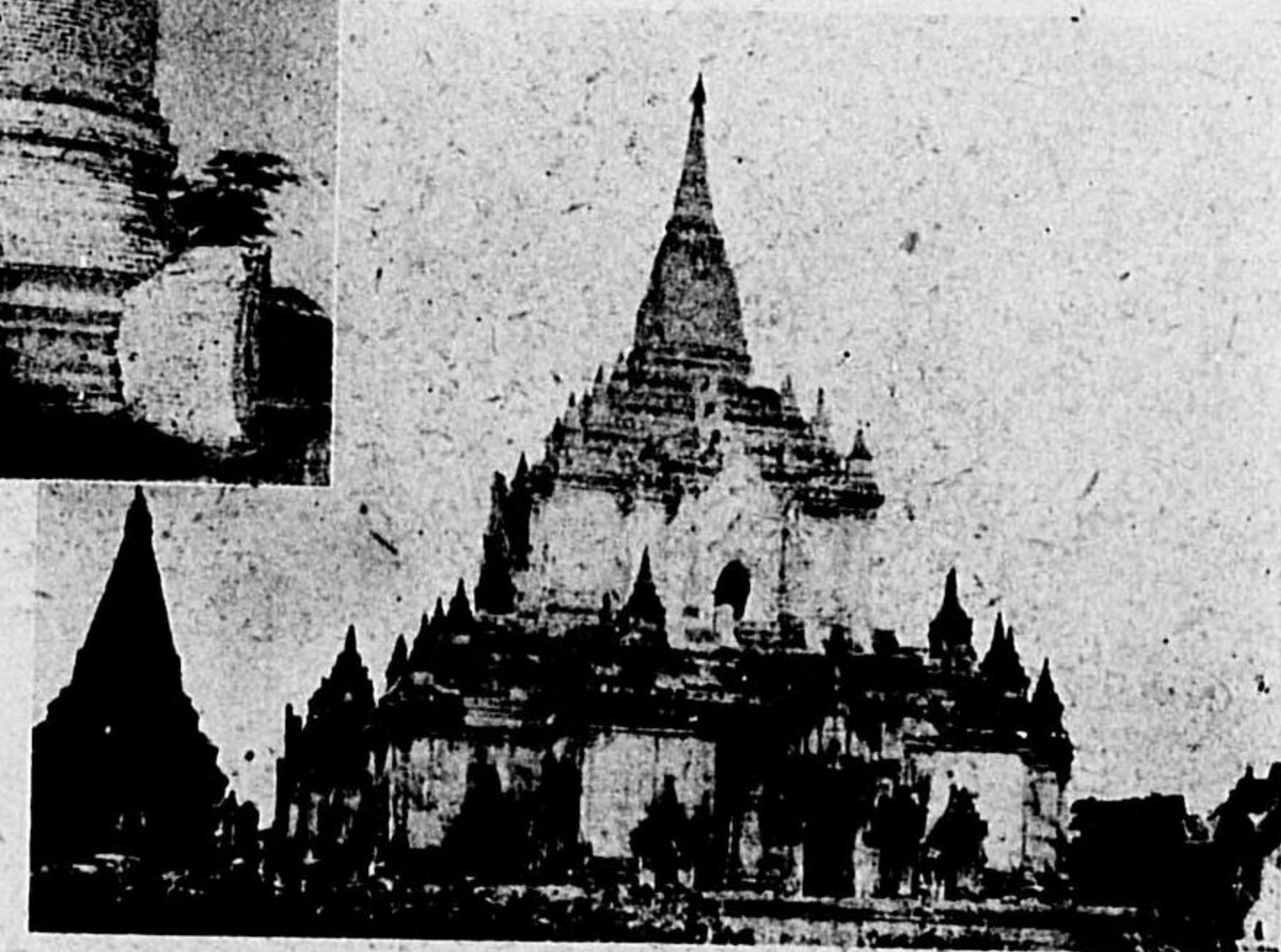


圖七二八第 ↓
 塔ンゴダエユシ ンーゲンラ



(34) 圖附史築建度印

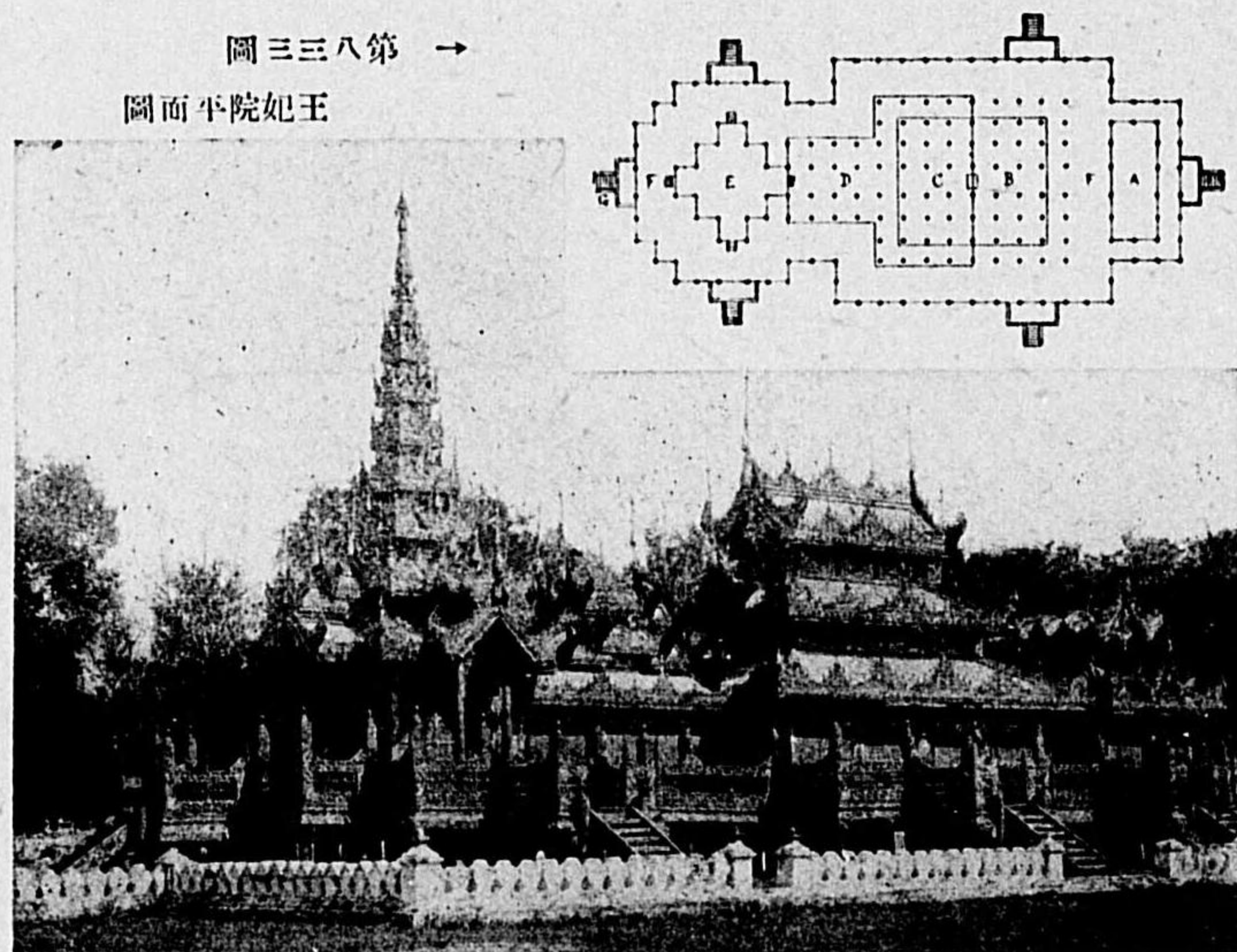
← 圖四二八第
 塔古のンガバ
 圖五二八第 ↓
 塔ンリバダウガ ンガバ



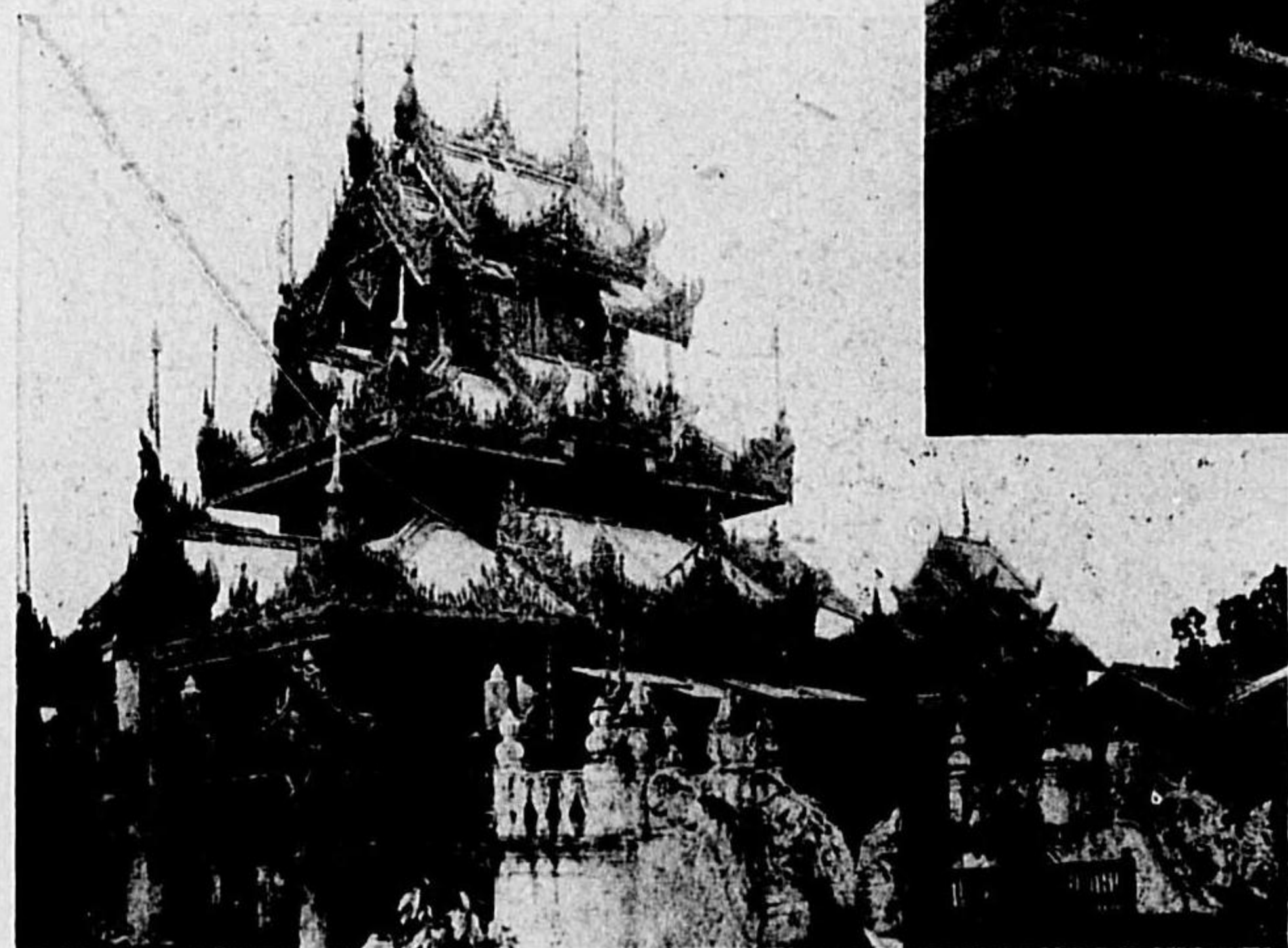
← 第八二六圖
 ランダインのシユエダゴン正門の獅子

(37) 圖 附 史 築 建 度 印

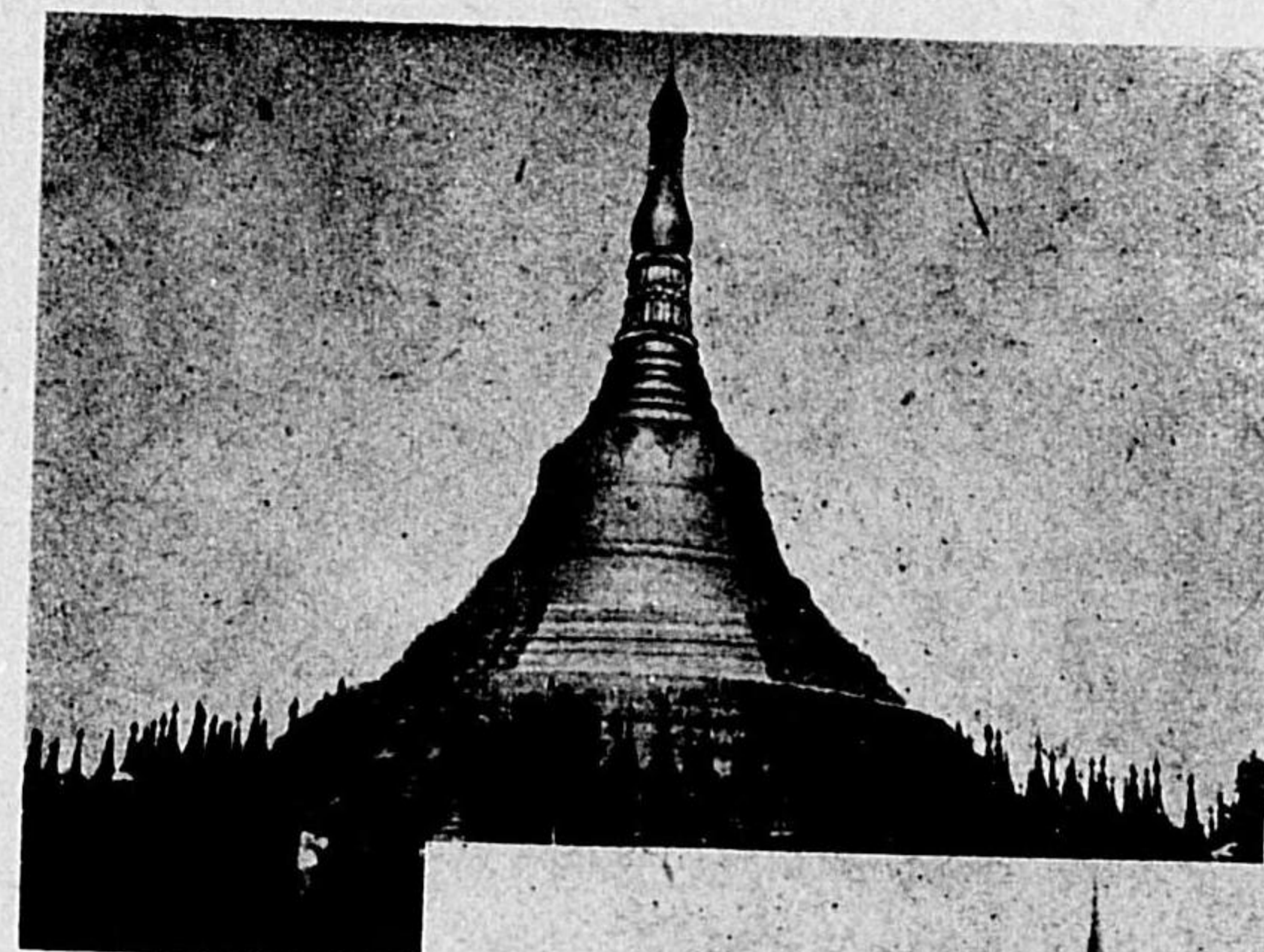
圖三三八第 →
圖面平院妃王



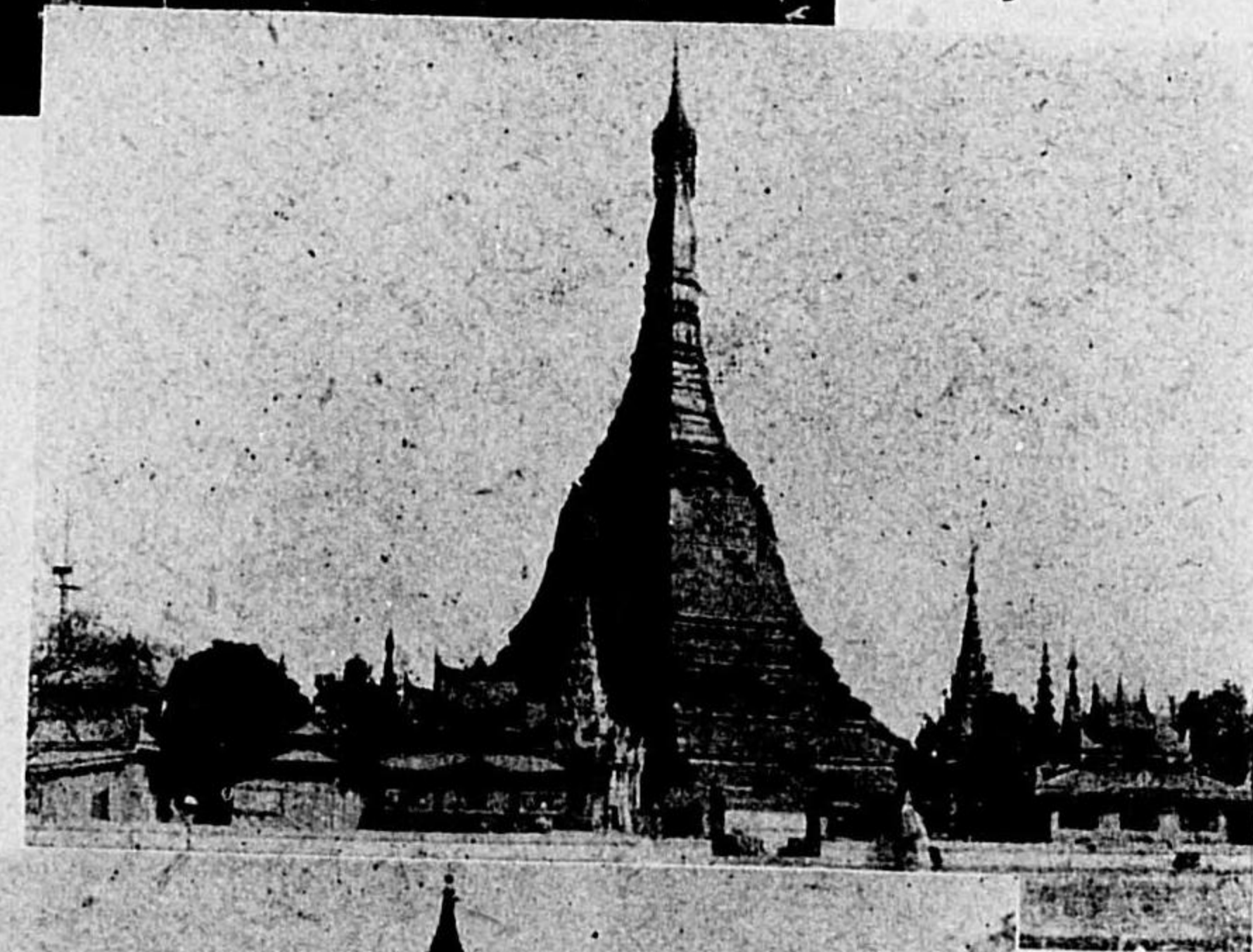
院妃王—レダシマ 圖四三八第 ↑
宮王—ン—グシラ 圖六三八第 →
院僧—ン—グシラ 圖五三八第 ↓



(36) 圖 附 史 築 建 度 印



第 八 三 〇 圖
スグー レニウニマウダウ



→ 第 八 三 一 圖
ラングーン スーレー塔

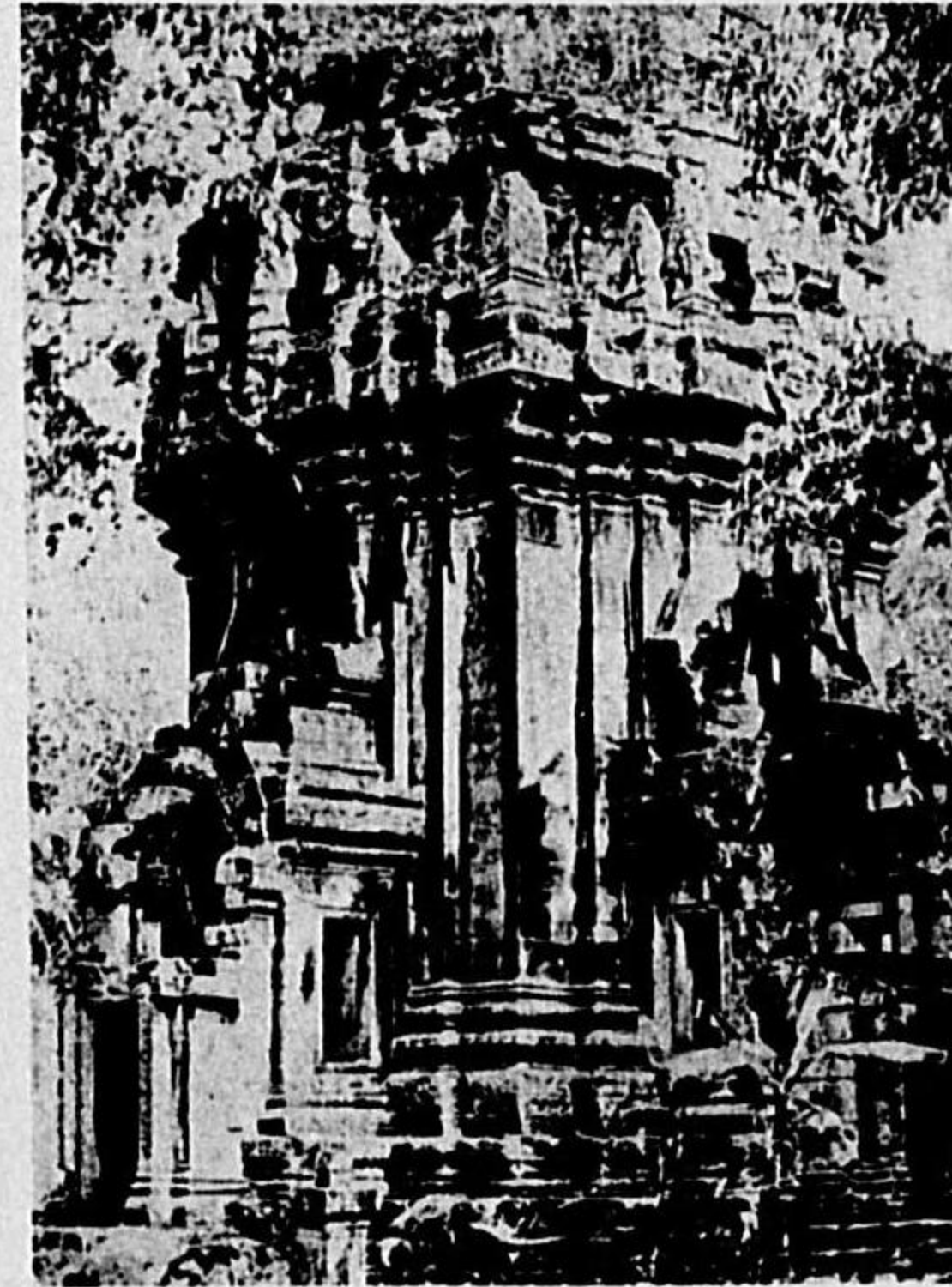


← 第 八 三 二 圖
マンダレー 四百五十塔

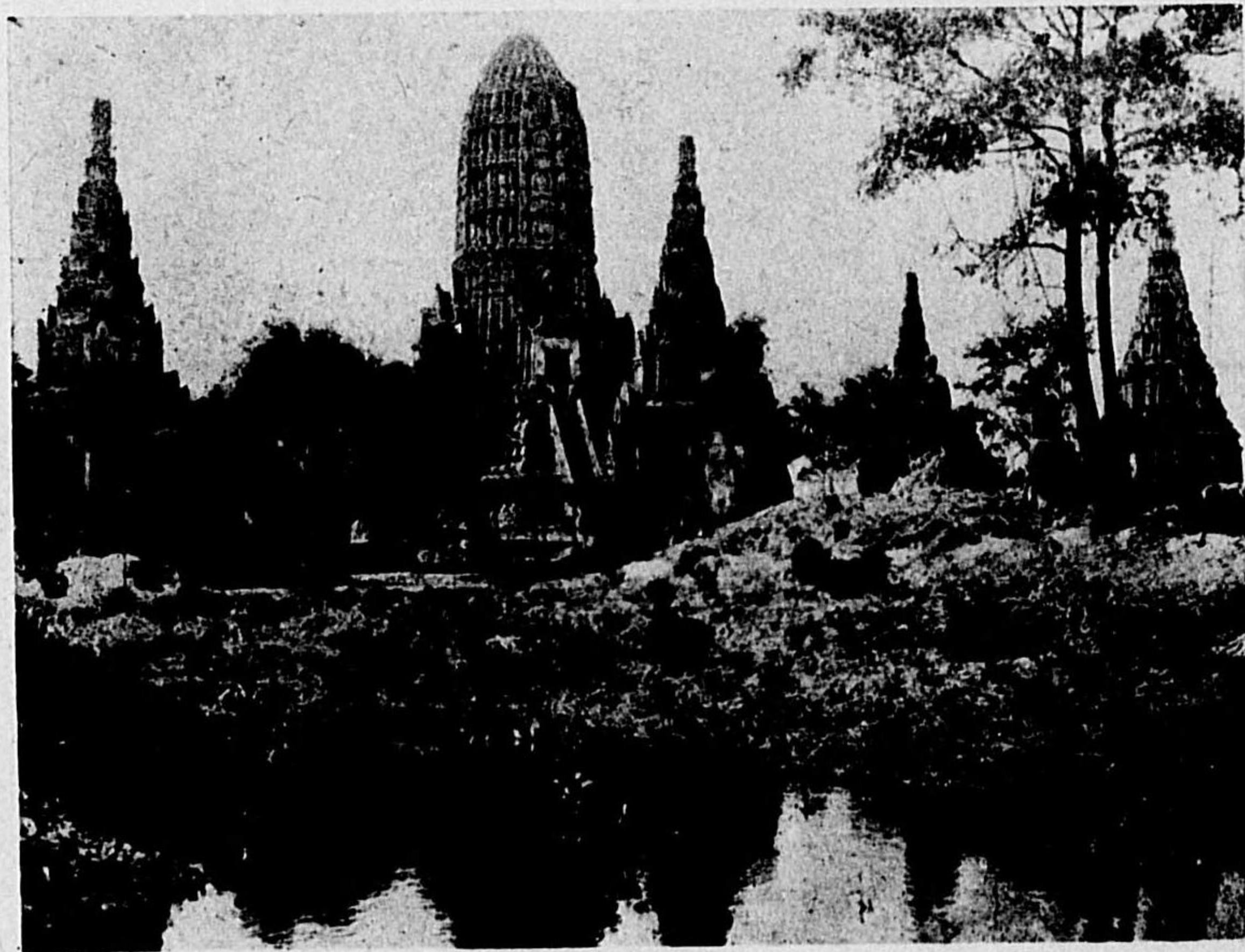
(39) 圖附史築建度印



築建古のイマイフ 圖〇四八第

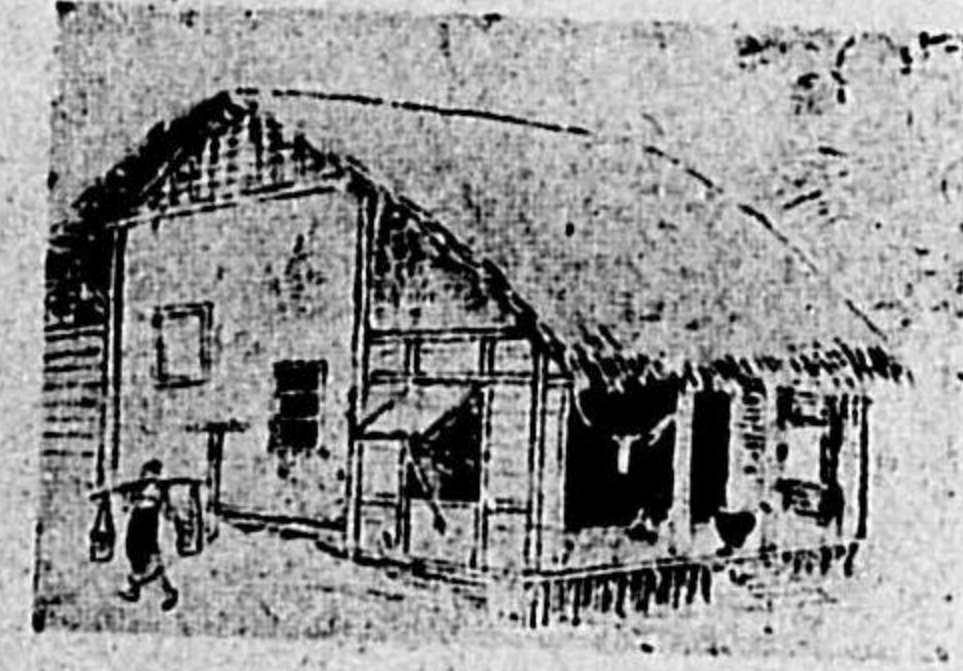
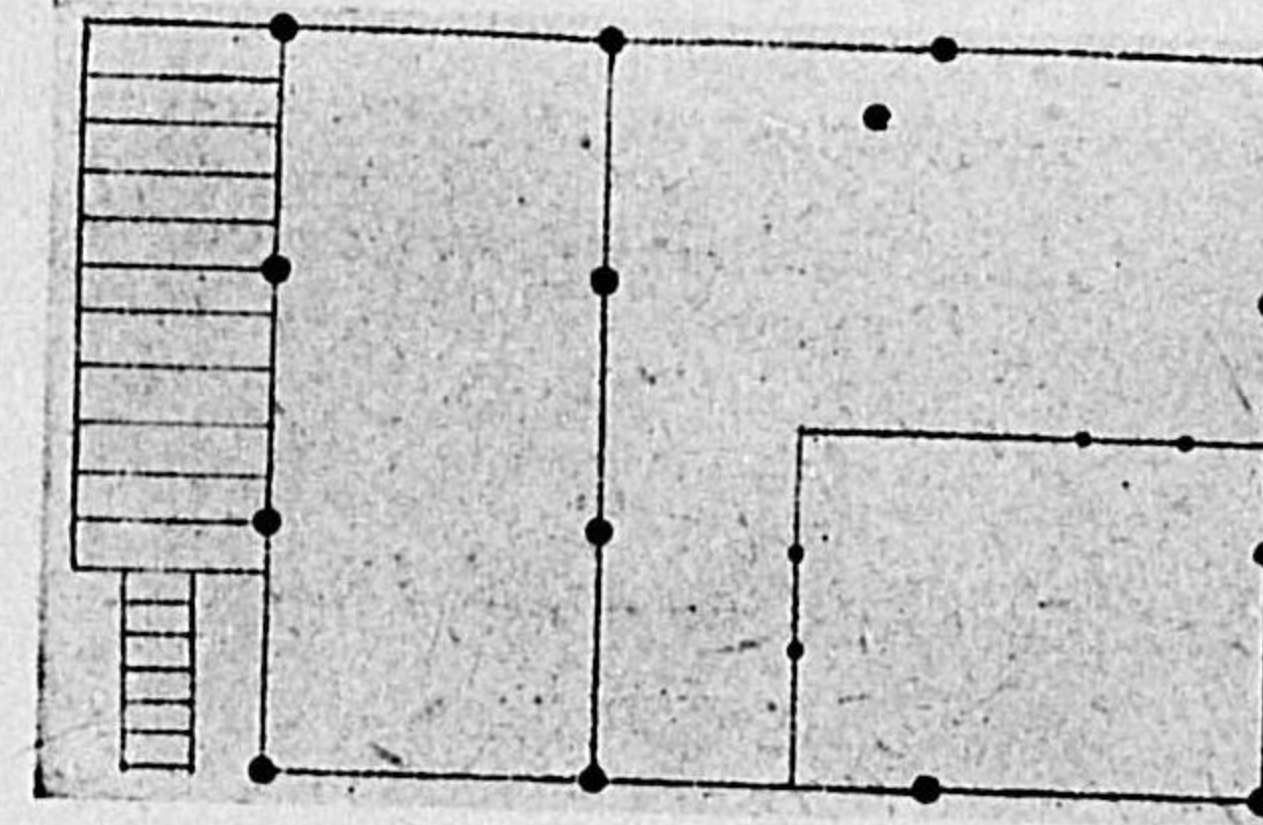


築建古のリプロ 圖九三八第



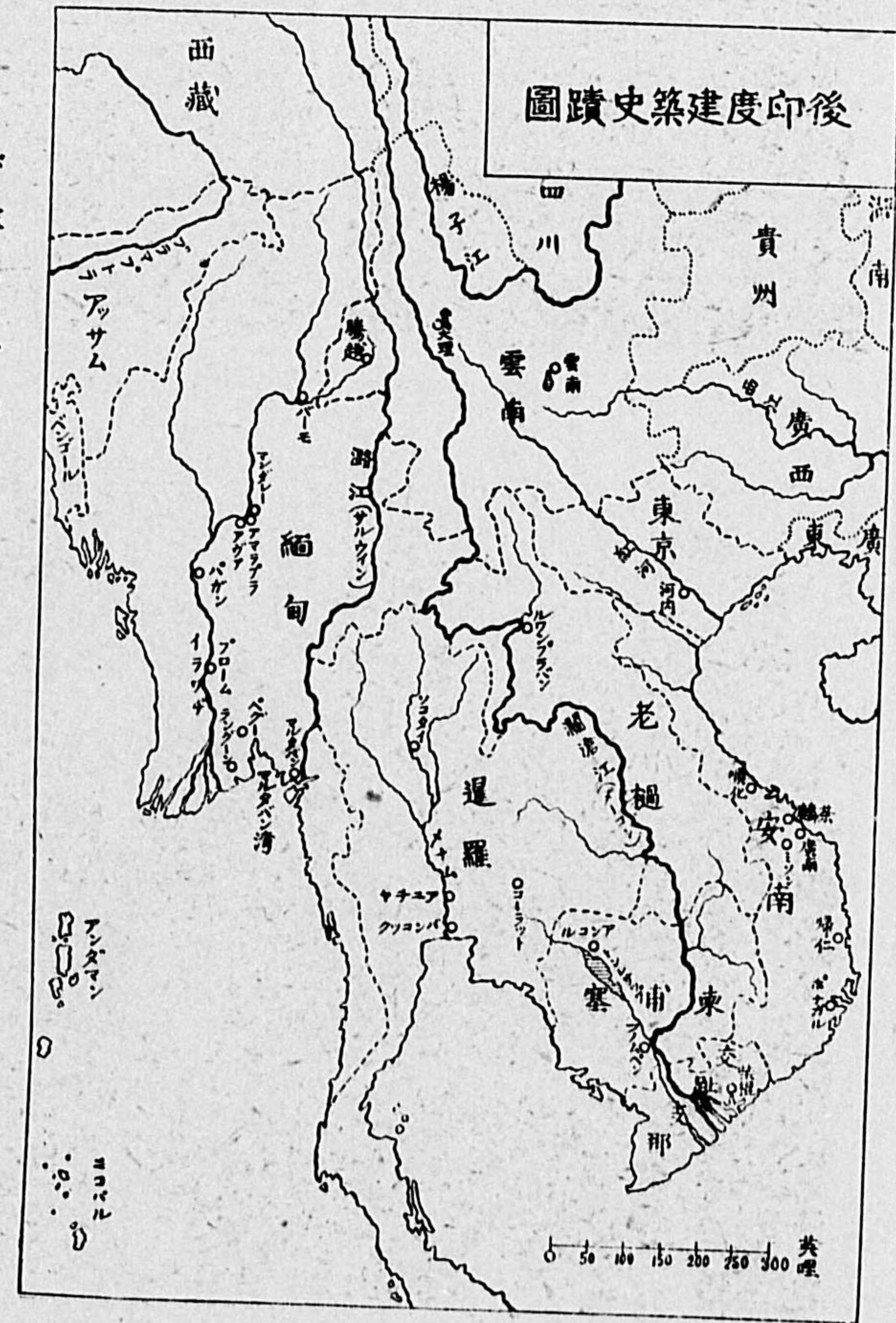
塔諸のアチヌア 圖一四八第

(38) 圖附史築建度印



圖七三八第 ↑
民の近附モ一バ
面外と面平家
チツケス
圖八三八第 →
築建度印後
圖蹟史

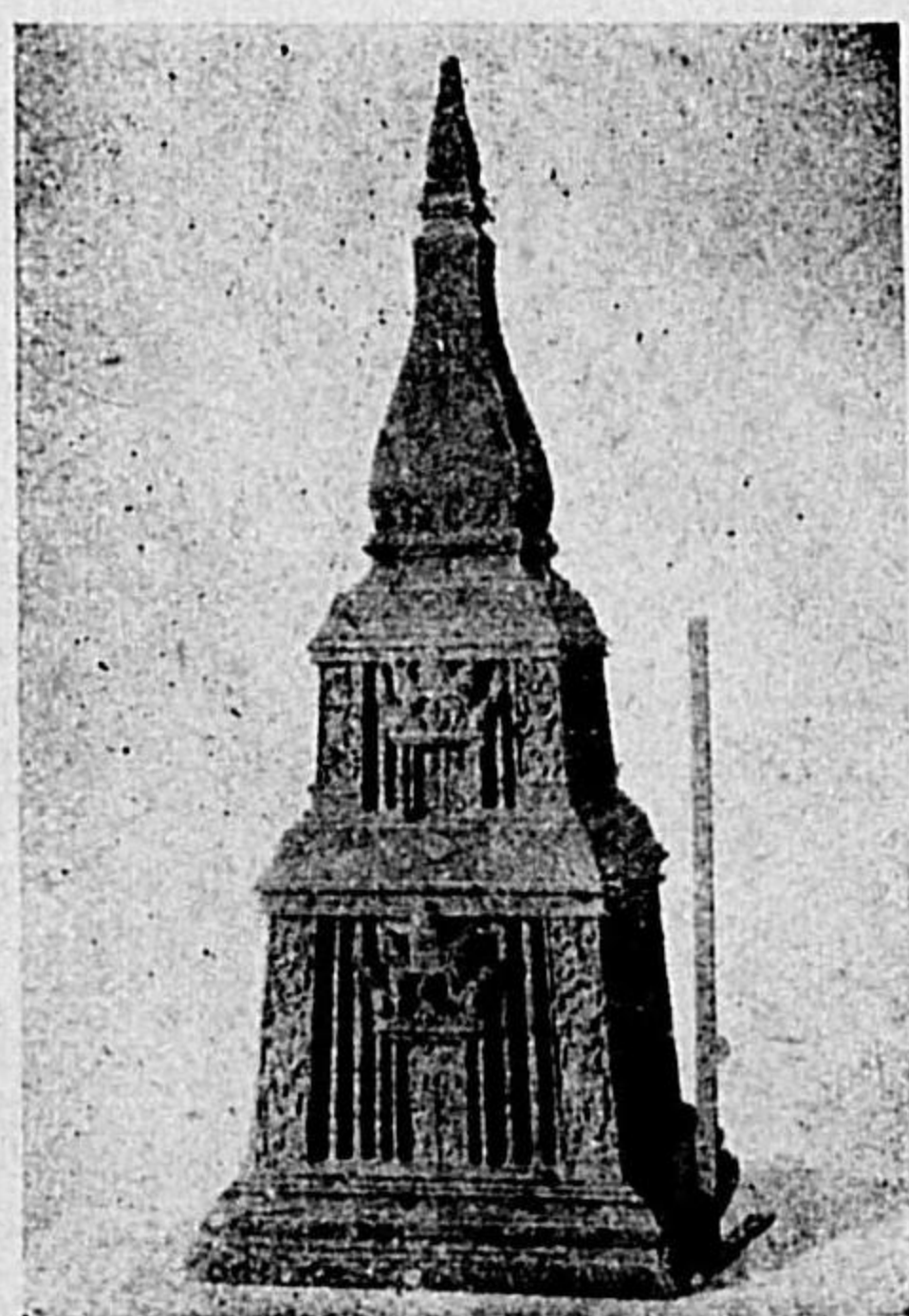
圖蹟史築建度印後



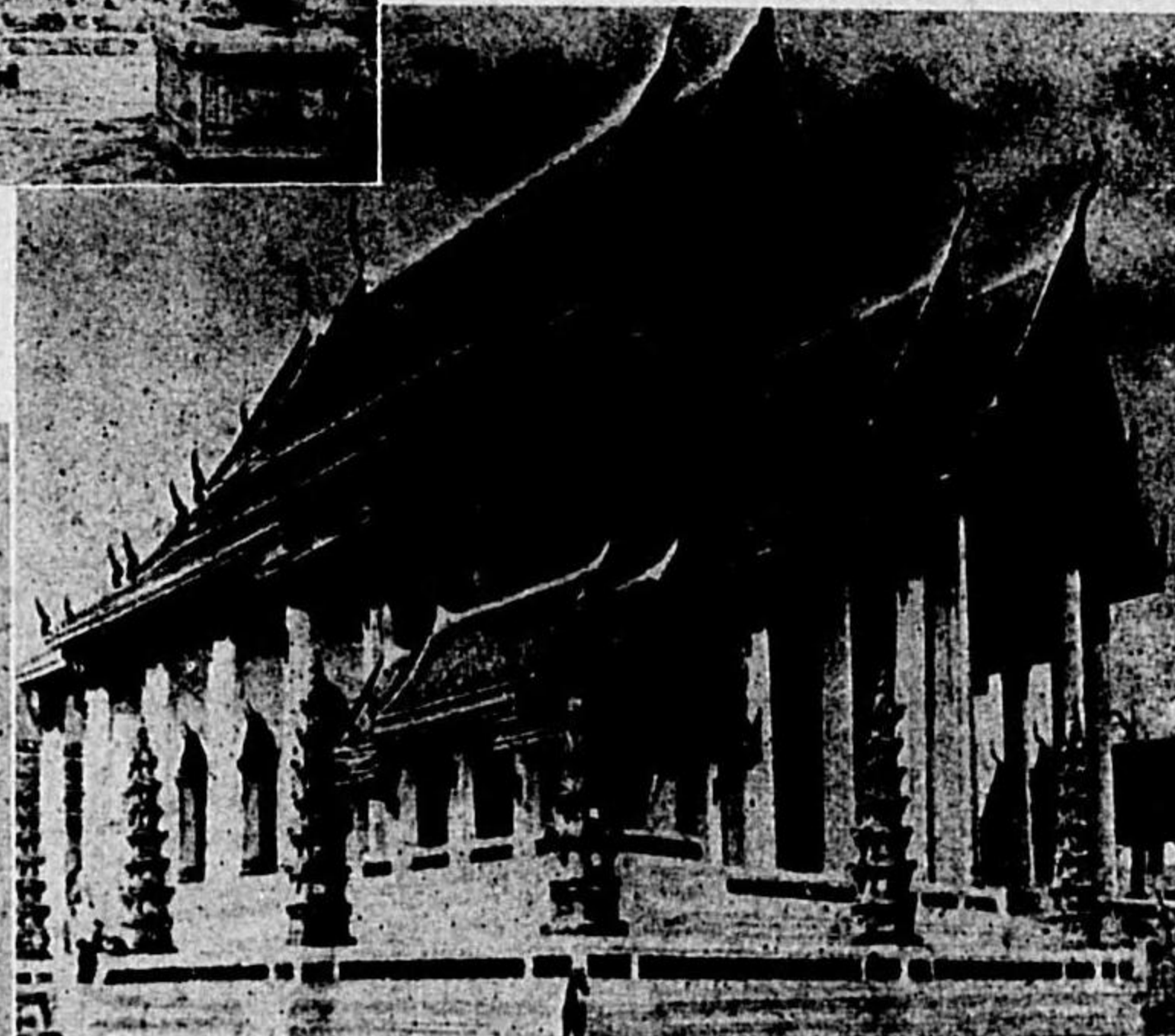
(41) 圖附史築建度印



↑ 第六四八圖
トツワ タツコンバ
堂佛のシエユジ。



第八四八圖 河内東洋學院所藏の老樹の塔

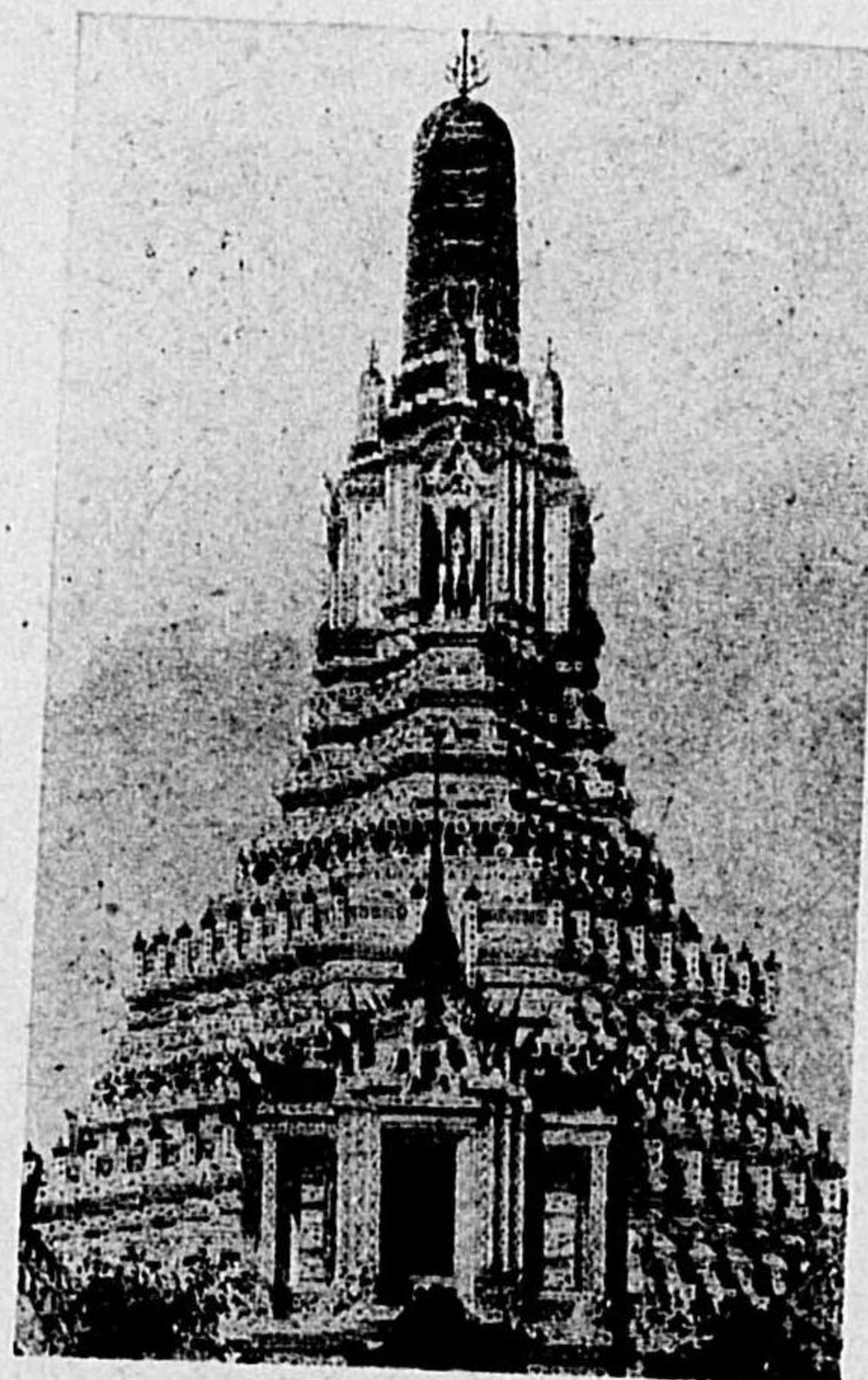


↑ 第七四八圖
房僧のトータース・トツワ タツコンバ



← 塔の樹老の藏所院學洋東内河 圖九四八第

(40) 圖附史築建度印



ンチ・トツワのタツコンバ 圖三四八第

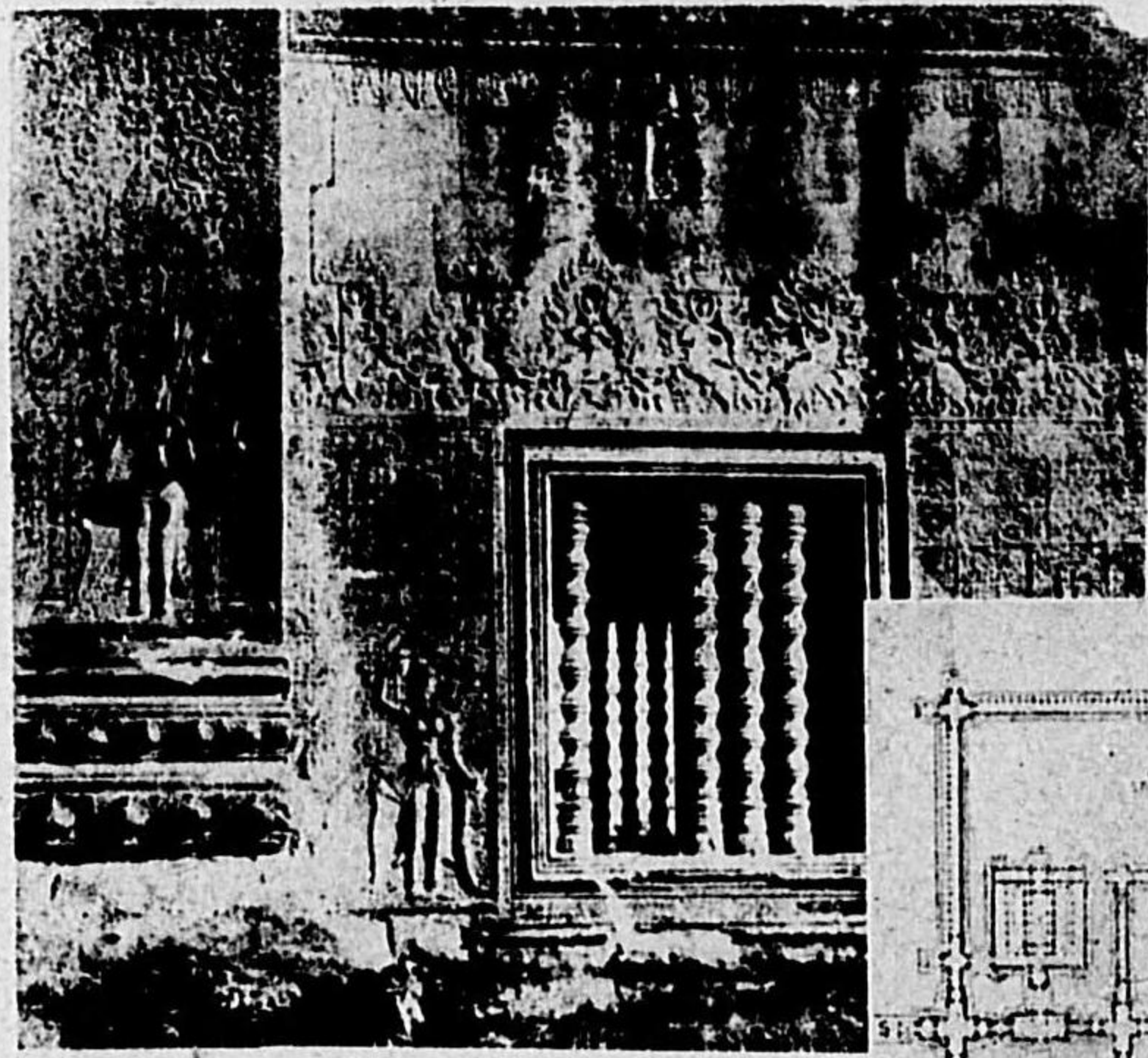
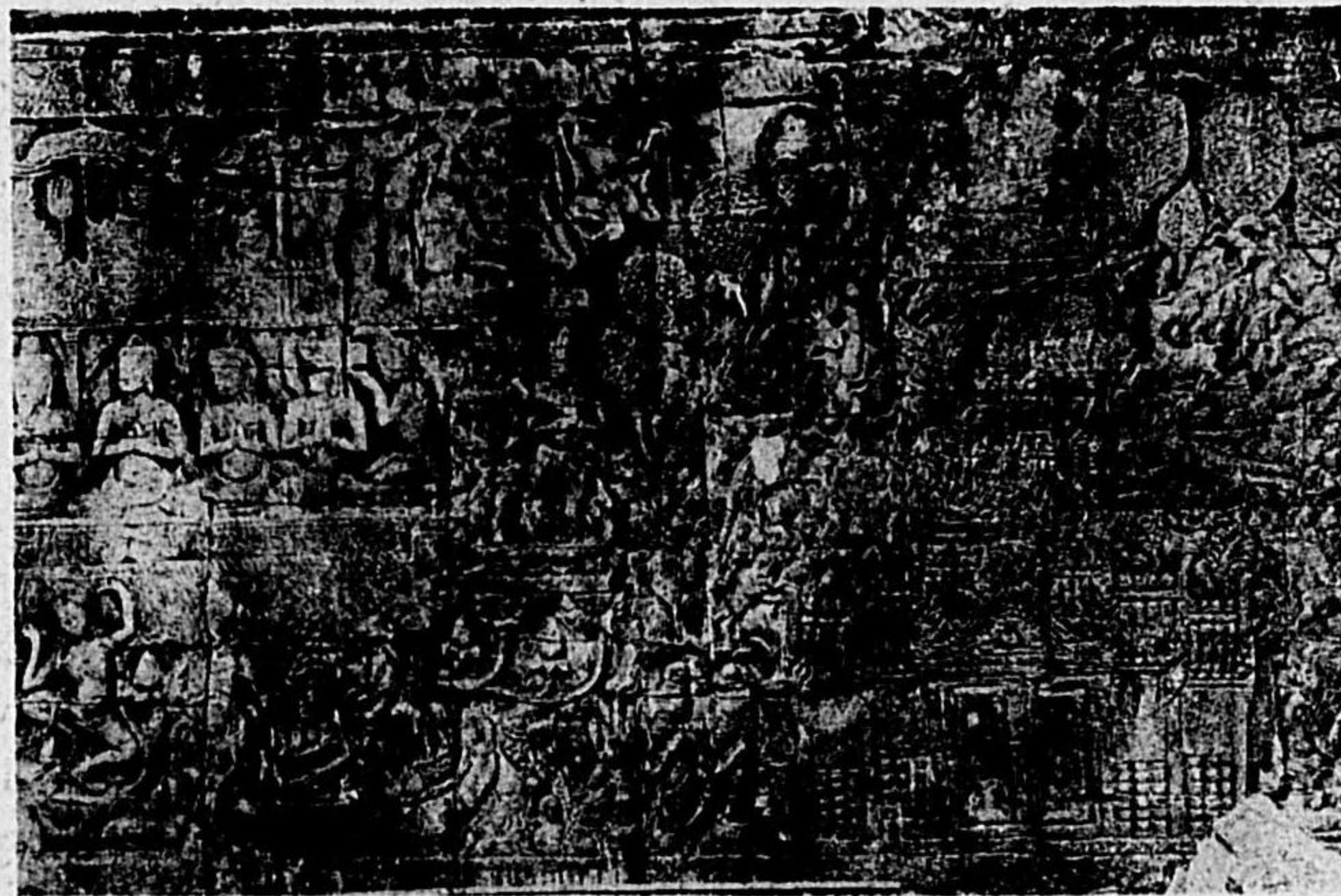


← 第八四二圖 アニチアの塔



↑ 第四四八圖 チセマント・ラフ
堂鐘のシリ・マンア・トツワ 圖五四八第 →

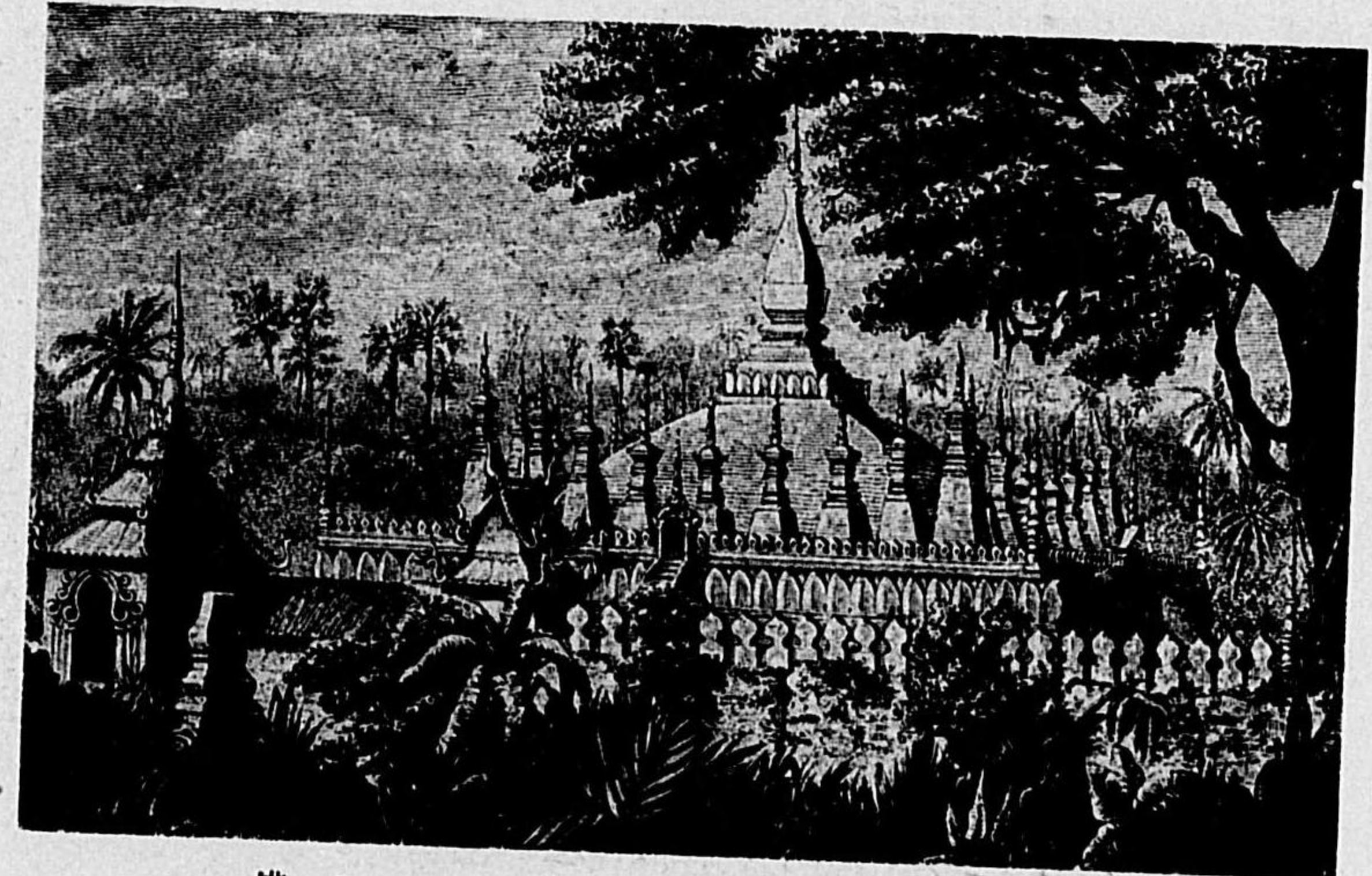
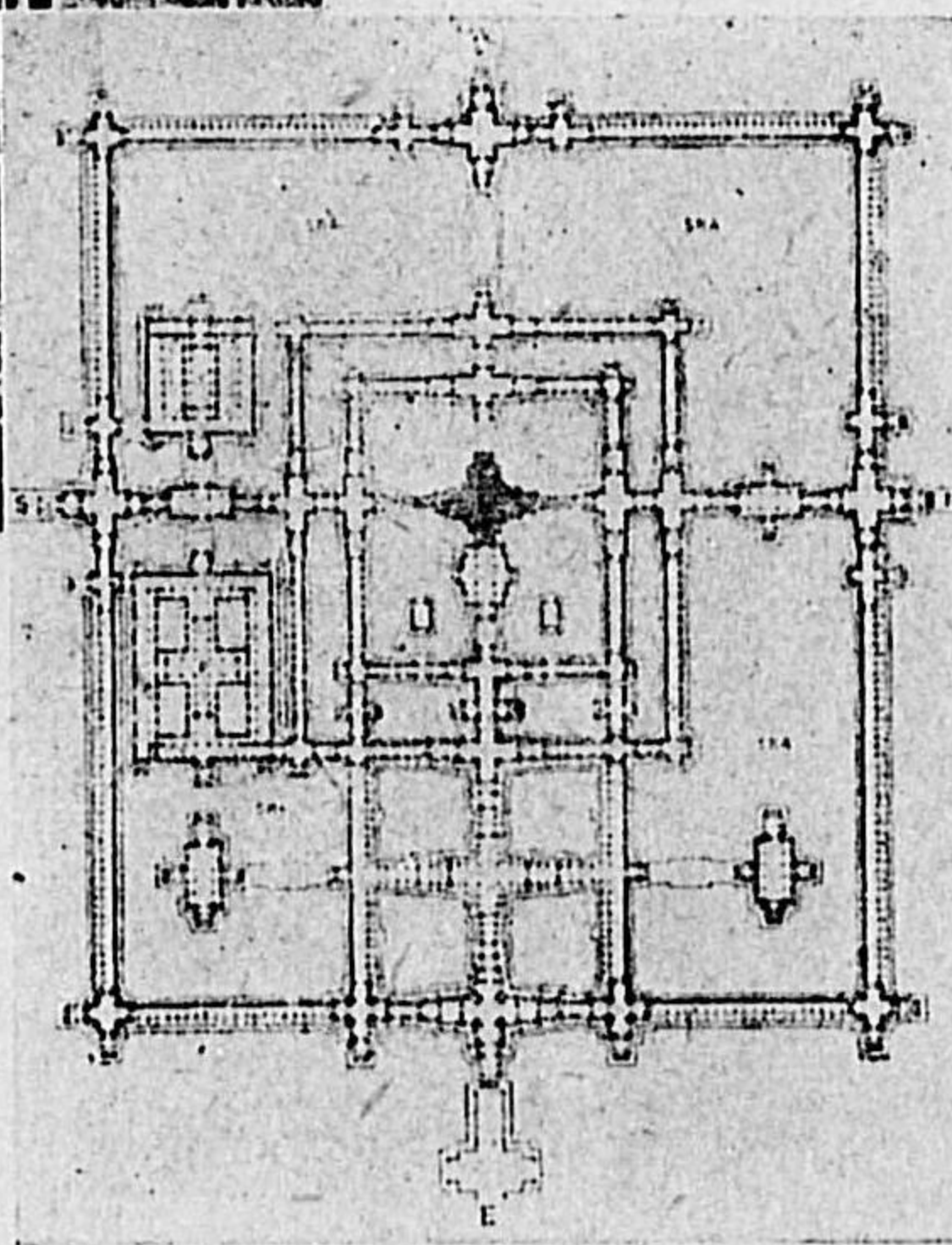




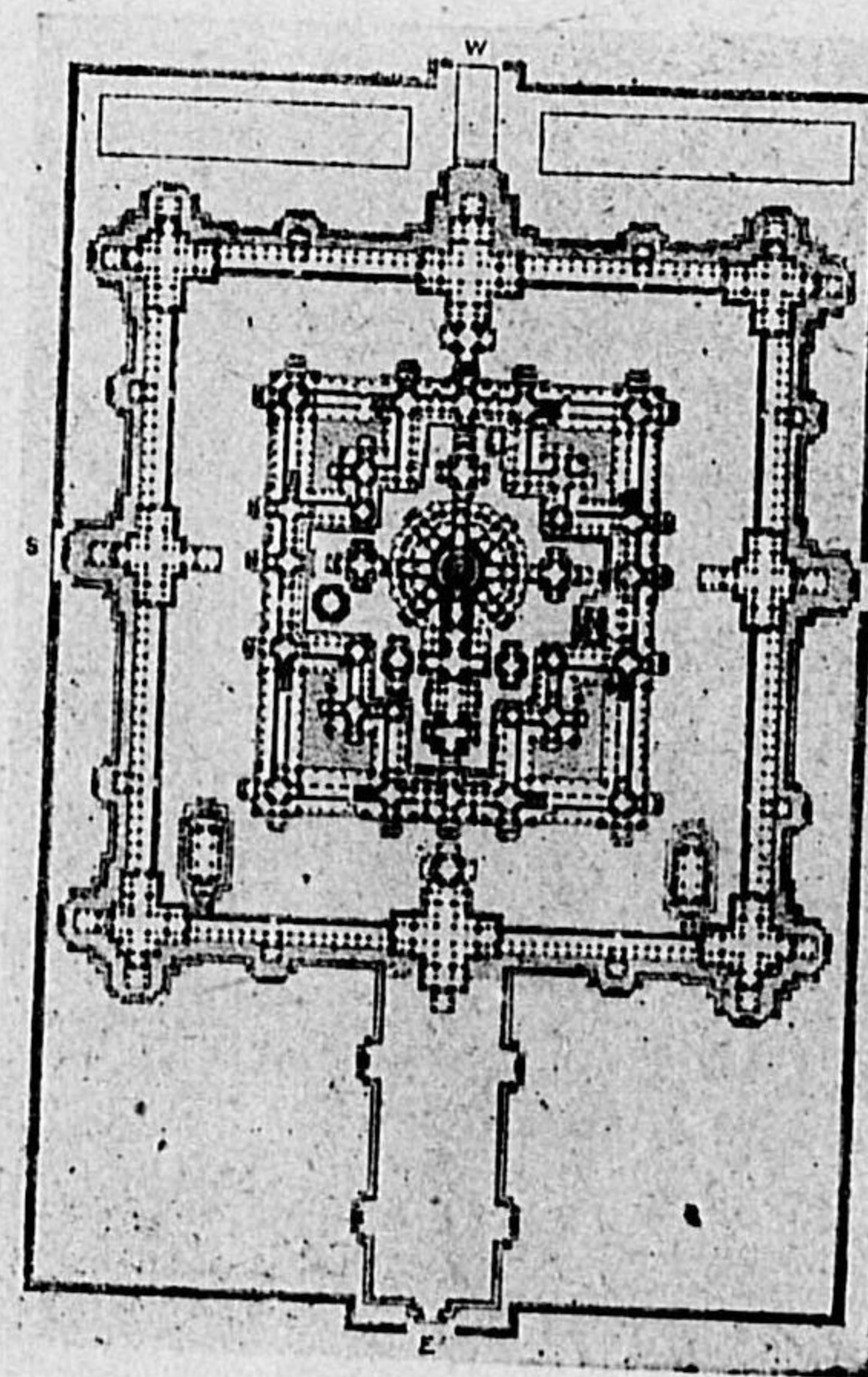
圖三五八第 ↑
彫浮面壁のンヨバ

圖四五八第 →
部細のトツワ・ルコシア

圖五五八第 →
圖面平堂祠のアレアメ・ンベ



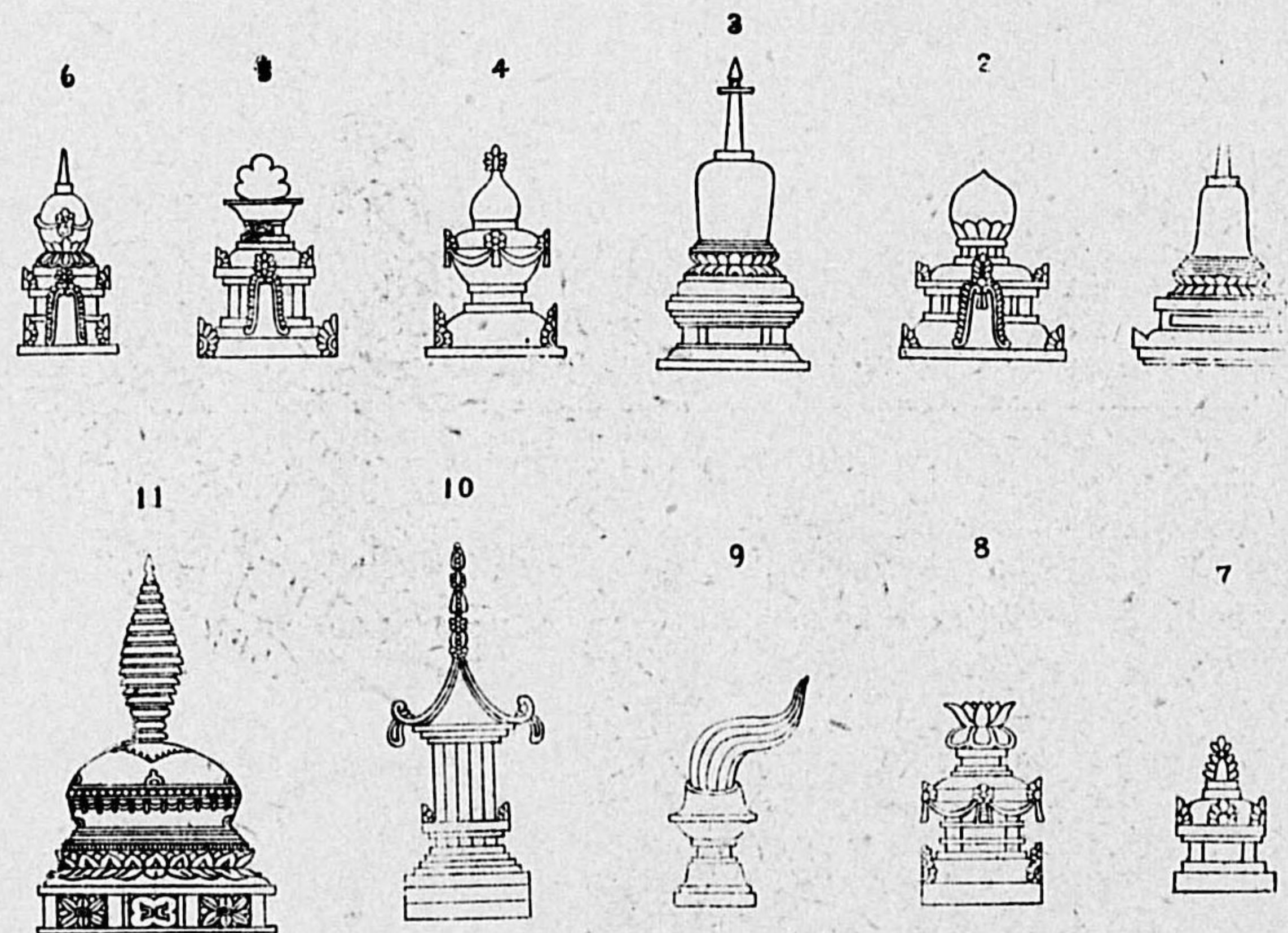
塔のンヤチンエイウ 圖〇五八第



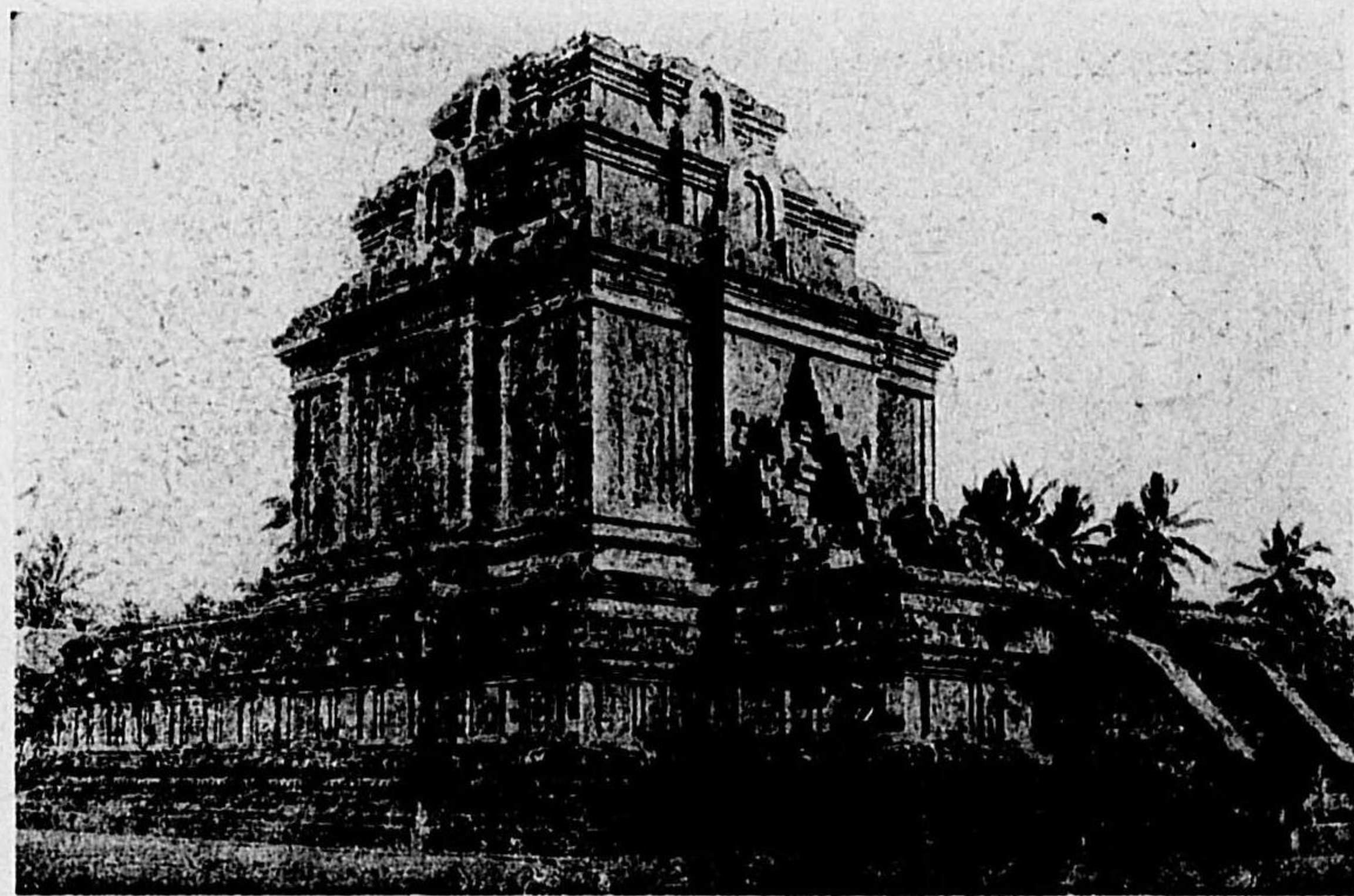
塔のンヨ・ムヨチ 圖一五八第 ↑

← 圖面平のンヨバ 圖二五八第

(47) 圖附史築建度印



頗具佛及パーツるれは現に刻彫ルドプロブ 圖六六八第



トツドンメ・ヂンヤテ 圖七六八第

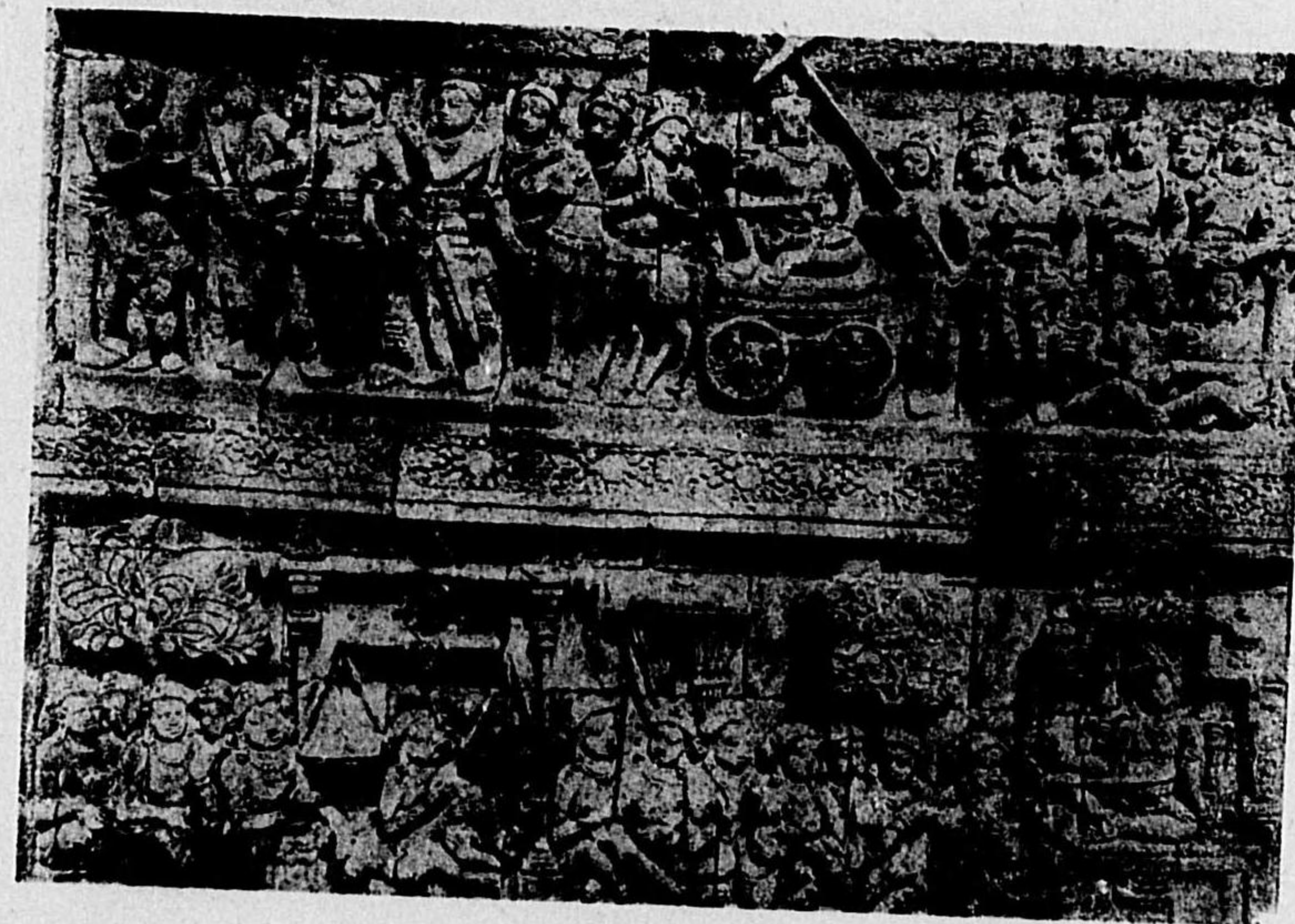
(46) 圖附史築建度印

圖三六八第 →
塔の周の其び及央中ルドプロブ



← 圖四六八第
部細のルドプロブ

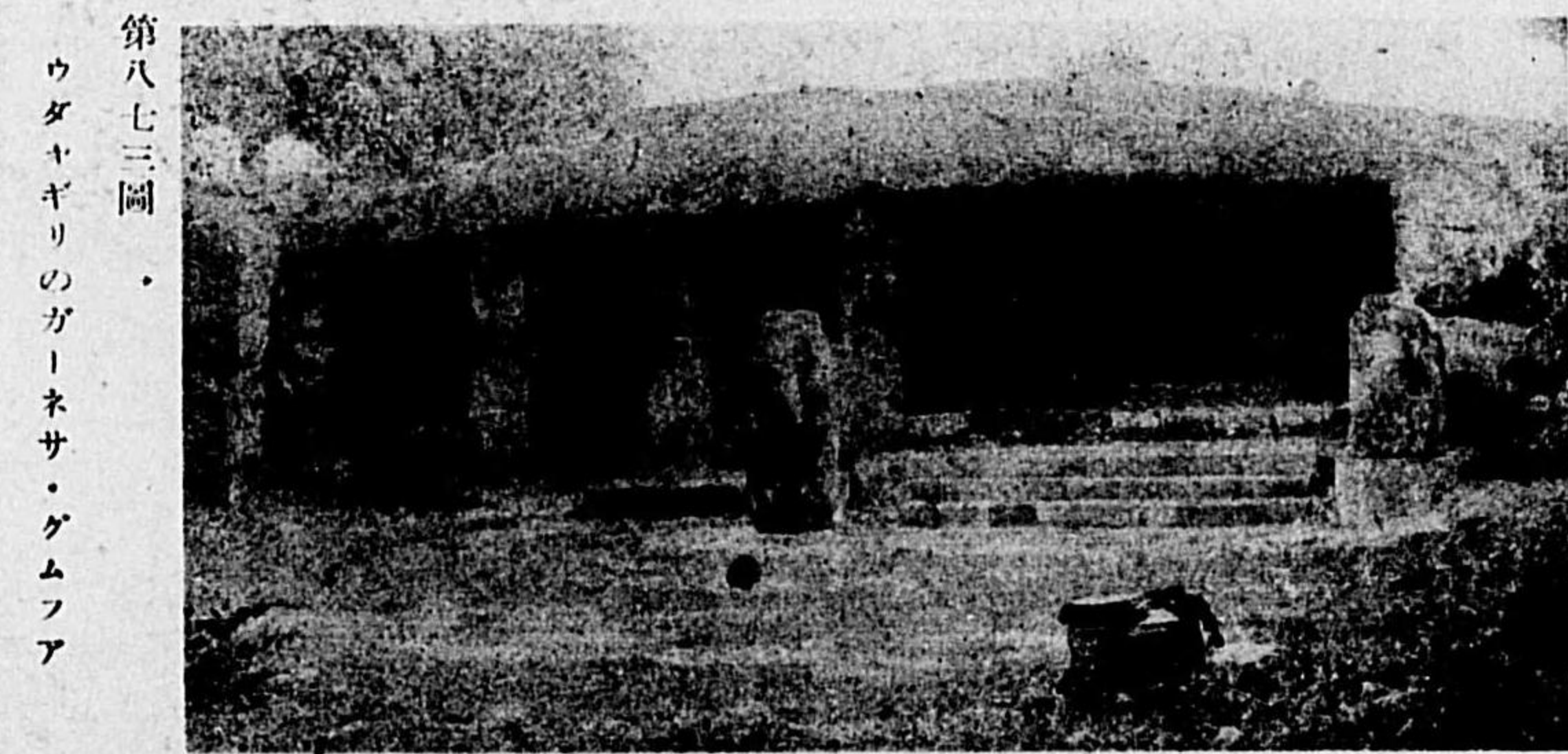
↓ 圖五六八第
刻彫のルドプロブ



(49) 圖附史築建度印



第八七二圖 ←
ウダヤギリのラニ・グムフア

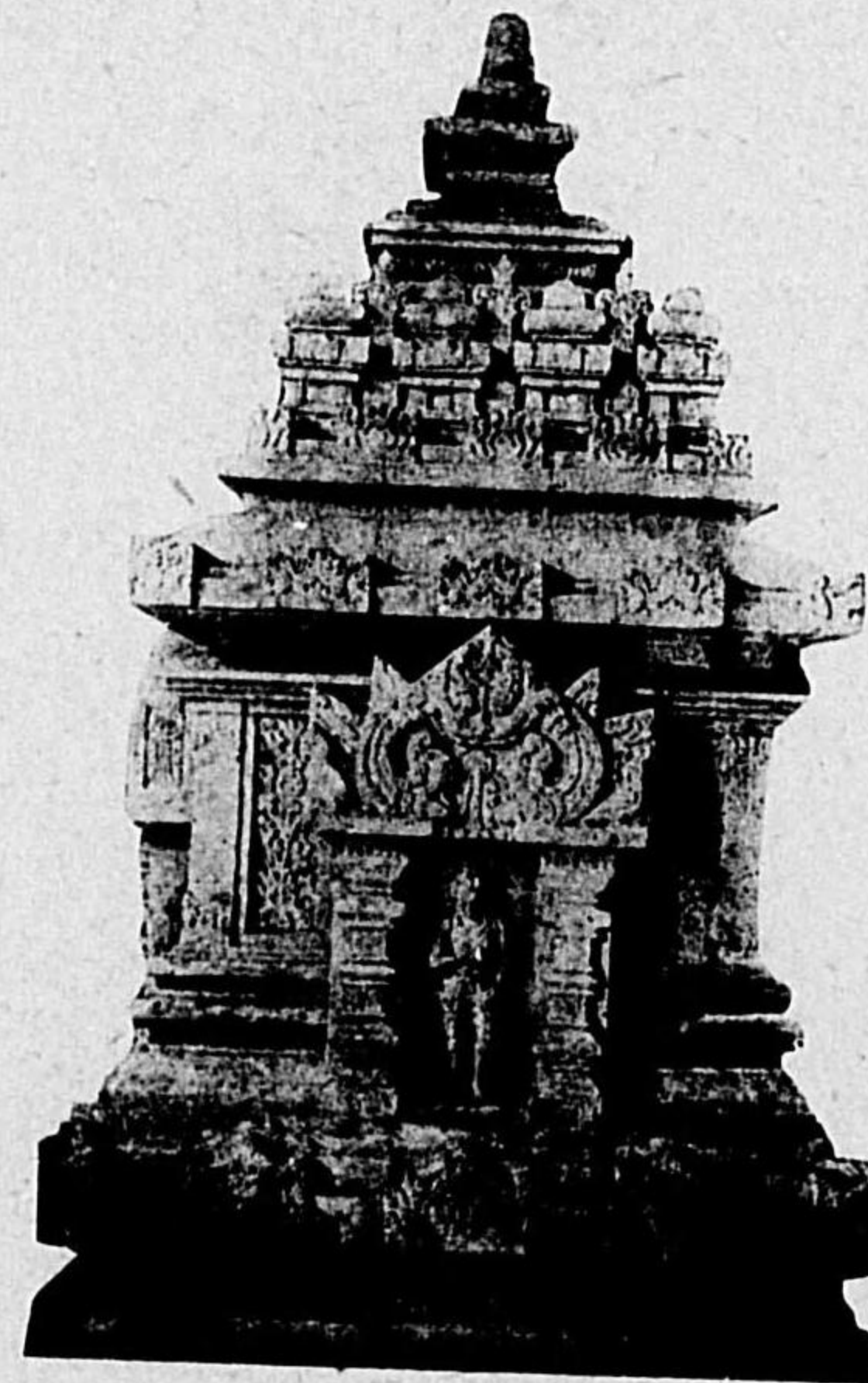


第八七三圖
ウダヤギリのガーネサ・グムフア



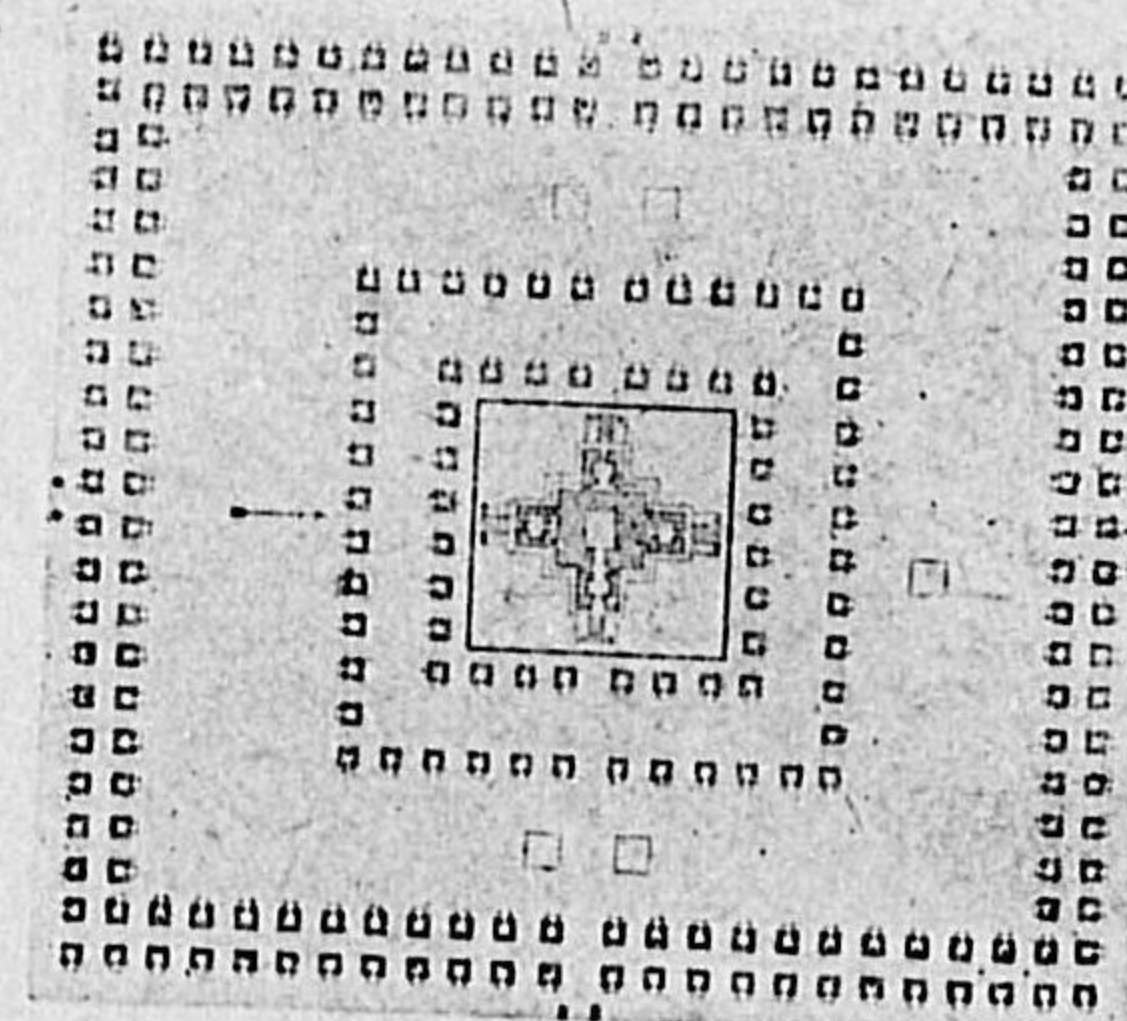
第八七四圖 ←
カンダギリのアナンタ・グムフア

(48) 圖附史築建度印



第九六八第 ↑
ンラグンヨジ・ロロ・ヂンヤチ

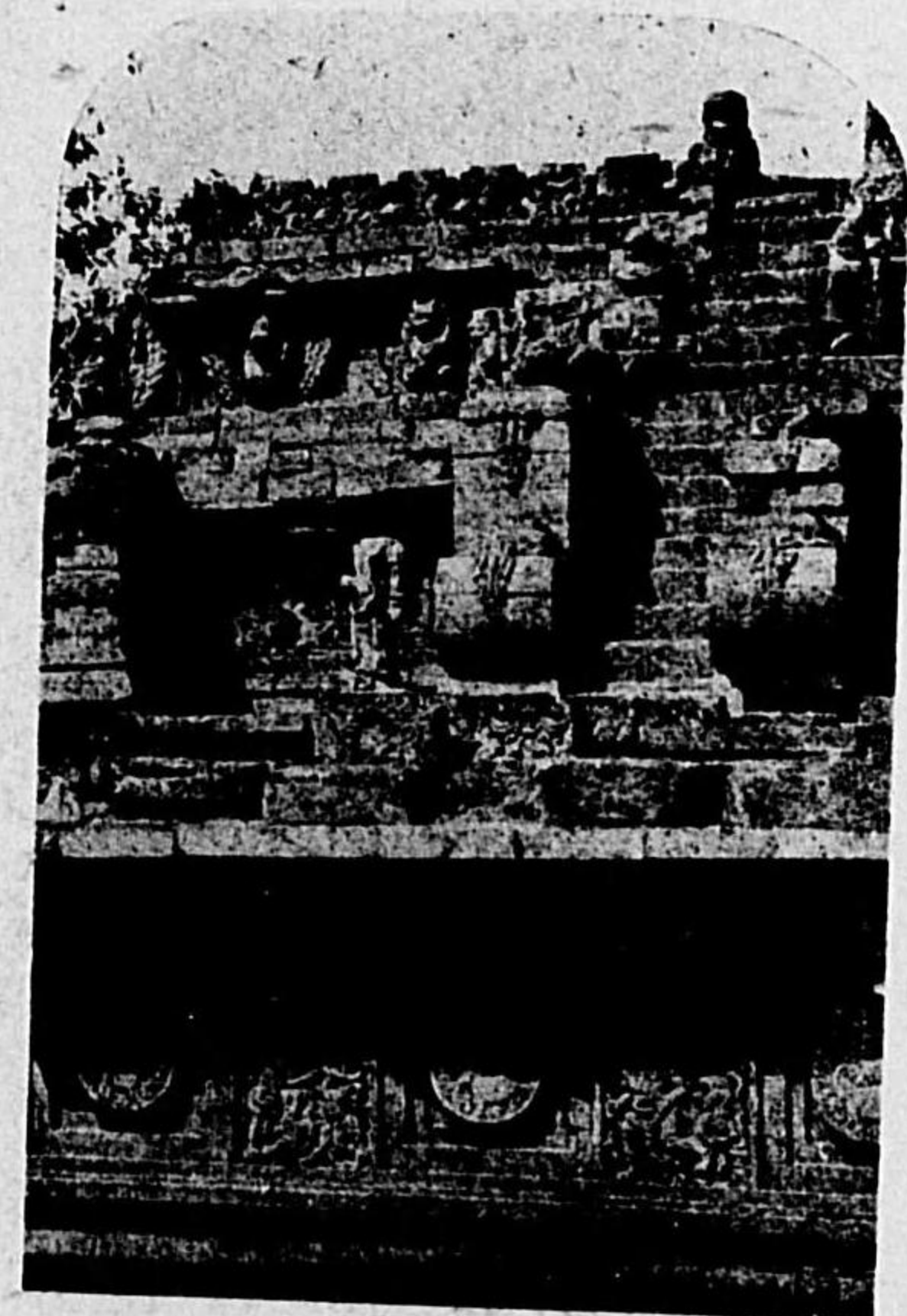
圖〇七八第 ↓
圖面平のウヨシ・ヂンヤチ



圖一七八第 →
ンラタナバ・ヂンヤチ

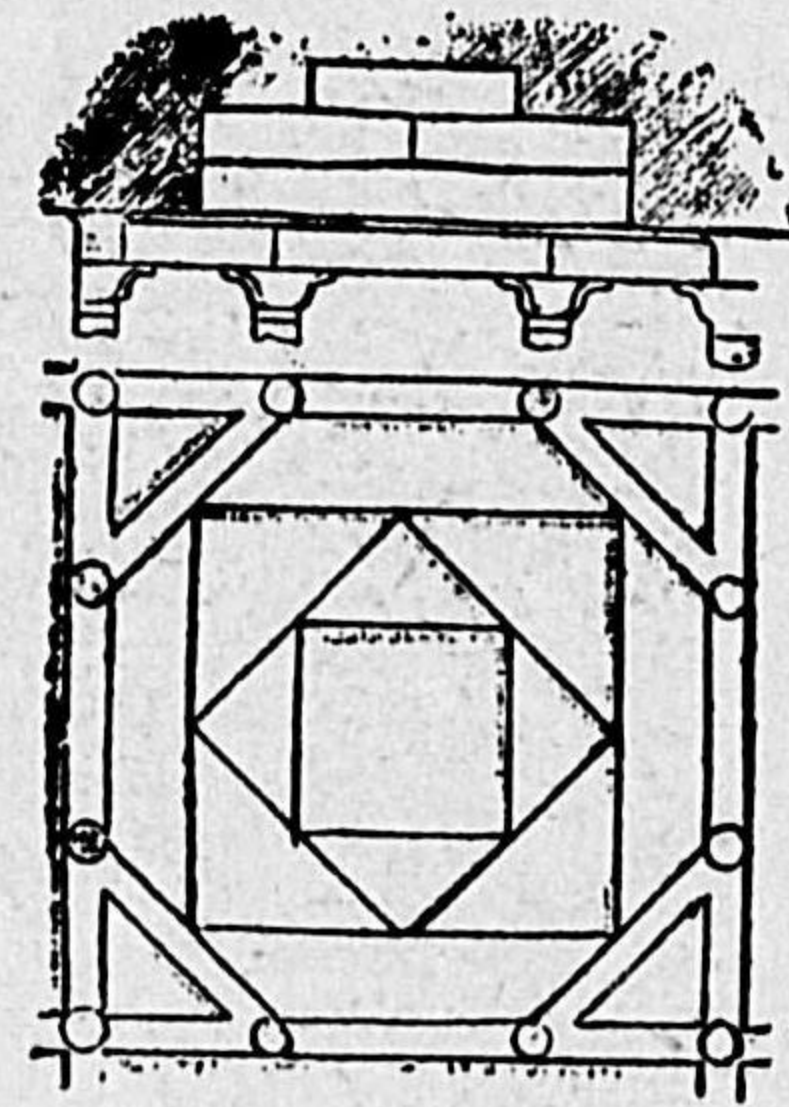


ンベヤジ・ヂンヤチ 圖八六八第

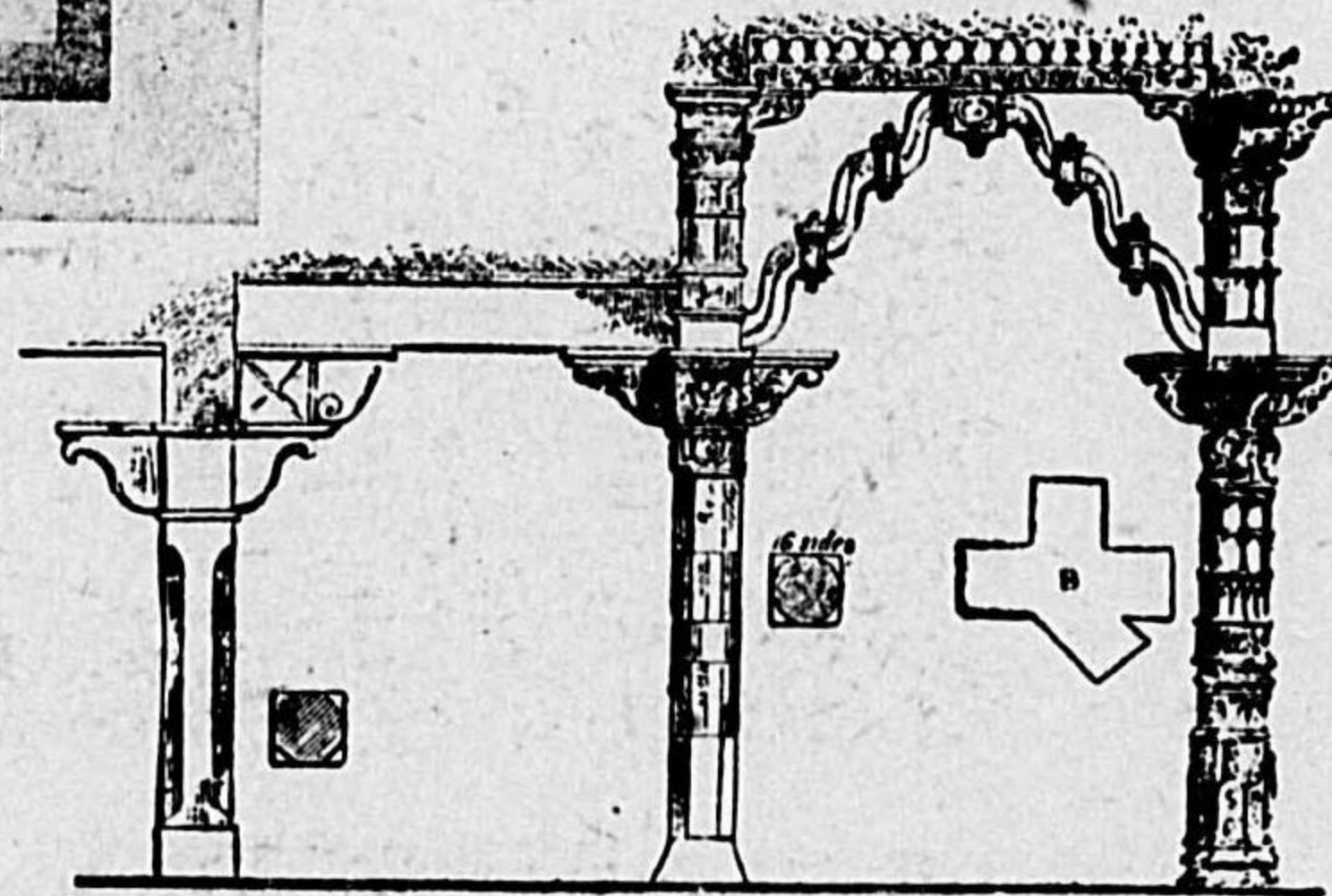




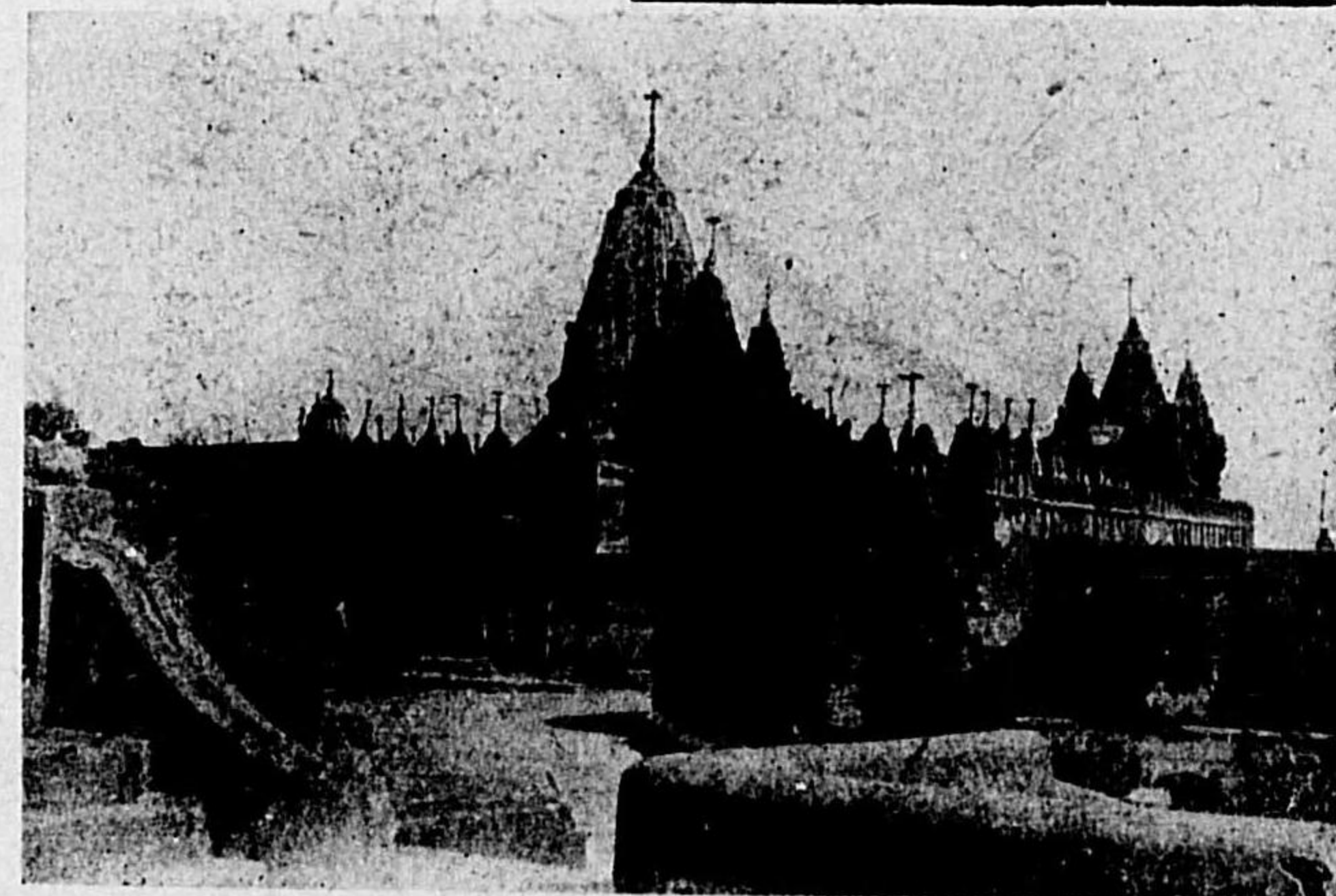
← 第八七八圖
ジャイナ教本殿及び拜殿
の断面及び平面圖



↑ 圖九七第
圖の伏井天殿本教ナイヤジ



圖〇八八第 →
法手の殊特築建教ナイヤジ



← 第八八一圖
パリタナ アーヂナート祠堂



← 圖五七八第
見發ヲトマ
教ナイヤジ
彫石の厨所

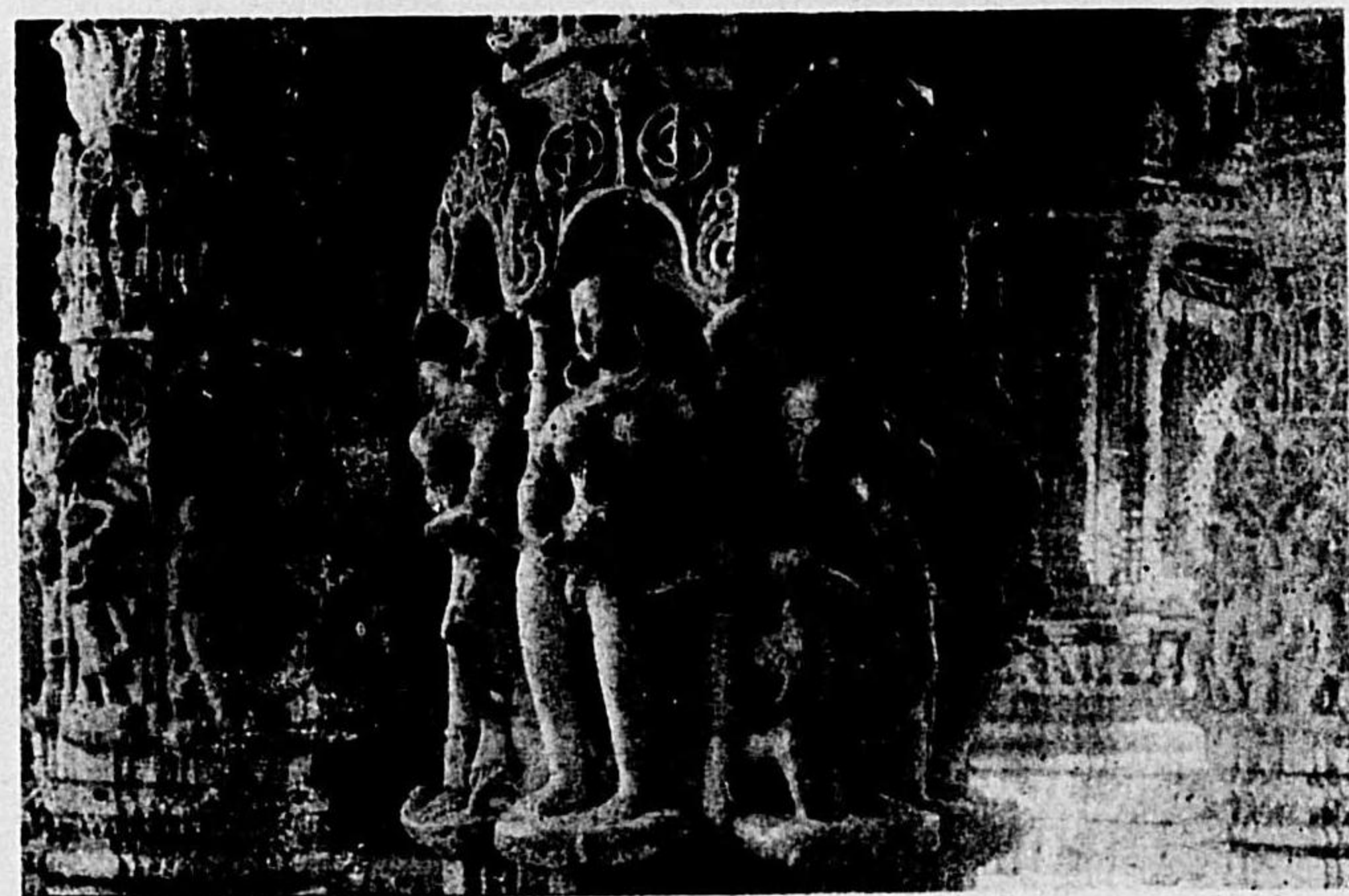


第八七六圖 →
トヲ見發ジャイナ教所屬の石欄



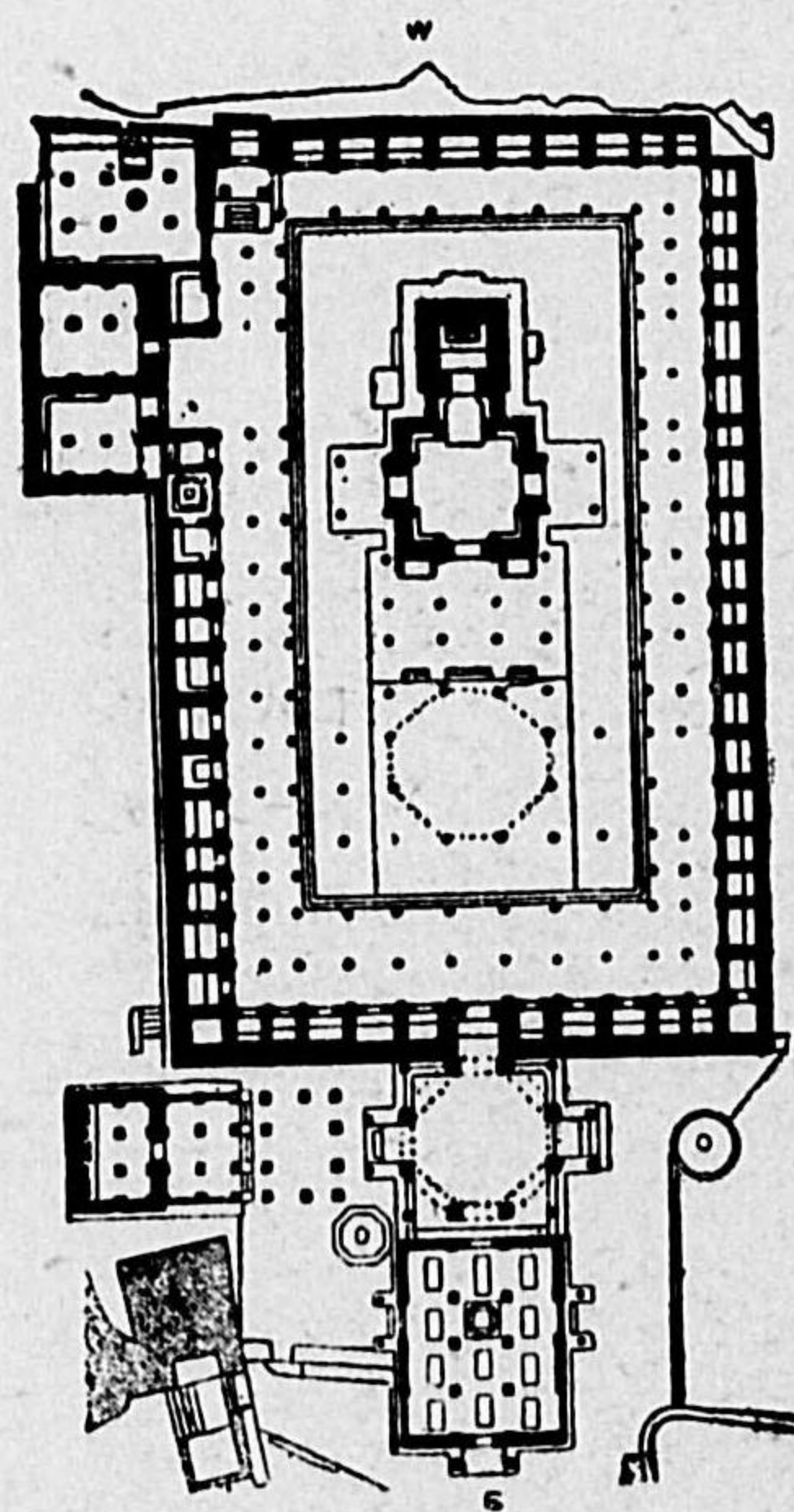
← 第八七七圖
エローラ第三十一窟インドラ・サブハ

(53) 圖附史築建度印

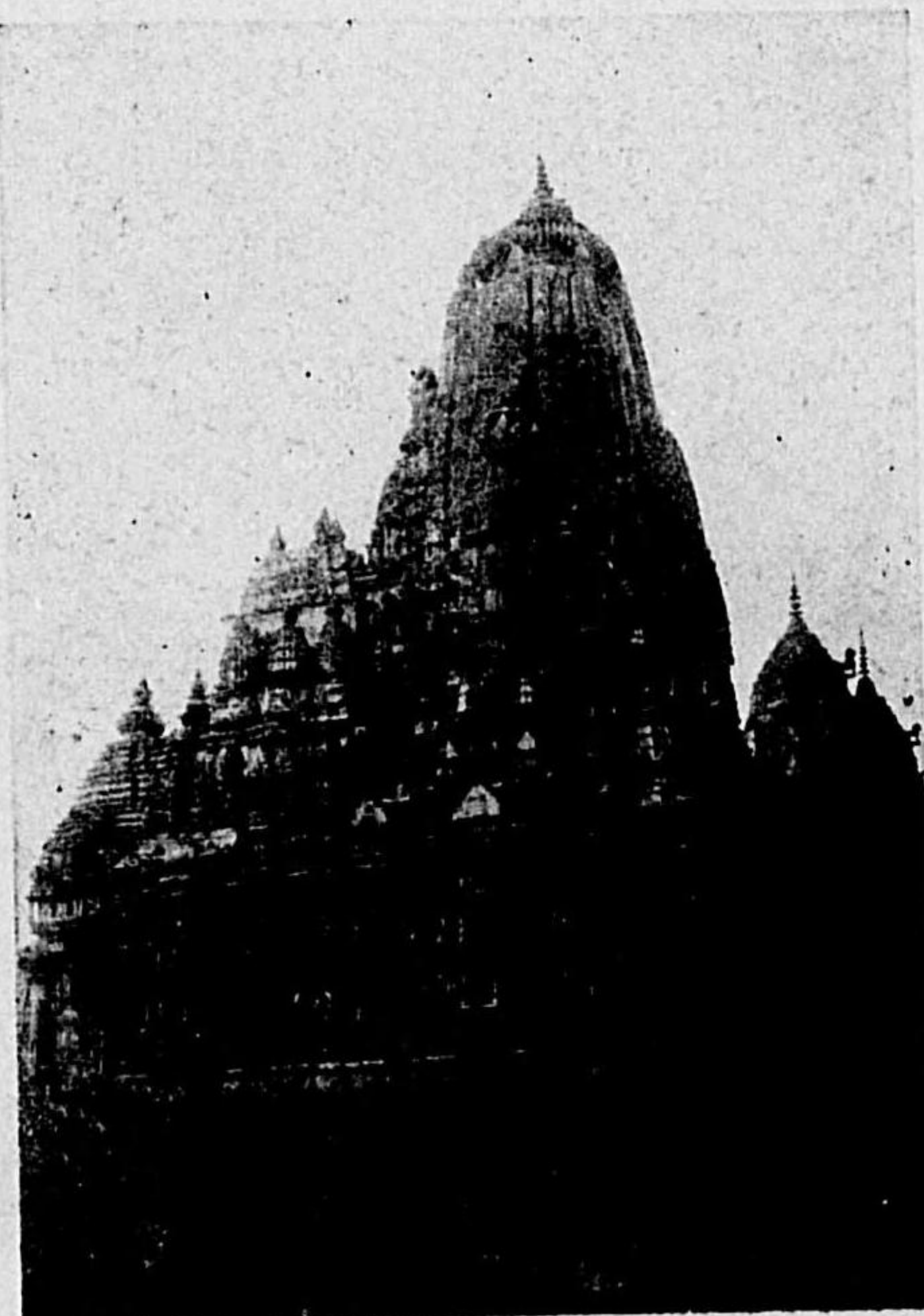


部細堂祠の摩維山ープア 圖六八八第

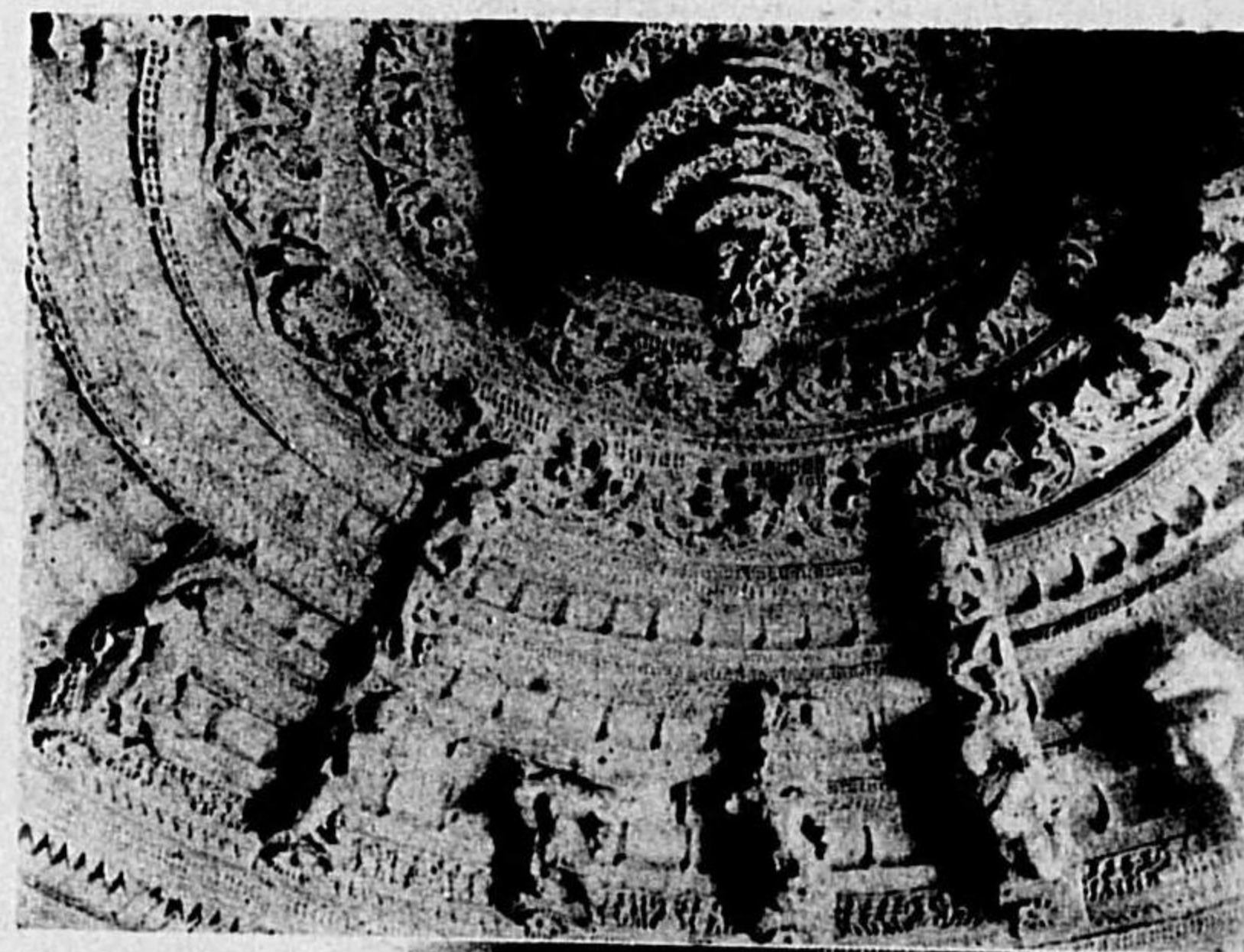
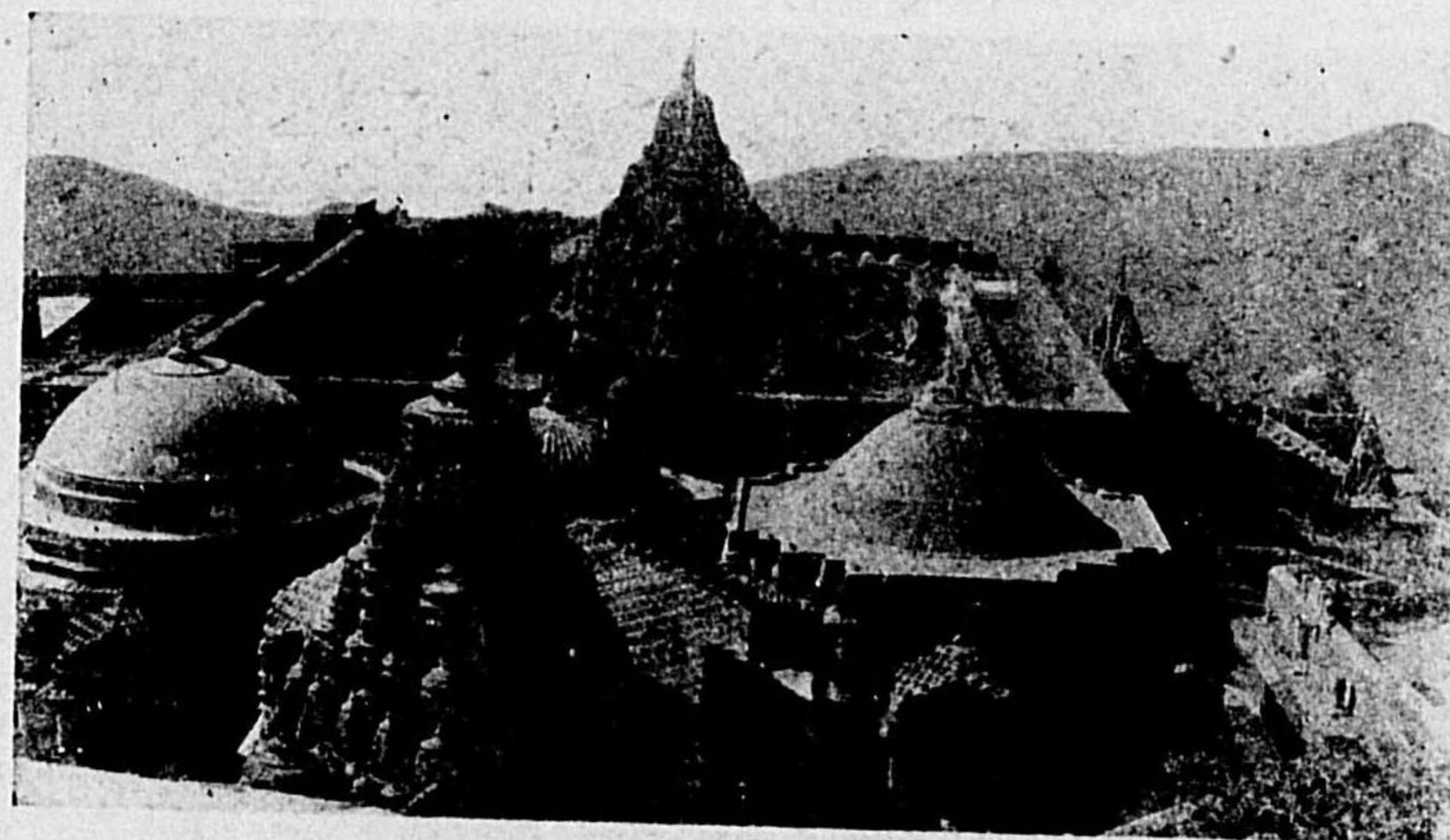
堂祠トーナワスルバ ハーラユジカ 圖七八八第



圖五八八第
圖面平堂祠の摩維山ープア



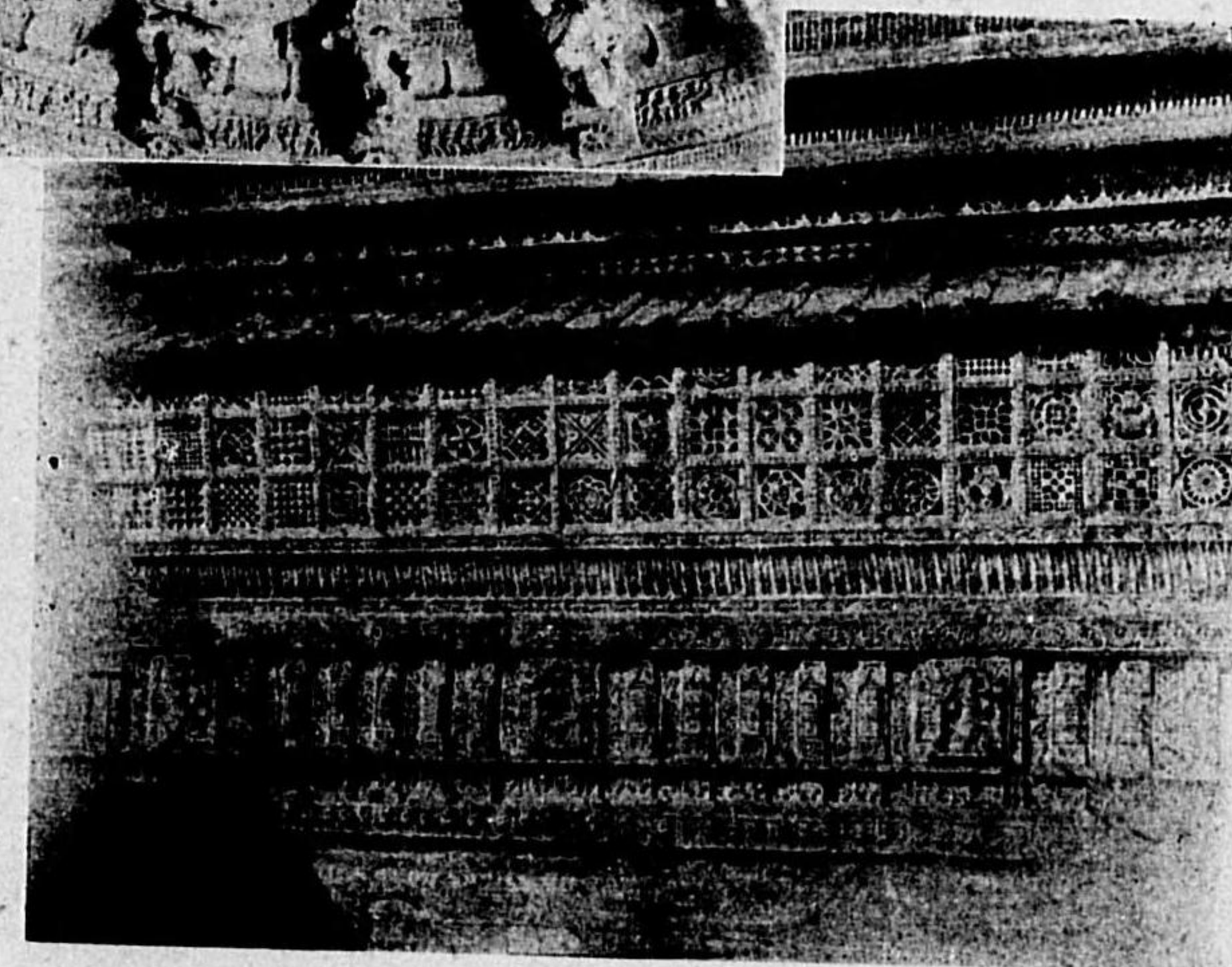
(52) 圖附史築建度印



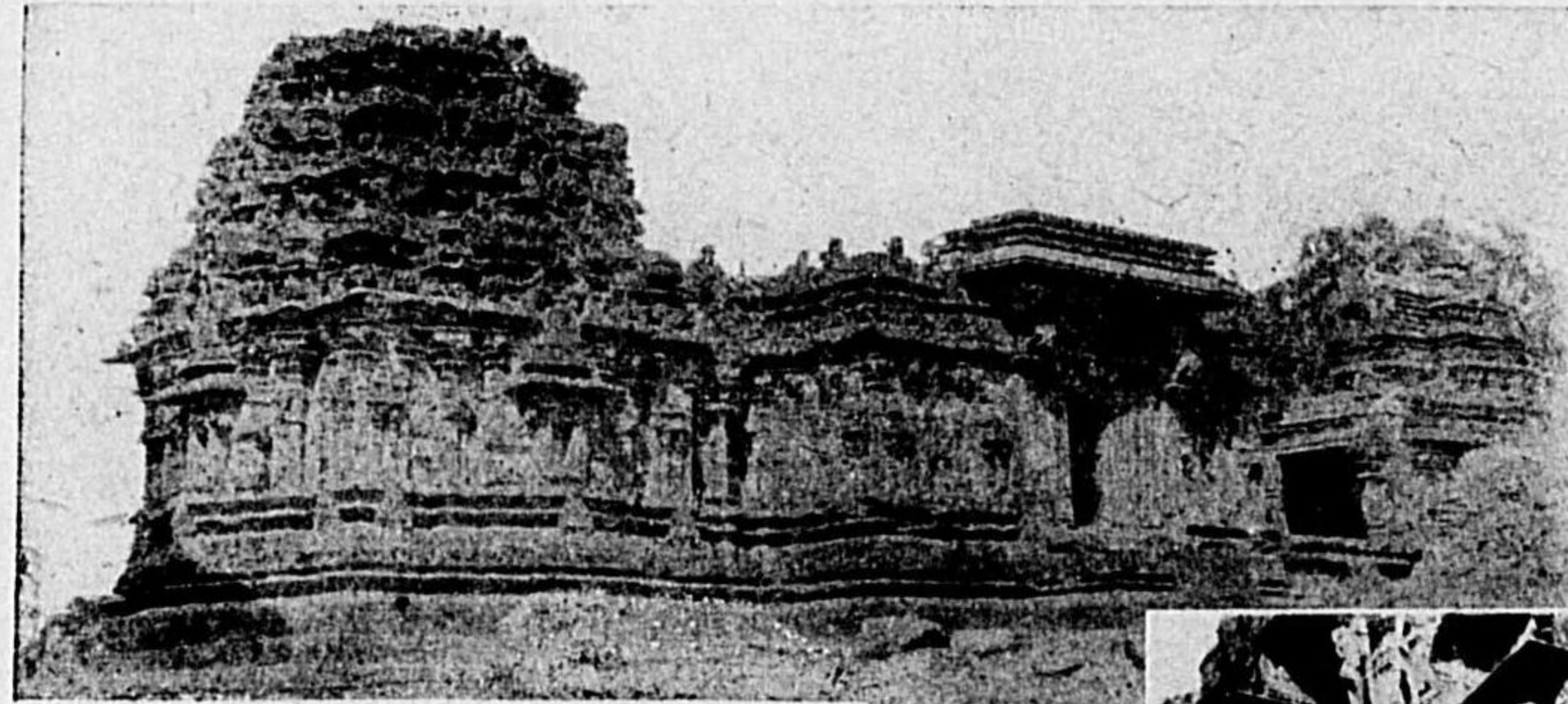
↑
圖二八八第
山ルナルギ
堂祠トーナミネ

↓
圖四八八第
ブムサ山ルナルギ
ーヤヂーラ・チラ
子格の廊廻堂祠

↑
圖三八八第
ニウ山ルナルギ
祠のラーバツス
非天の殿拜堂

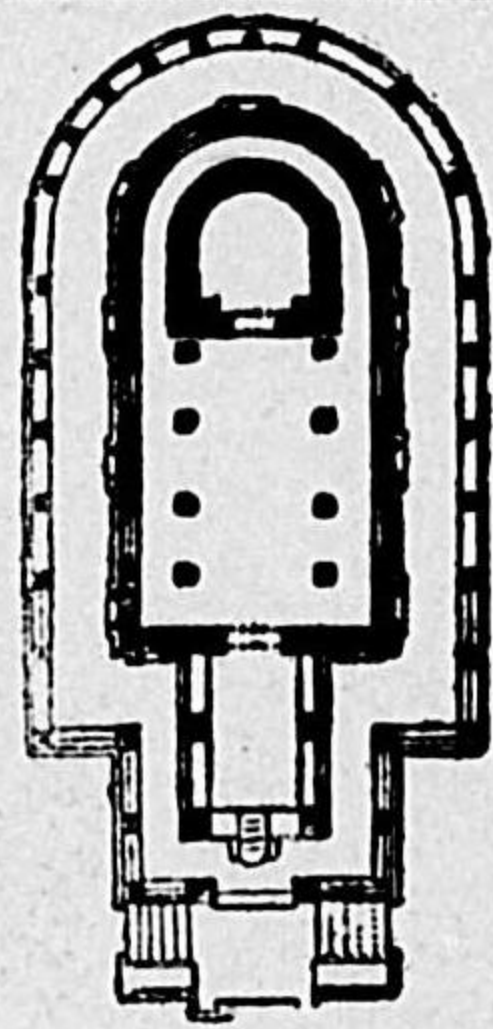
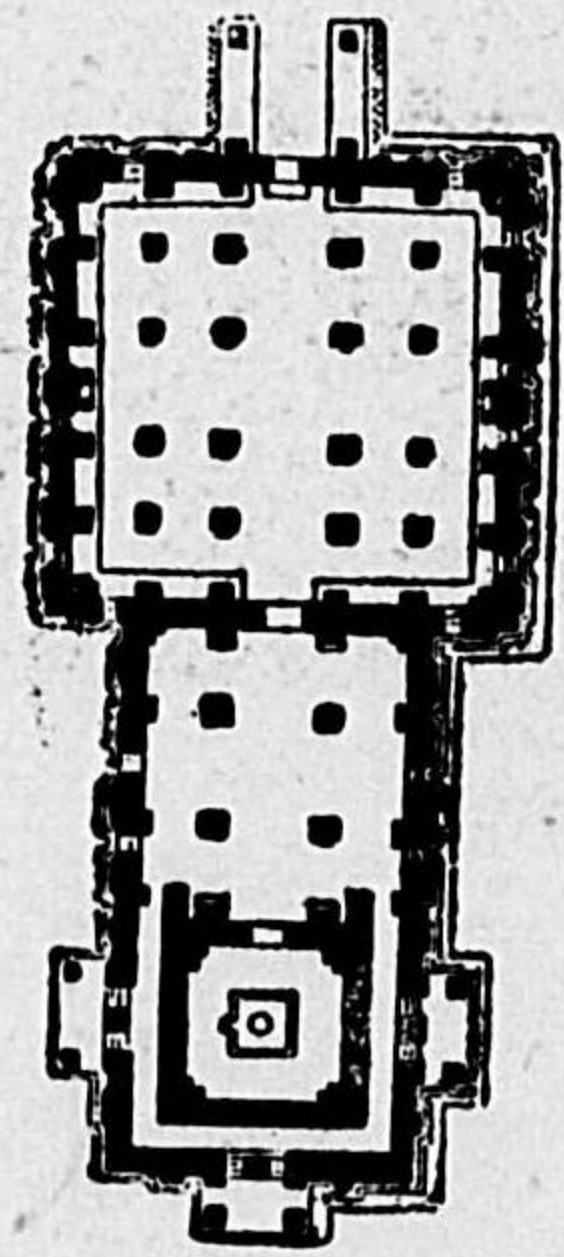


(55) 圖附史築建度印

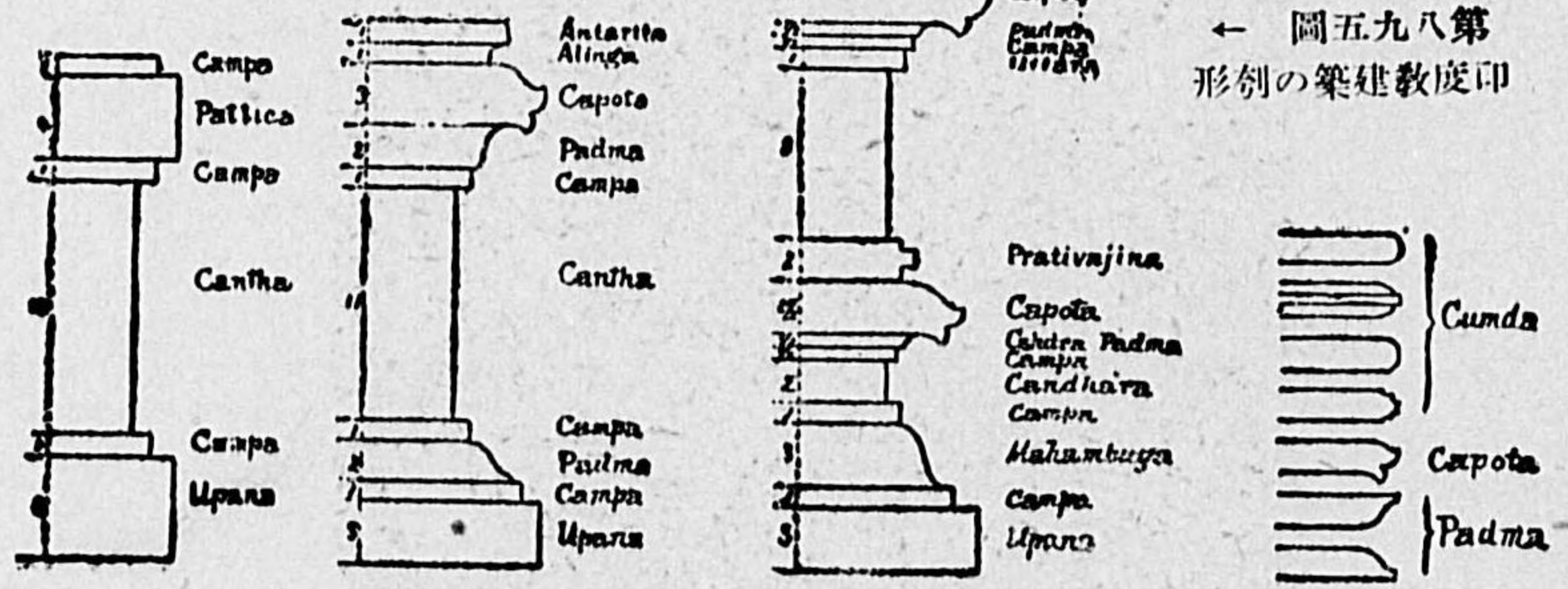


↓ 第八九二圖
アーメダバ
ードハチ・シンの祠堂

↑ 第九一八圖
シカヂンカツラ
堂祠トーナワジイウ



↑ 第九三三圖
堂祠のレホイア
圖面平
第九一八圖
のルカダダバ
圖面平堂



← 第九五八圖
形刹の築建教度印

印度教建築の刹形

(54) 圖附史築建度印



↓ 第九八〇圖
・ナバラス
像巨のラゴルベ



↑ 第九八八圖
ルートツチ
塔の利勝



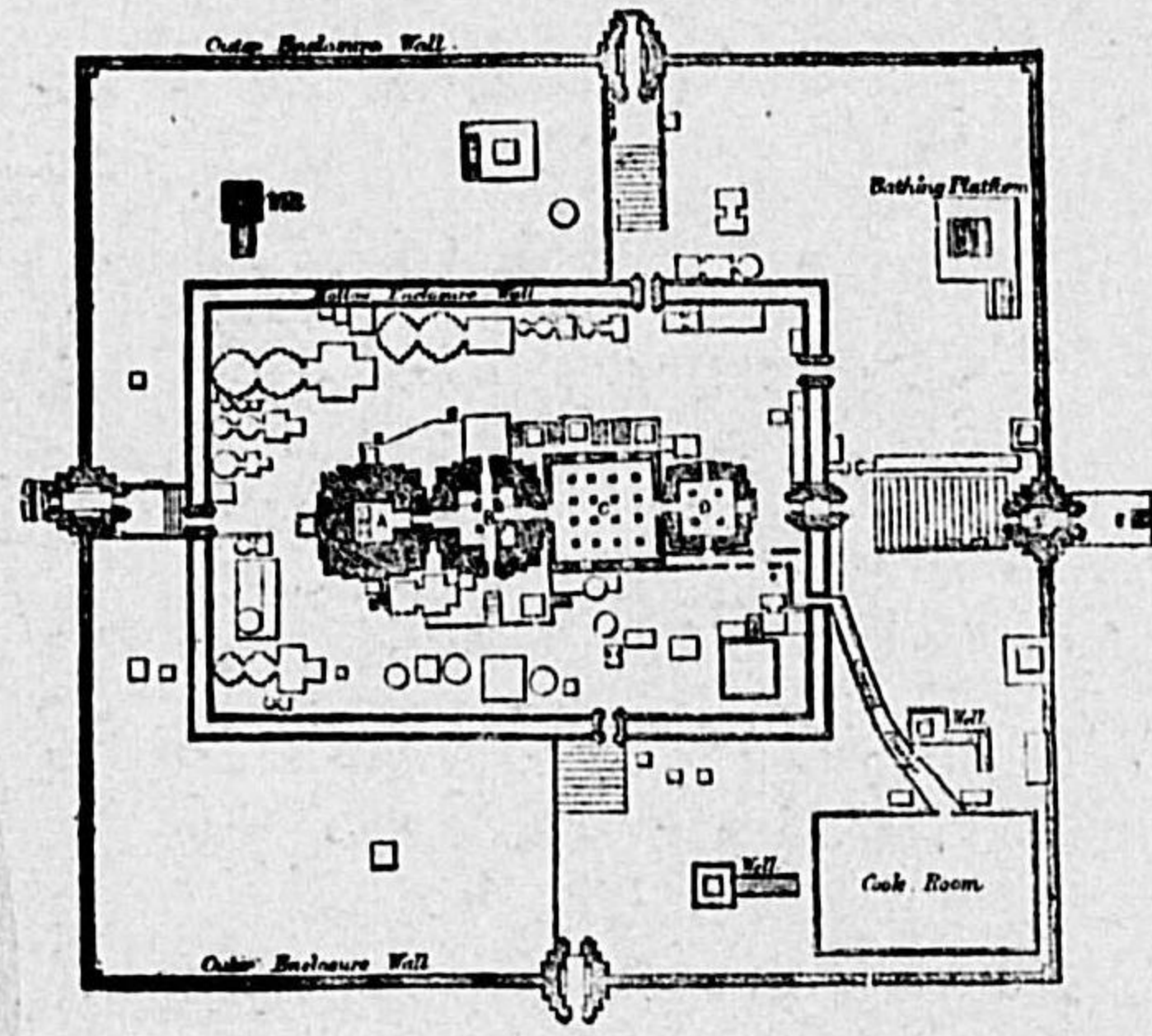
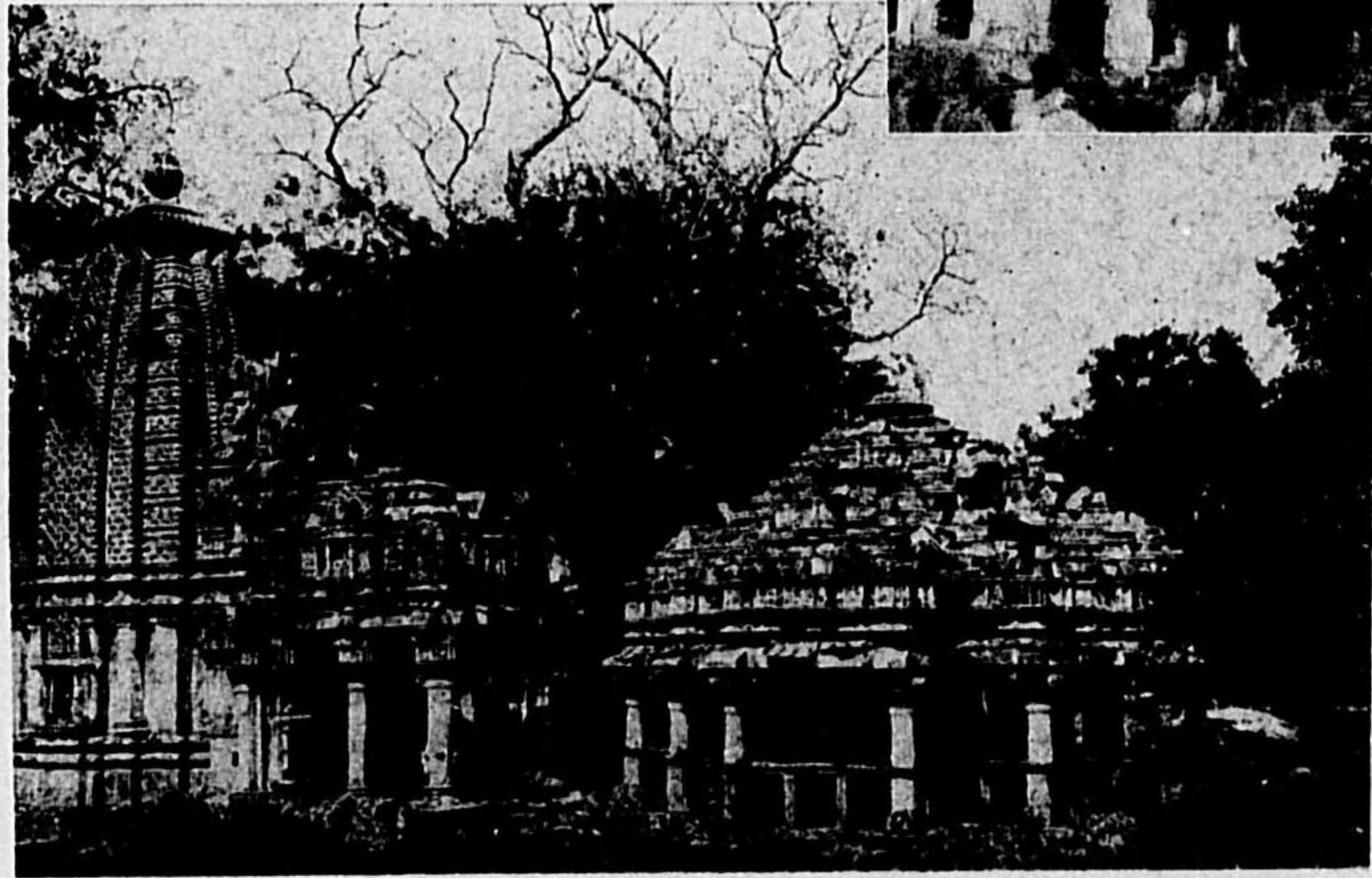
↑ 第九八八圖
ルートツチ
塔の譽名

圖〇〇九第 →
圖面平のハトーナンガヤジ



圖一〇九第 ↑
殿本ハトーナンガヤジ

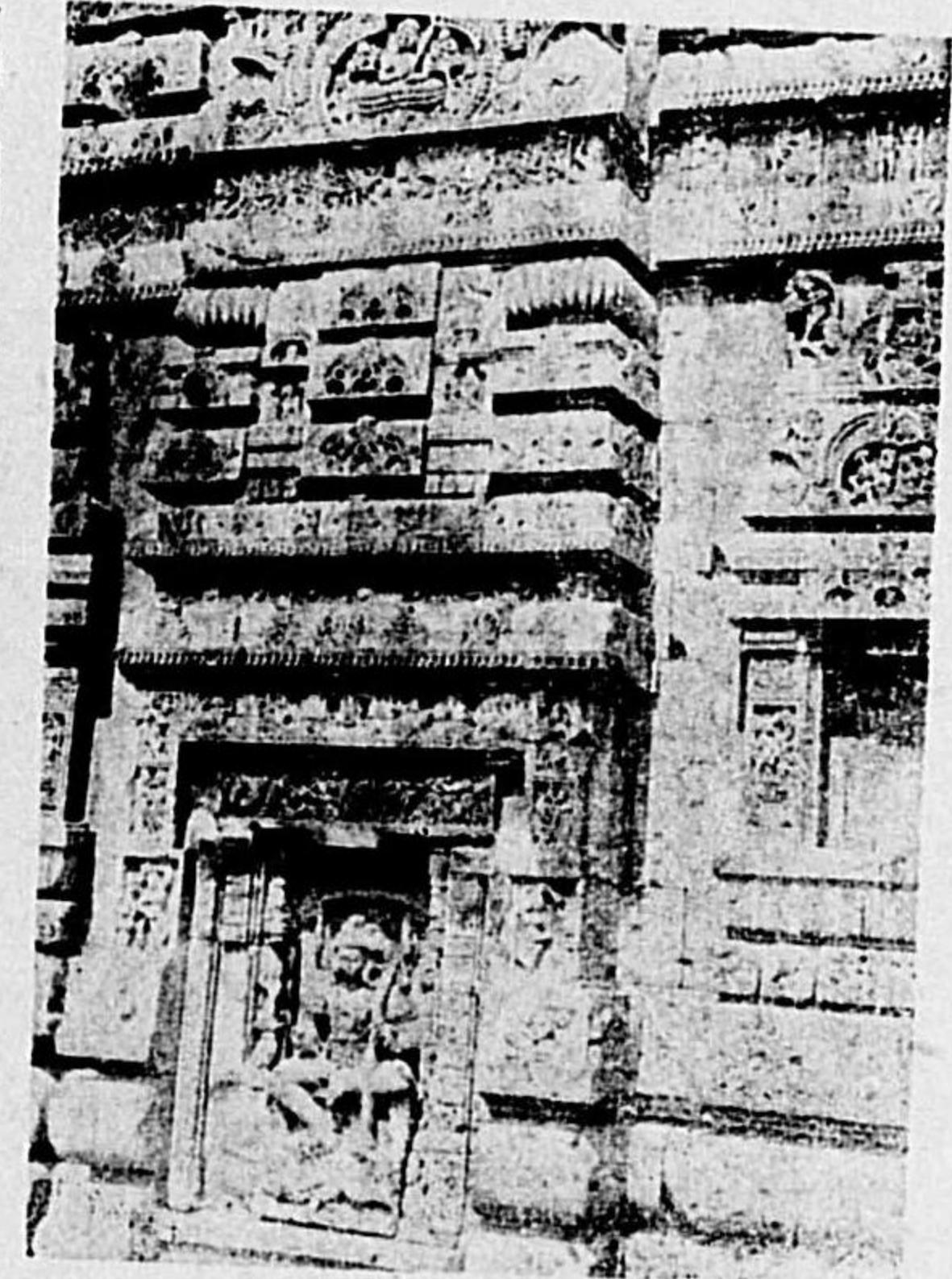
堂祠のリロバ 圖三〇九第 ↓



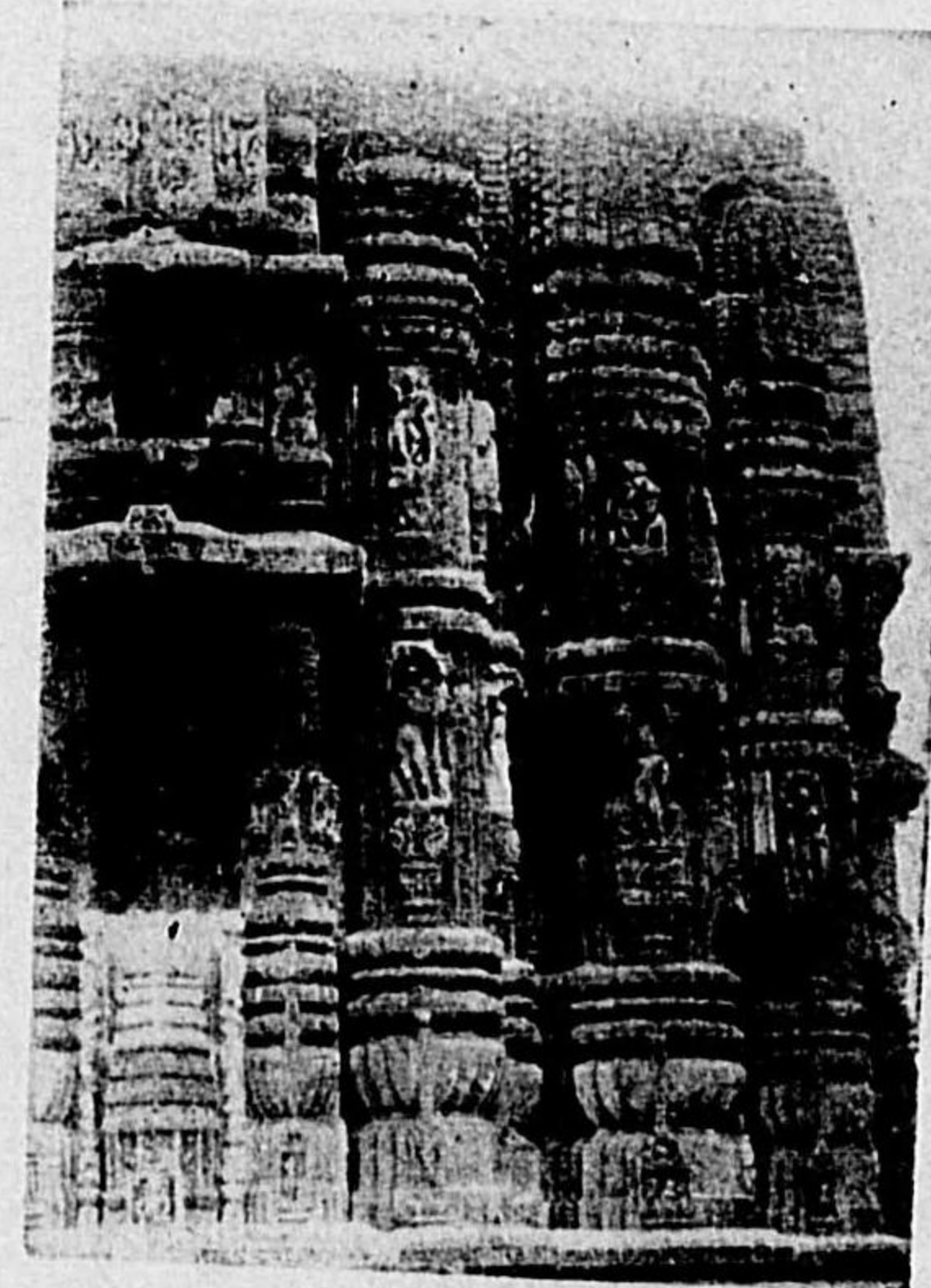
↑ 第九〇二圖
ジャガンナートハ西大門



門のルワステクム 圖七九八第



圖六九八第
部細のラカシの堂祠レワスメラスルバ

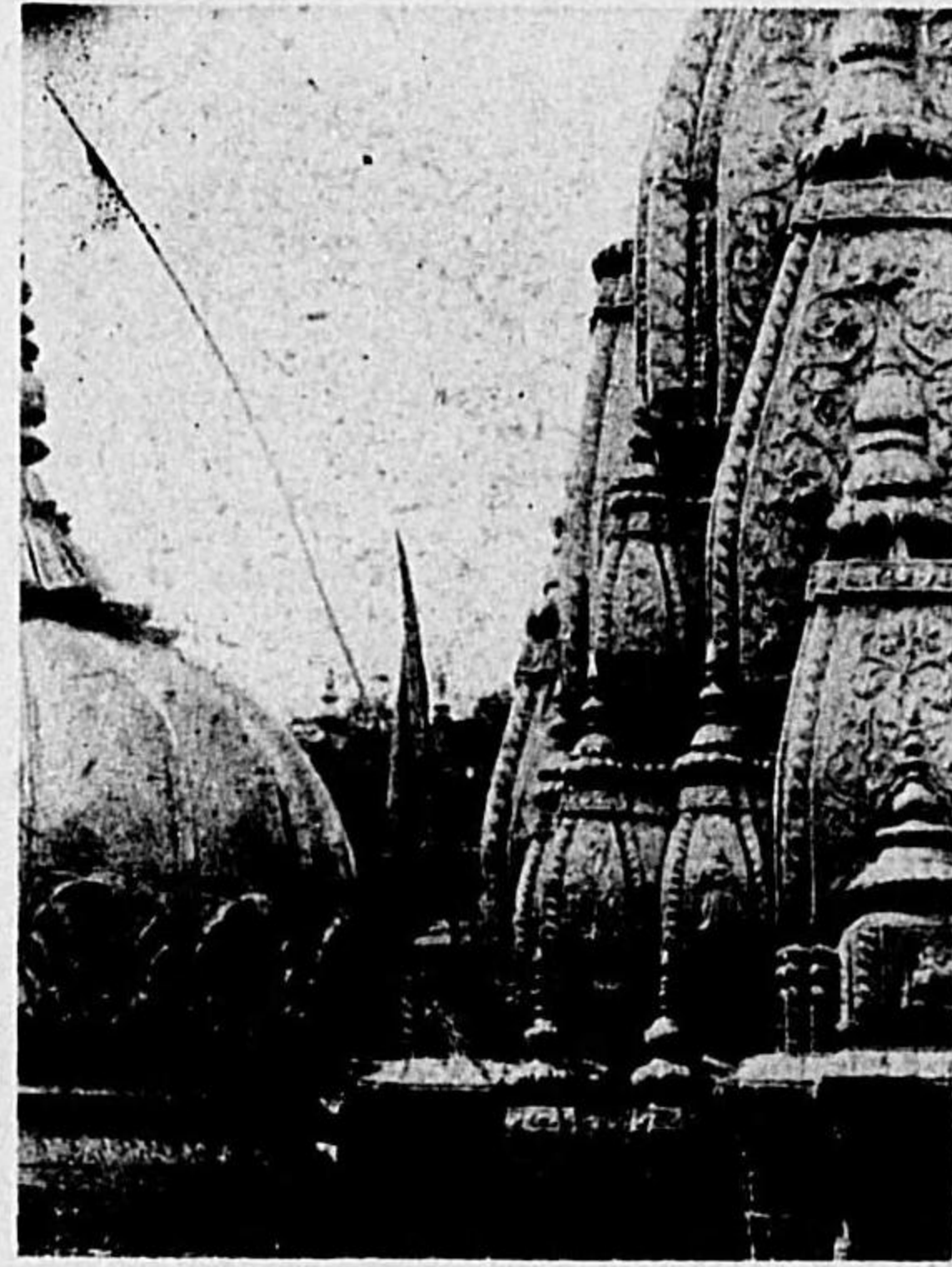


圖九九八第
面壁のニラ・ヤジーラ

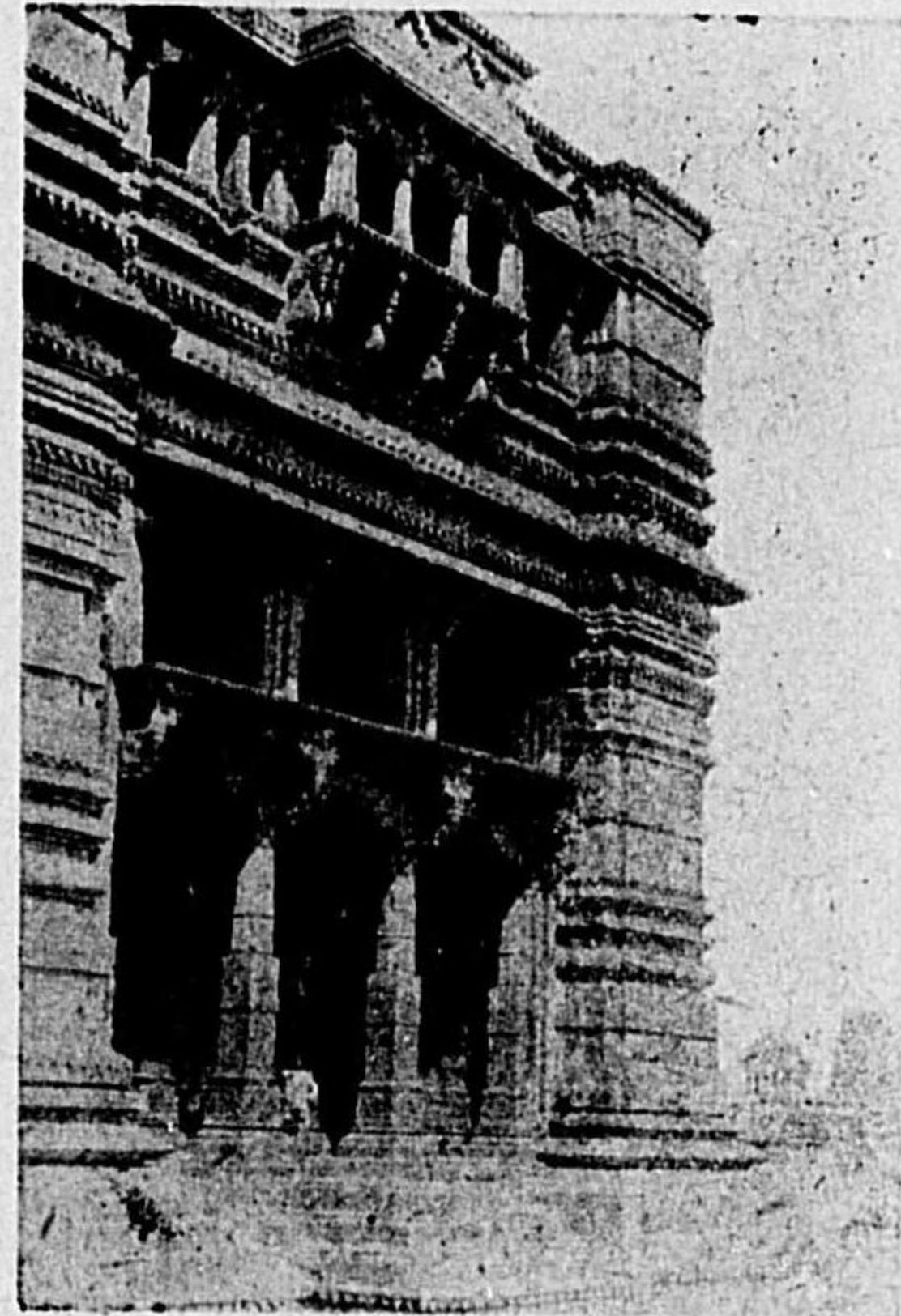


圖八九八第
殿本のアヴェデーハマ・ジーラガンリ

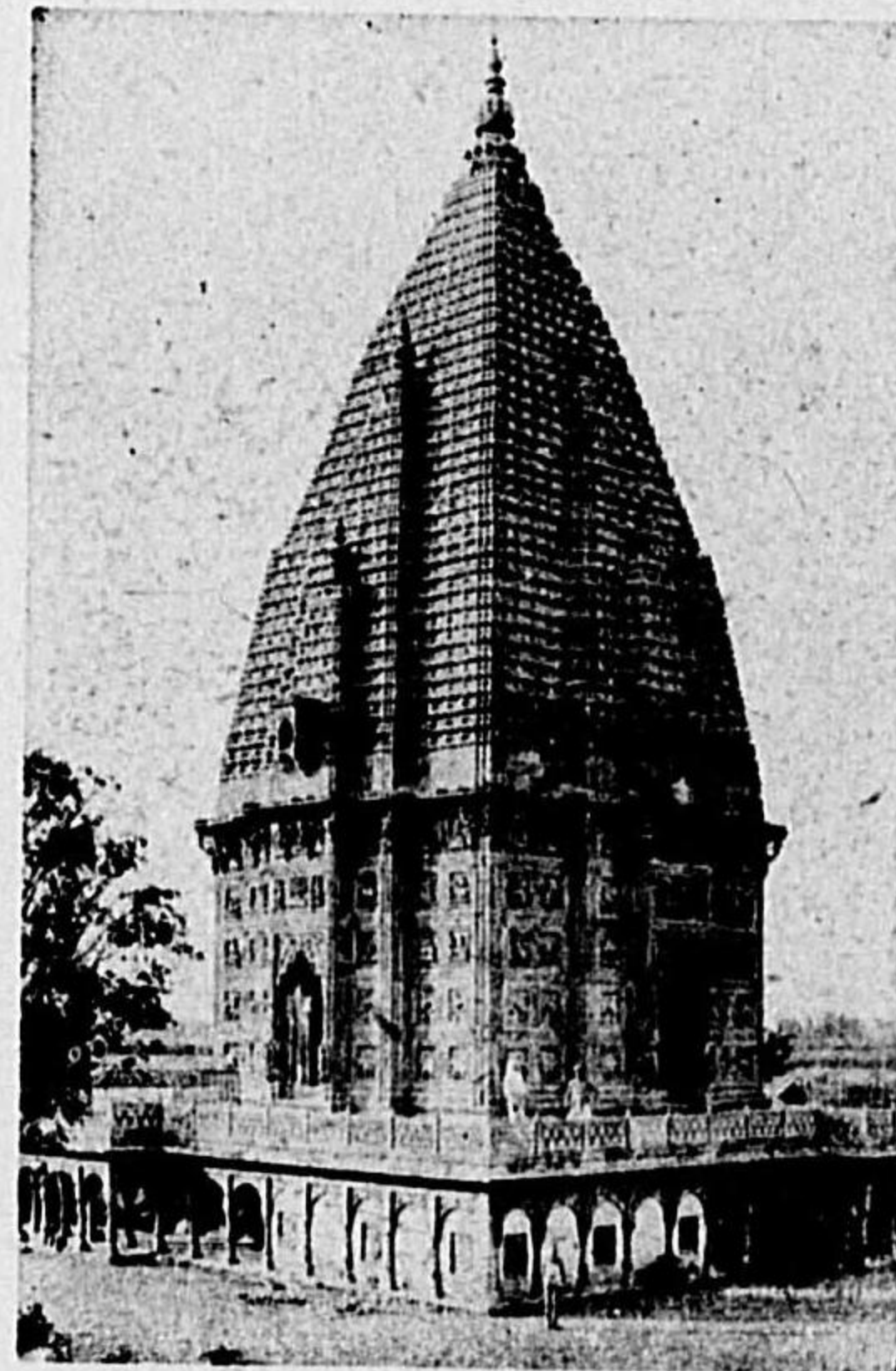
(59) 圖附史築建度印



堂祠金黃のスレーナベ 圖八〇九第



口入堂祠大のンバラドヒ 圖七〇九第



堂祠のルガナムラ 圖〇一九第

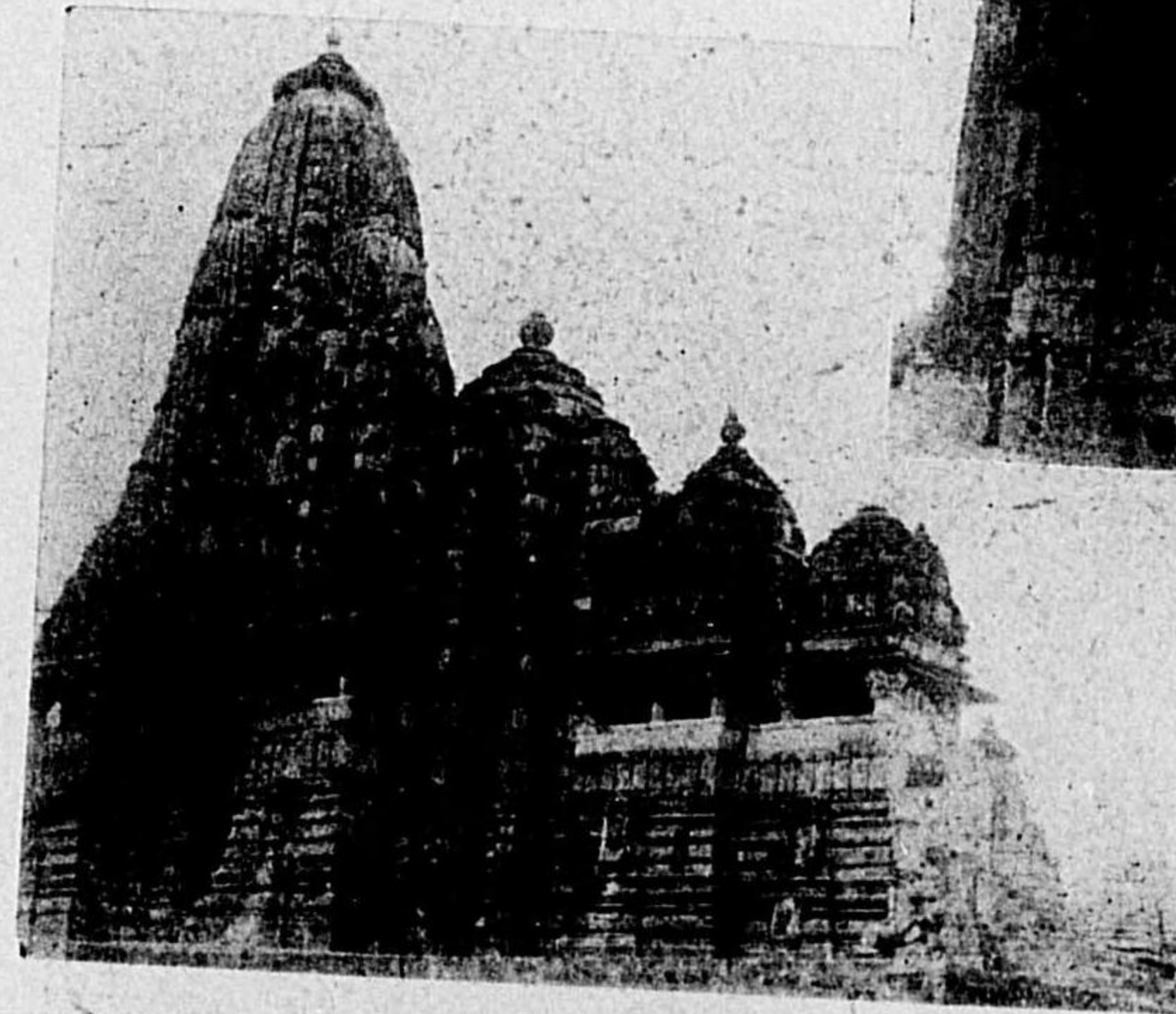


堂祠式代近のスレーナベ 圖九〇九第

(58) 圖附史築建度印

圖四〇九第 →
ルヂンマカリテのルオリオグ

圖五〇九第 ↓
オデーハマ・ヤルダンカのホラユジカ



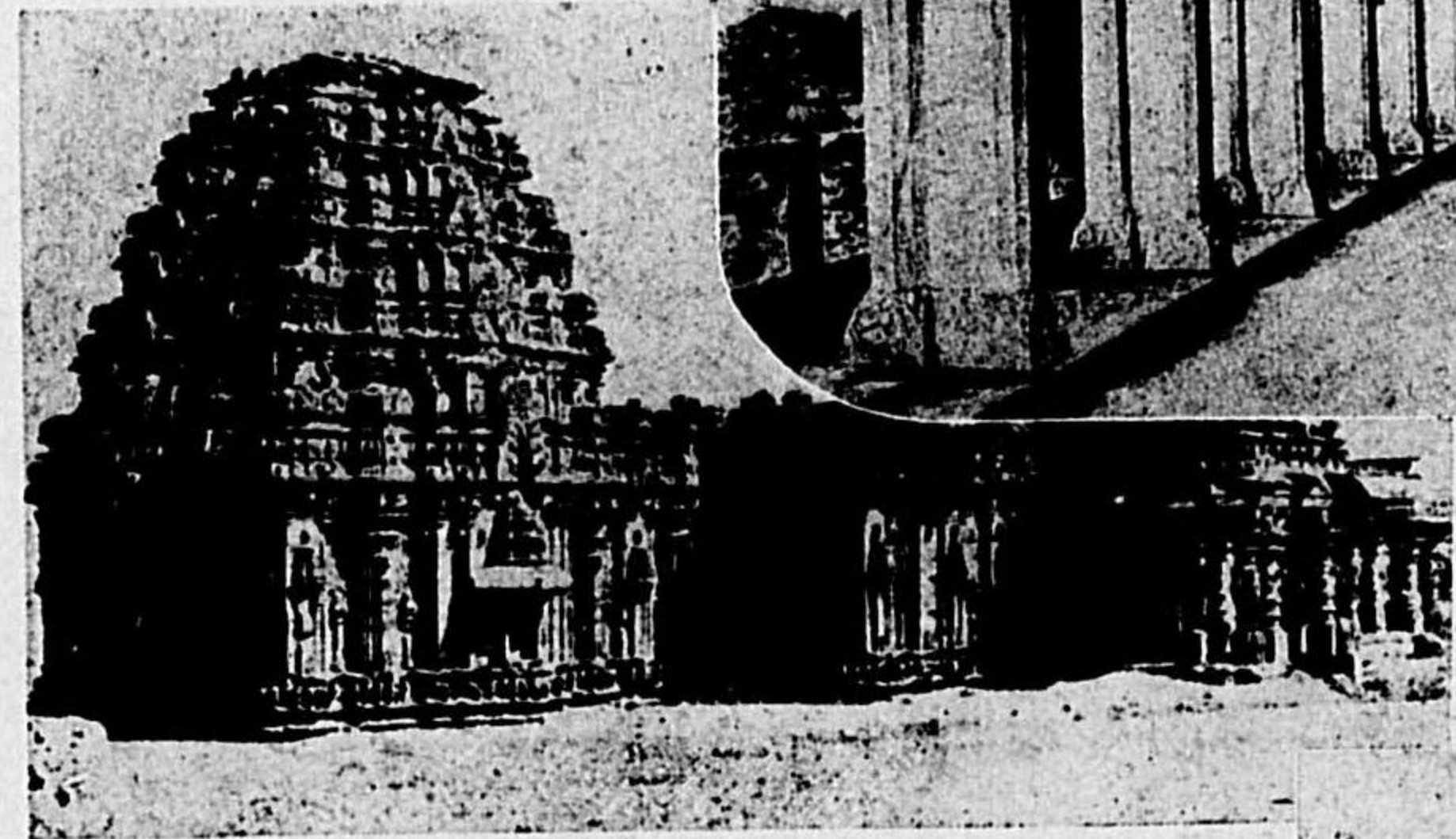
↓
圖六〇九第
タンアフレエ
祠窟の島



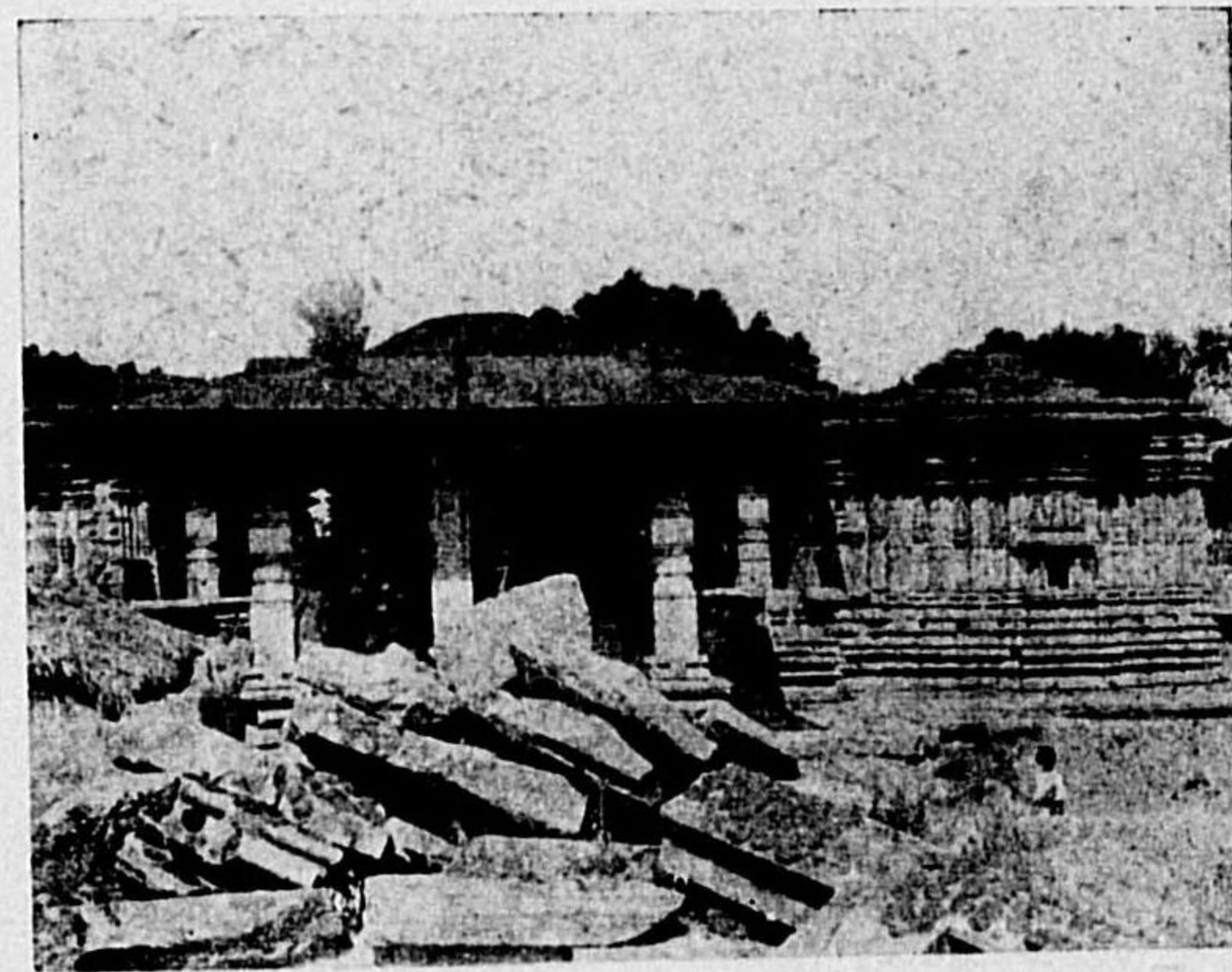
(61) 圖附史築建度印

圖六一九第 →
殿宮のルベムア

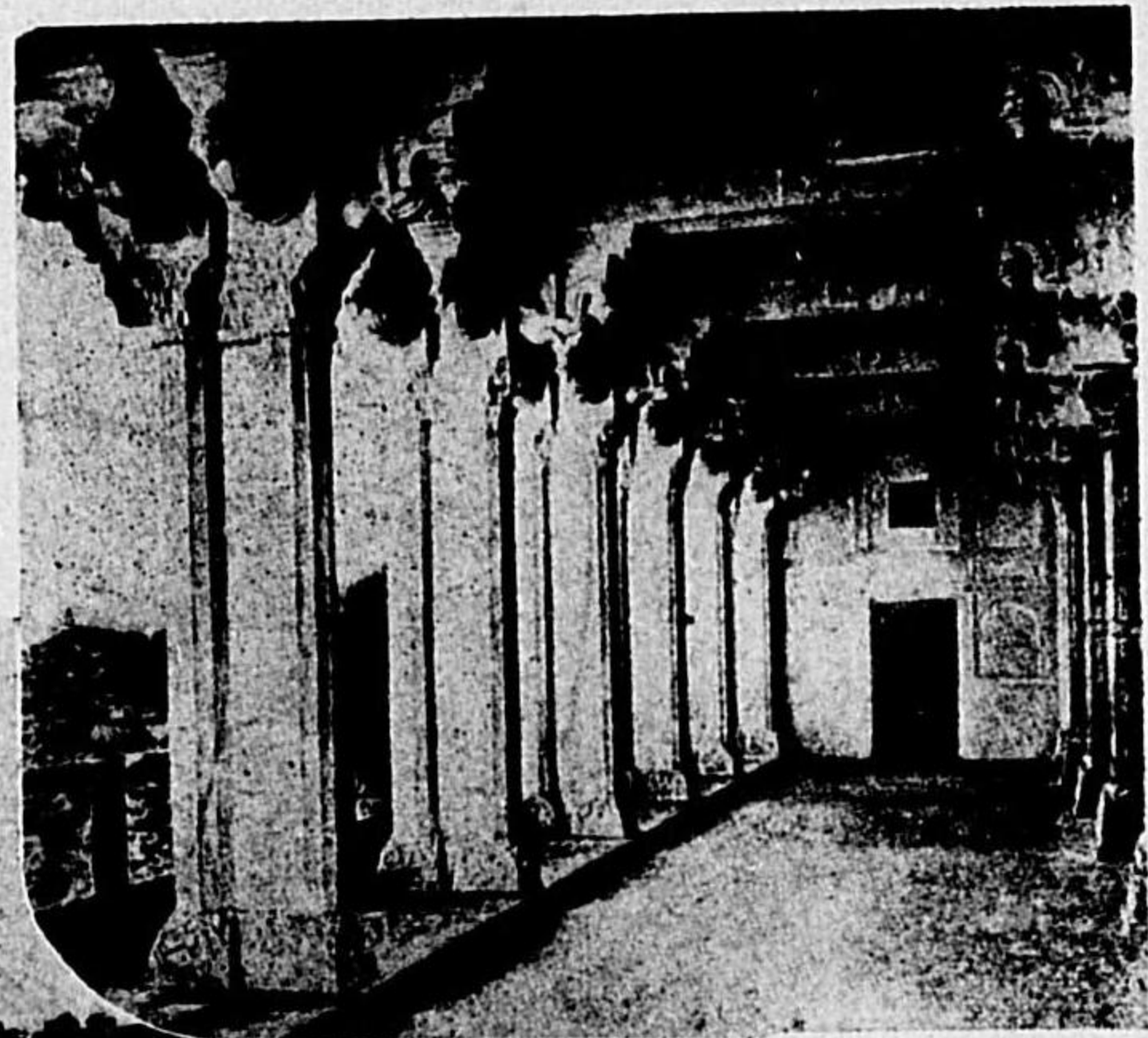
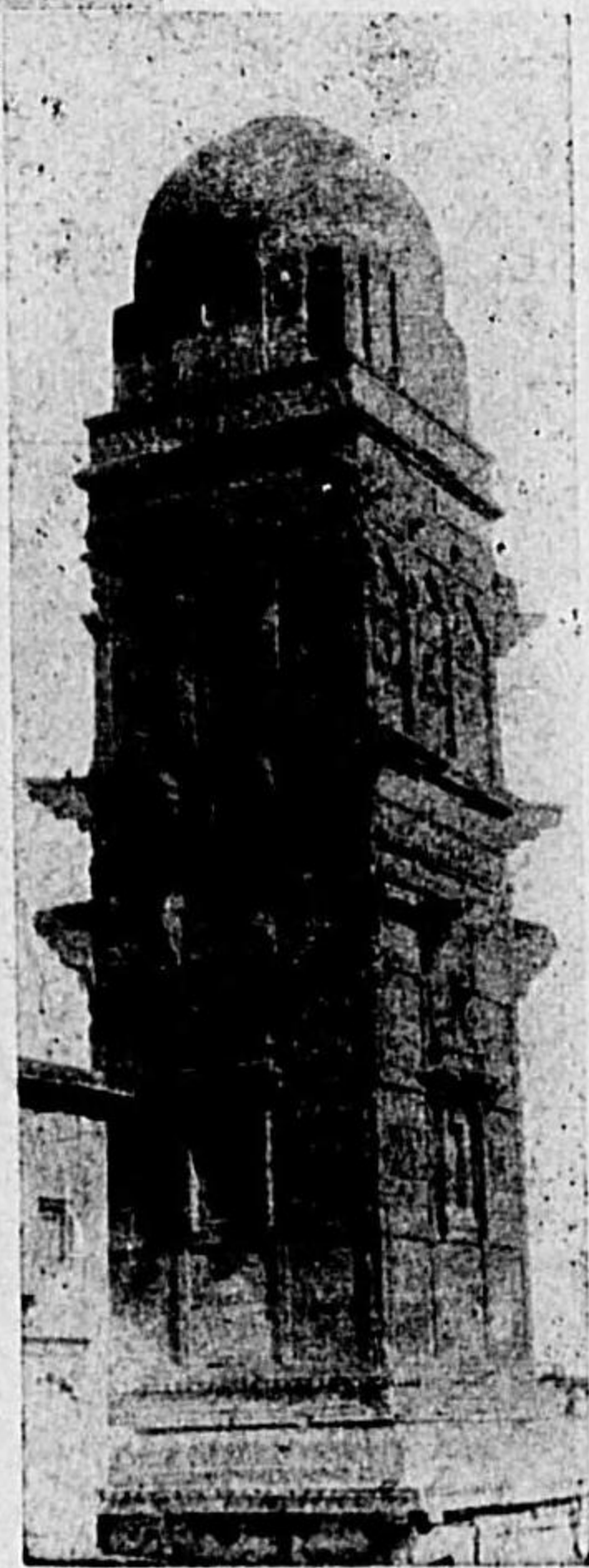
圖七一九第 ↓
祠古のギタツイ



堂祠大のマンコムナハ 圖八一九第 ↓



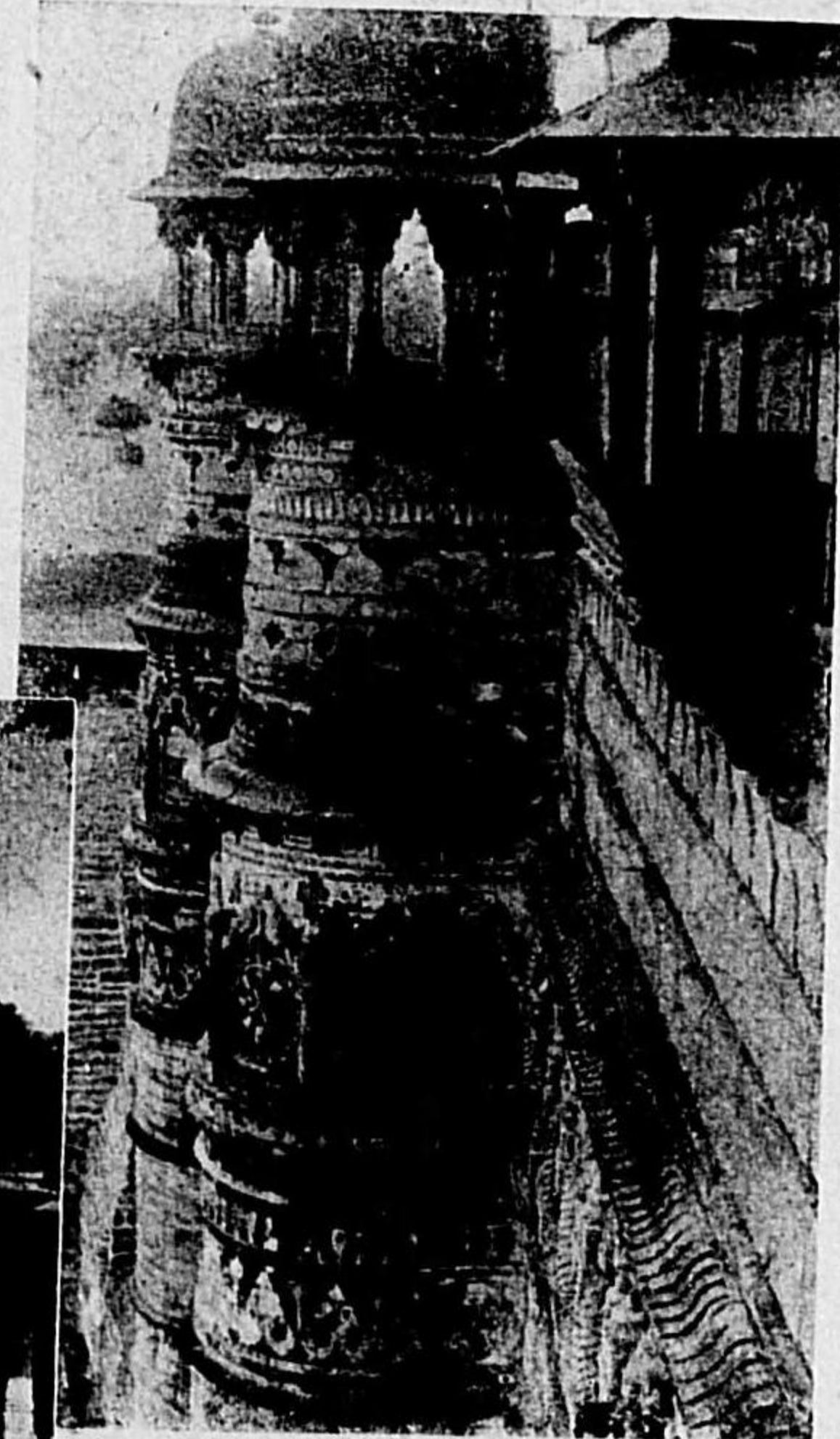
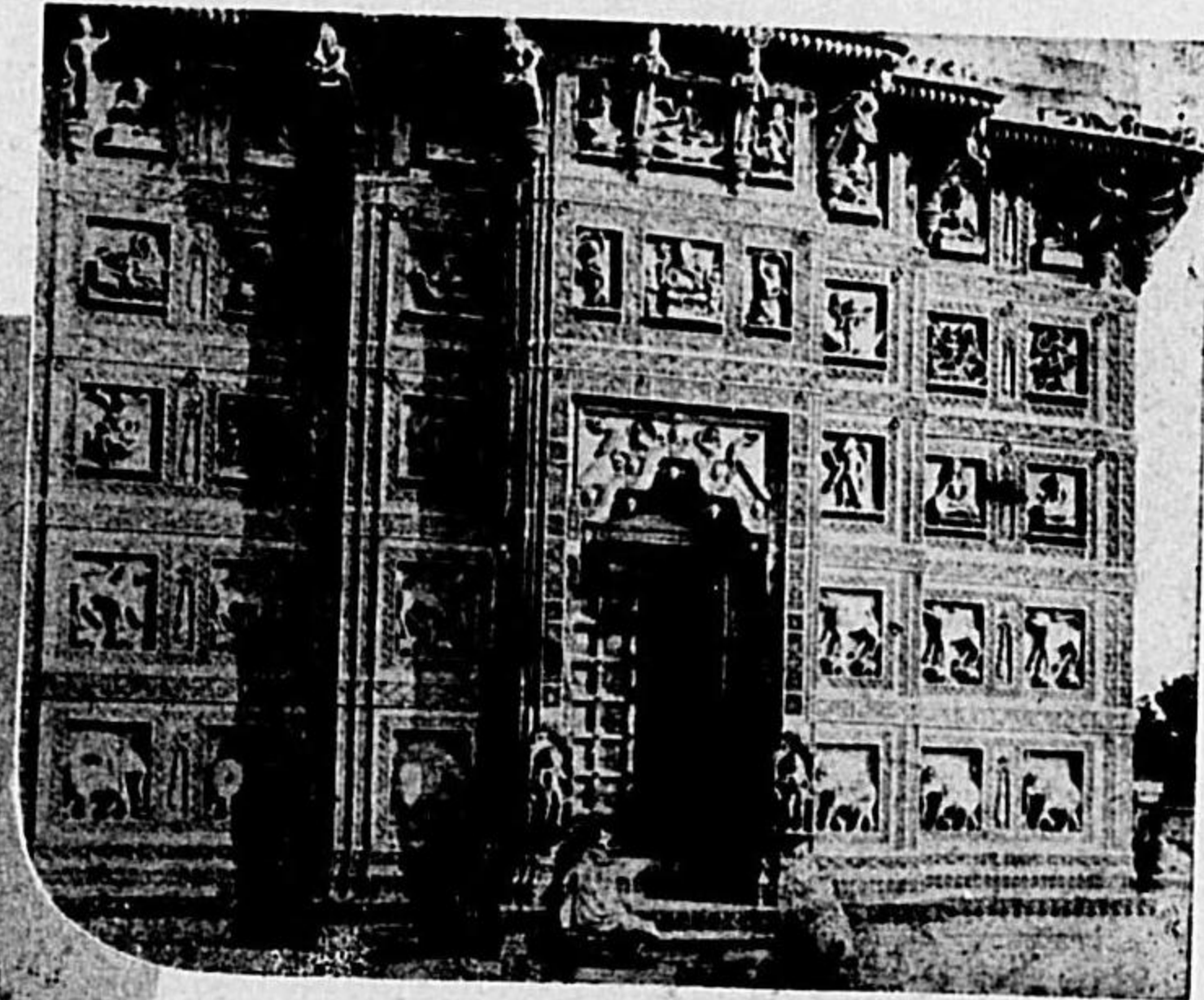
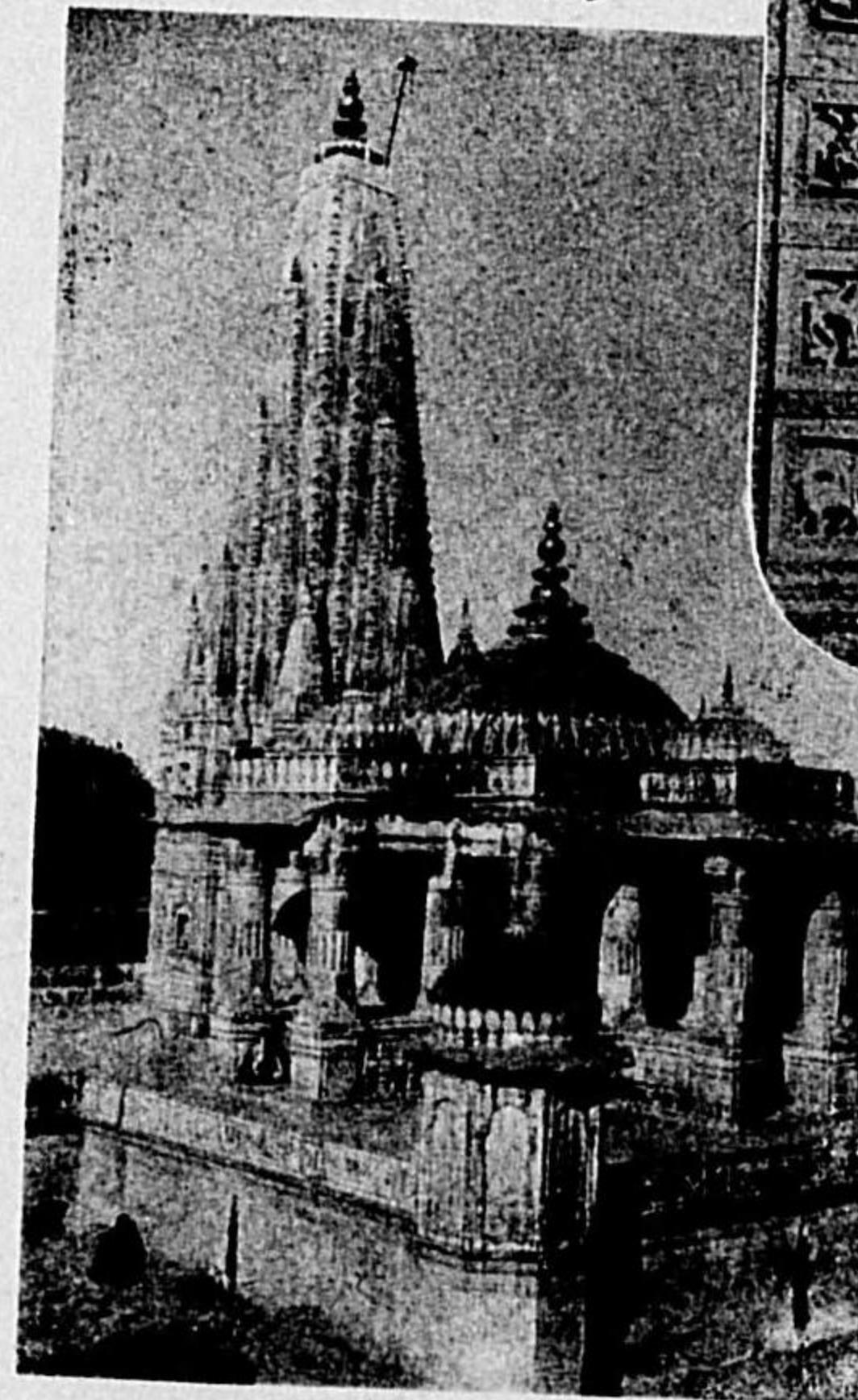
ジルブ・チサのラトマ 圖五一九第 →



(60) 圖附史築建度印

圖一一九第 →
部細堂祠のルガナムラ

圖二一九第 ↓
堂祠のトツコルヤレ



圖四一九第 ↑
殿宮のンシ・ンマのノオノグ
← 圖三一九第
剛クンシ・ムラゲンシ



(63) 圖附史築建度印

圖三二九第 →
部壁の堂祠ヌシイウのルールベ

圖四二九第 ↓
部壁の堂祠ヌレイウのルールベ



6.
Katareshwar
Hullabid.

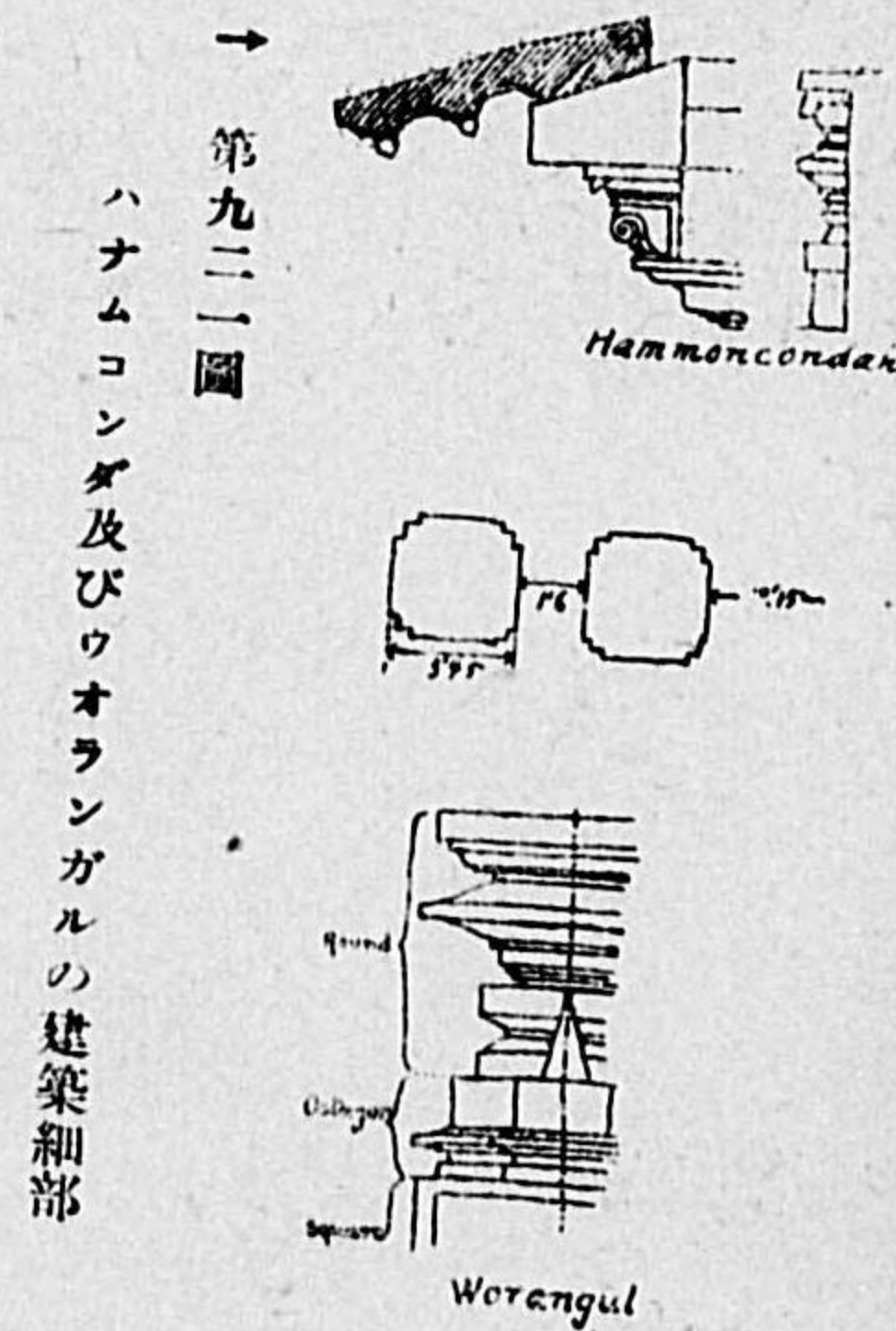
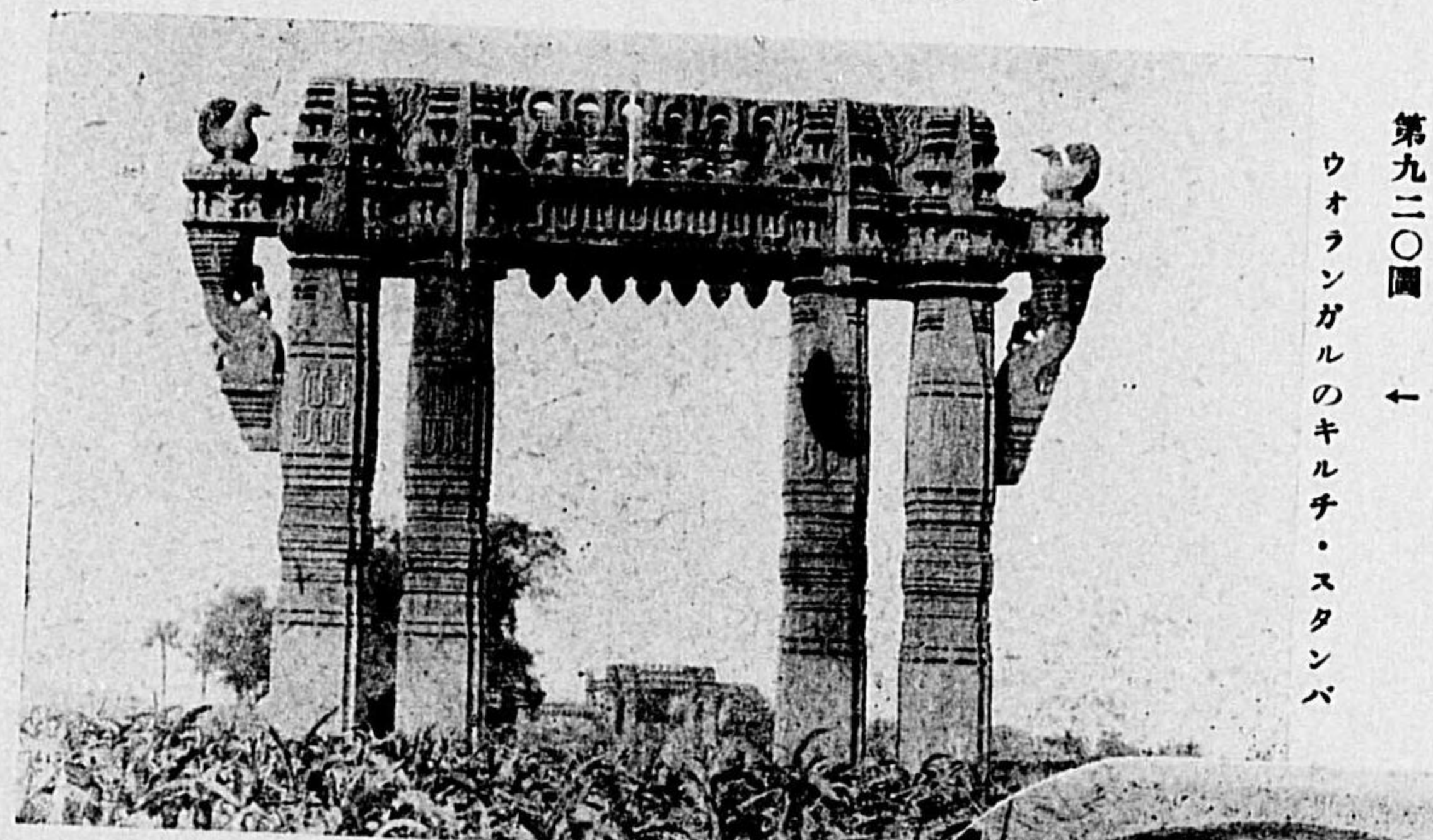


圖五二九第
タケのドツビレハ
部細のルユシレ



(62) 圖附史築建度印

第九二〇圖 ←
ウオランガルのキルチ・スタンバ



第九二二圖 ←
ベールのウイ
レマ祠堂平面圖
Temple of Vishwanath
Ballihur



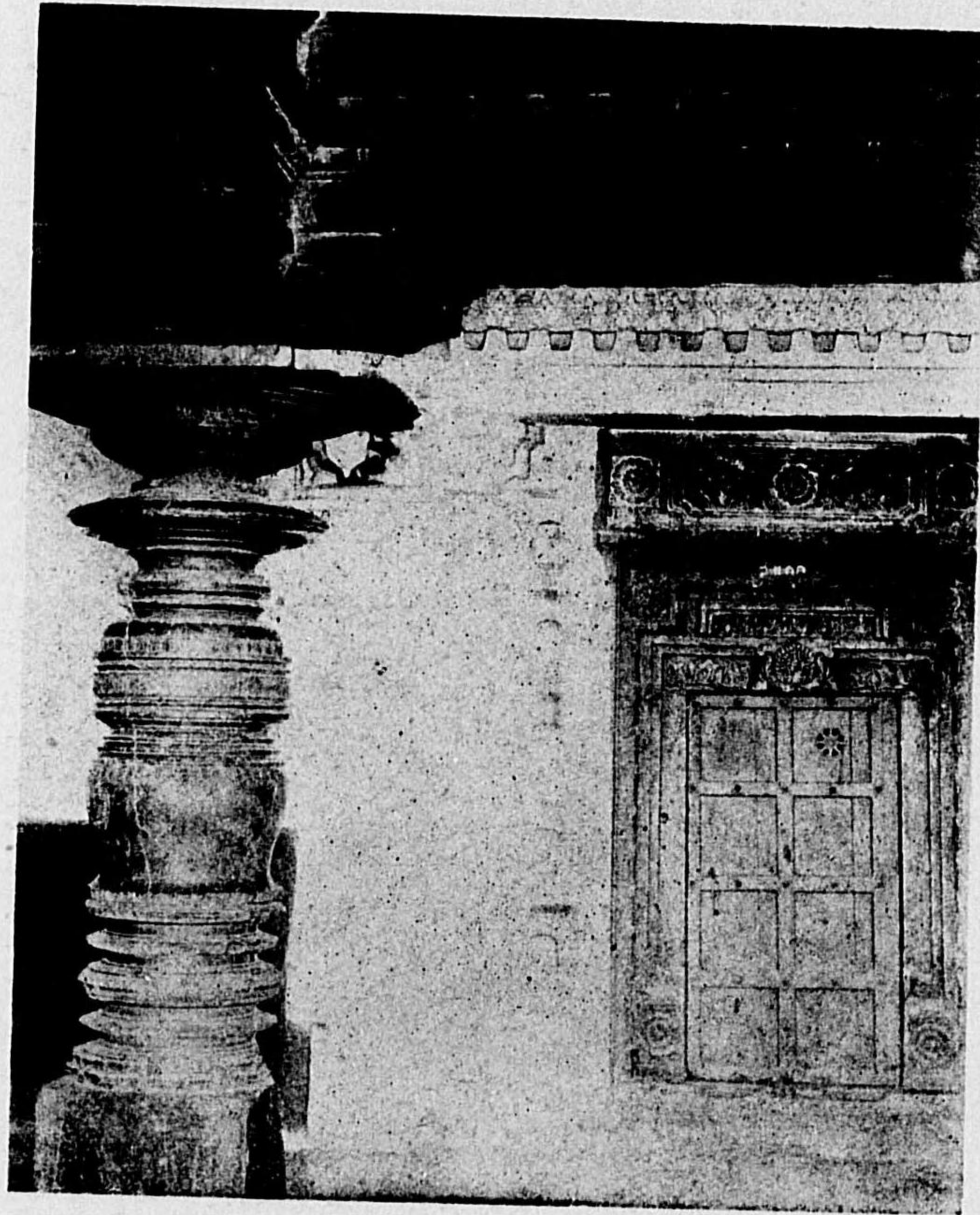
圖九一九第 ↑
藩内堂祠大のダンコムナハ

第九二九圖
ハレビツドのホイサ
レシユワル柱の断面

(65) 圖 附 史 築 建 度 印

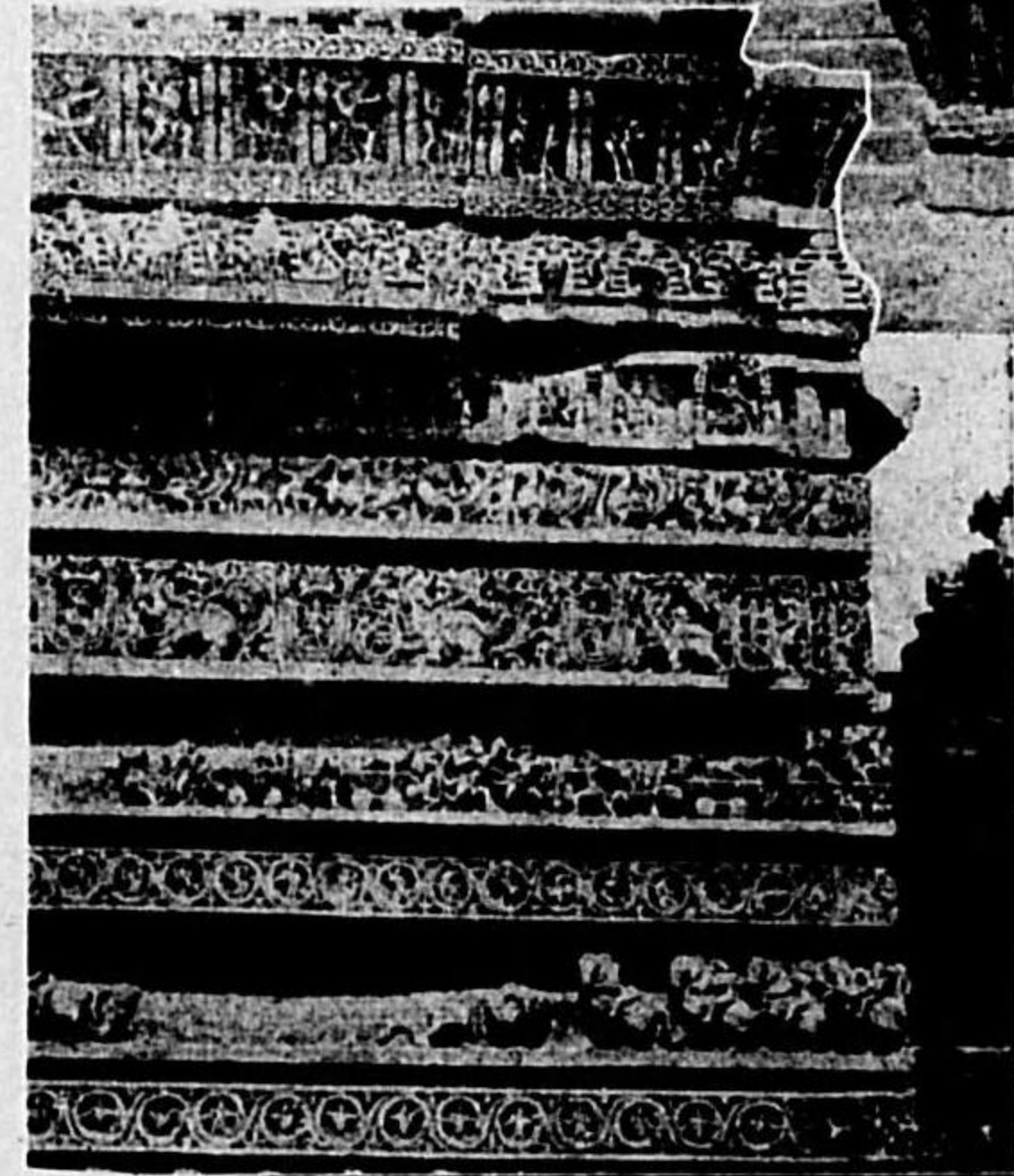
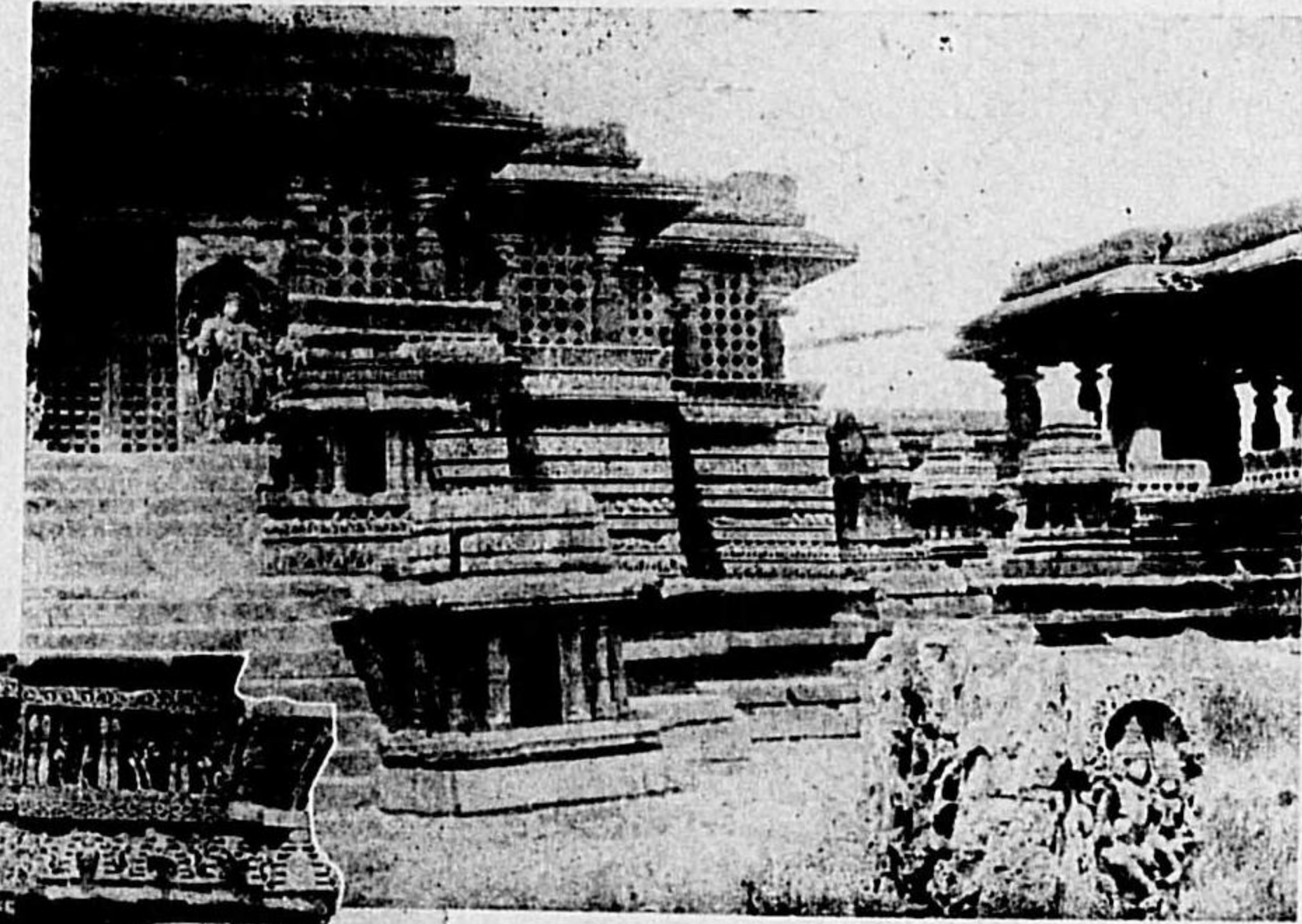


第九三〇圖 ←
ハレビツドのホイ
サレシユワル細部

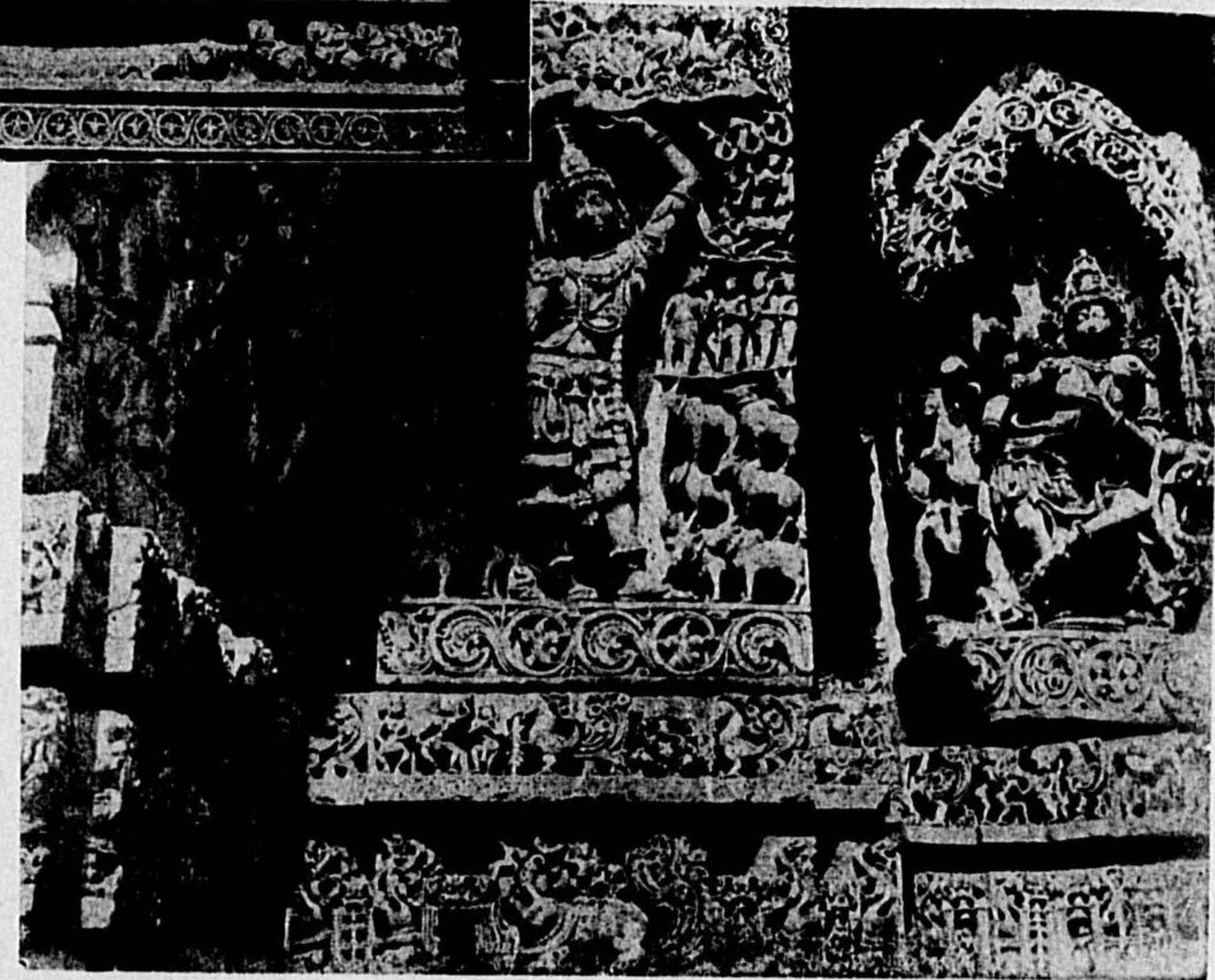


第九三九圖 第 一 三 九 第 古 祠 内 的 圖

(64) 圖 附 史 築 建 度 印

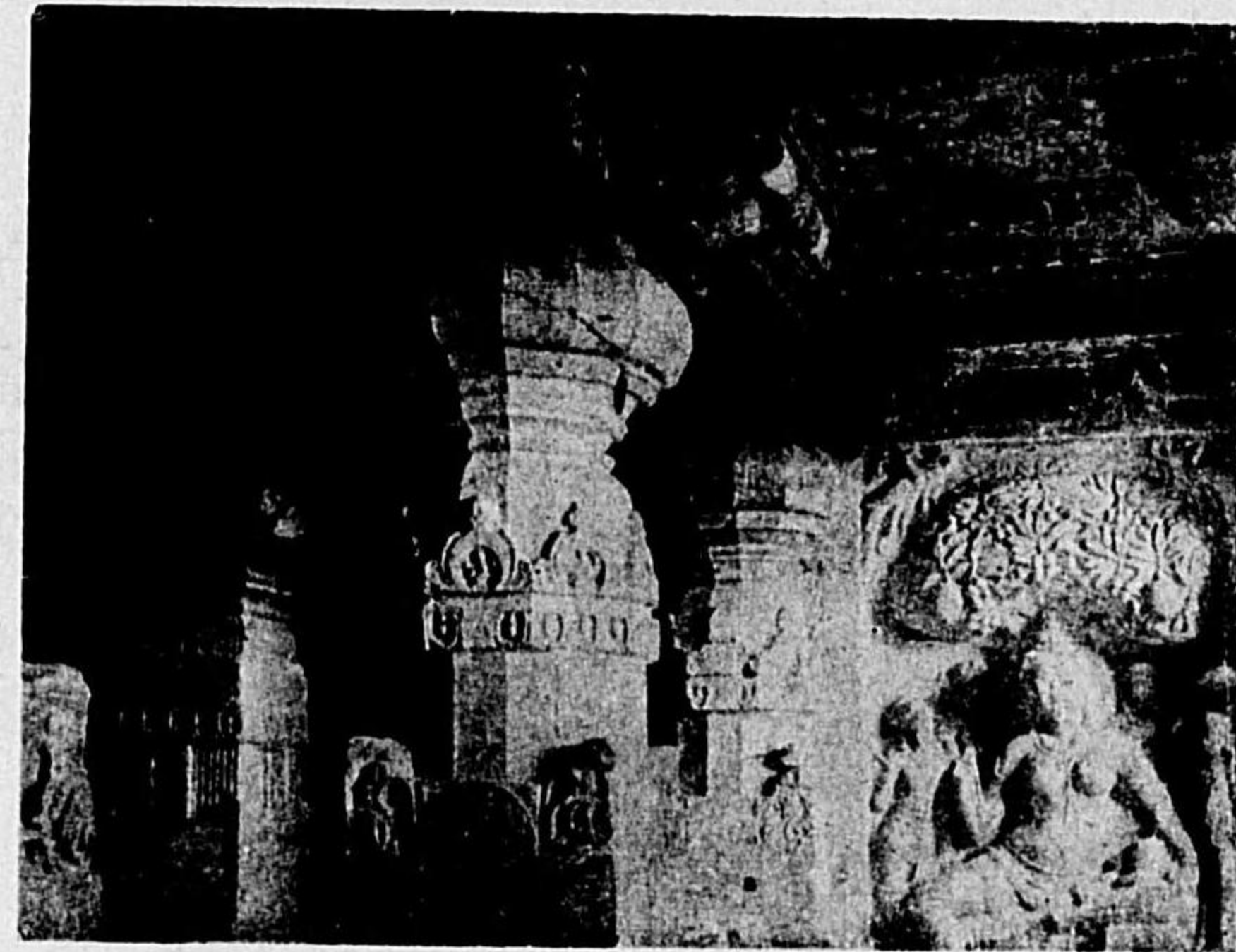


第九二九圖 →
ハレビツドのホイサ
↑ 刻彫壇基上同 第九二九圖
↓ 刻彫面壁上同 第九二九圖



(67) 圖 附 史 築 建 度 印

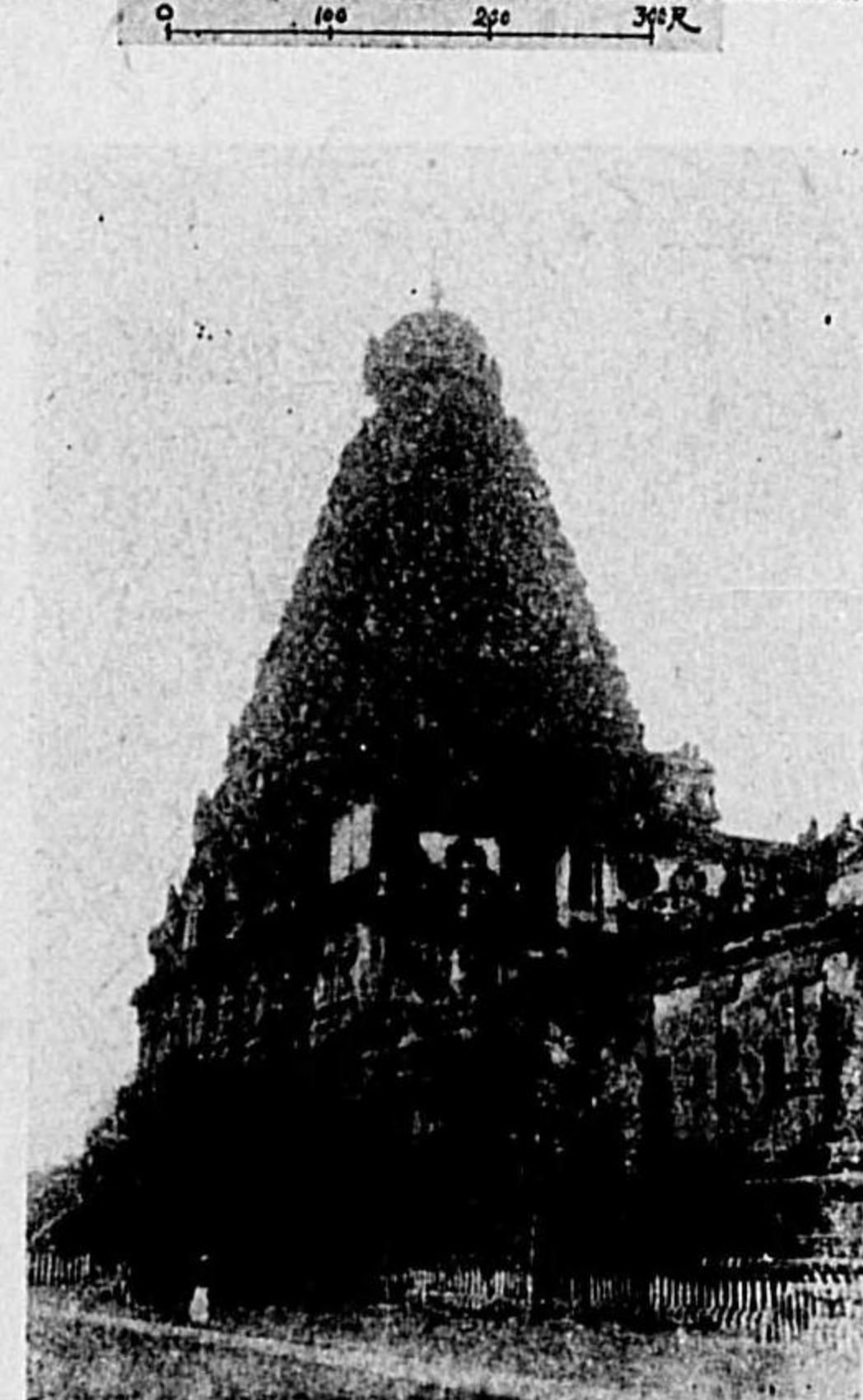
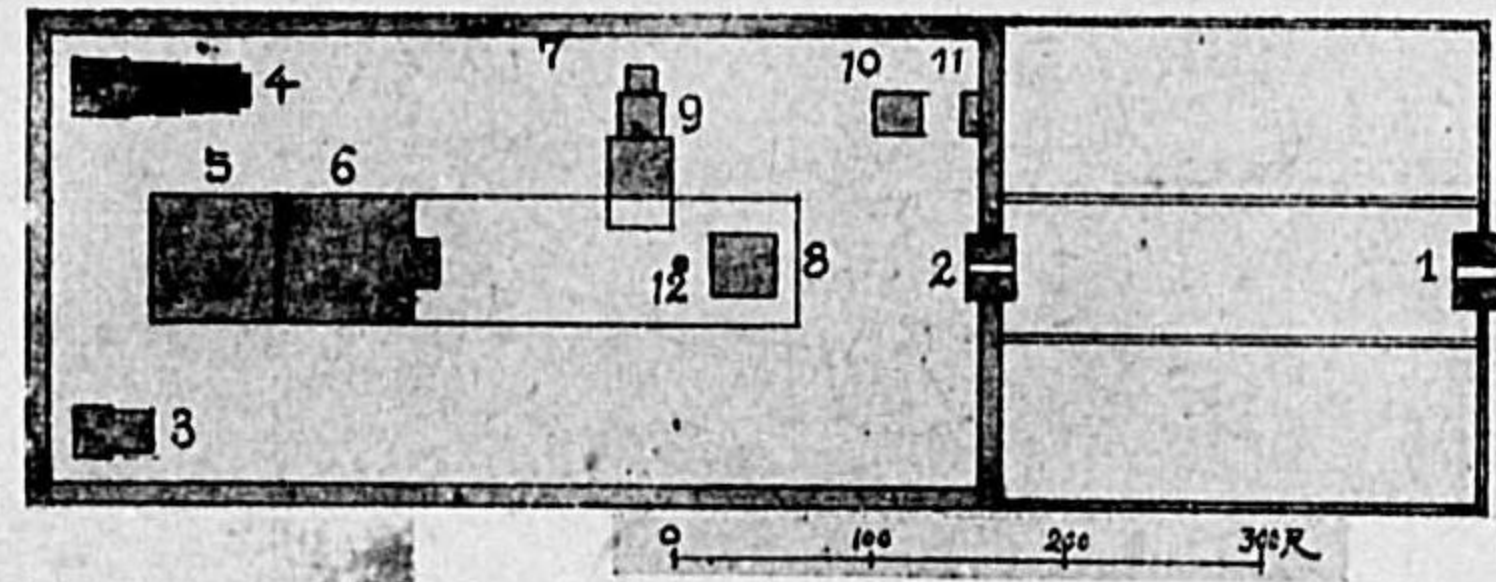
圖六三九第 →
サーライカ
部内の廊廻



圖七三九第
(央中)
ルーオジンダ
圖面平堂祠大

圖八三九第
(左下)
ルーオジンダ
門二第堂祠大

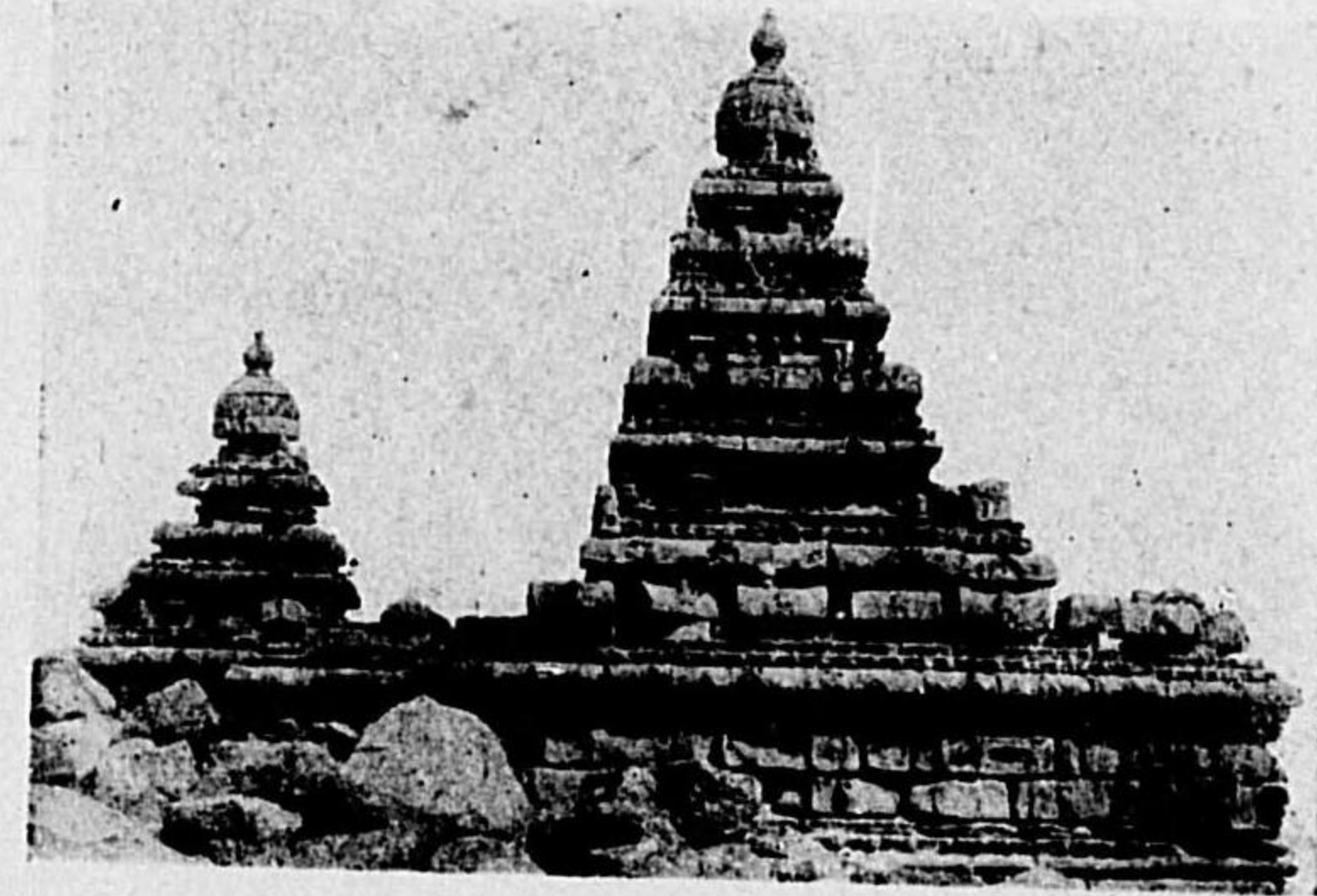
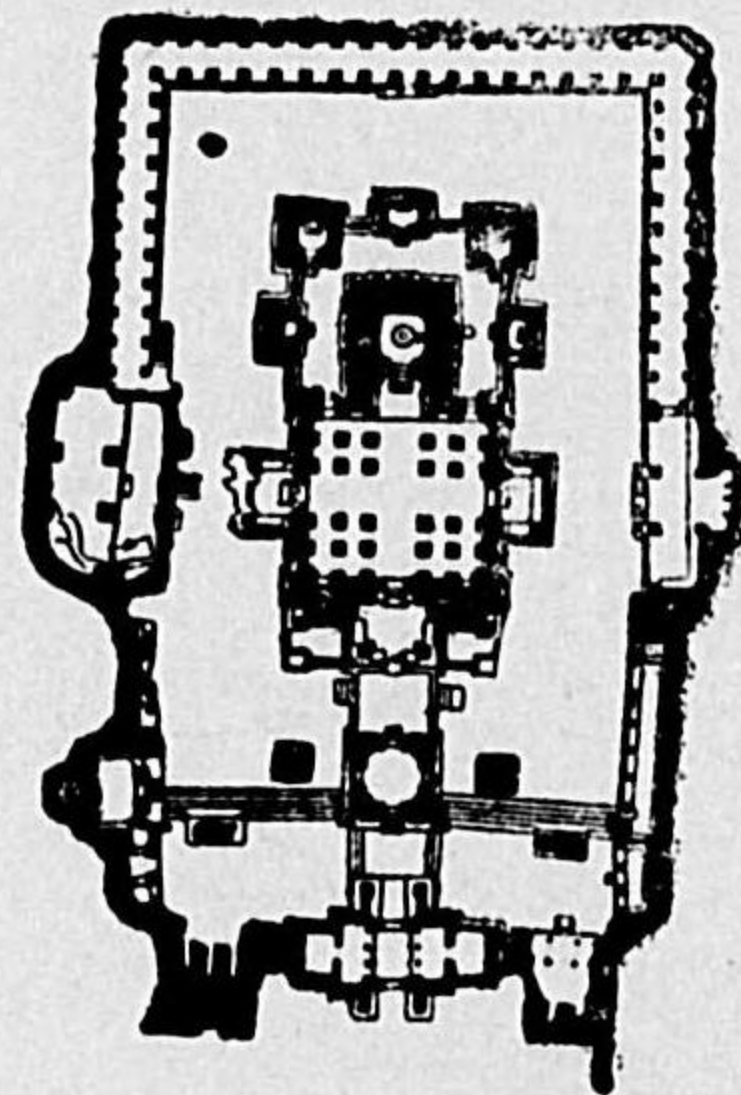
(右下) 圖九三九第
殿本堂祠大ルーオジンダ



(66) 圖 附 史 築 建 度 印



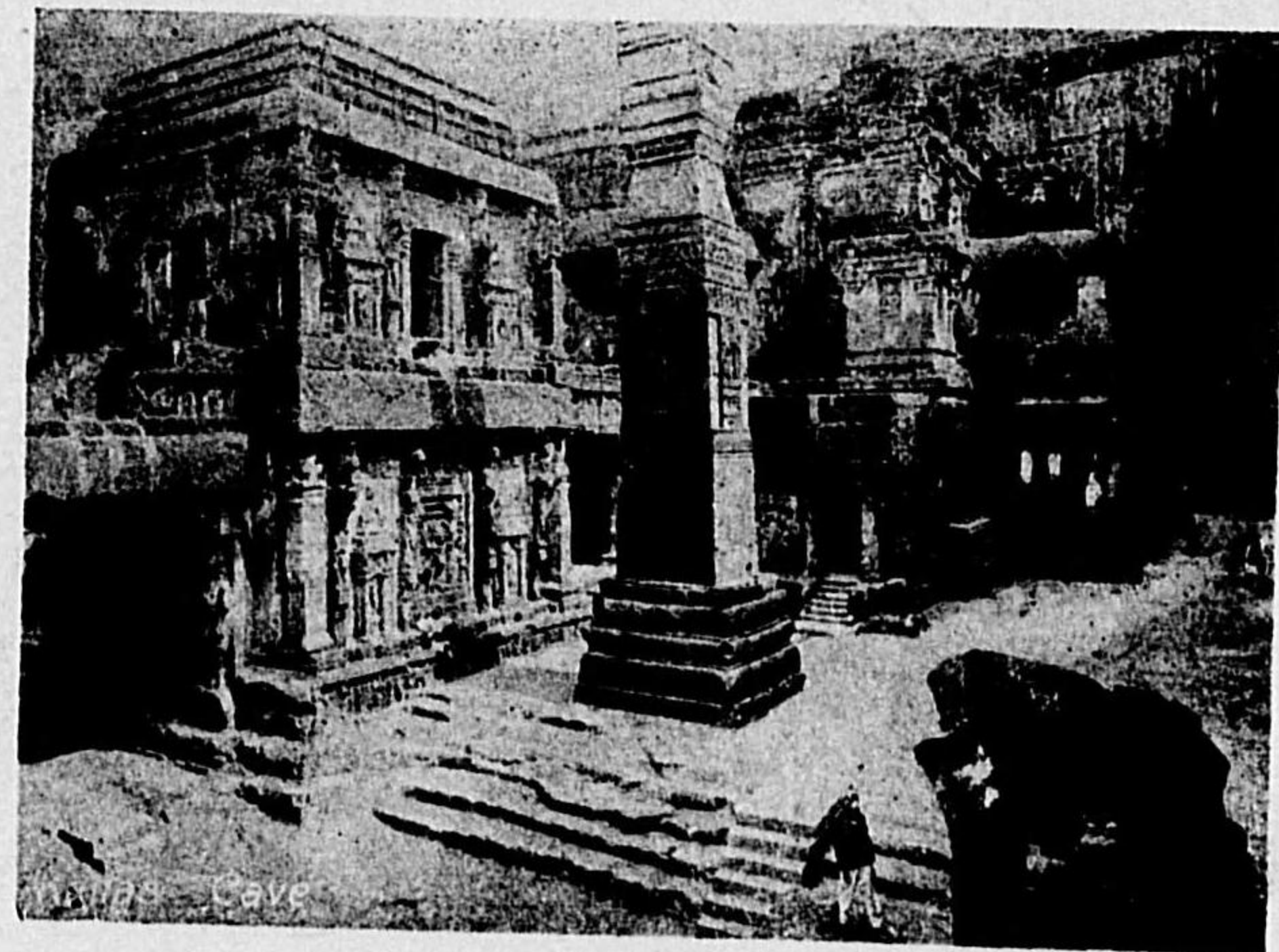
← 第九三二圖
マーマラプラムの石寶殿



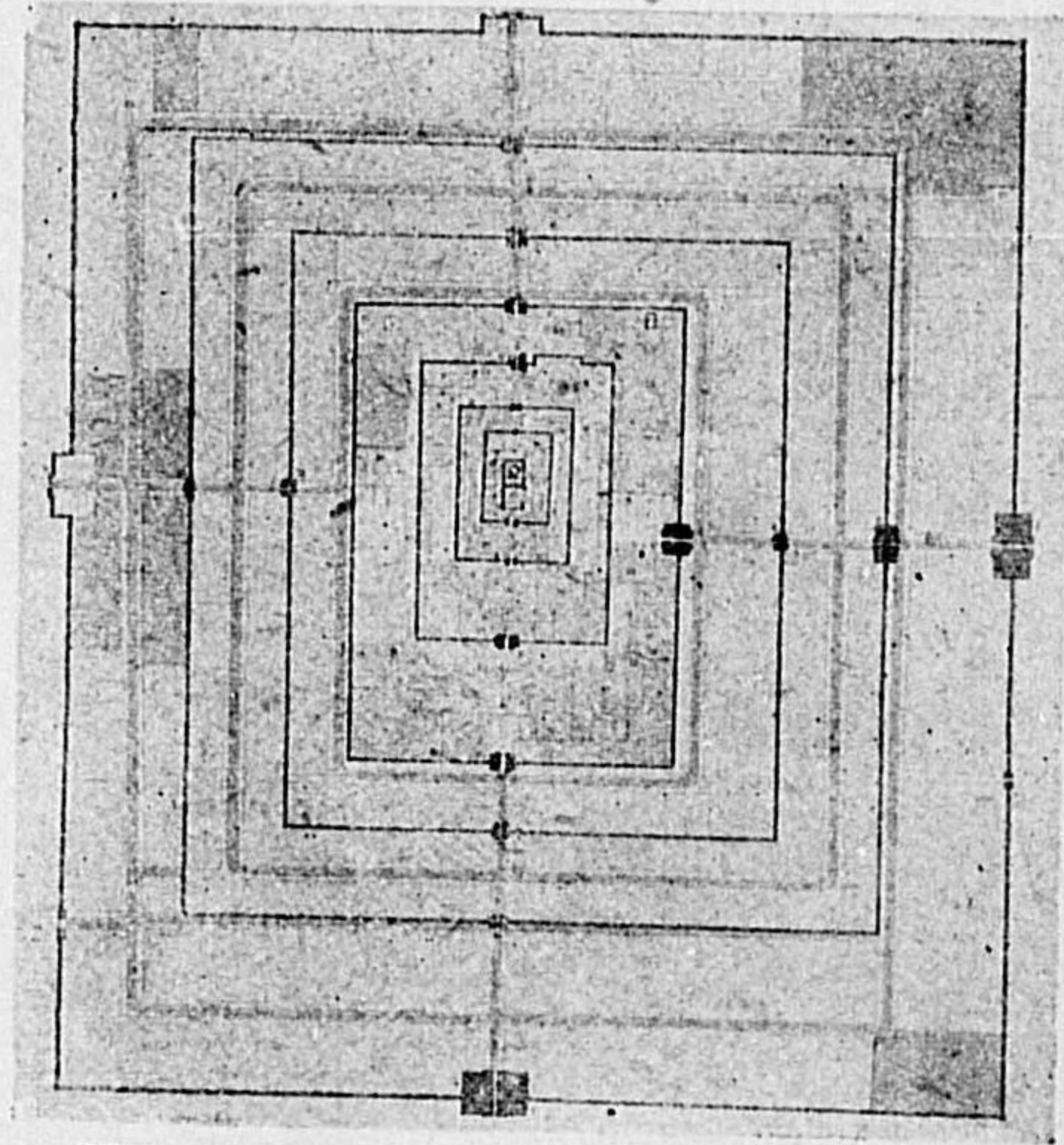
圖三三九第
(右中)
プラマーマ
レアのマラ
堂祠ワ

圖四三九第
(左中)
のサーライカ
圖面平

→
圖五三九第
サーライカ
景全

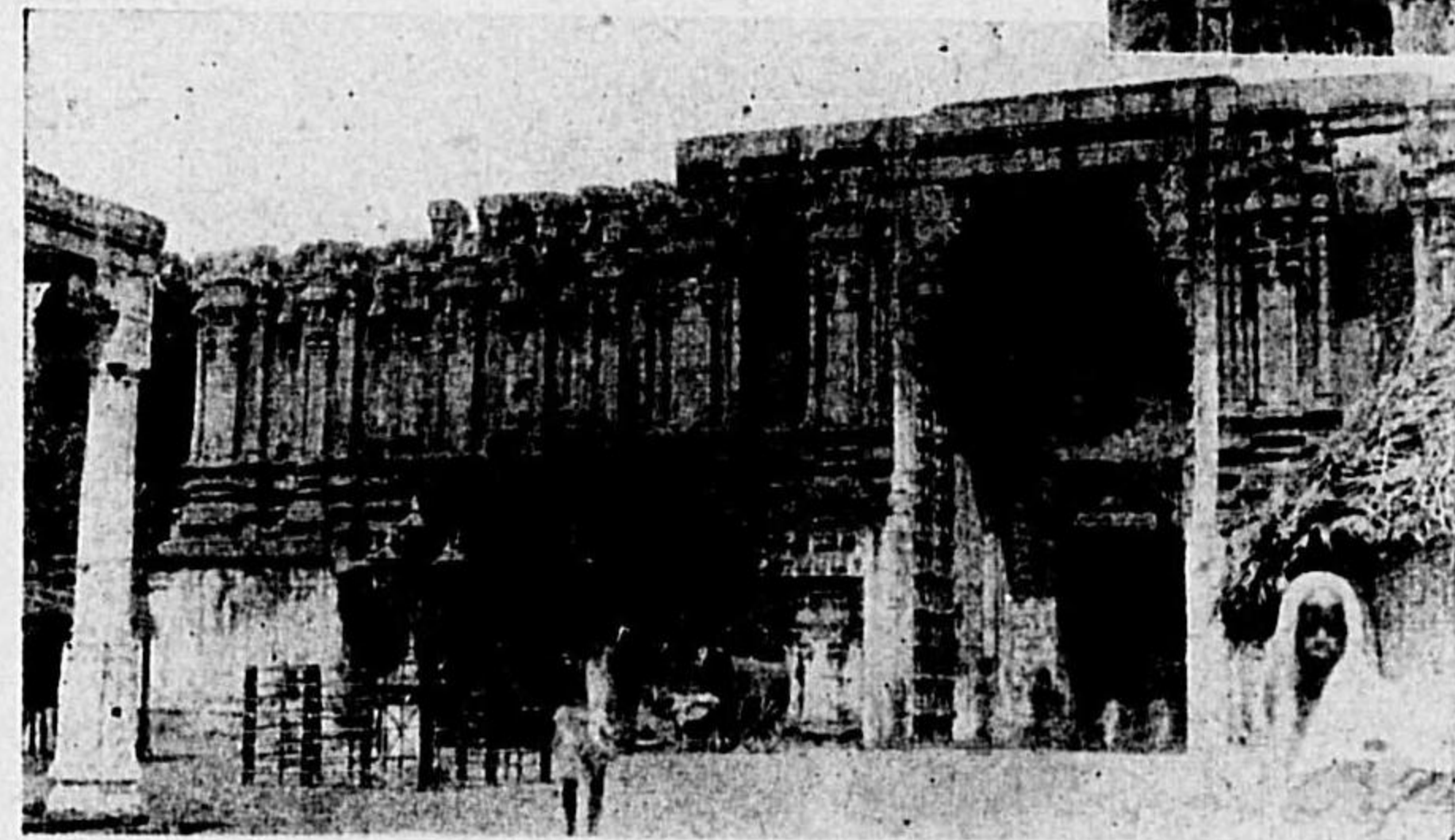


(69) 圖附史築建度印



圖面平堂祠大ムガンラリス 圖四四九第

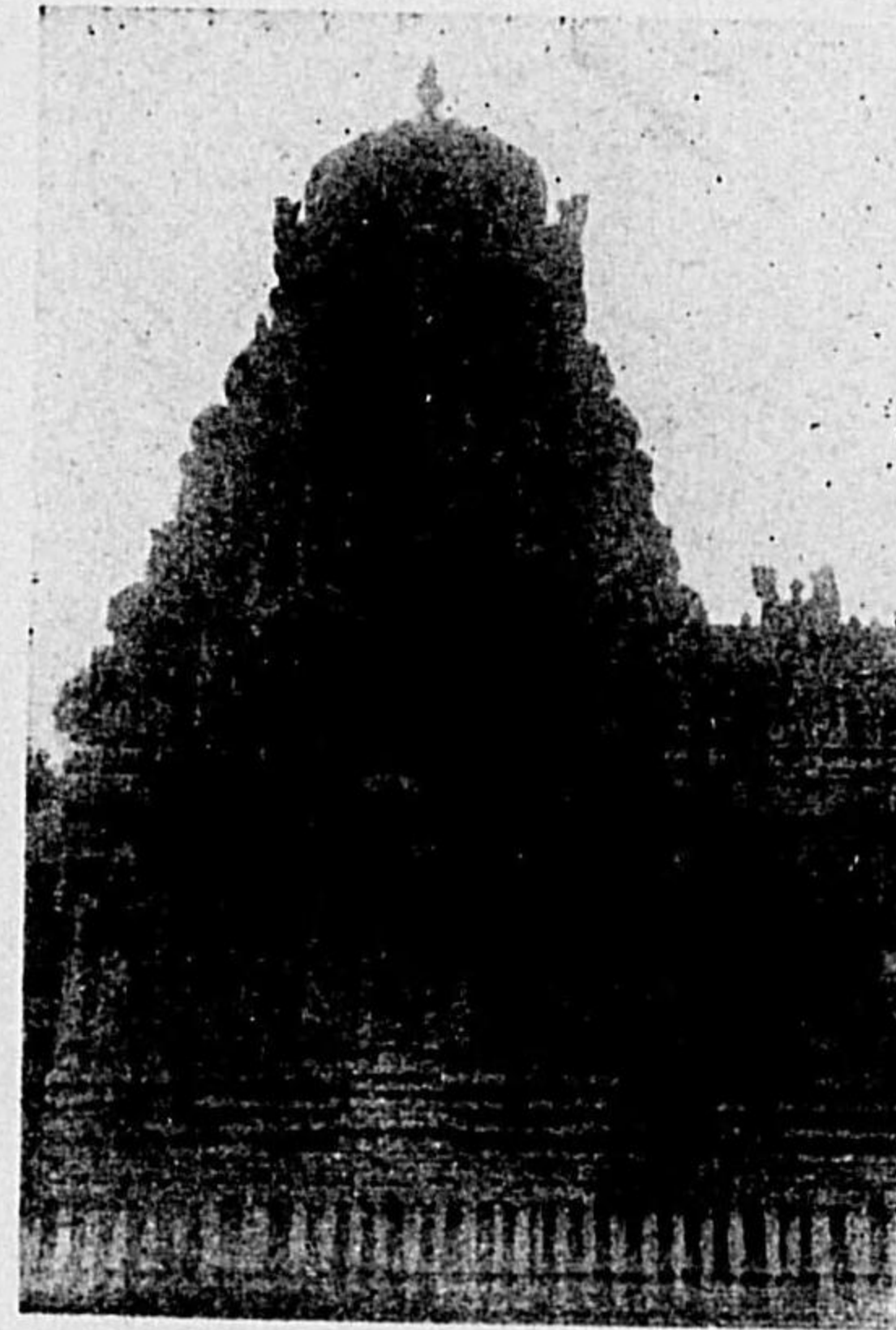
圖六四九第 ↓
堂祠大ムガンラリス
柱 刻 彫



←
圖五四九第
ムガンラリス
門一第堂祠大
↓
圖七四九第
ムガンラリス
景全堂祠大



(68) 圖附史築建度印



圖一四九第
部細の殿拜アニーラプス



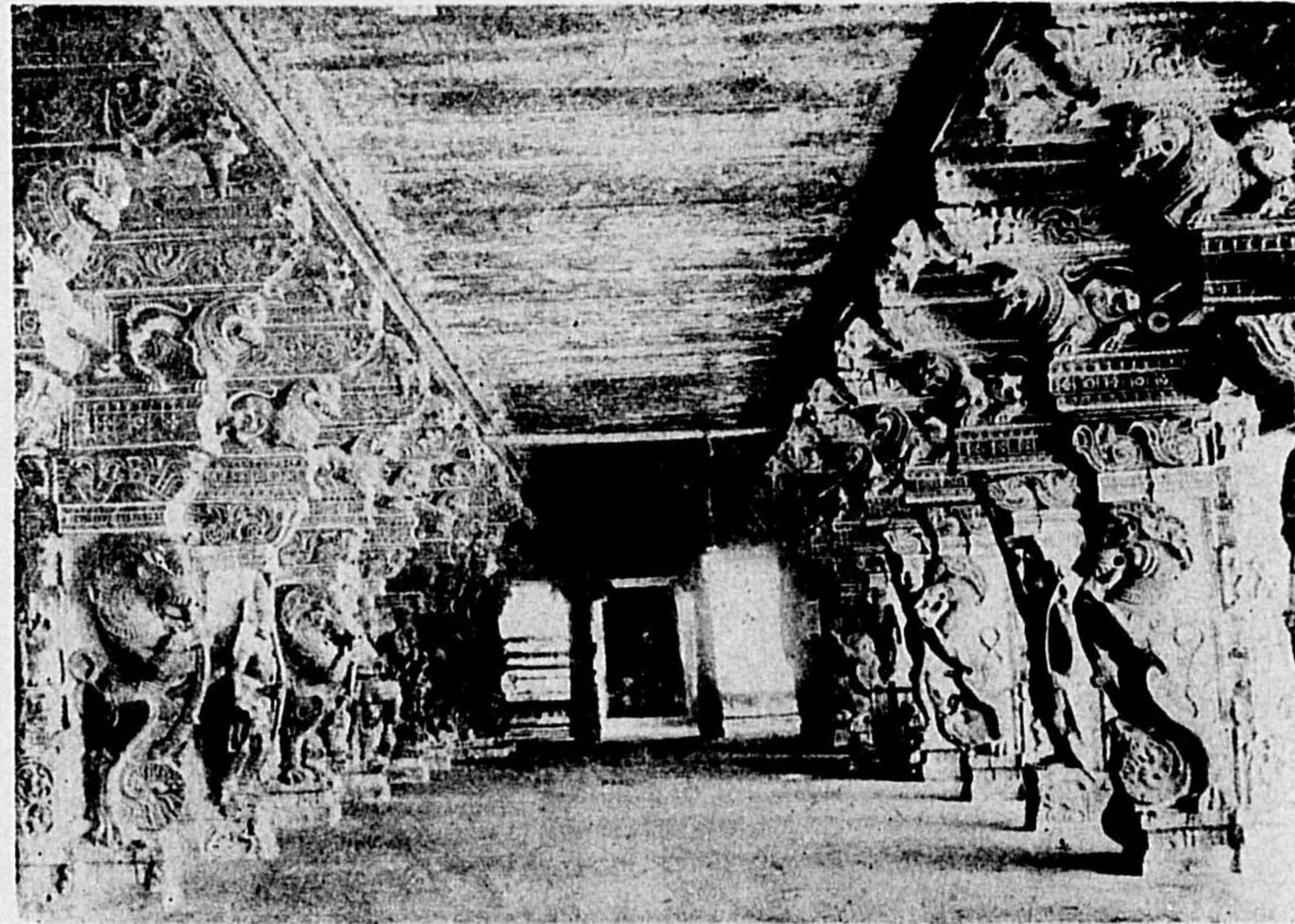
圖〇四九第
殿本の堂祠アニーラプス



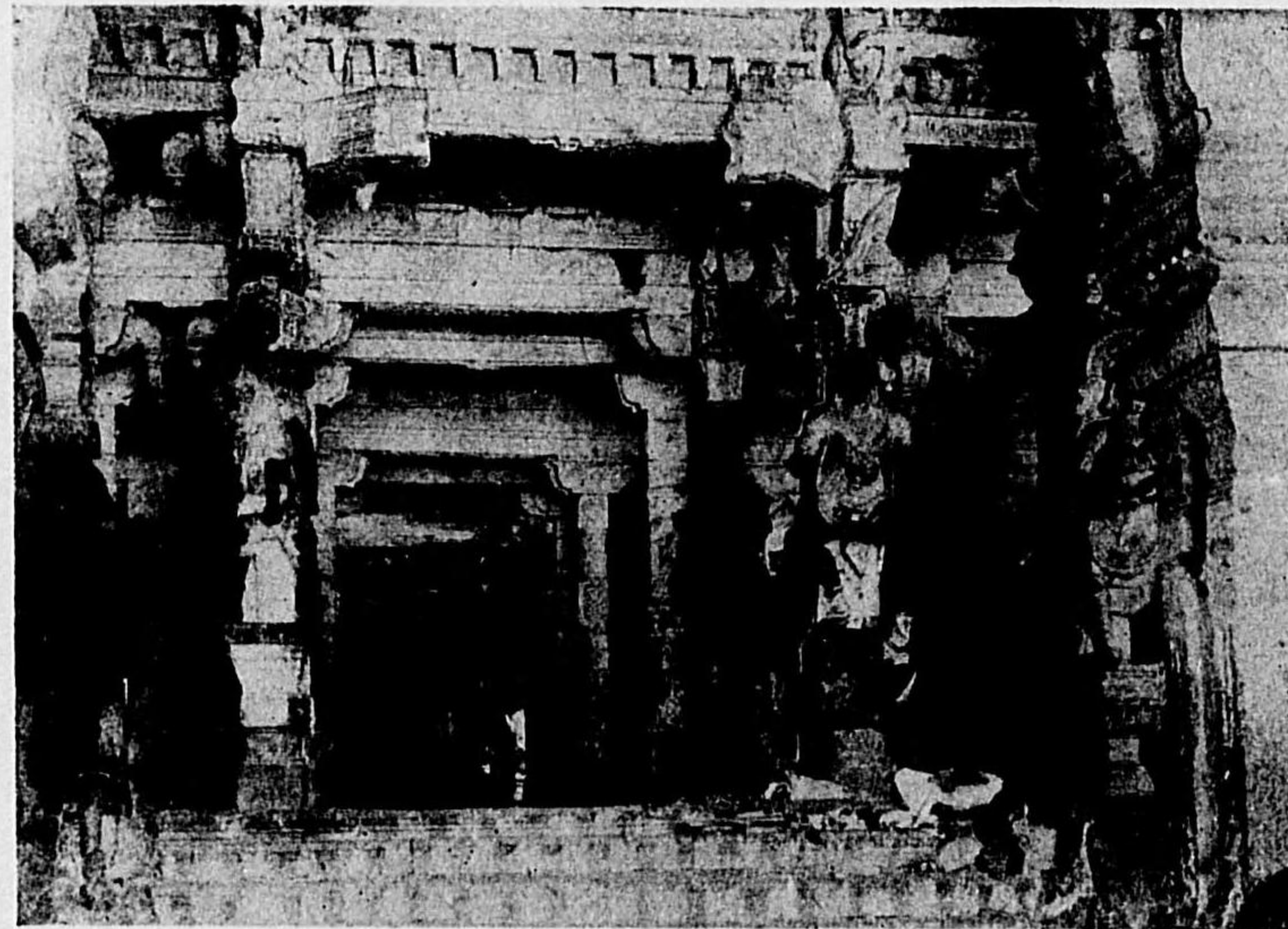
圖三四九第
興神祠ルールバルチ



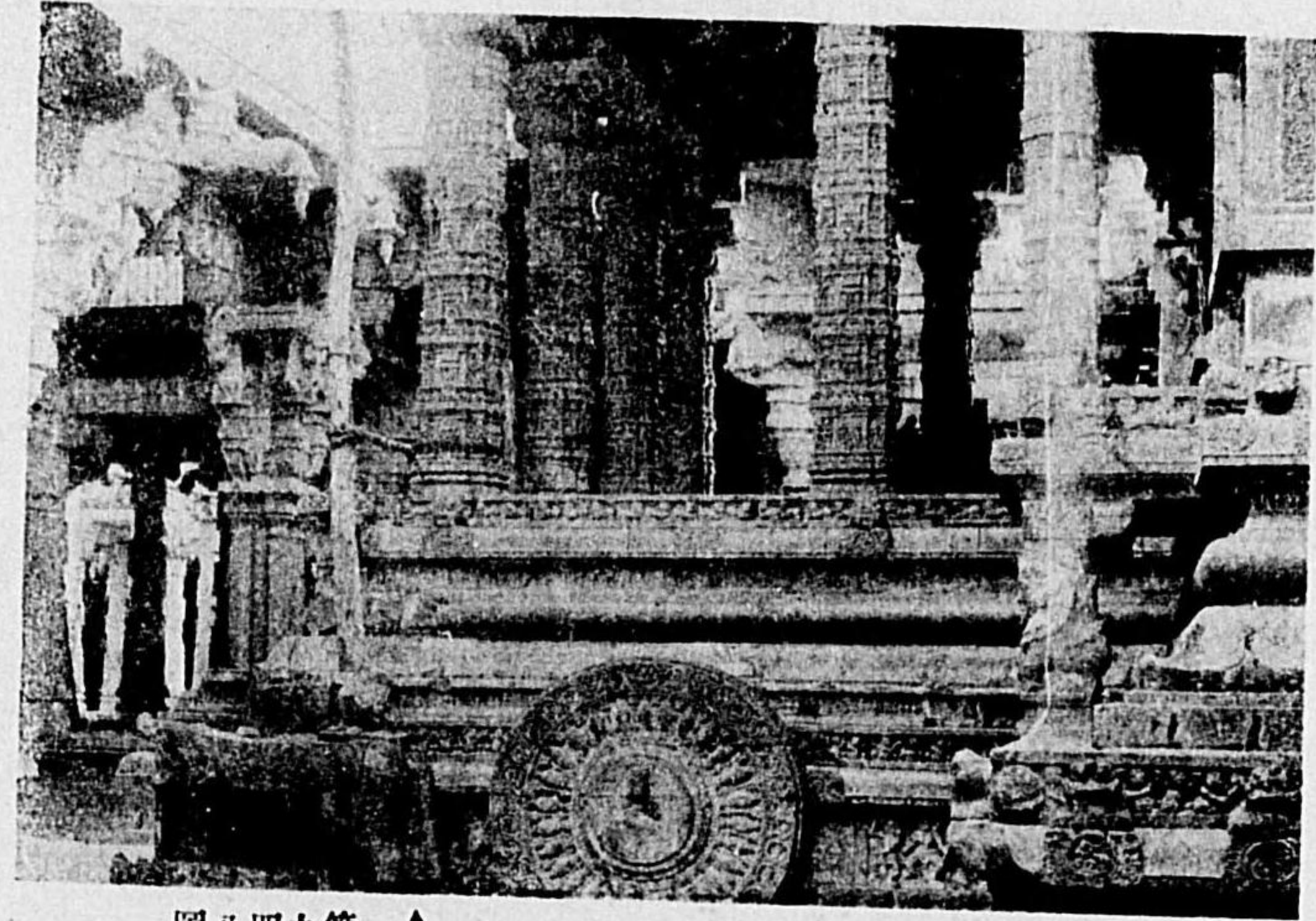
圖二四九第
門一第の堂祠ルールバルチ



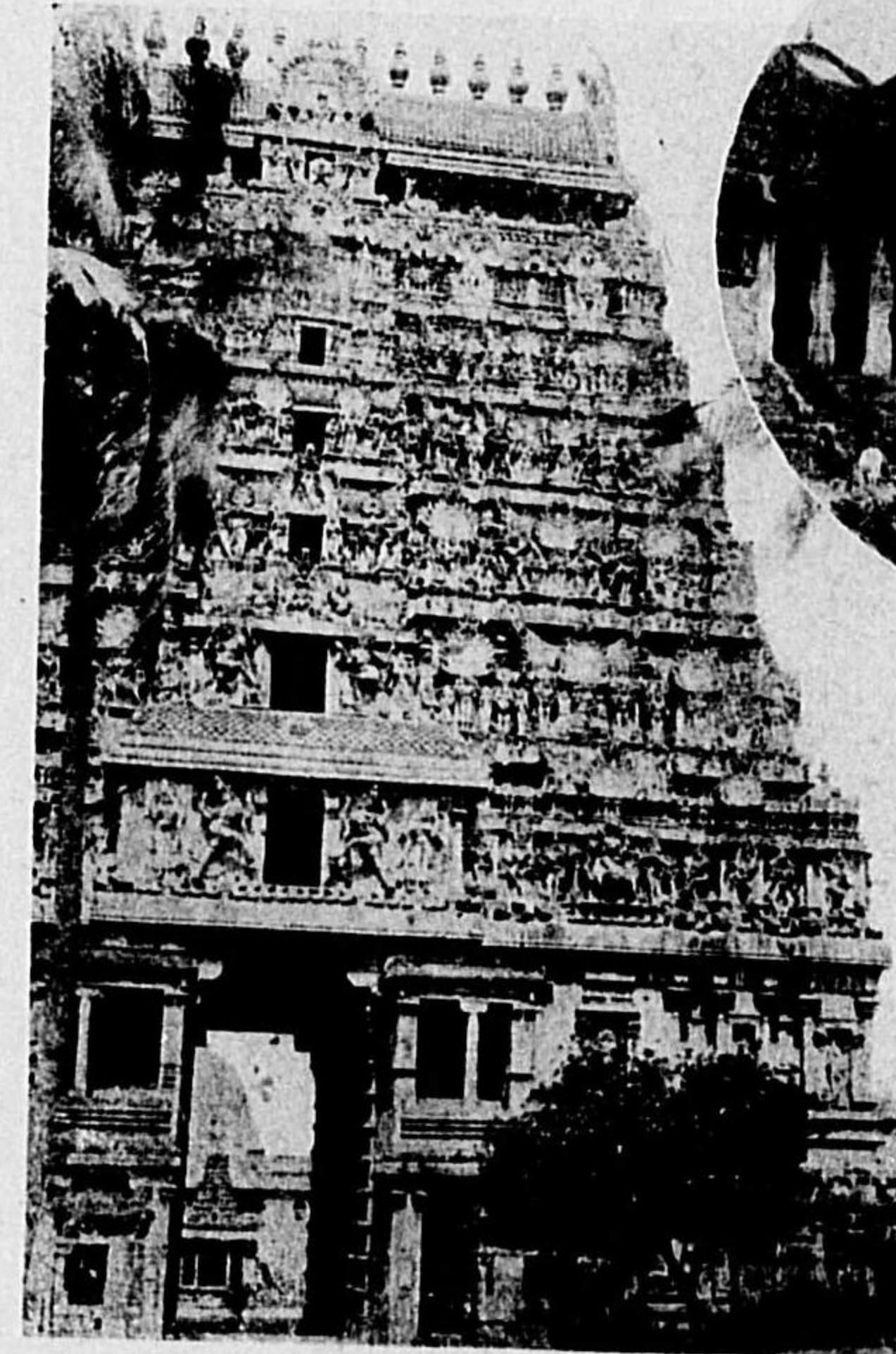
廊の堂祠大ラヅマ 圖一五九第



殿柱千堂祠大ラヅマ 圖二五九第

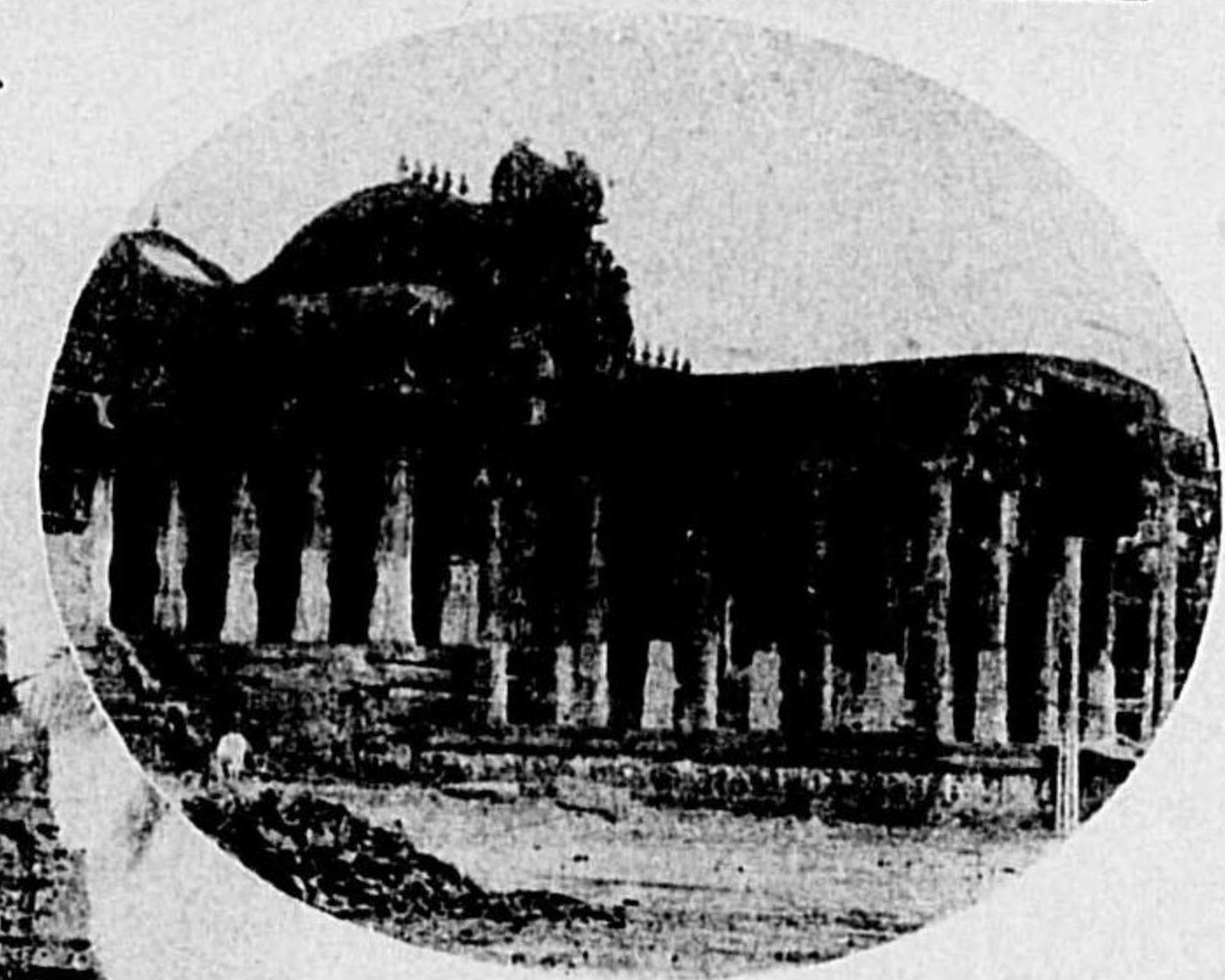


圖八四九第 ↑
院内堂祠のムラバンダチ

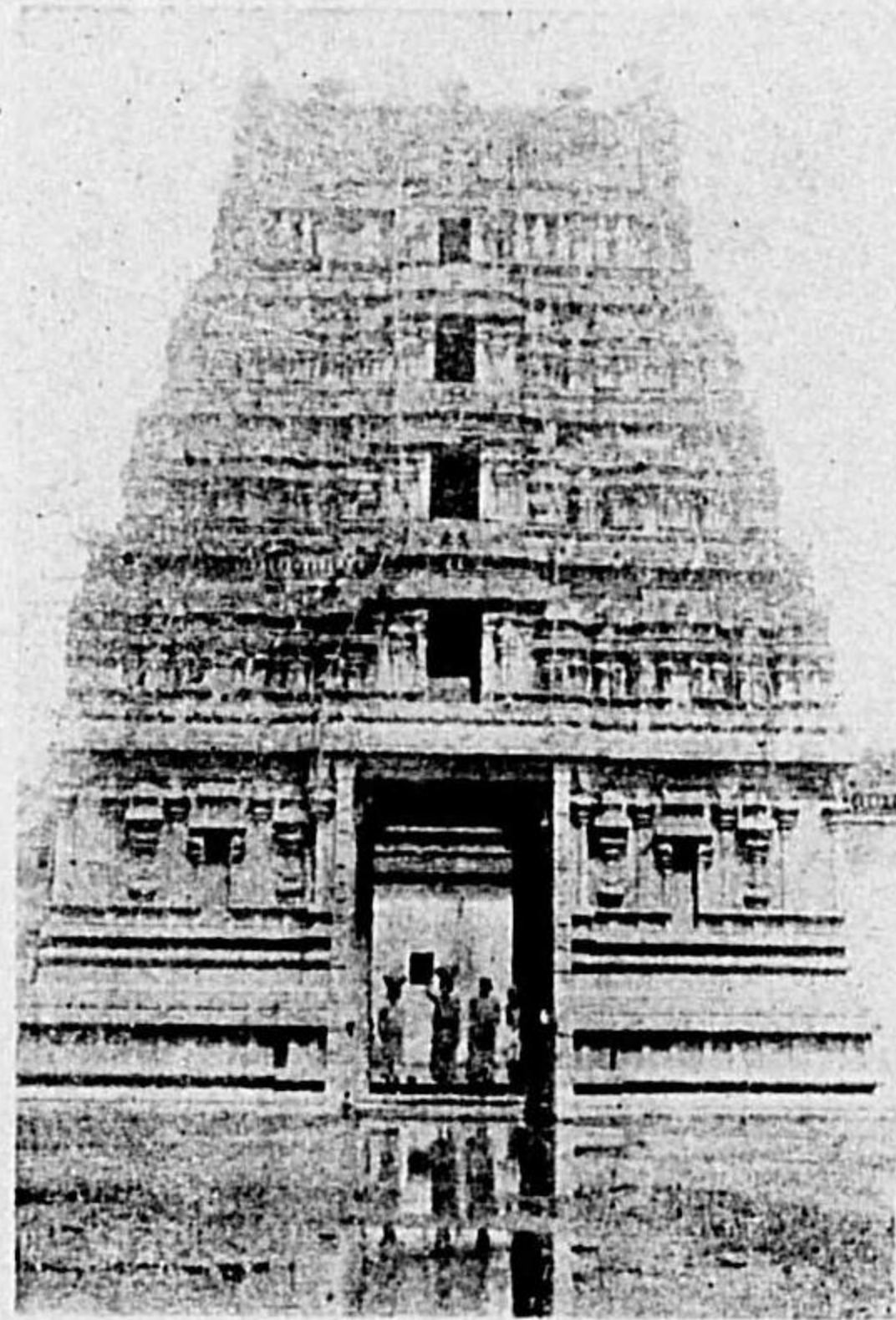


圖〇五九第 ↑
堂祠ムラバンダチ

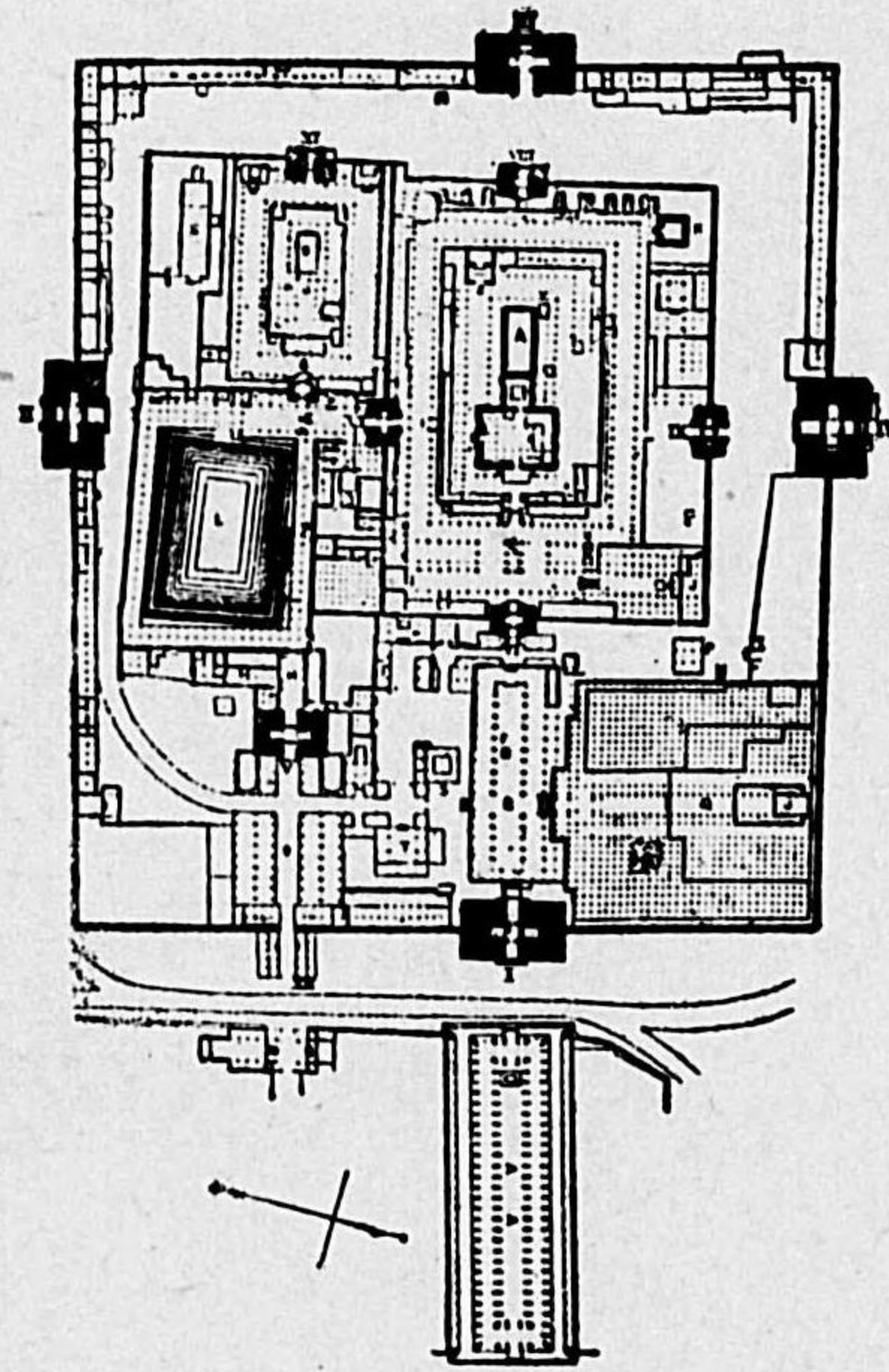
← 圖九四九第
門南堂祠ムラバンダチ



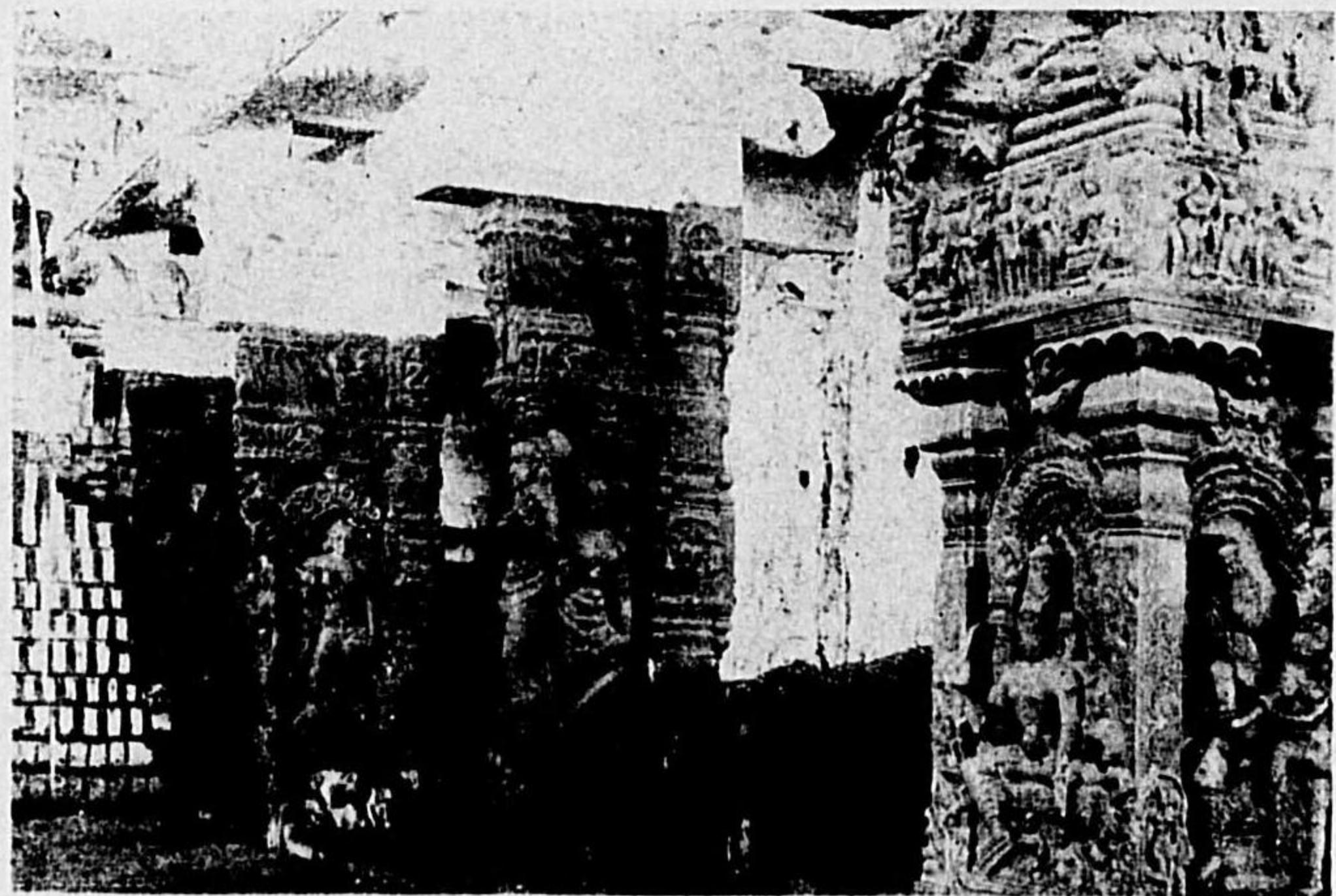
(73) 圖附史築建度印



門中の堂祠のレーロエウ 圖六五九第

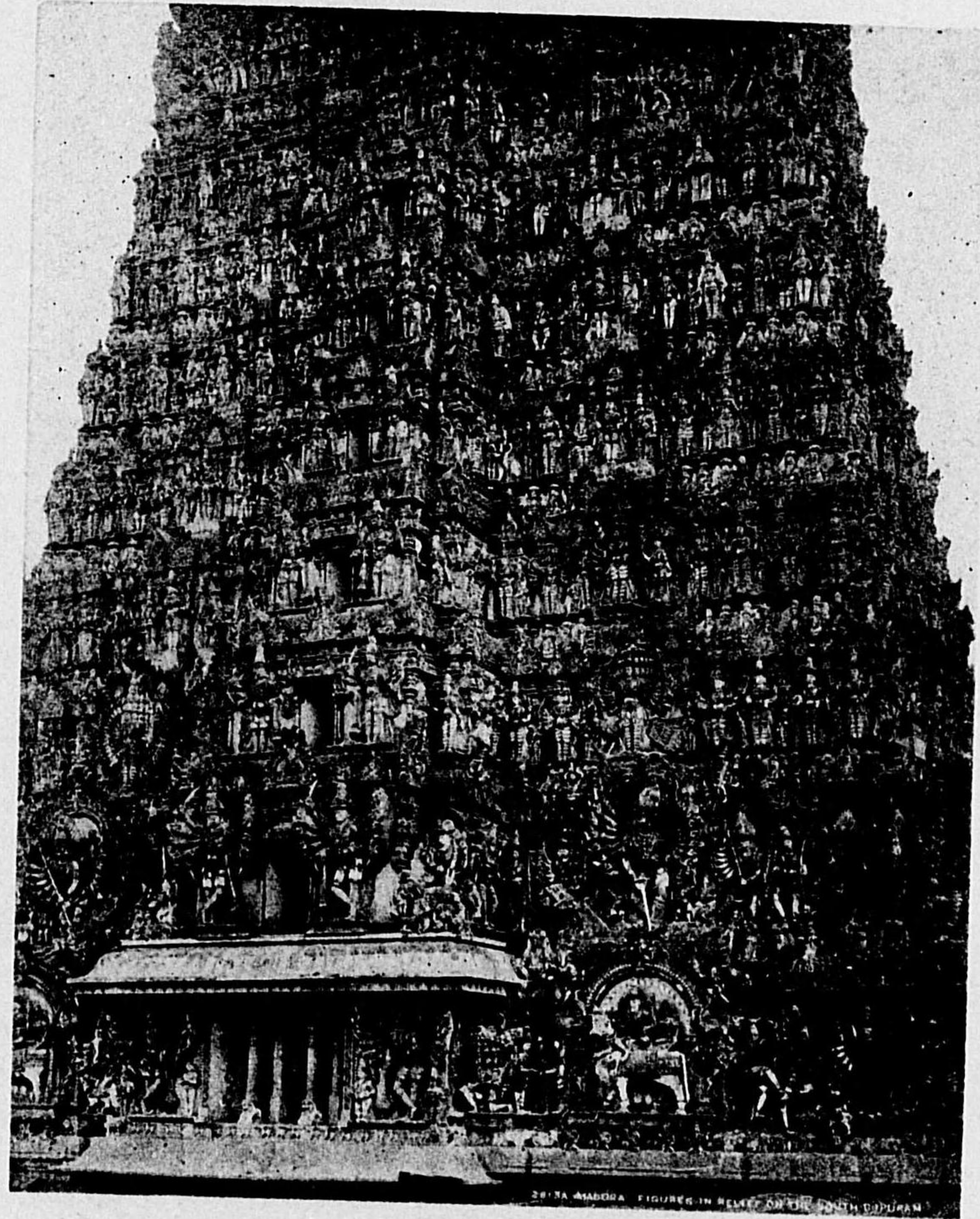


圖面平堂祠大ラツマ 圖四五九第

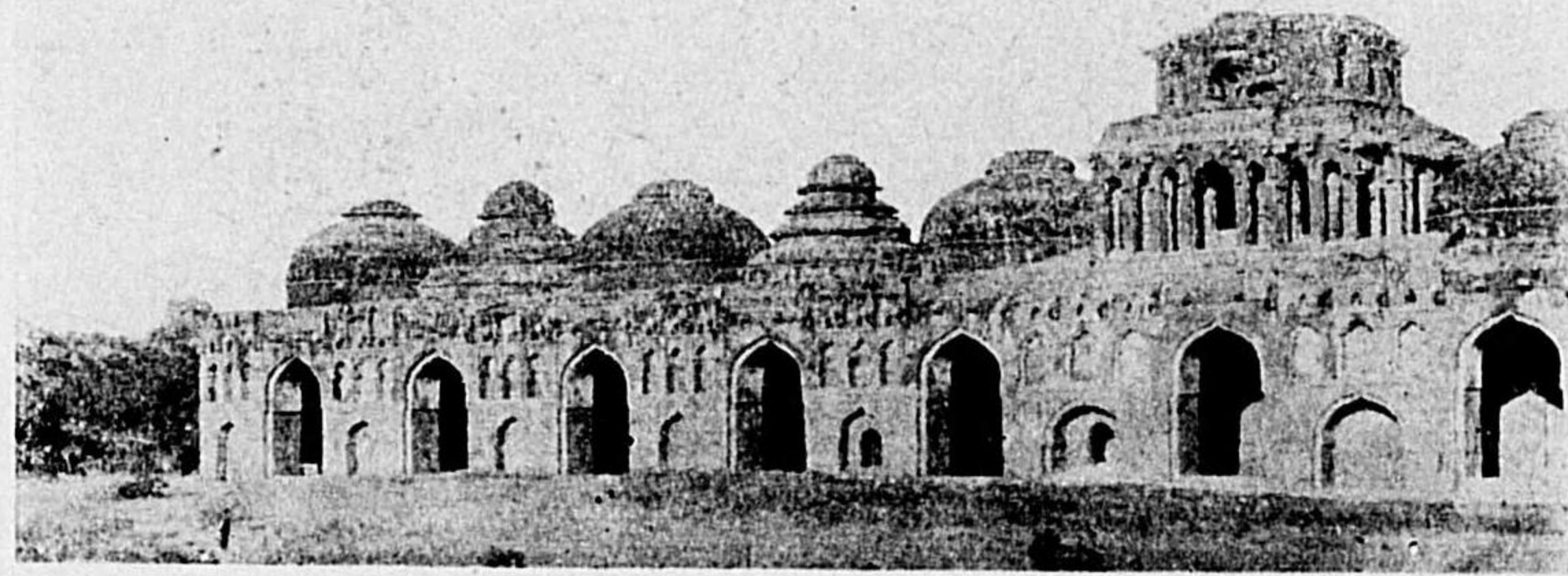


堂祠ミサムラのムナコバンク 圖五五九第

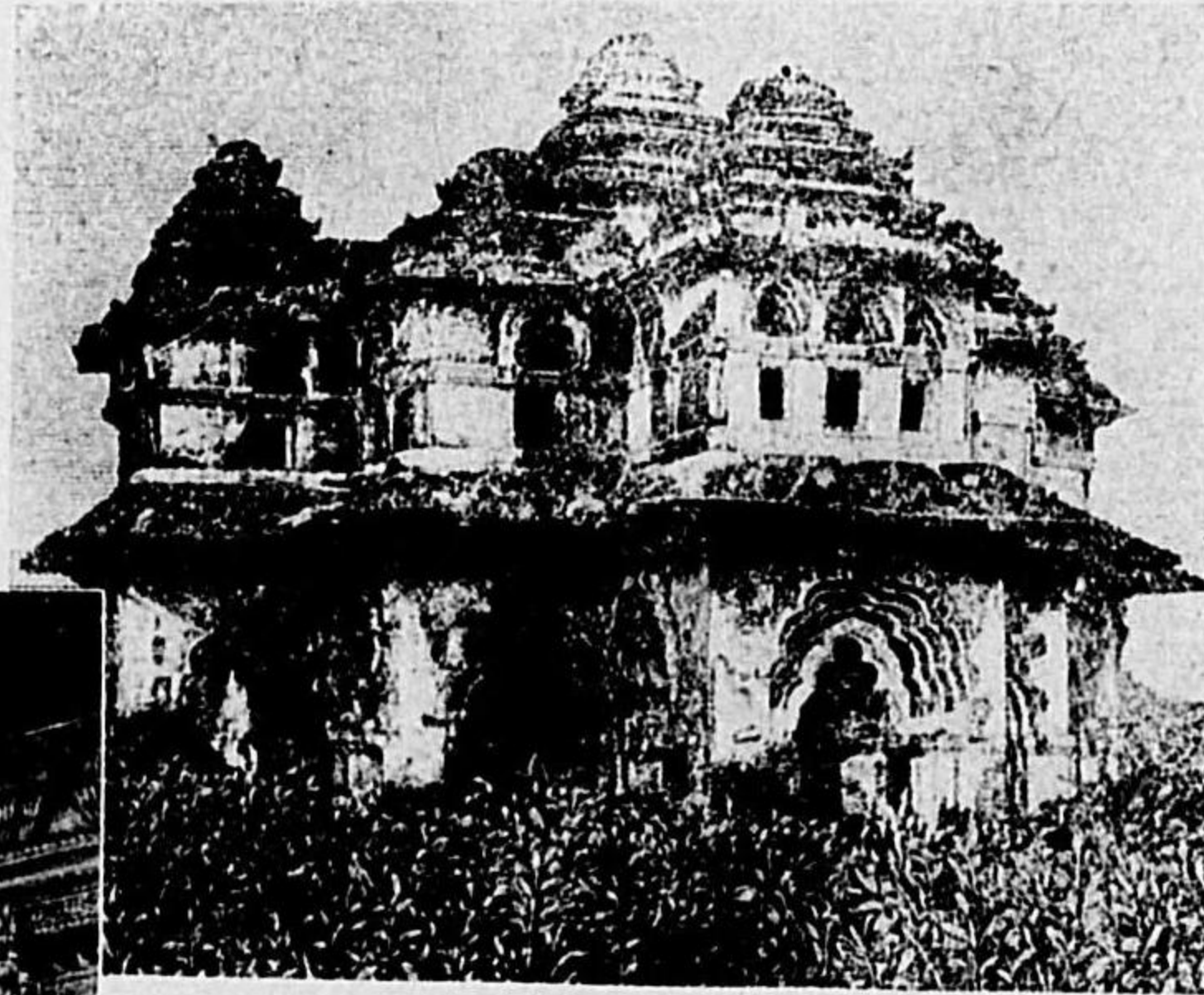
(72) 圖附史築建度印



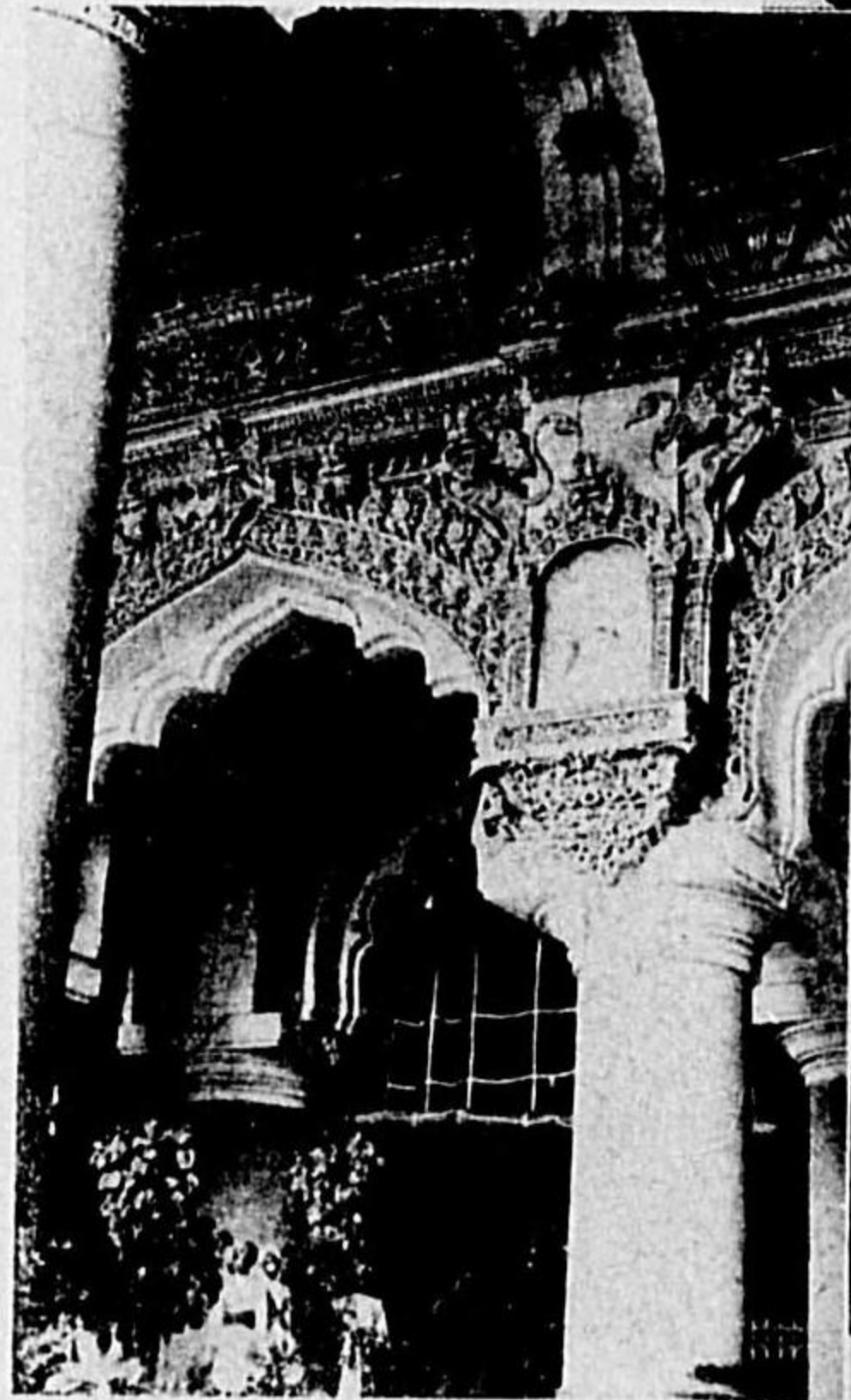
ラプゴの堂祠大ラツマ 圖三五九第



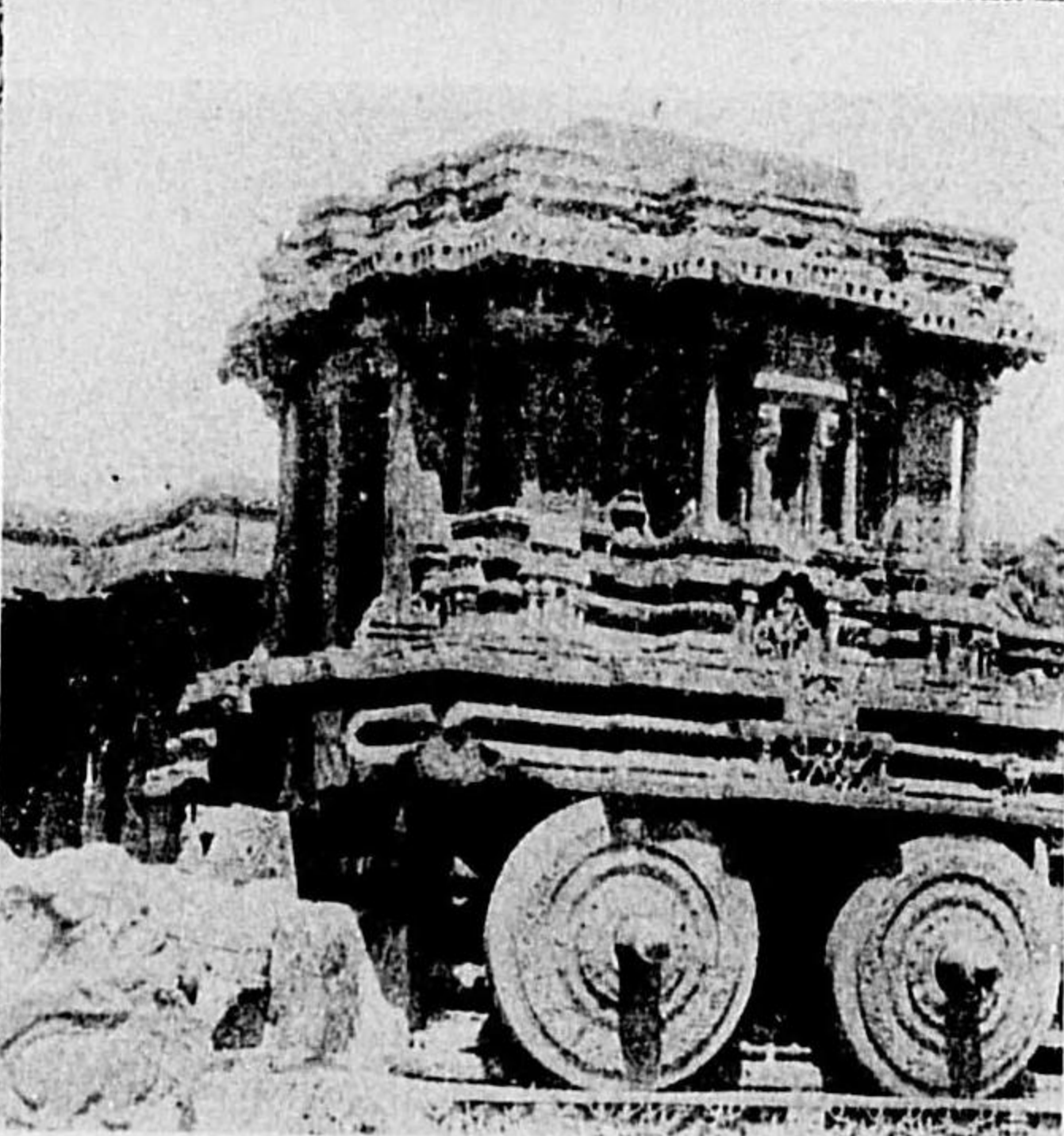
舍象の宮王ルガナヤジイヴ 圖三六九第



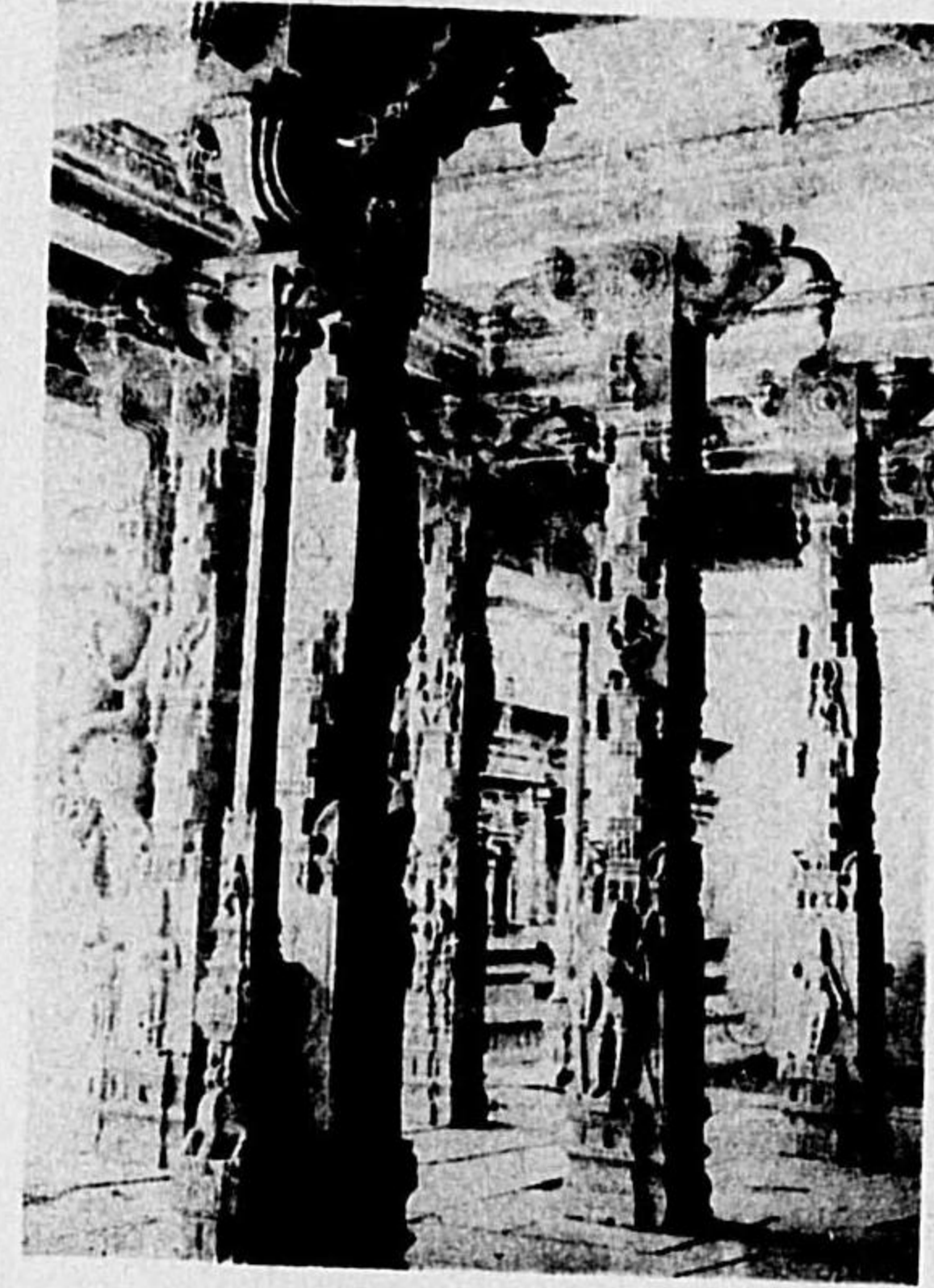
↓ 宮王のラツマ 圖四六九第



圖一六九第 →
イヴのルガナヤジイヴ
祠小の前祠バート



第九六二圖
ウイジャヤナガルの王宮庭園内亭子



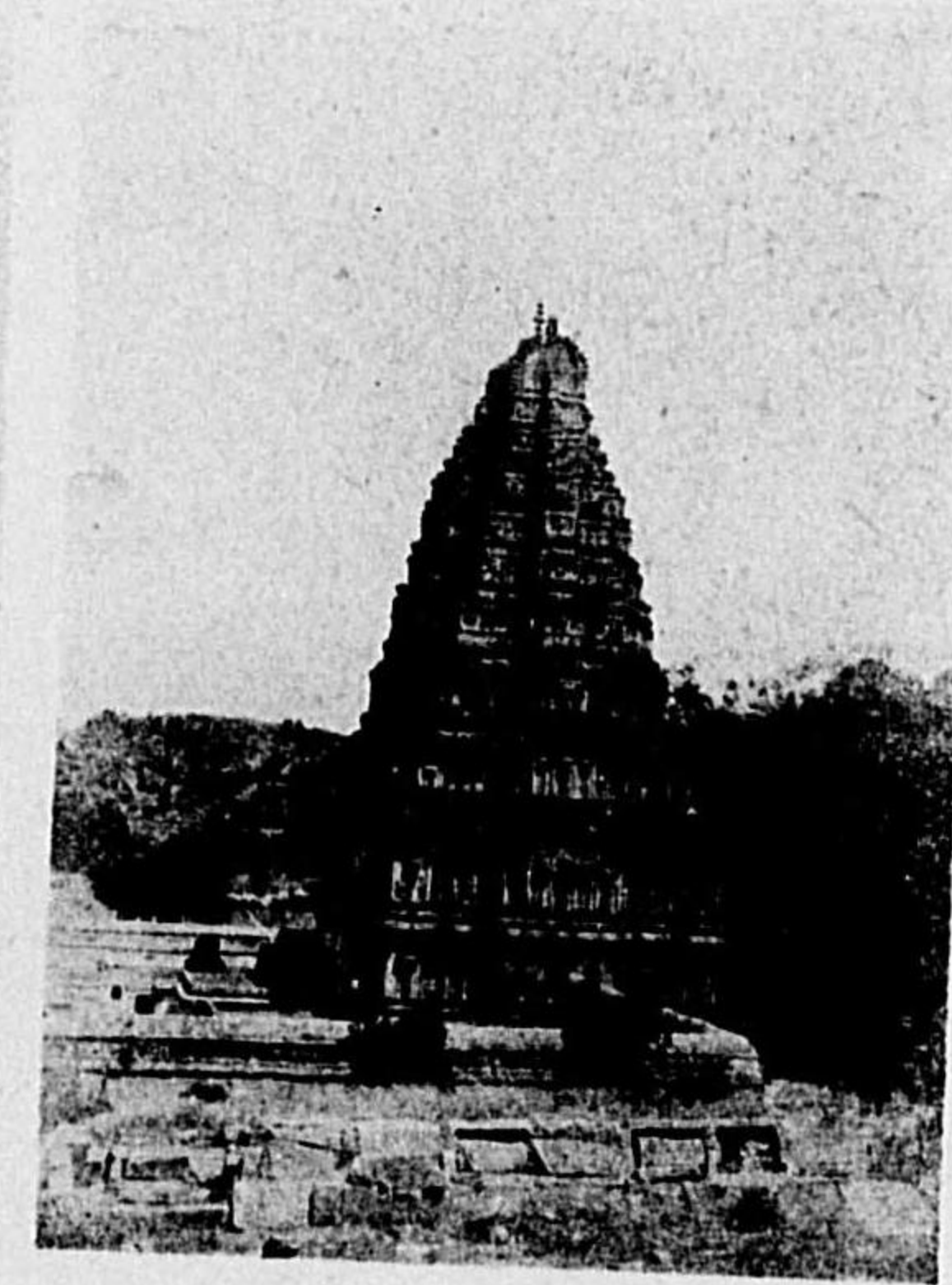
圖八五九第
柱のムラナカの堂祠のルーロエウ



圖七五九第
柱のムラナカの堂祠のルーロエウ

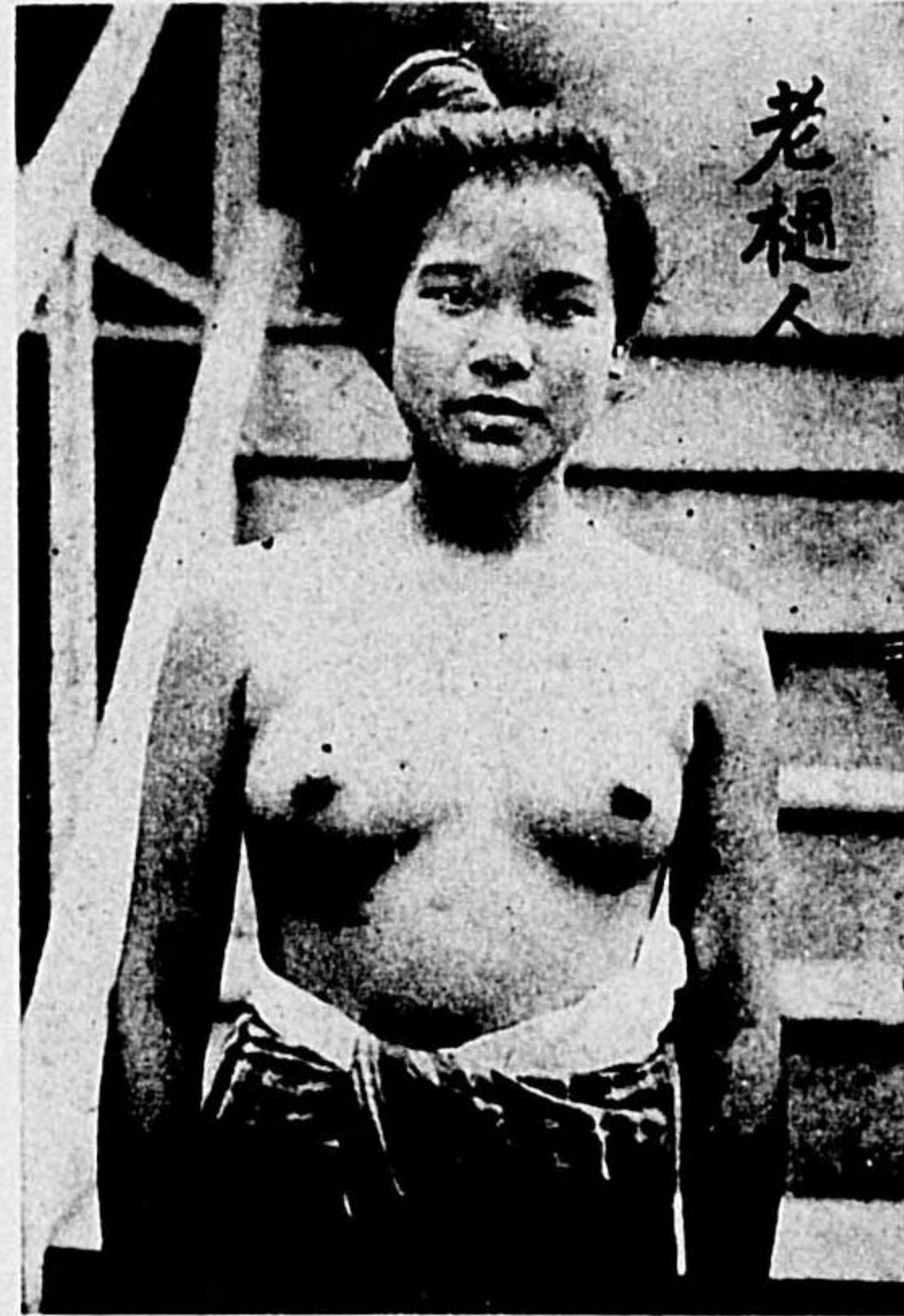


圖〇六九第
堂祠バートイヴのルガナヤジイヴ



圖九五九第
門の堂祠大のルガナヤジイヴ

(2) 圖附那支度印領佛



人樁老 圖七六九第



人南安 圖六六九第



人塞市東 圖九六九第



人那趾交 圖八六九第

(1) 圖附那支度印領佛

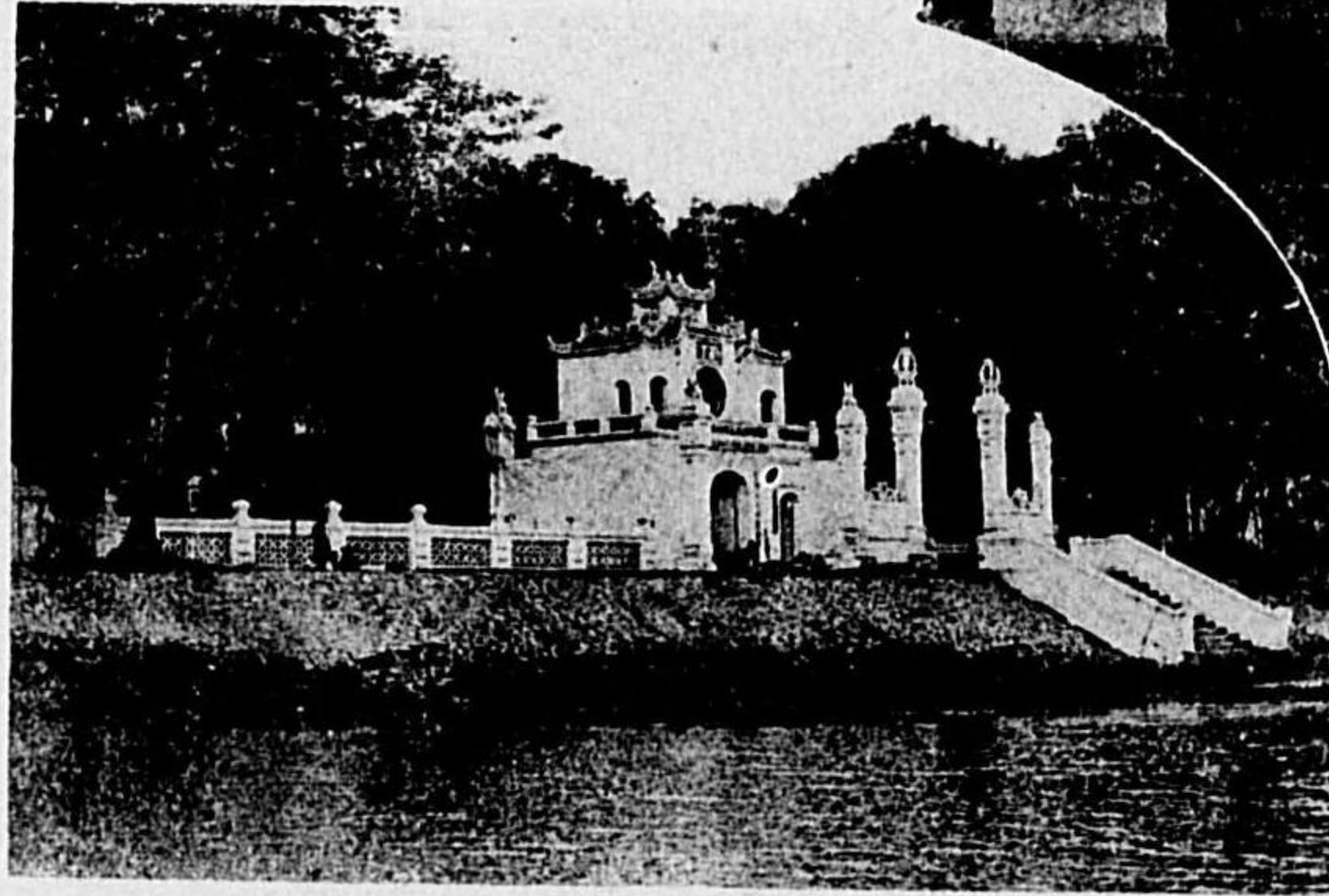


圖地那支度印領佛 圖五六九第

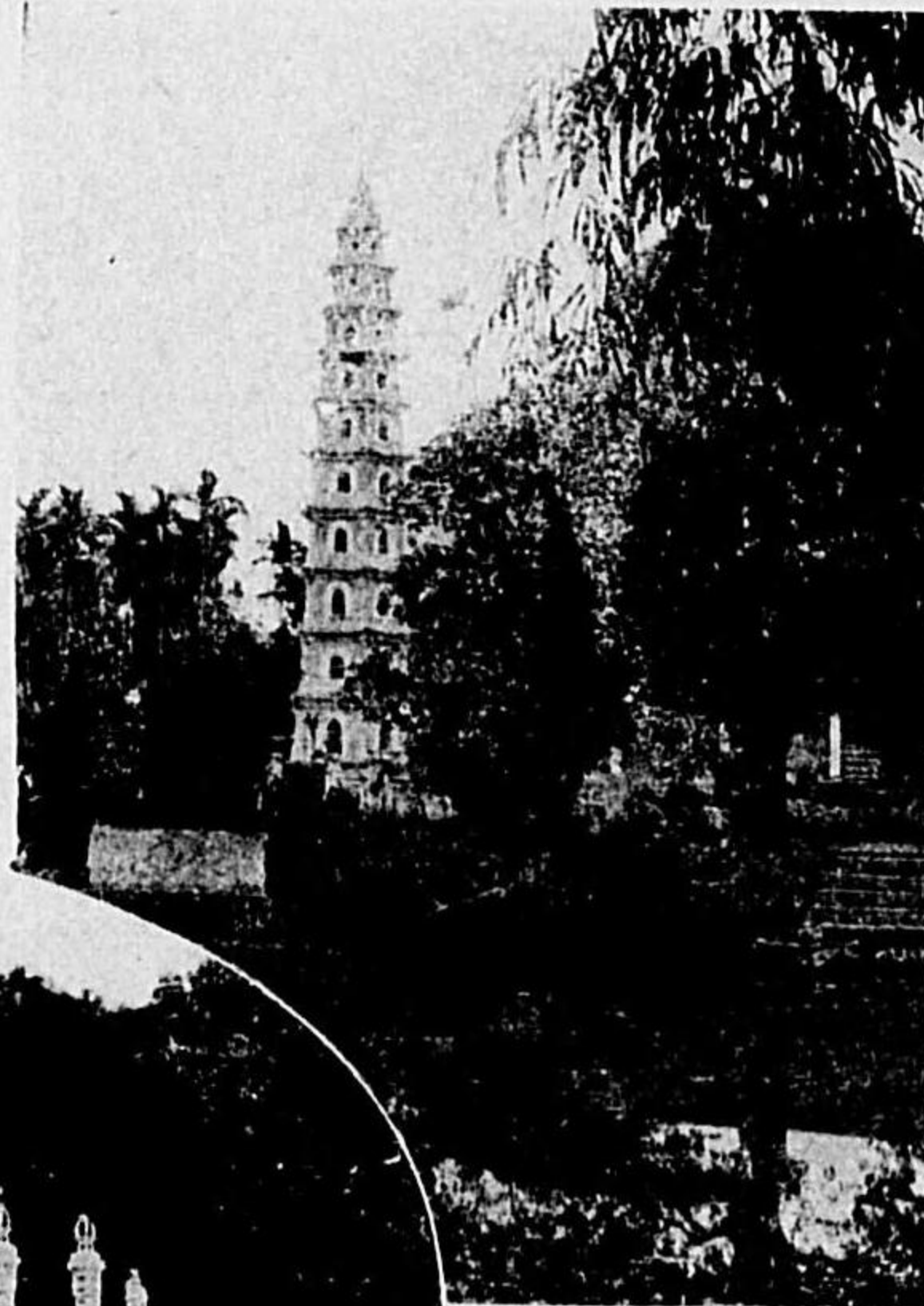
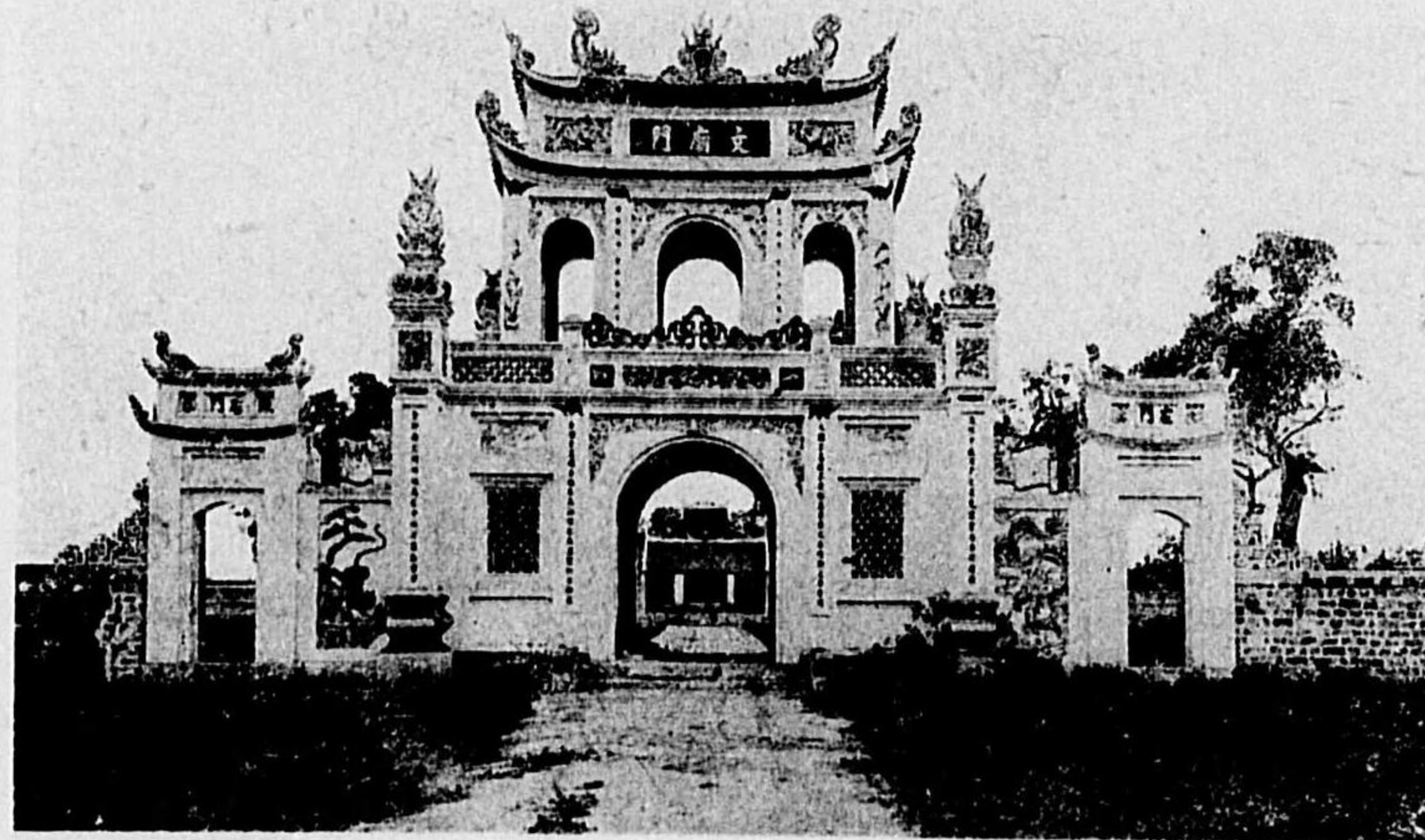
(4) 圖附那支度印領佛

圖二七九第一
寺法蓮の梅白

圖三七九第
觀道



圖四七九第
廟子孔



(3) 圖附那支度印領佛

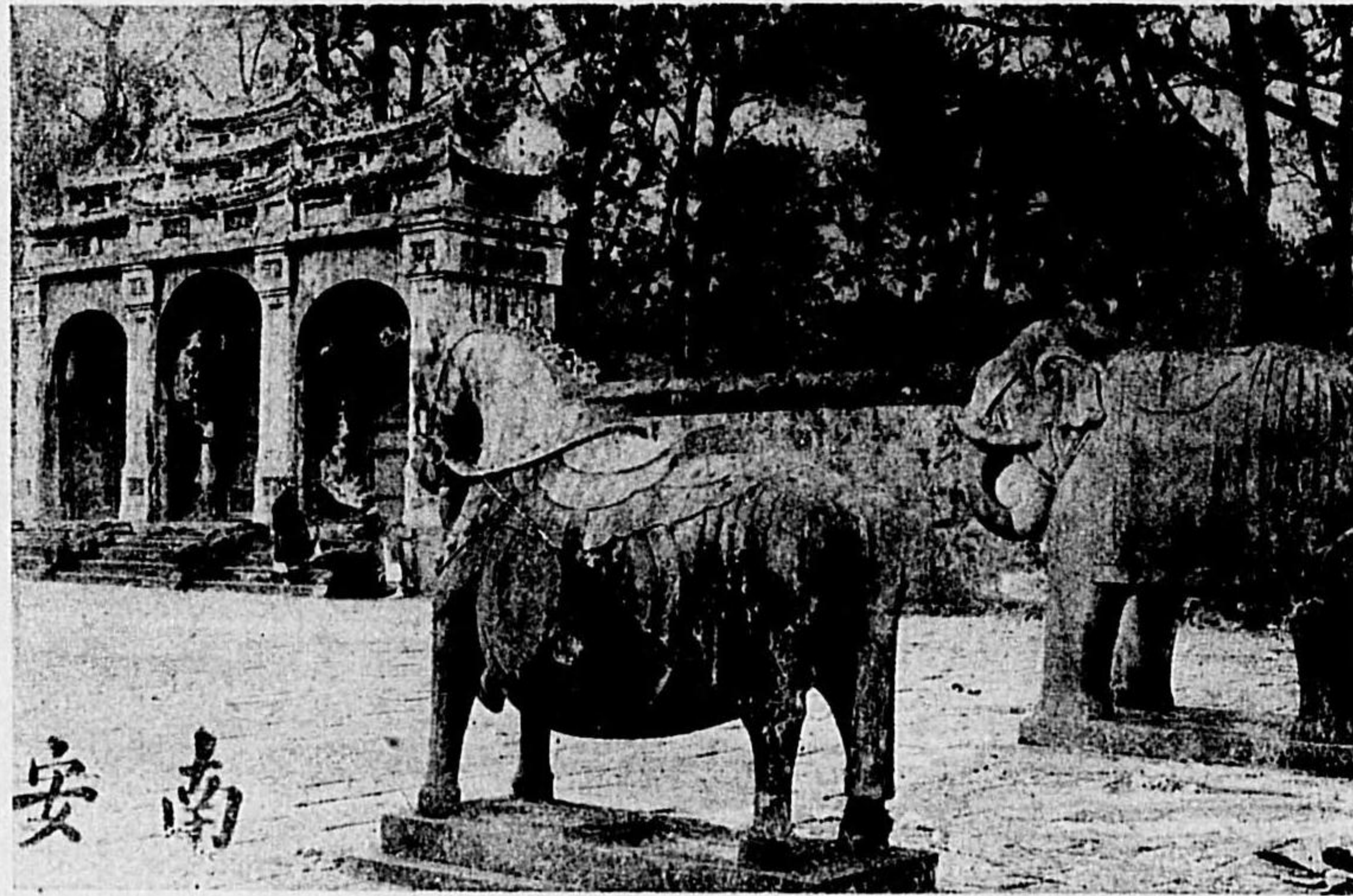


街西蘭佛內河圖〇七九第



亭柱一圖一七九第

(6) 圖附那支度印領佛



陵の帝命明南安 圖七七九第



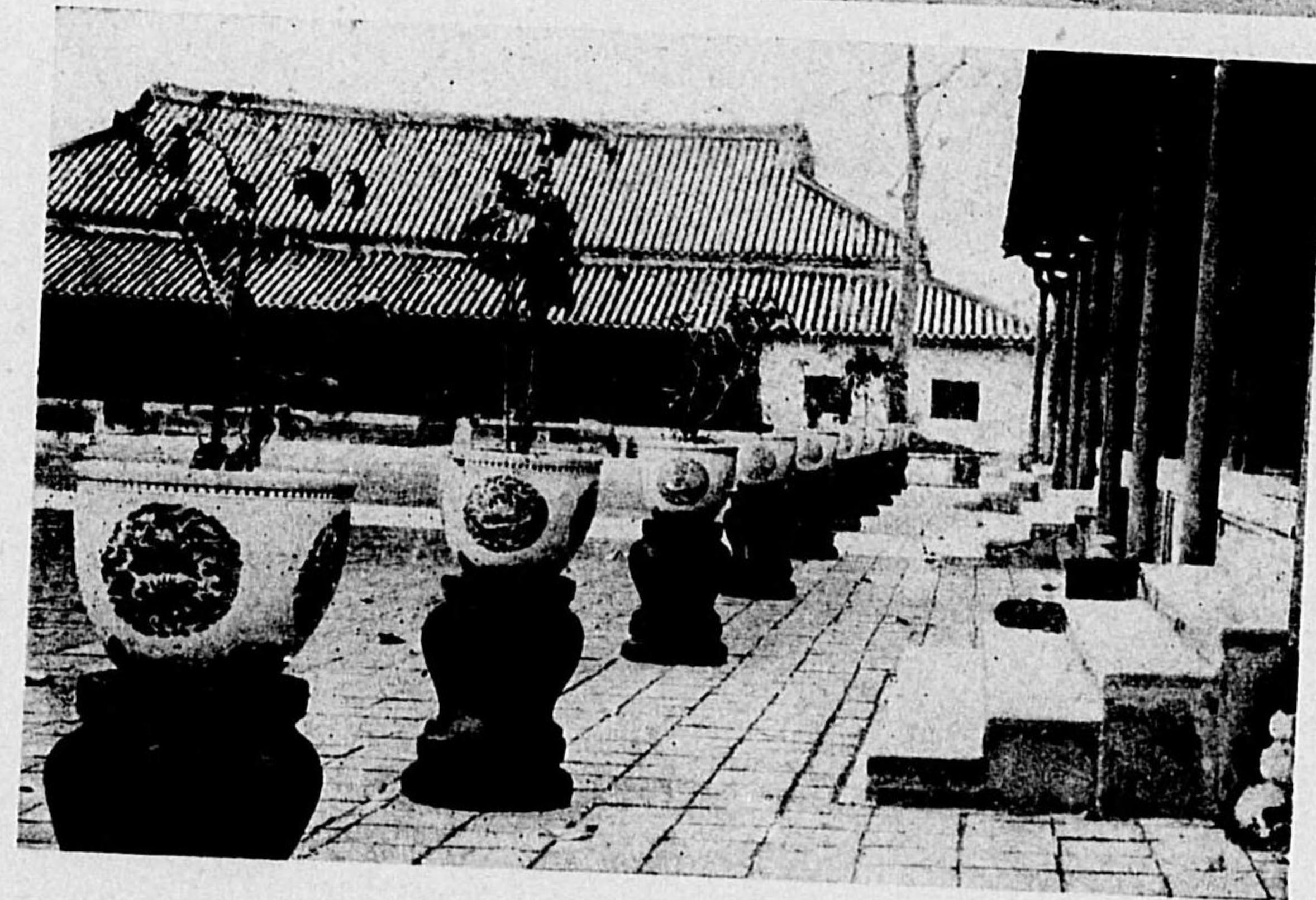
家農の方地南安 圖八七九第

(5) 圖附那支度印領佛

圖五七九第 →
優女の南安



圖六七九第 ↓
殿宮の帝皇南大



(8) 佛領印度支那附圖

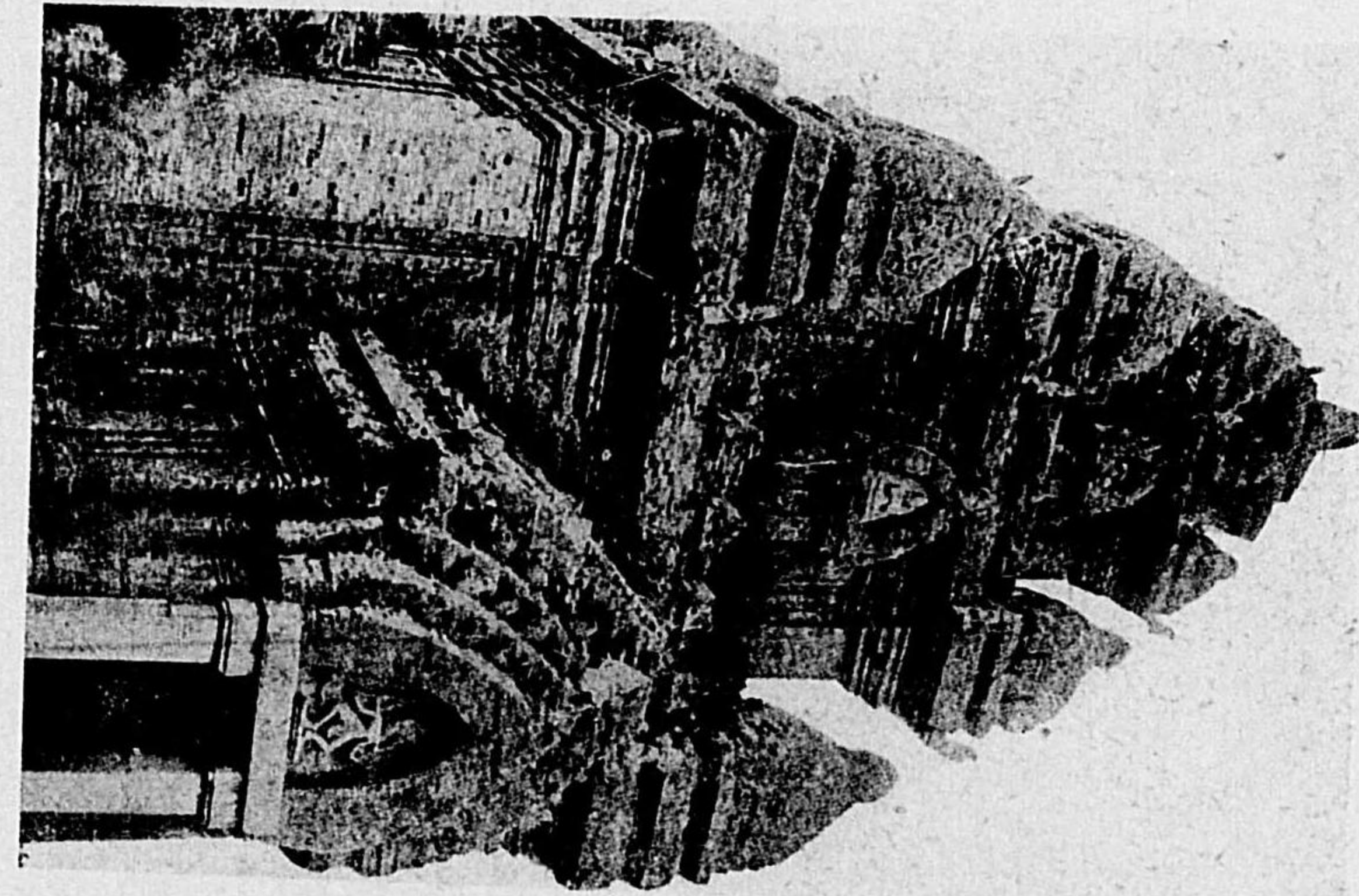


↑ 第一廊 ツワ・ルコンア 圖一八九第
第二廊 在に形出廊

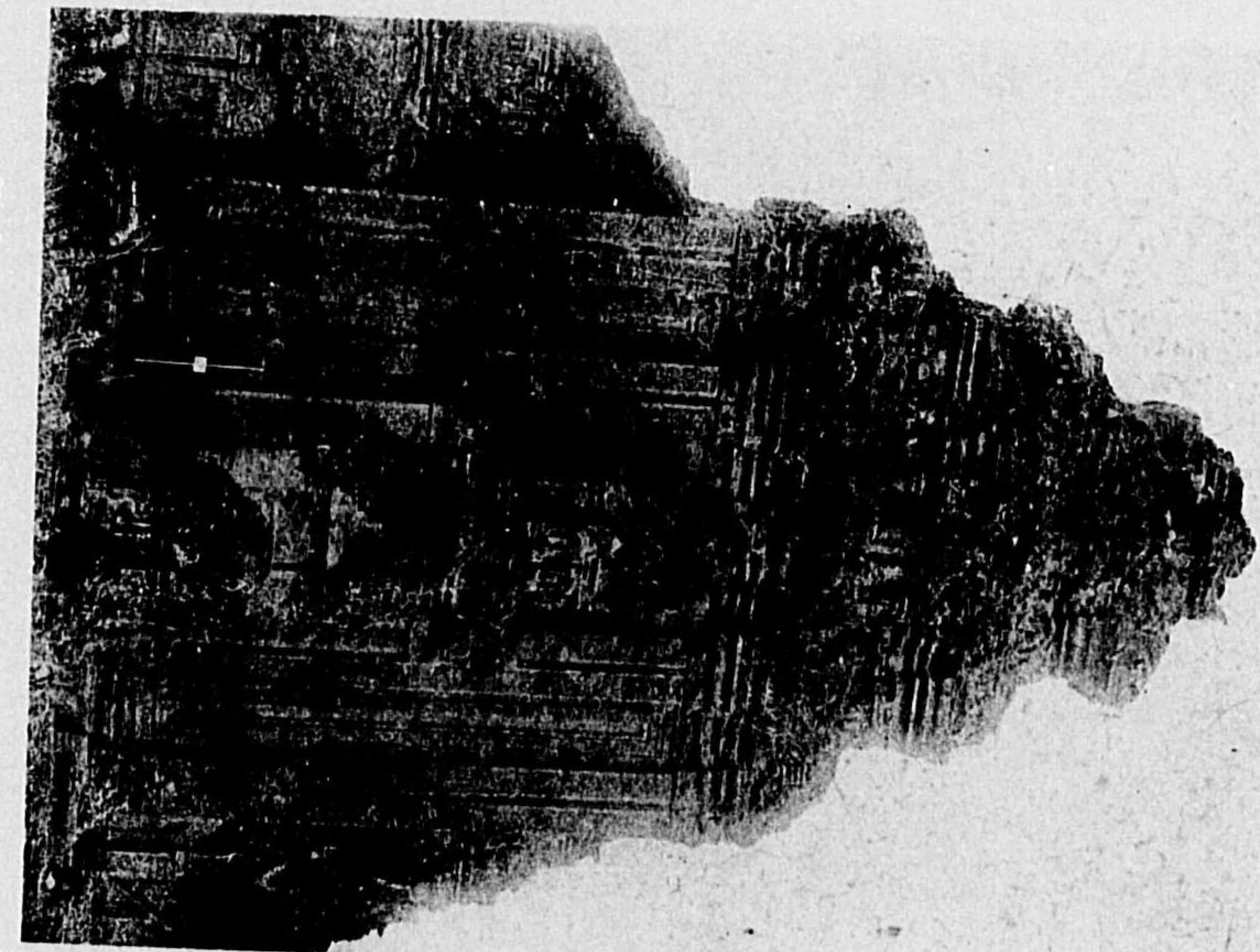


↑ 東市樂の舞妓 圖二八九第
← 於にルコンア 圖三八九第
片斷彫石のマーラフ

(7) 佛領印度支那附圖

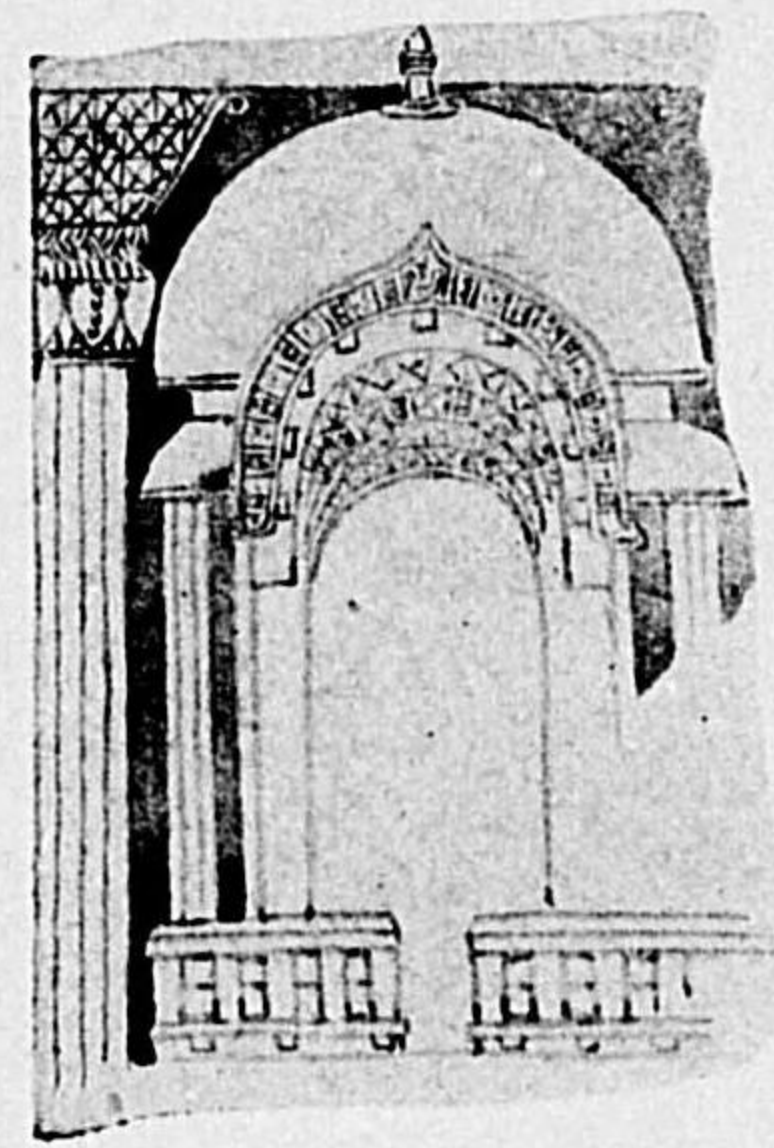


址遺の國城占 圖九七九第



址古のソソミ國城占 圖〇八九第

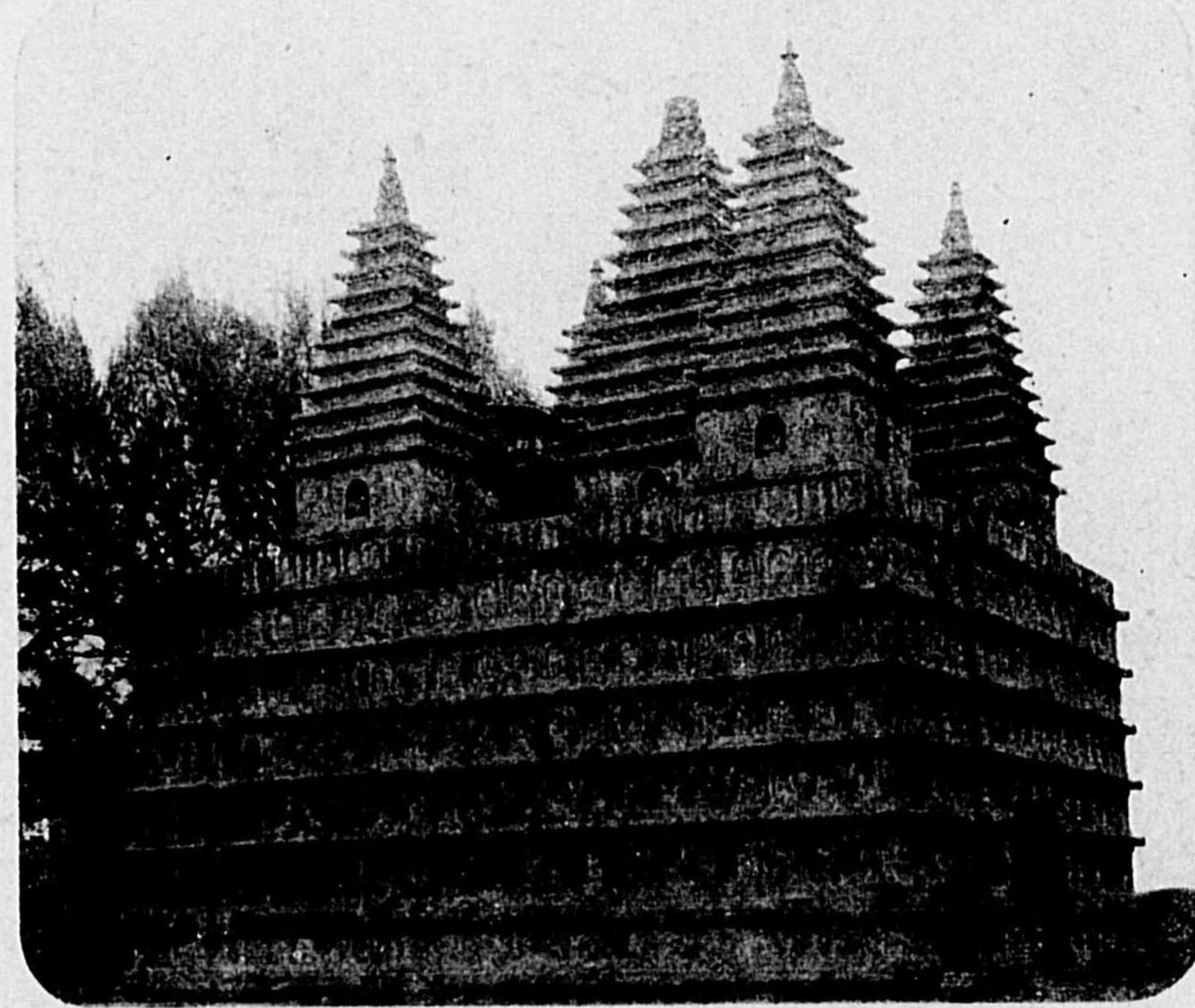
(2) 圖附涉交のと築建教回と築建皮印



↑
圖七八九第
刻彫の垣玉のトーフル-パ

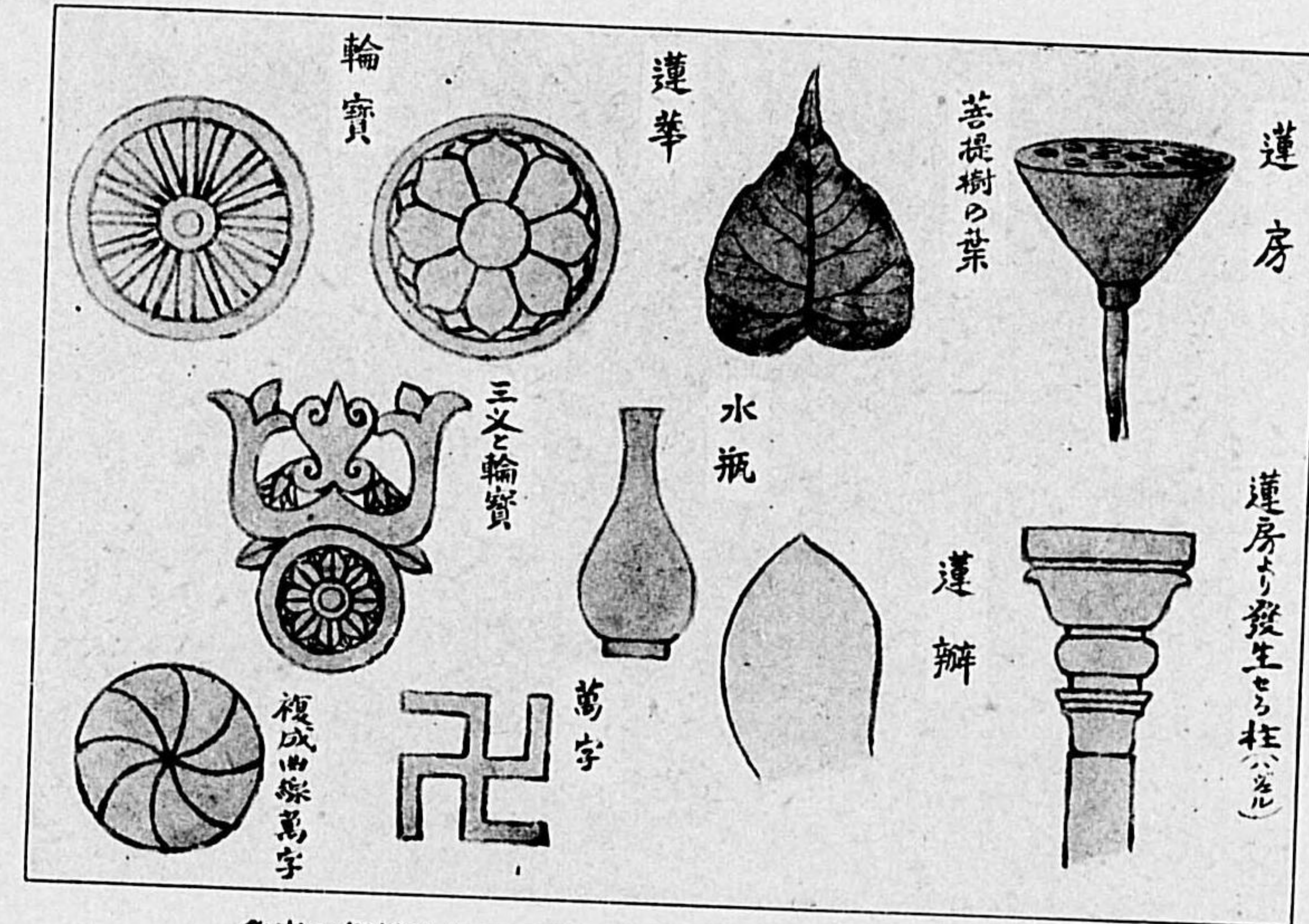


↑
圖六八九第
のトーフル-パ
刻彫の垣玉

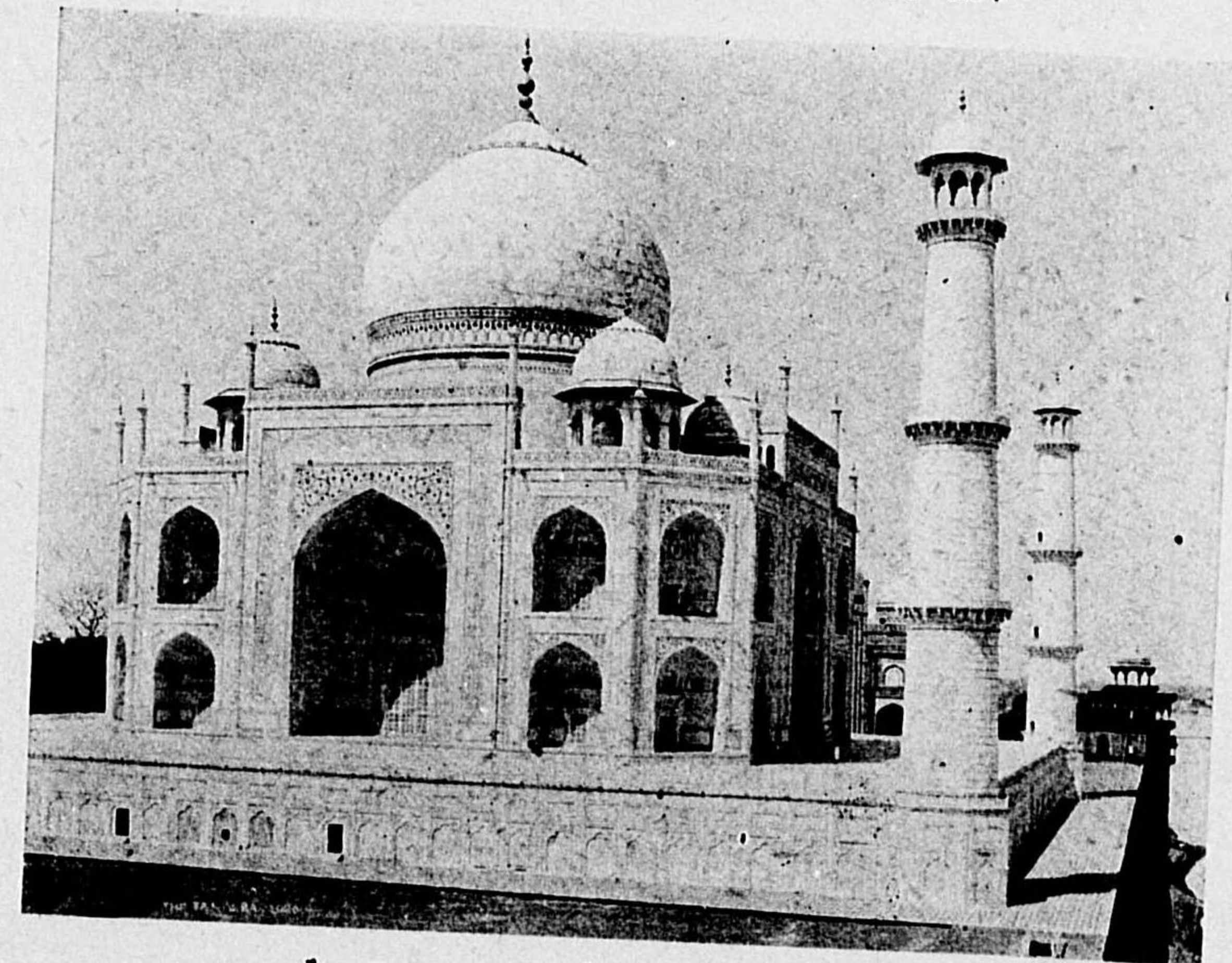


寺塔五那支 圖八八九第

(1) 圖附涉交のと築建教回と築建皮印

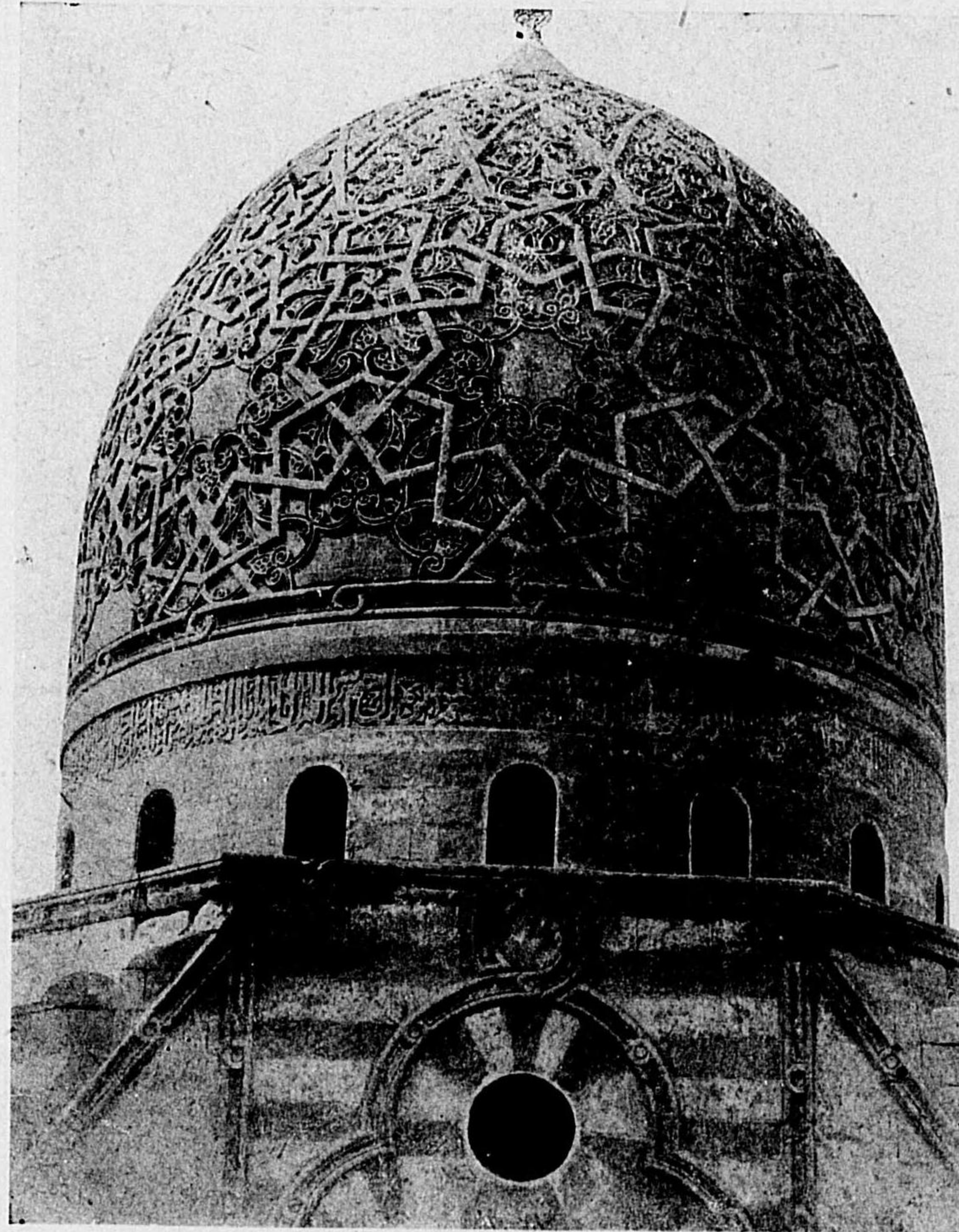


象表の仰請るたれは現に部細築建皮印 圖四八九第



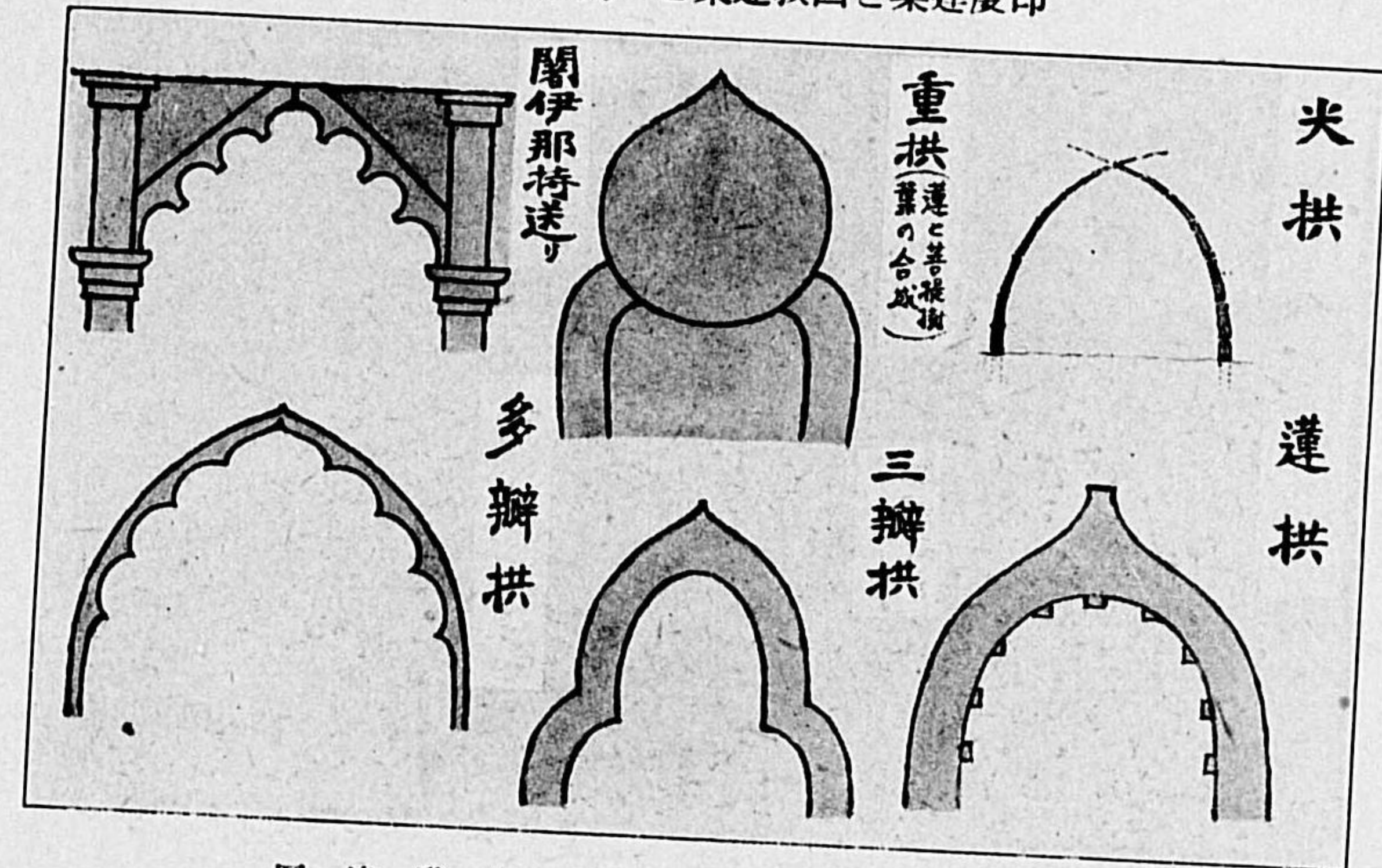
ル-ハマ-ジ-タ 圖五八九第

(4) 圖附涉交のと築建教回と築建度印

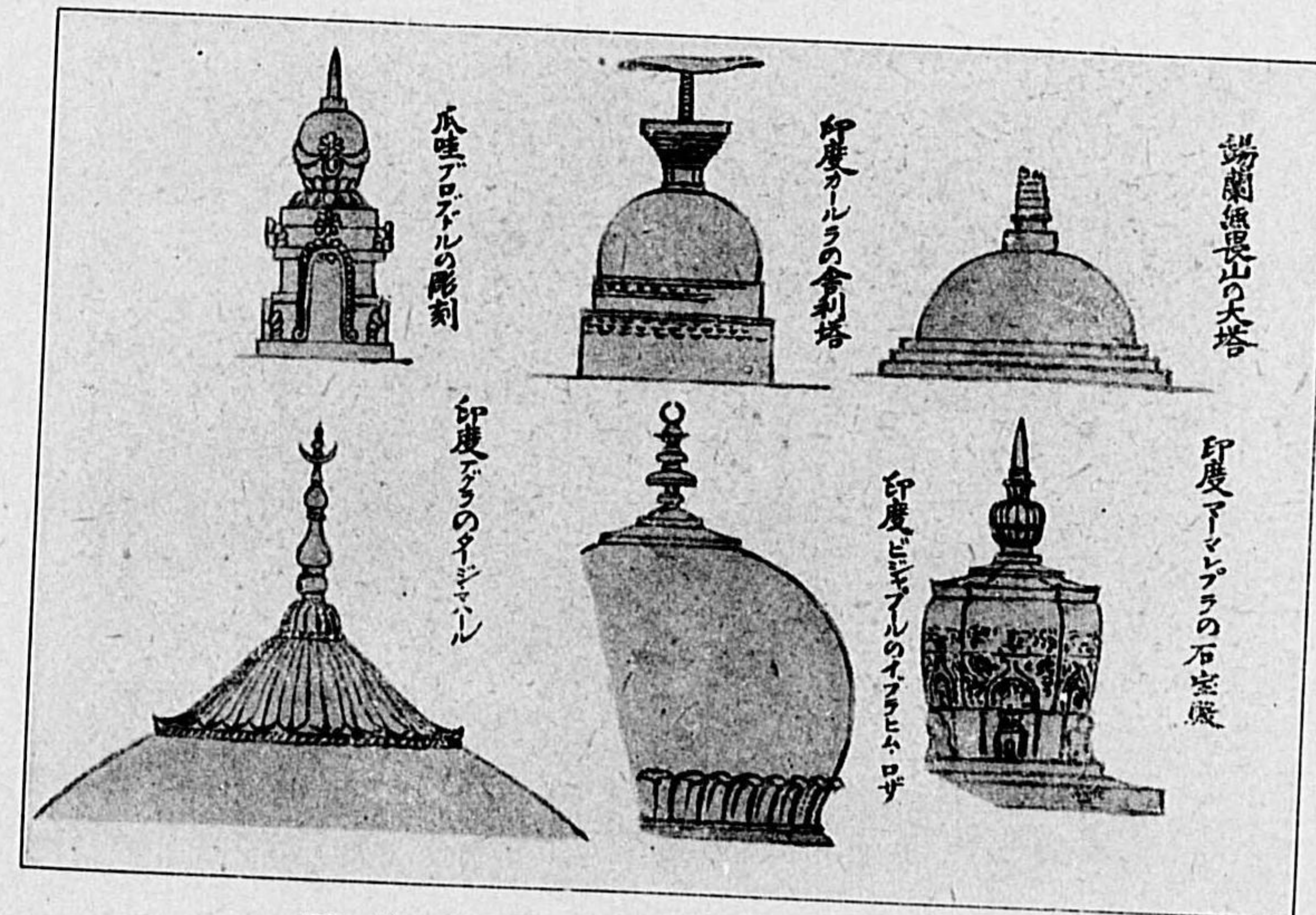


(紀世五十)(一ペ・トイカロイカ及埃 様文何幾の蓋球及埃 圖一八九第

(3) 圖附涉交のと築建教回と築建度印

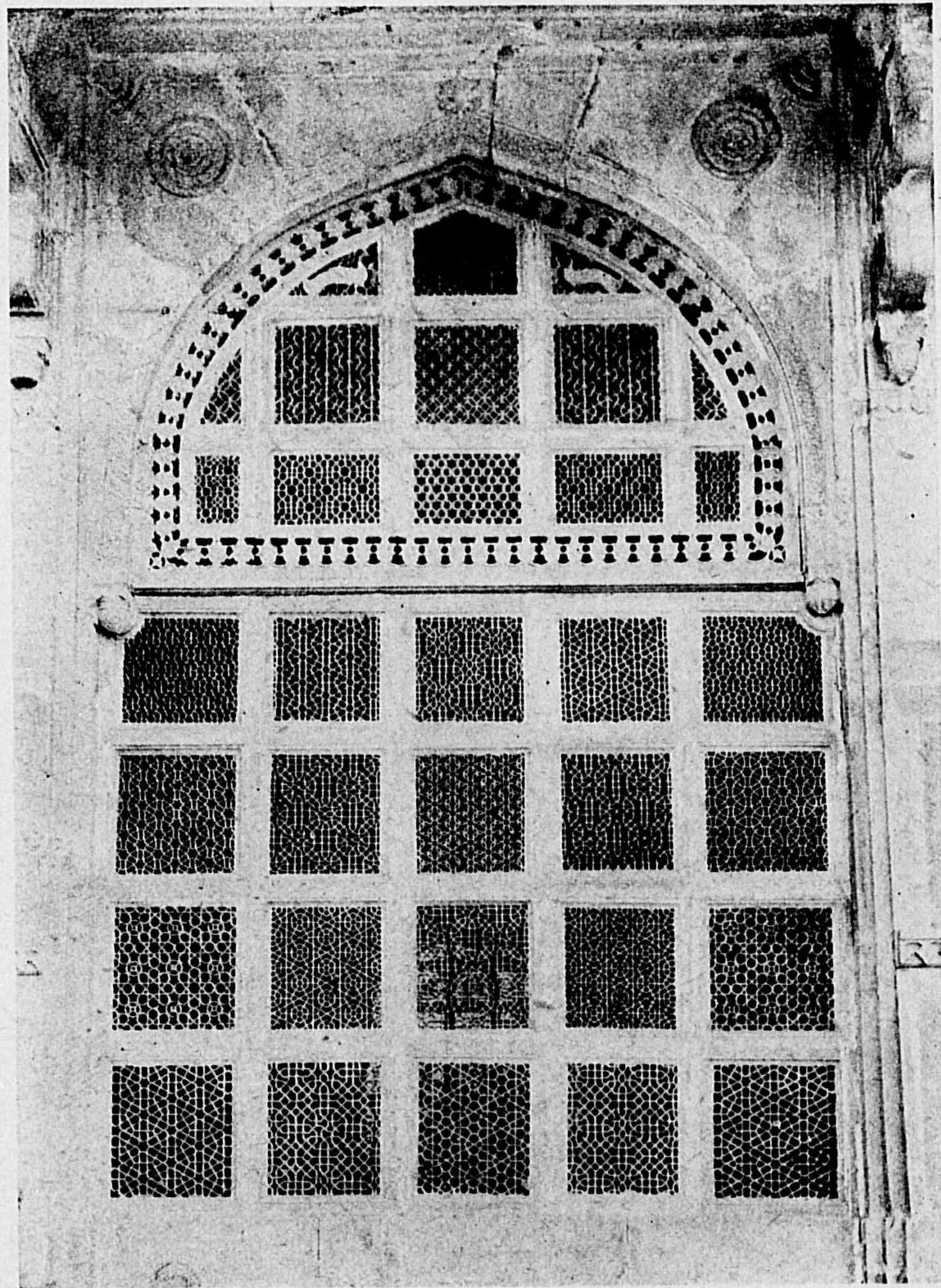


圖達發法手の拱度・印 圖九八九第



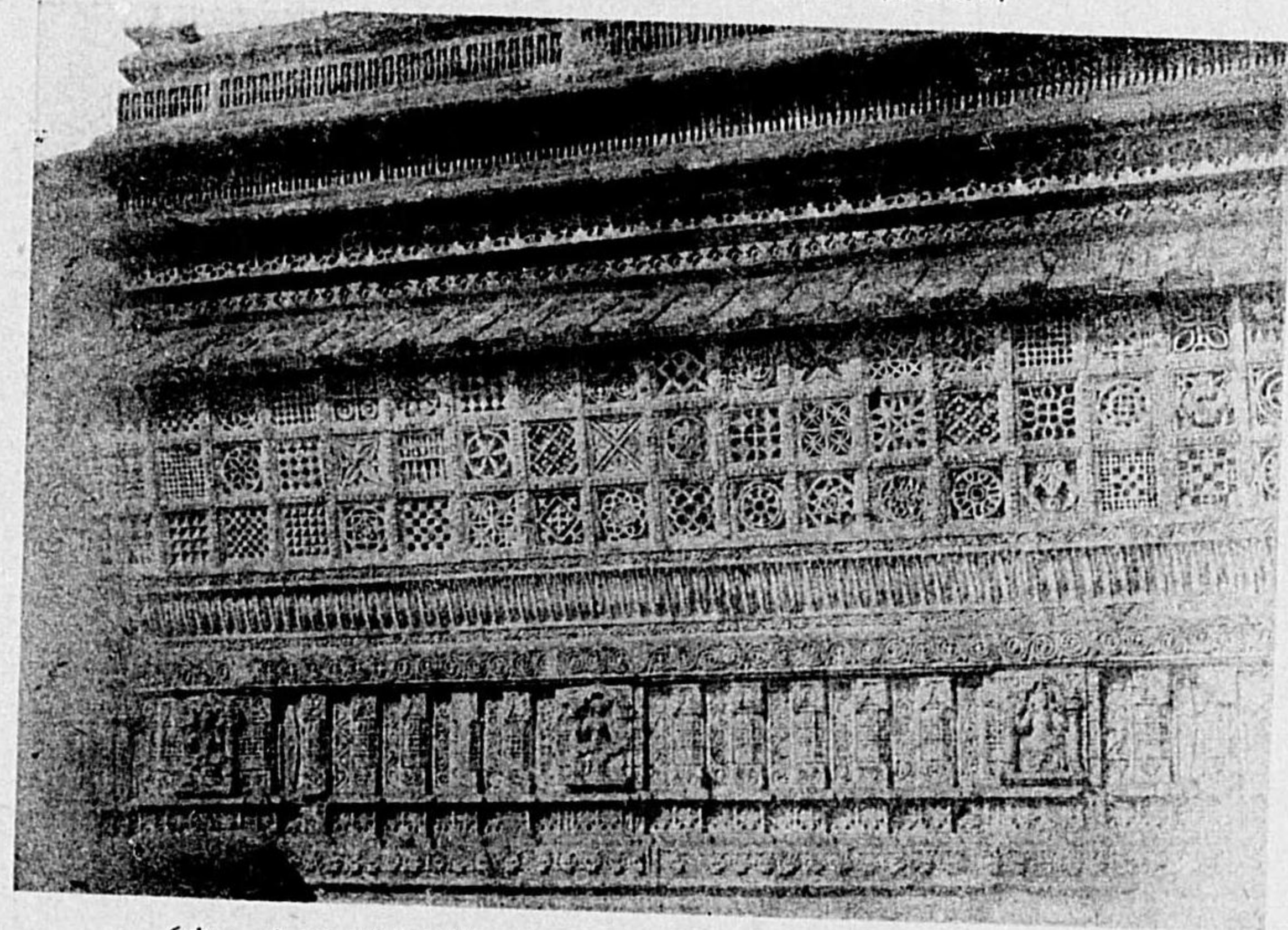
圖達發蓋球度印 圖〇九九第

(6) 圖附涉交のと築建教回と築建度印

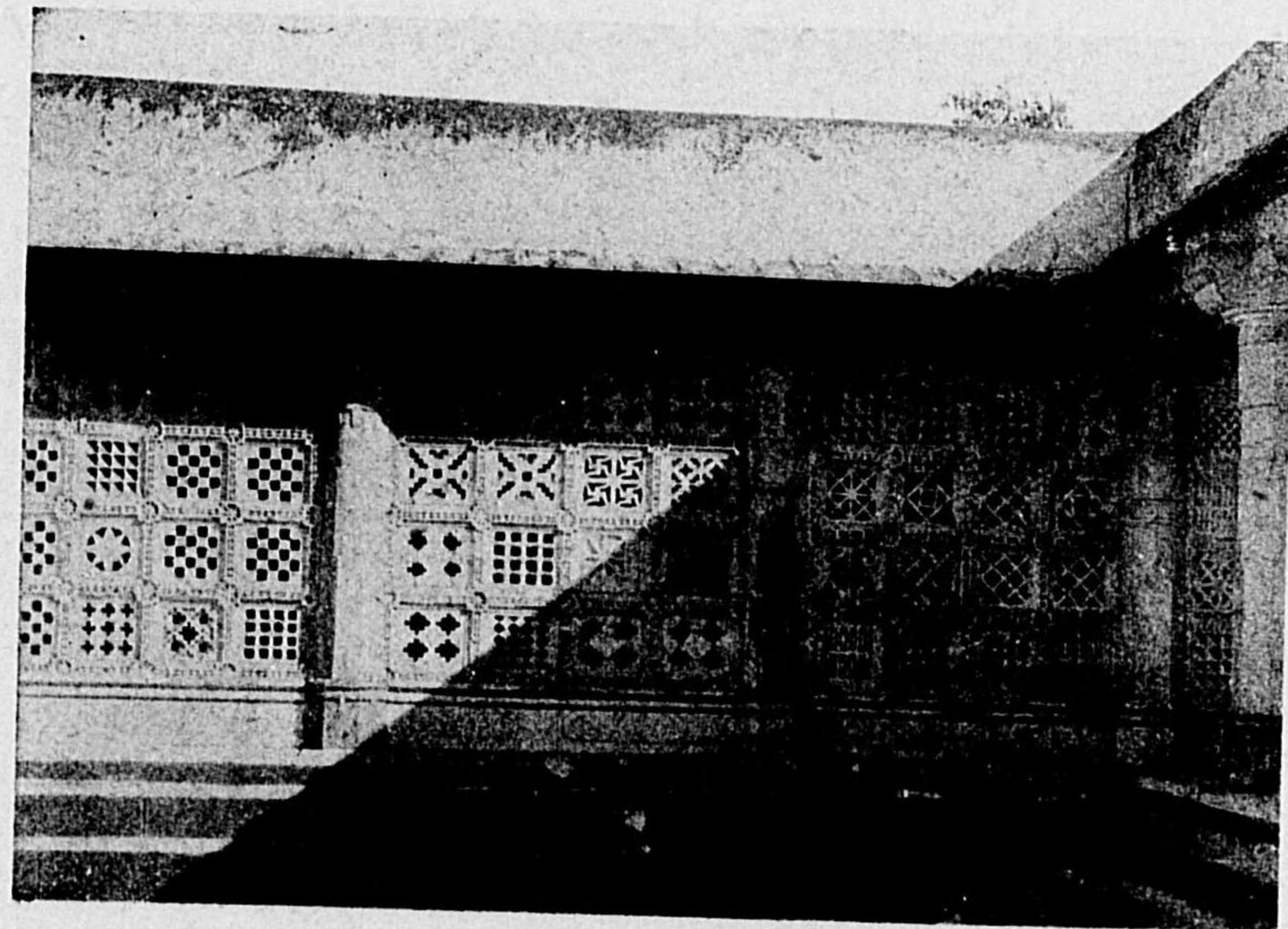


(墓のスウガドツメハム) 様文何幾るたれは現に朝兒臥莫 圖四九九第

(5) 圖附涉交のと築建教回と築建度印

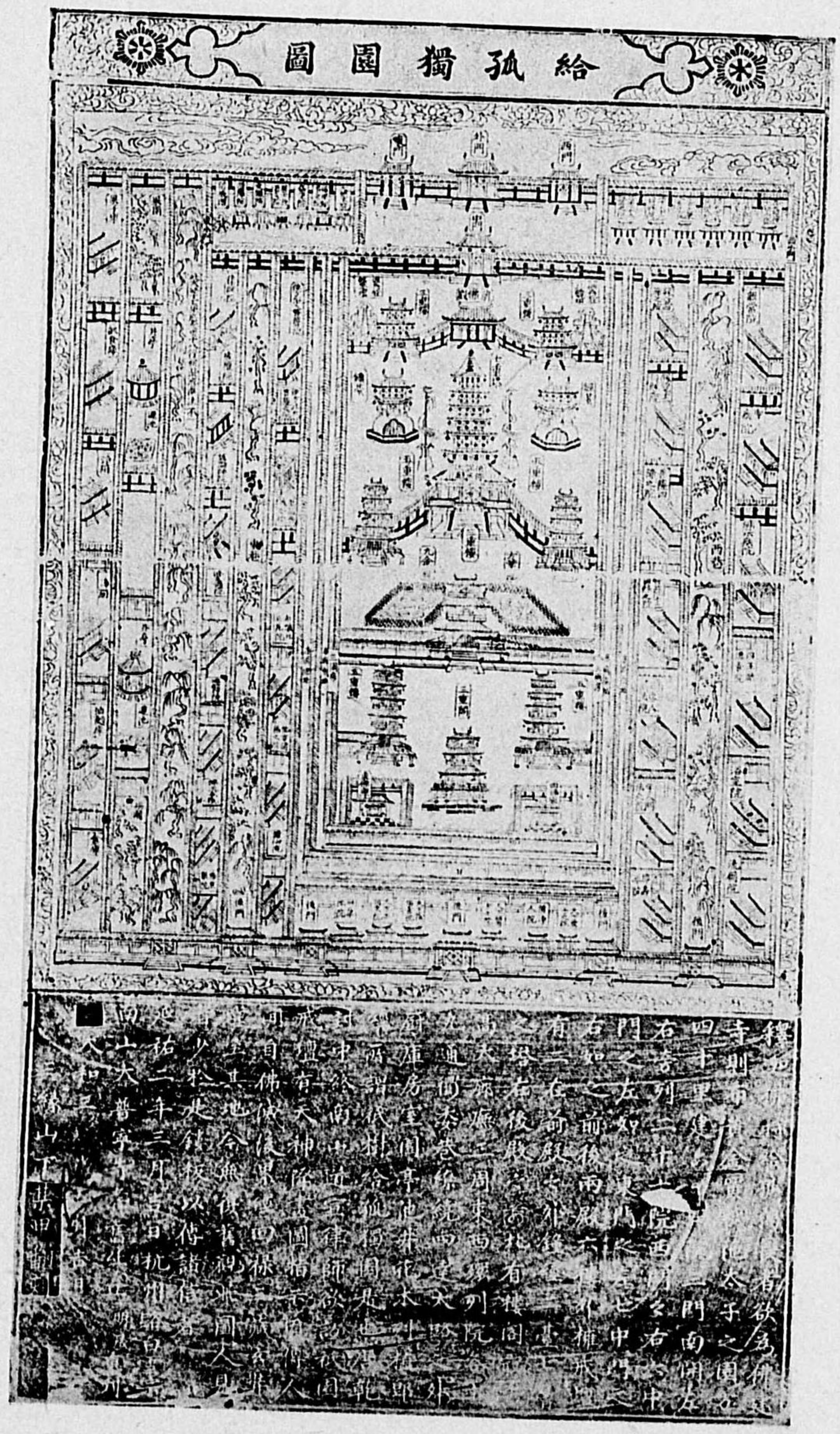


(山ーブア) 様文何幾るたれは現に築建教那伊閣 圖二九九第



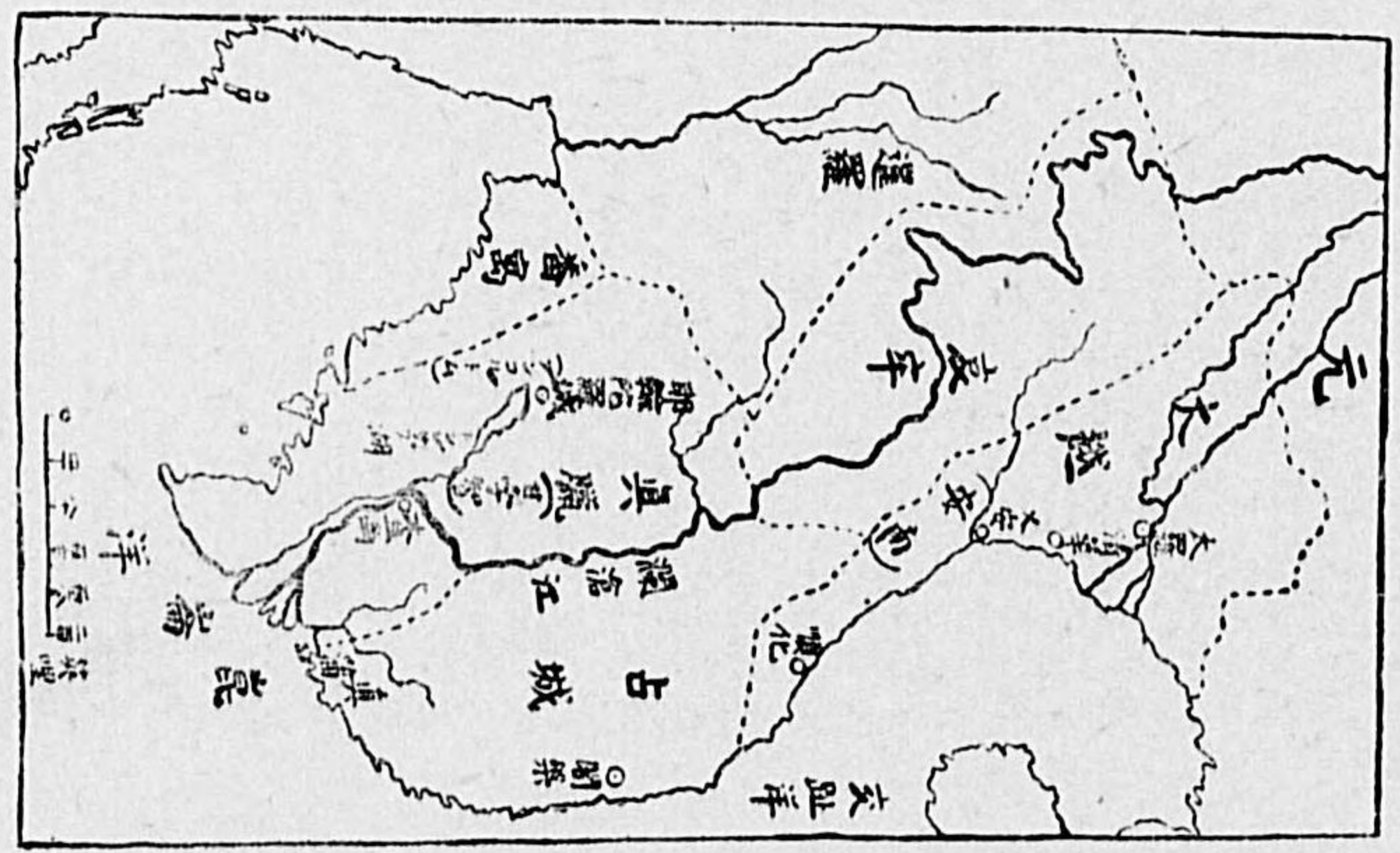
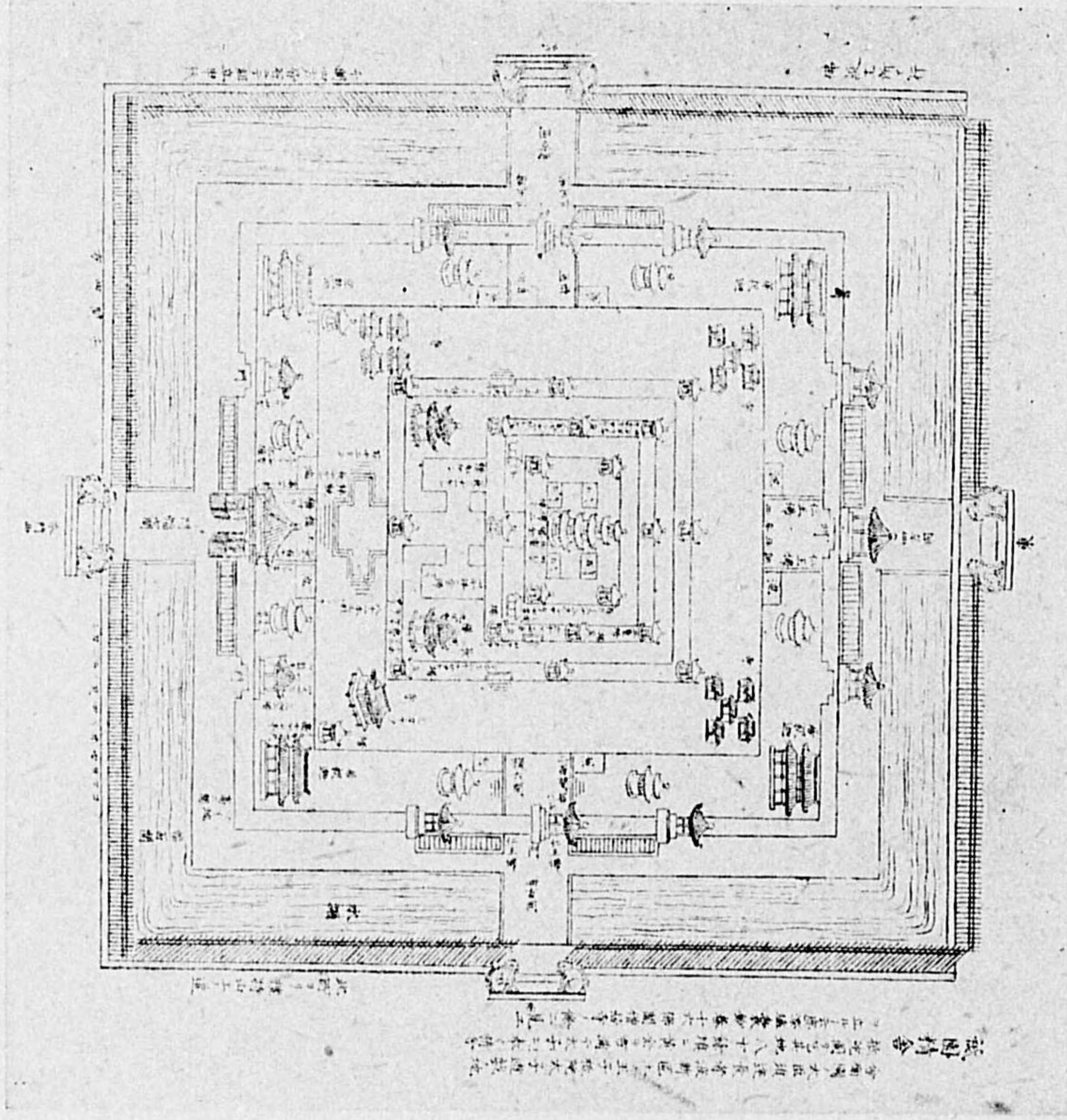
上 同 圖三九九第

(2) 圖附トツワ・ルコンアと圖合精園祇



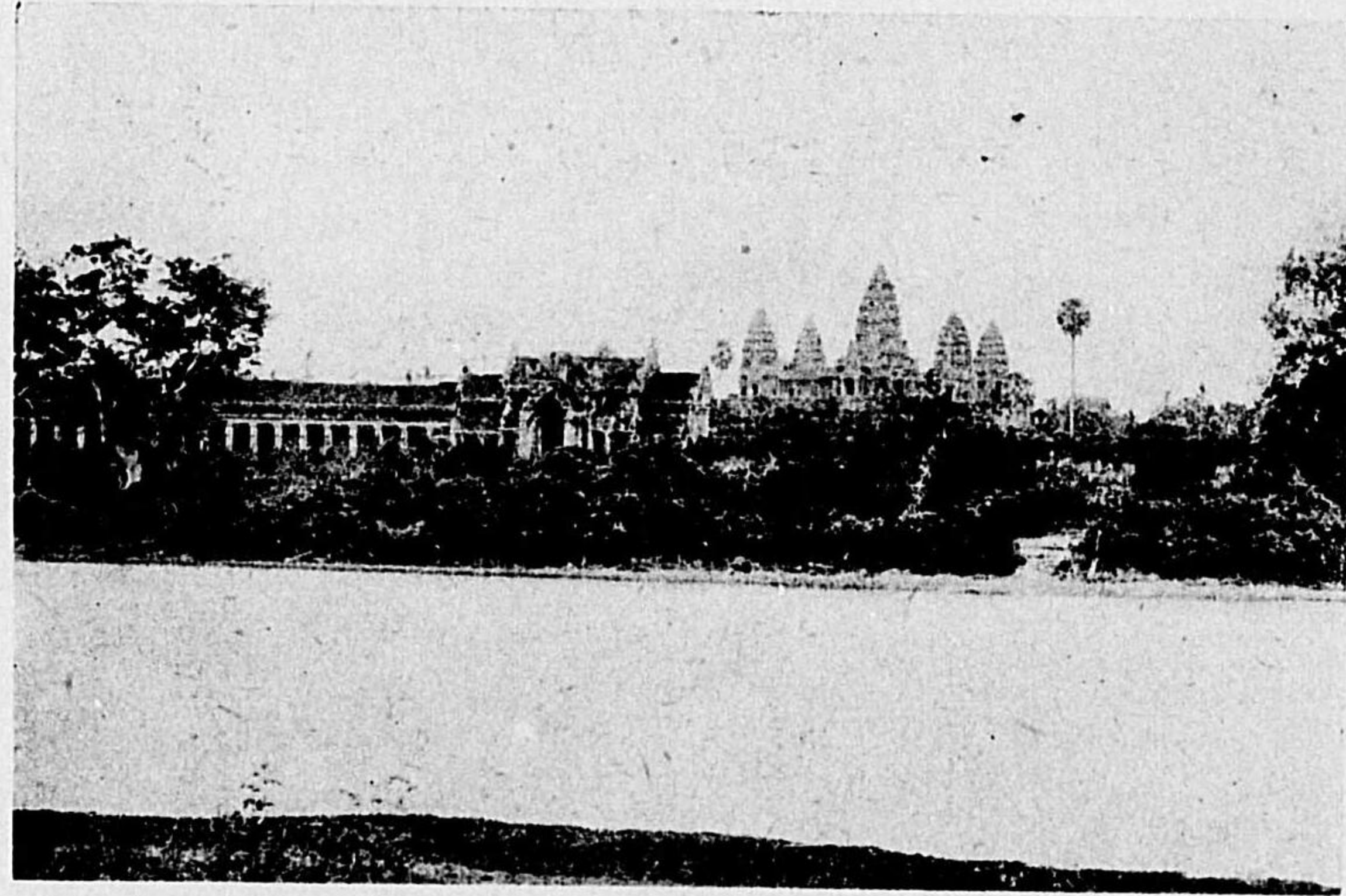
第九八圖 給孤獨園圖

(3) 圖附トツワ・ルコンアと圖合精園祇

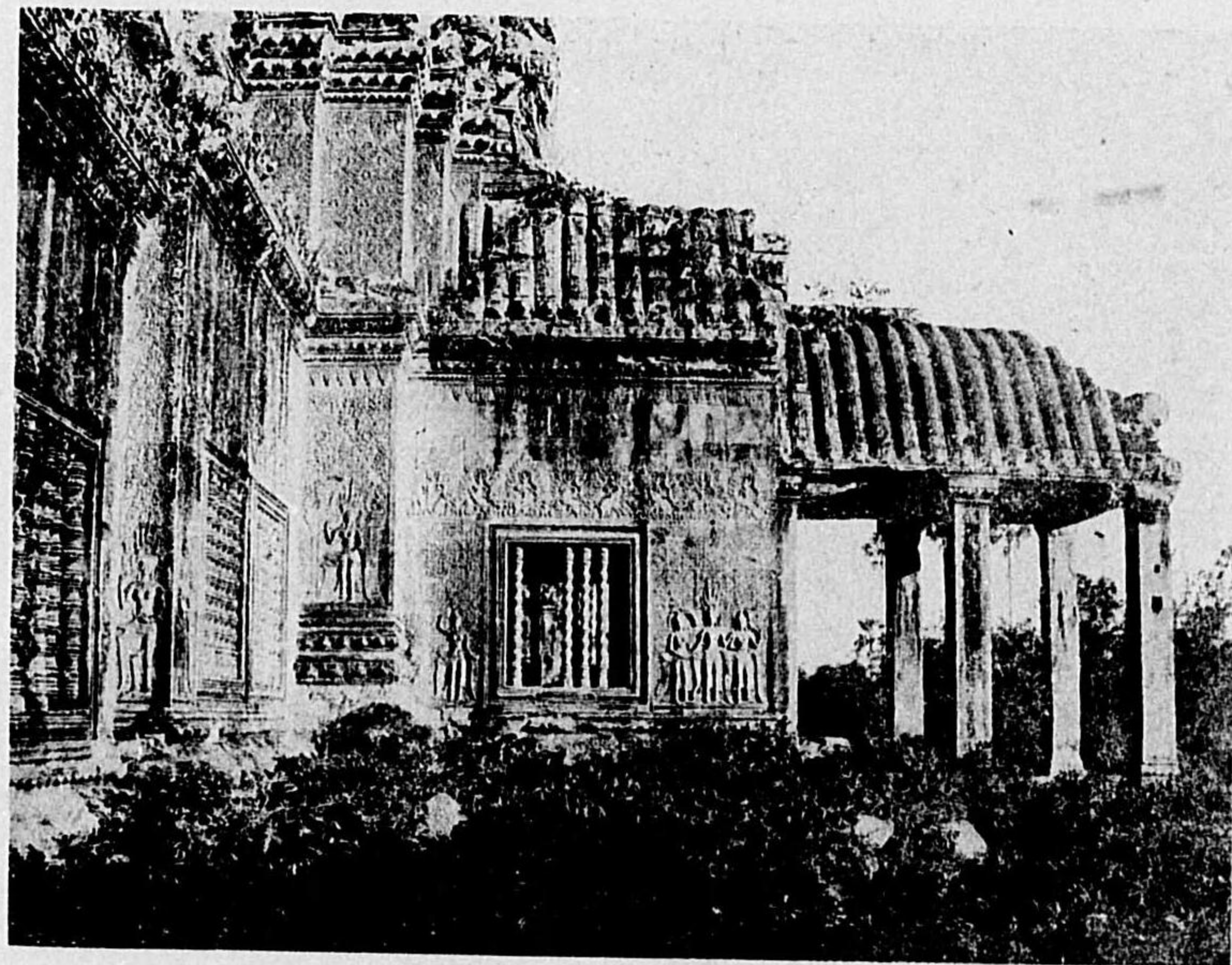


圖の代時元末 圖○○○—第 1
 ← 圖取見會梯園祇の了兼野島 圖九九九第

(6) 圖附トツワ・ルコンアと圖舎精園祇

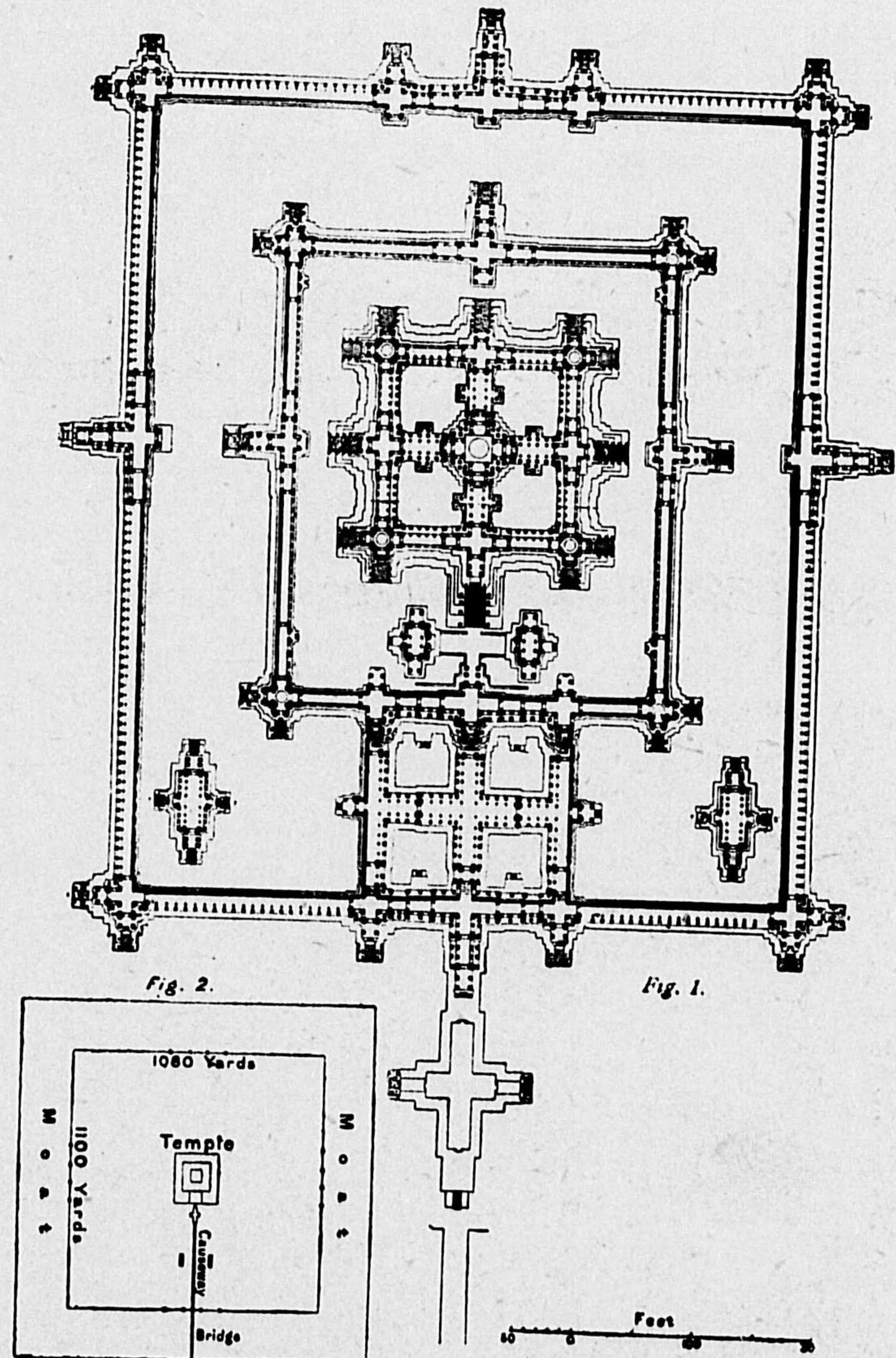


景前のトツワ・ルコンア 圖四〇〇一第



門大西トツワ・ルコンア 圖五〇〇一第

(4) 圖附トツワ・ルコンアと圖舎精園祇



Plan of the temple of Angkor Vât. Scale 176½ ft. to 1 in.

(る依にンソガーアフ) 圖面平トツワ・ルコンア 圖三〇〇一第

(8) 圖附トツワ・ルコンアと圖舎精園祇



彫浮の廊一第トツワ・ルコンア 圖八〇〇一第

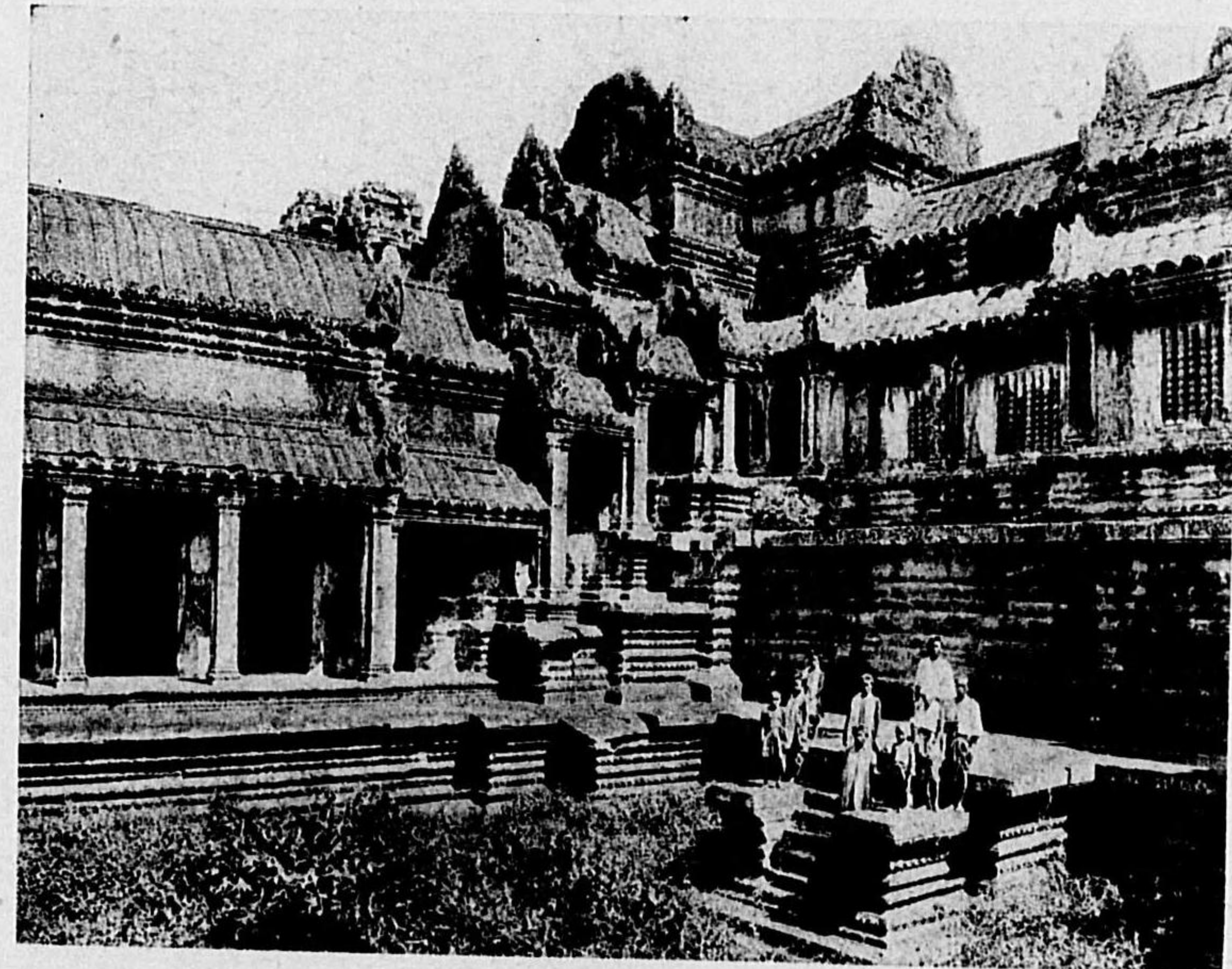


彫浮の廊一第トツワ・ルコンア 圖九〇〇一第

(7) 圖附トツワ・ルコンアと圖舎精園祇



面北の廊一第トツワ・ルコンア 圖六〇〇一第

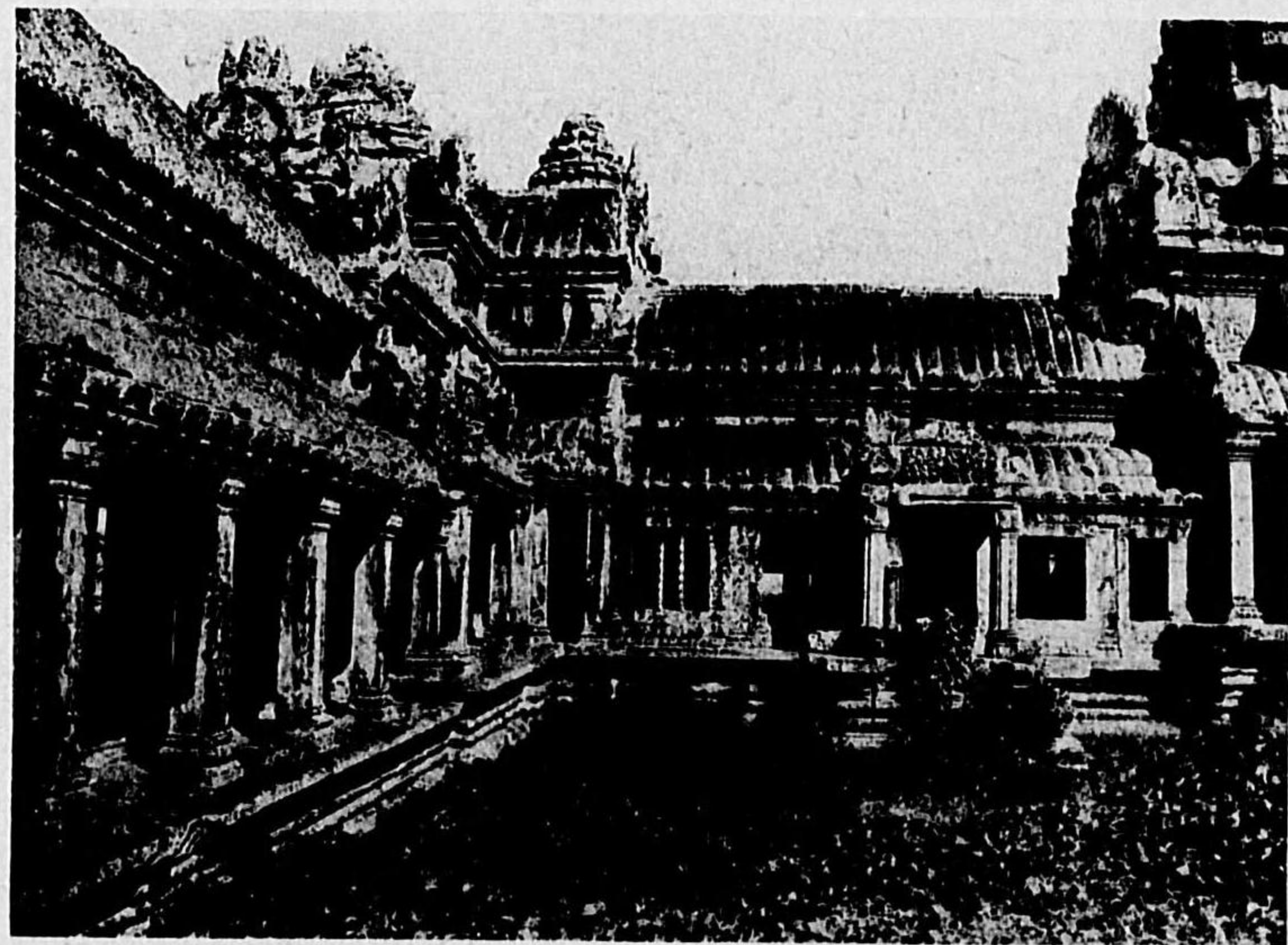


廊前其と部前の廊二第トツワ・ルコンア 圖七〇〇一第

(10) 圖附トツワ・ルコンアと圖舎精園祇

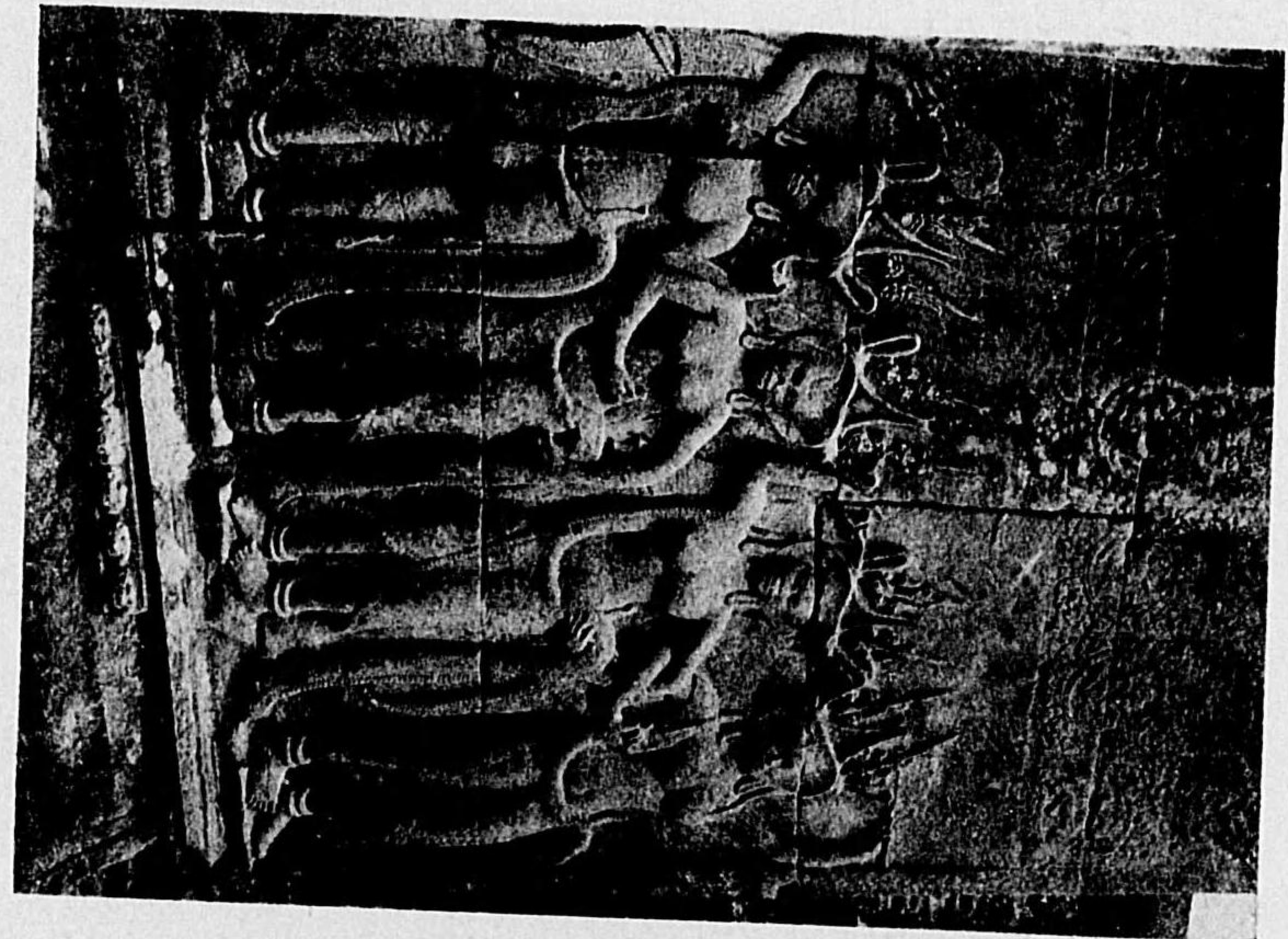


角隅の廊二第トツワ・ルコンア 圖二一〇一第

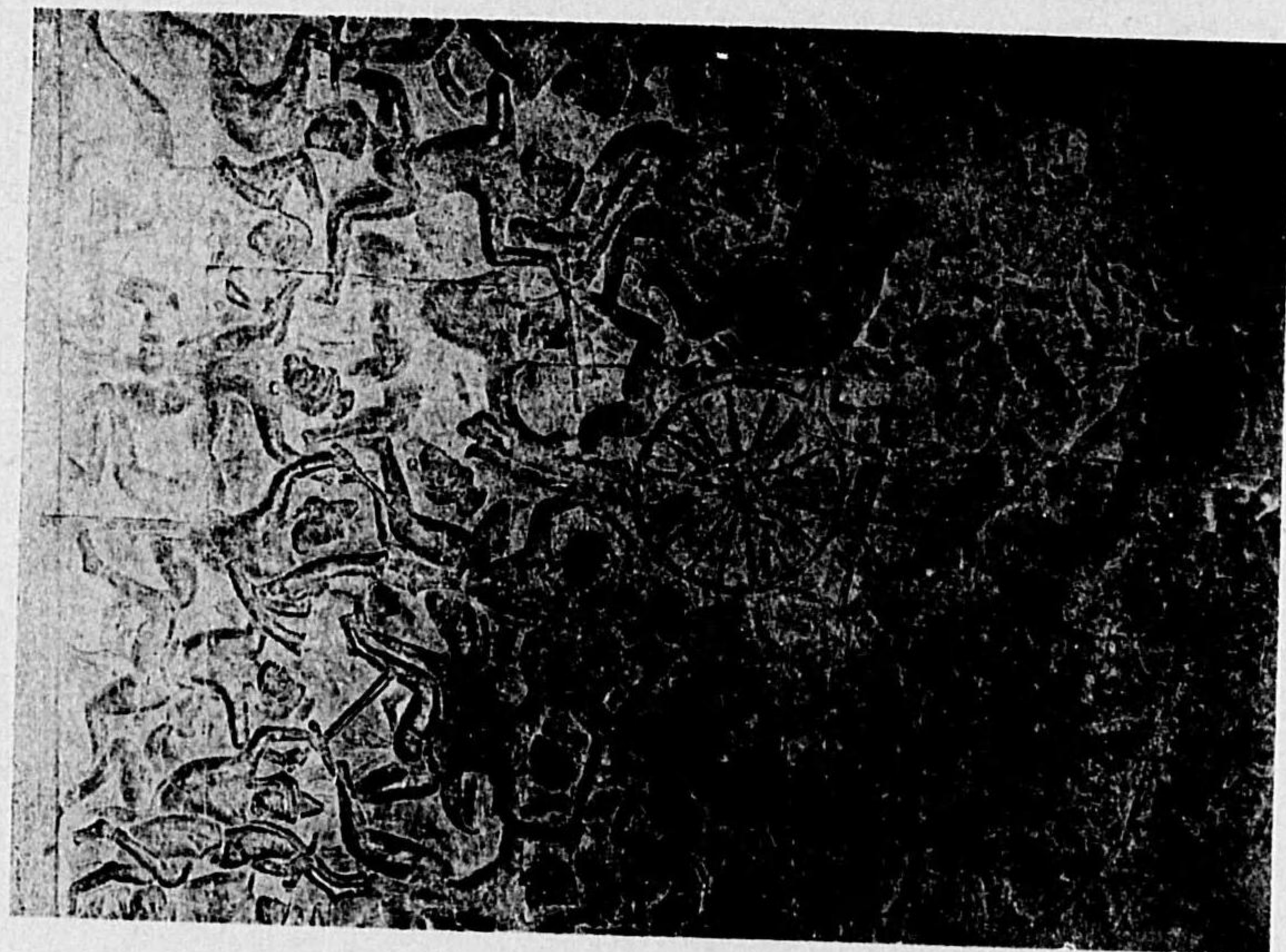


院内の廊三第トツワ・ルコンア 圖三一〇一第

(9) 圖附トツワ・ルコンアと圖舎精園祇

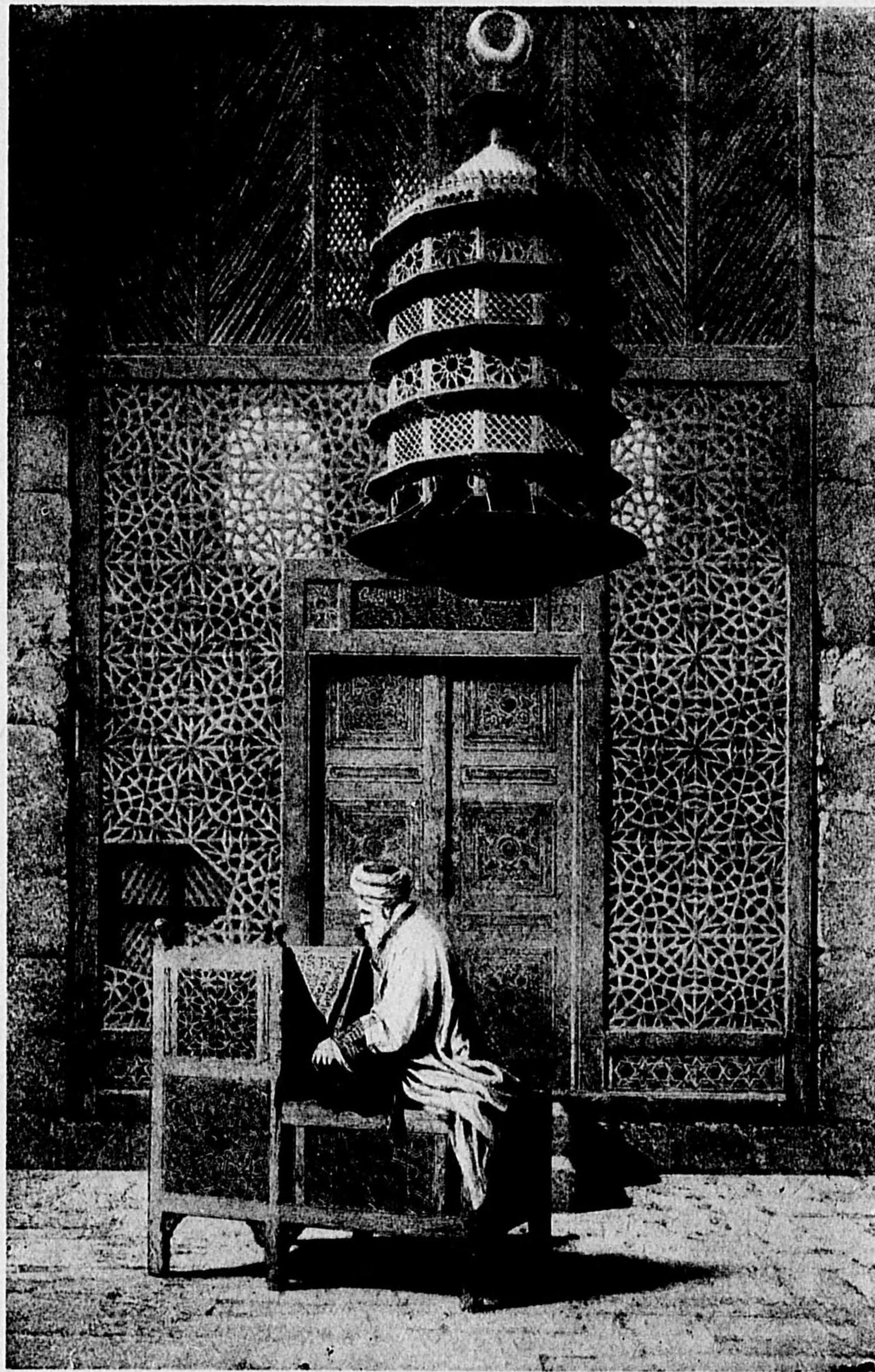


(戦) 彫浮の廊一第トツワ・ルコンア 圖〇一〇一第



格内の廊前廊二第トツワ・ルコンア 圖一〇一第

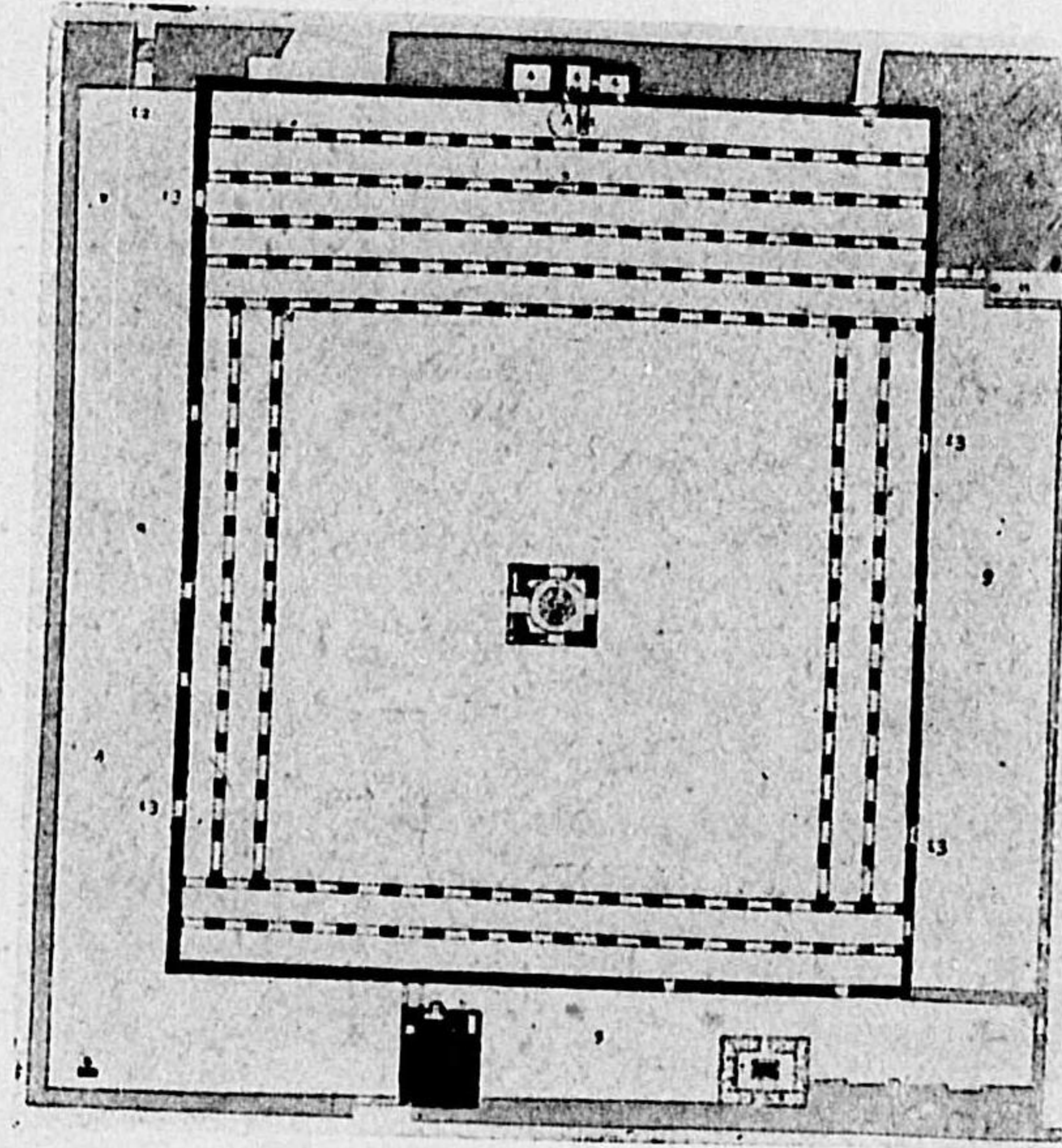
(2) 圖 附 築 建 教 回



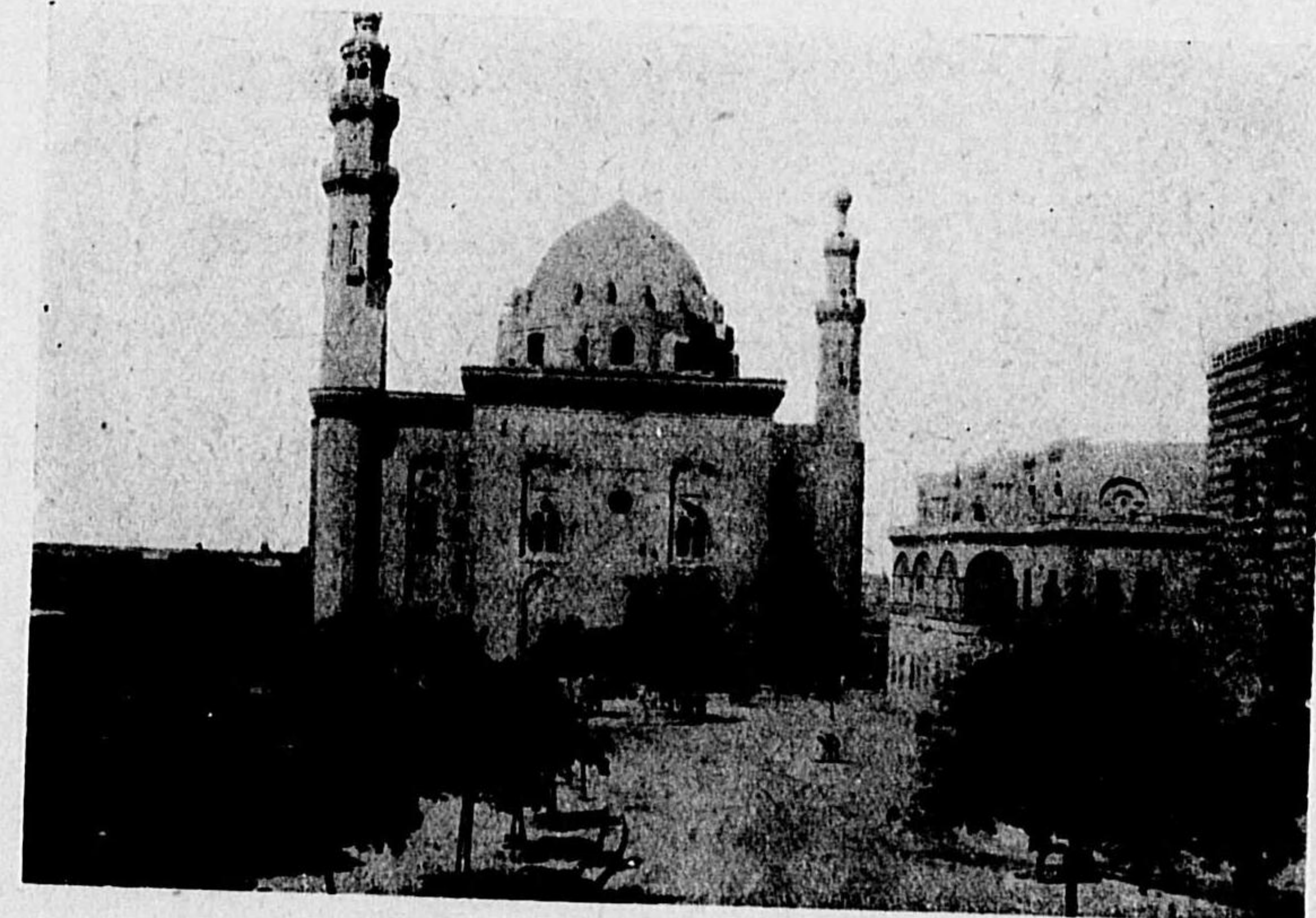
(クツクルバ・ンタルス) 備設部内堂拜禮 圖六一〇一第

(1) 圖 附 築 建 教 回

(上) 第一〇一五圖 埃及カイロのイブン・ツル・の平

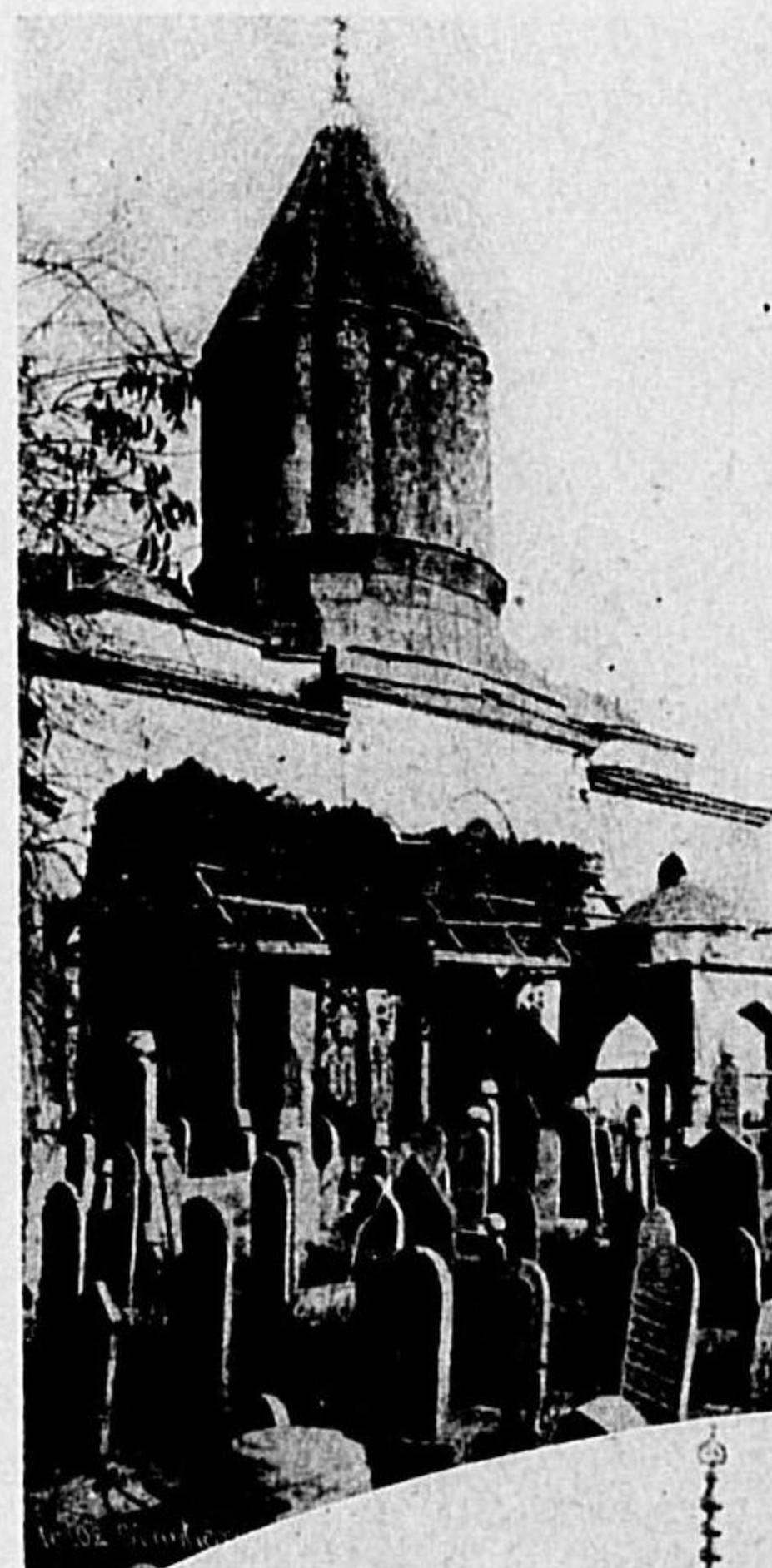


(下) 第一〇一四圖 埃及カイロのスルタン・ハッサン



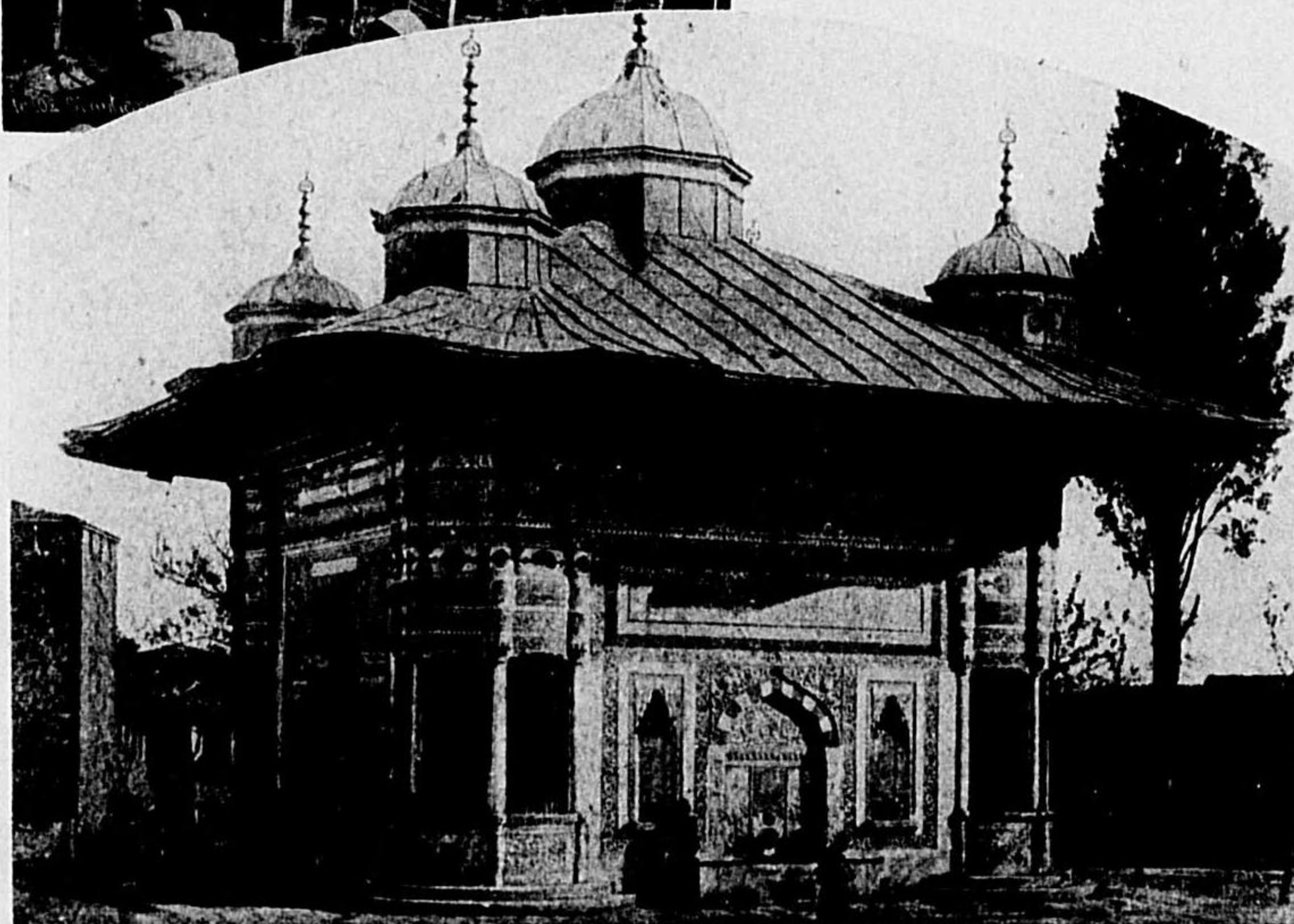
(4) 圖 附 築 建 教 回

圖九一〇一第
(ア = コ 亞 細 亞 小) 墓

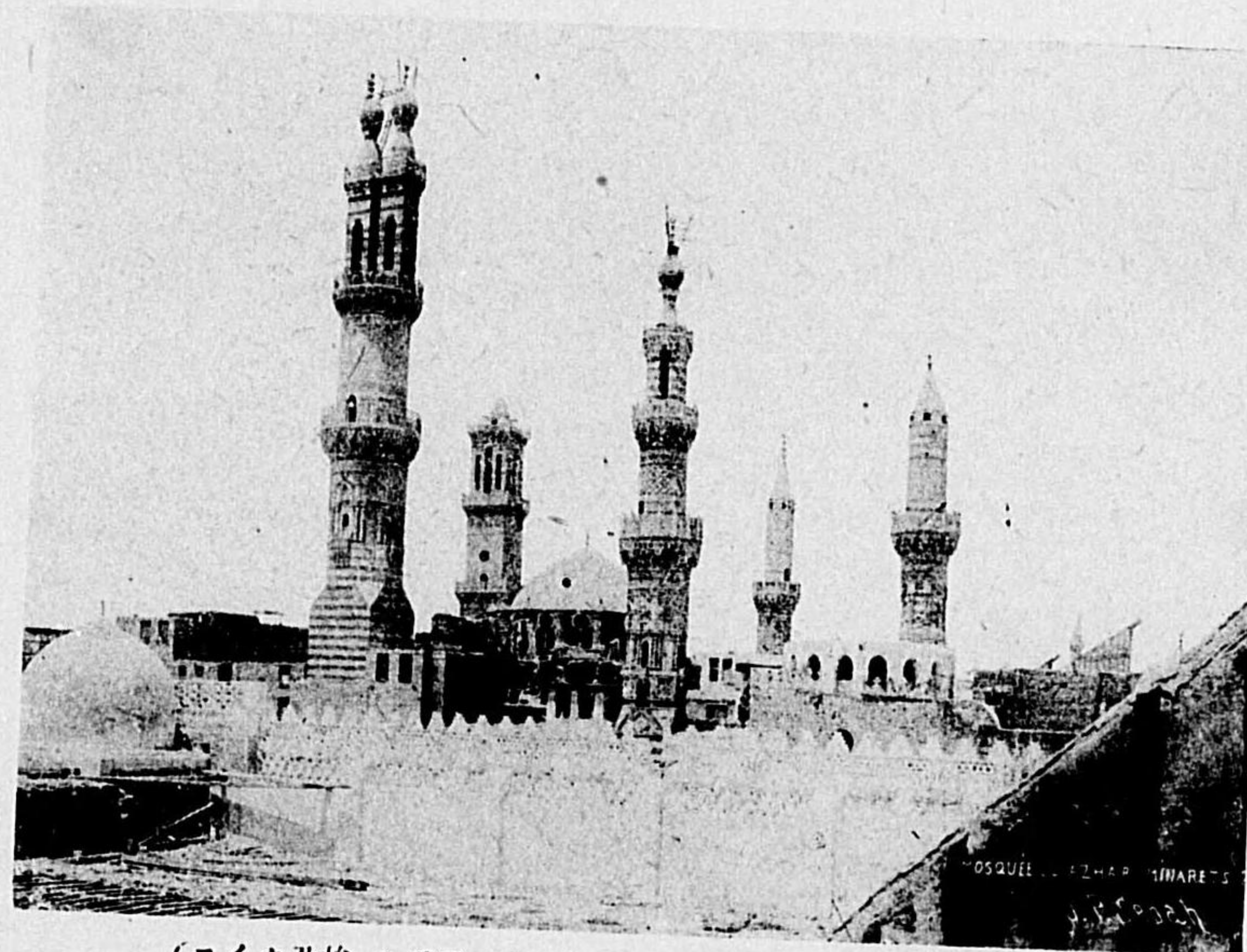


圖一三〇一第 ↑
(門裏のヤイフツ・ヤア堡丁但士君) 門

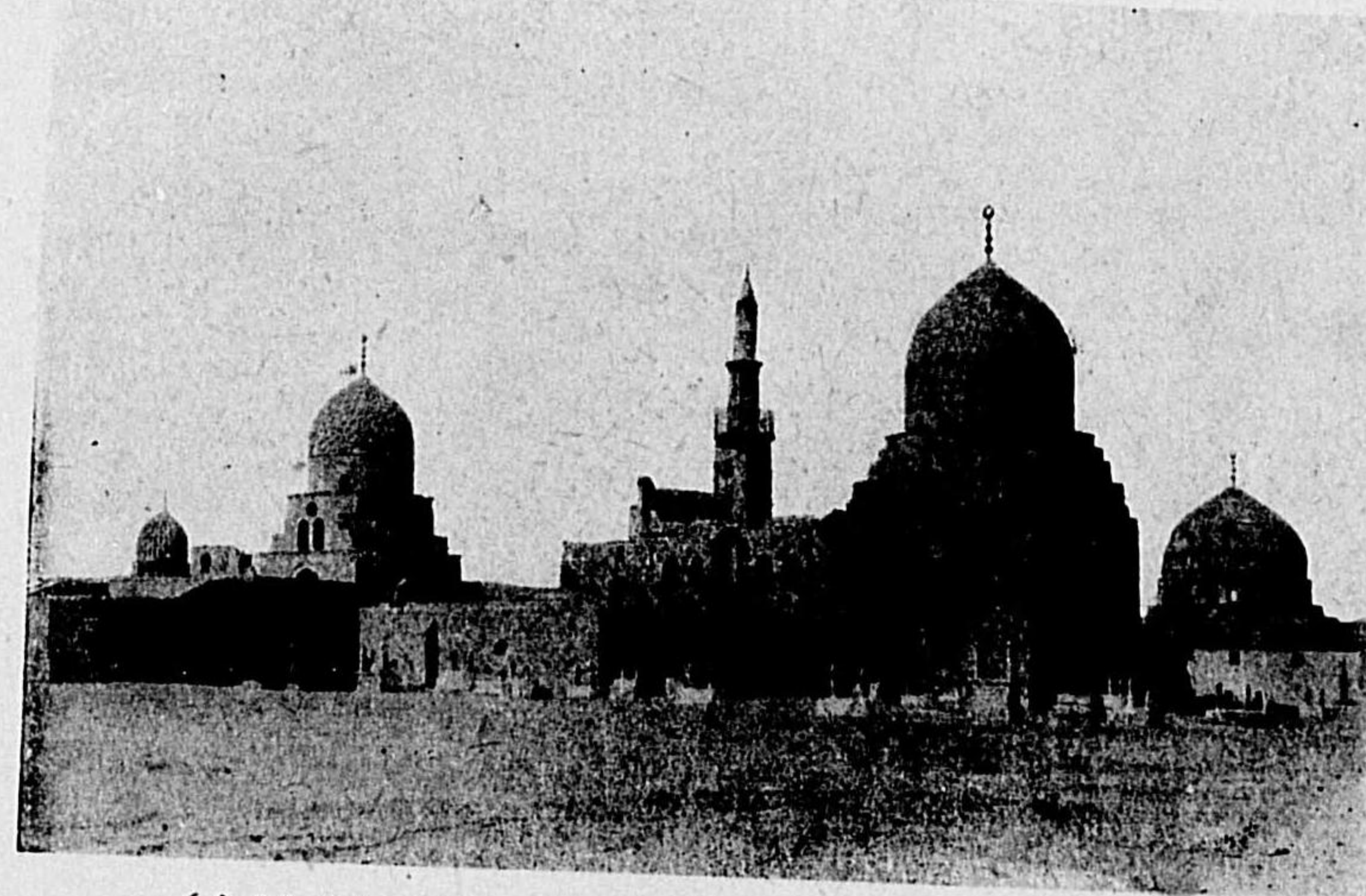
圖〇二〇一第 ↓
(舍盤水ドツメーア堡丁但士君) 舍水



(3) 圖 附 築 建 教 回



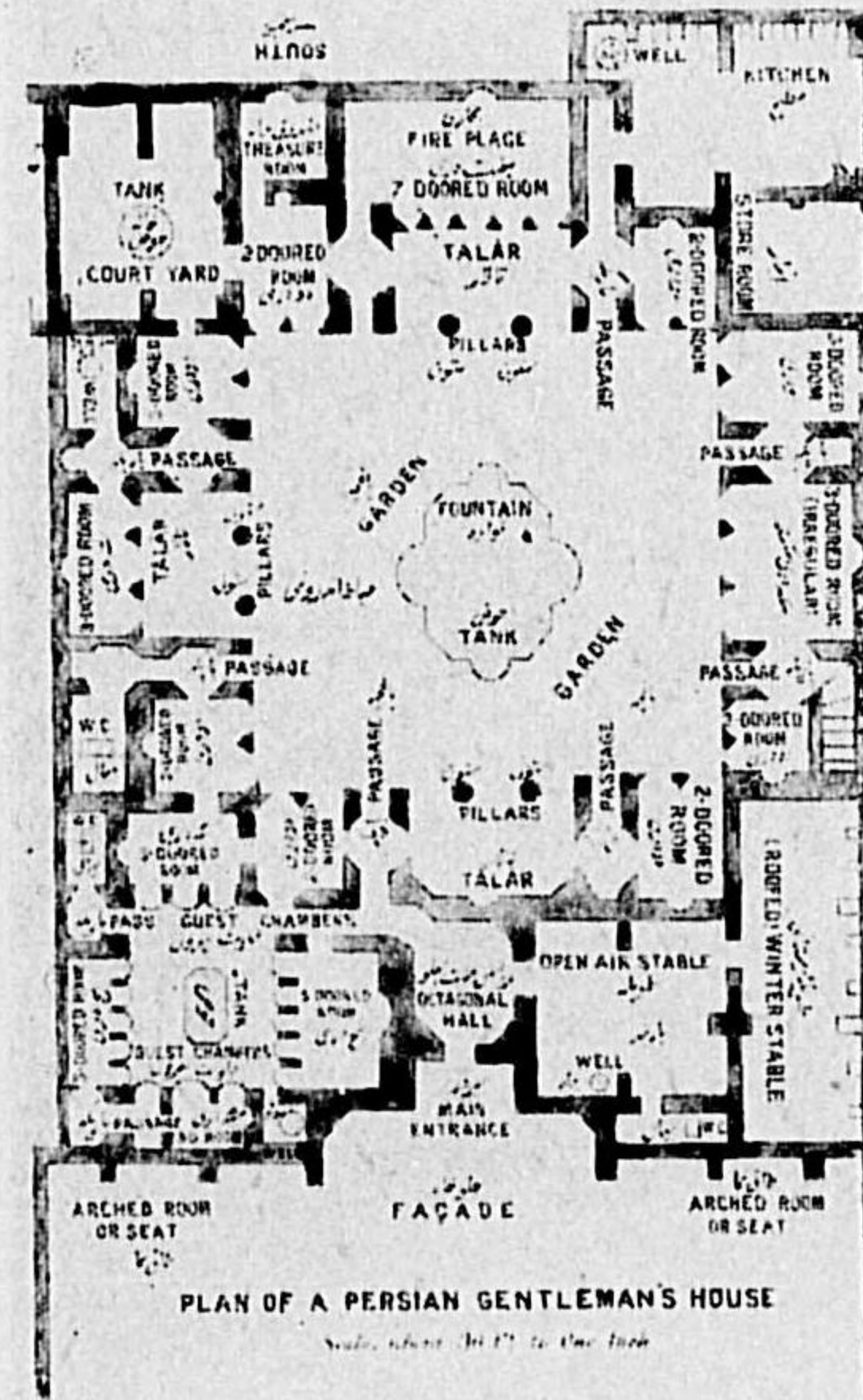
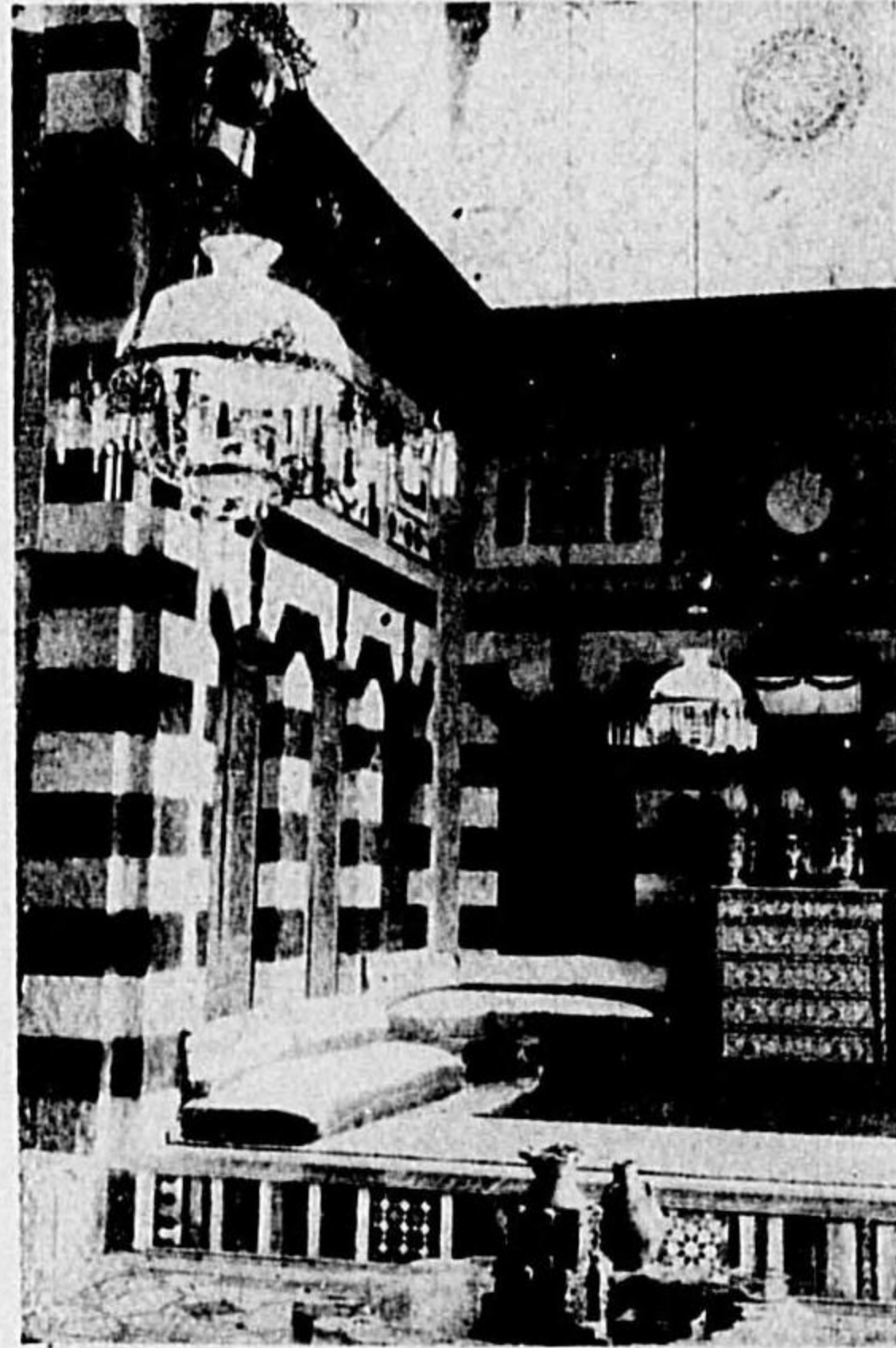
(ロイカ及埃ルザア・ルエ) トツレナミ 圖七一〇一第



(イベトイカ・ソタルスのロイカ及埃) 墓 圖八一〇一第

(6) 圖 附 築 建 教 回

圖五二〇一第
士紳のスクスマダ亞利敘)家住 ↓
(家のヤシバ・サア

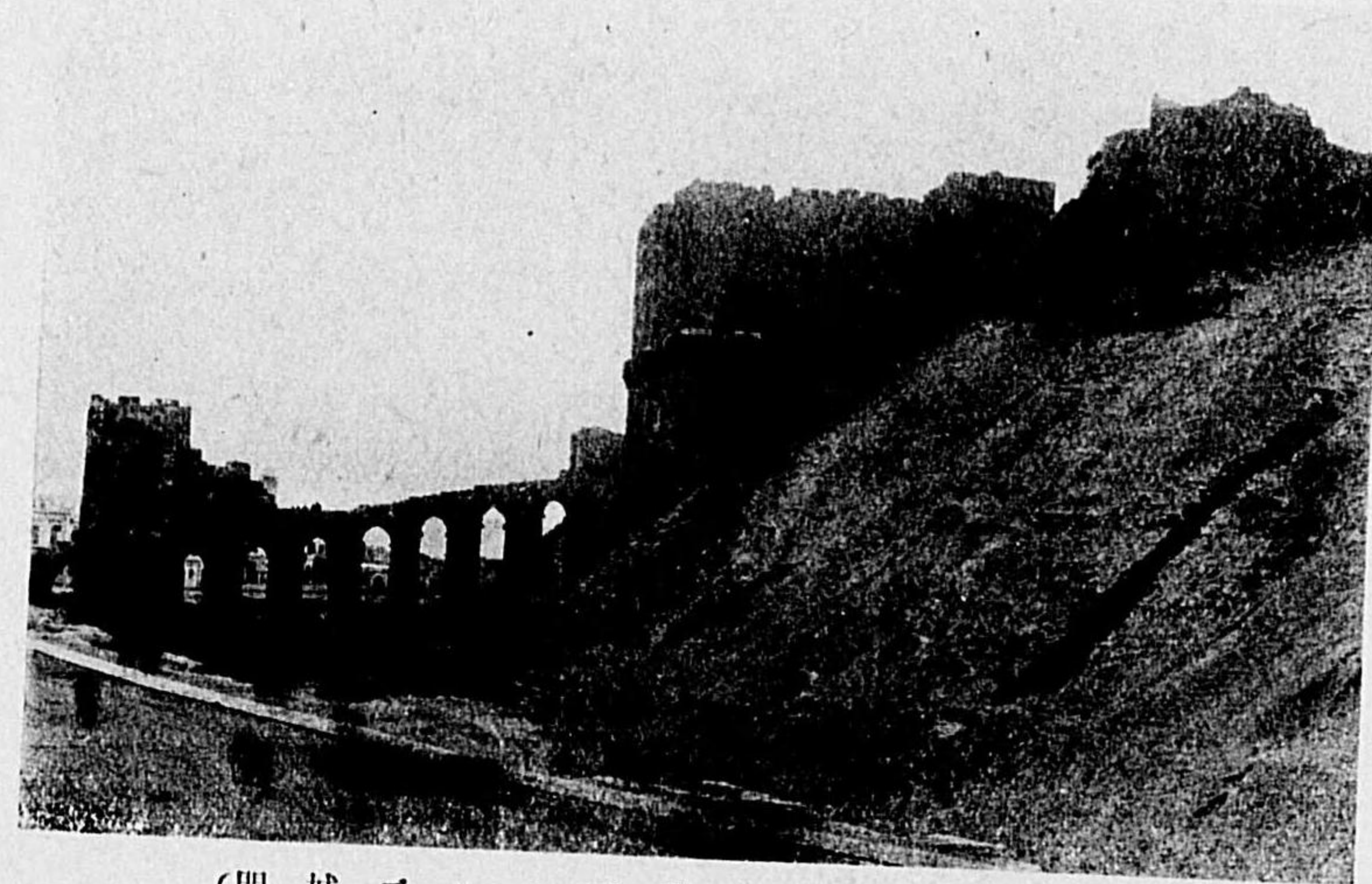


(圖面平邸士紳斯波)家住 圖四二〇一第

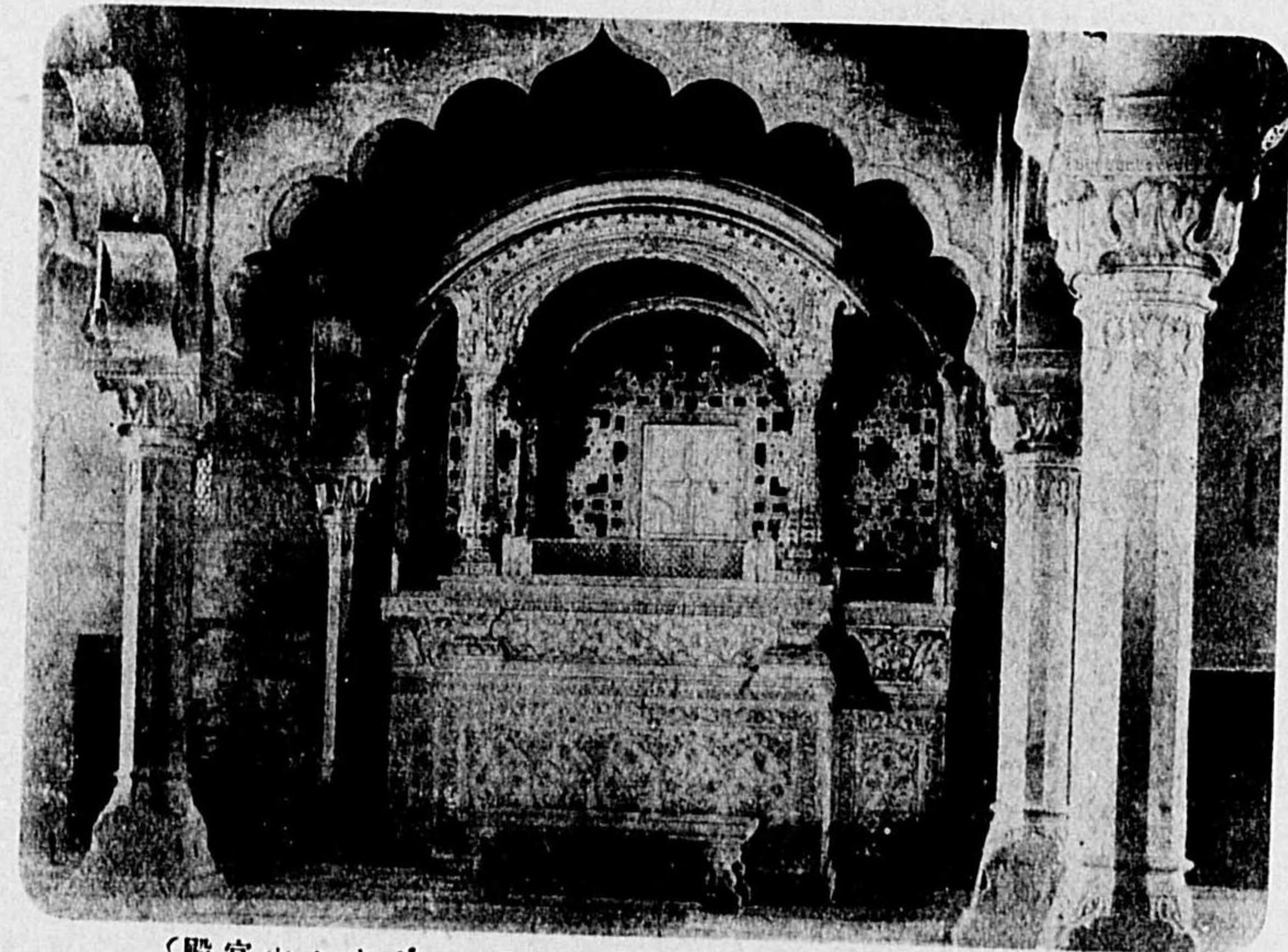


(街市ロイカ及埃)家 民 圖六二〇一第

(5) 圖 附 築 建 教 回

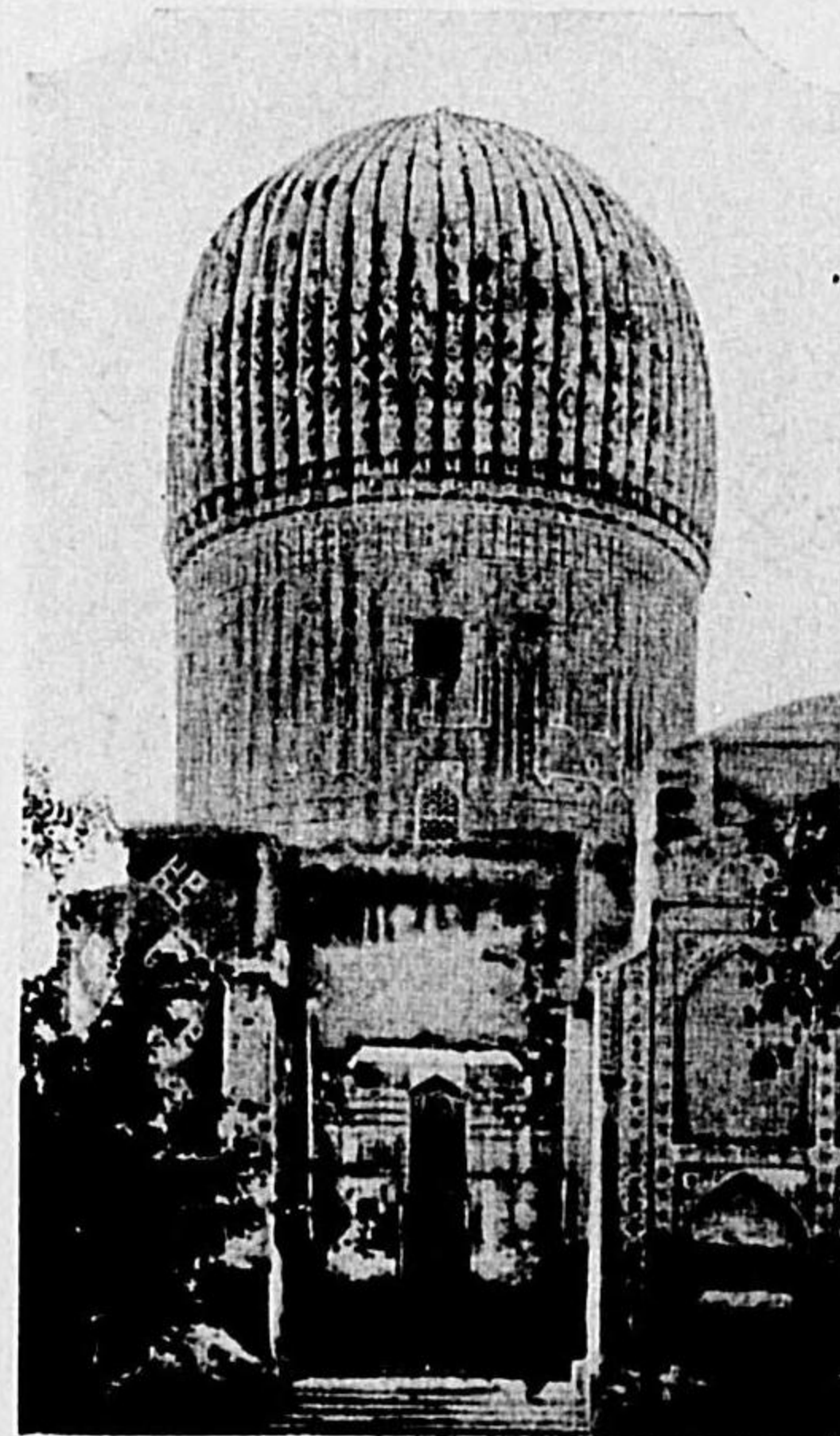


(門城ブレハ亞利敘)城 圖二二〇一第



(殿宮のンヤジ・ーヤシリテ度印)殿宮 圖三二〇一第

(8) 圖 附 築 建 教 回

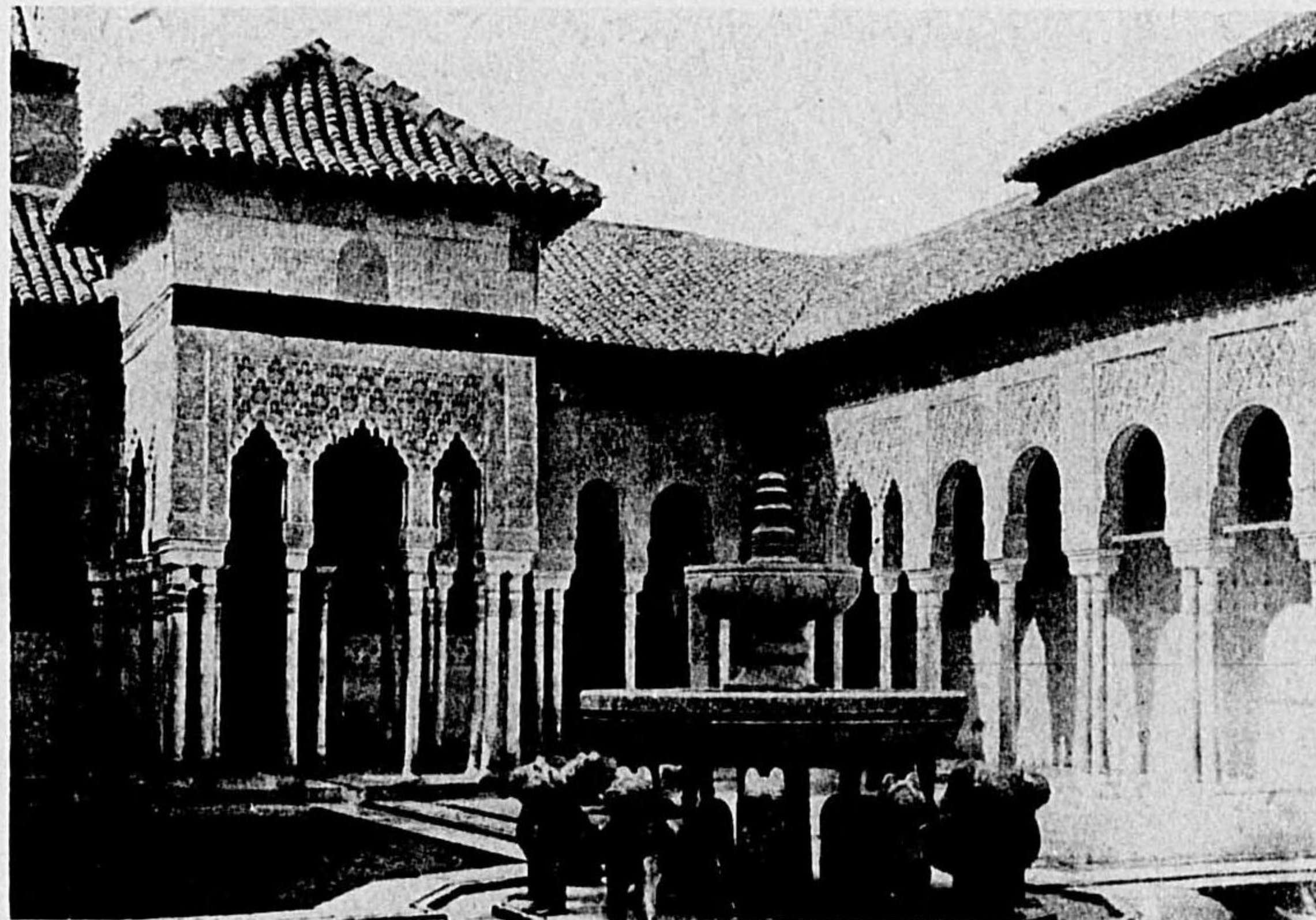


第一〇三圖

土耳其斯道サマルカンの帖木兒の墓

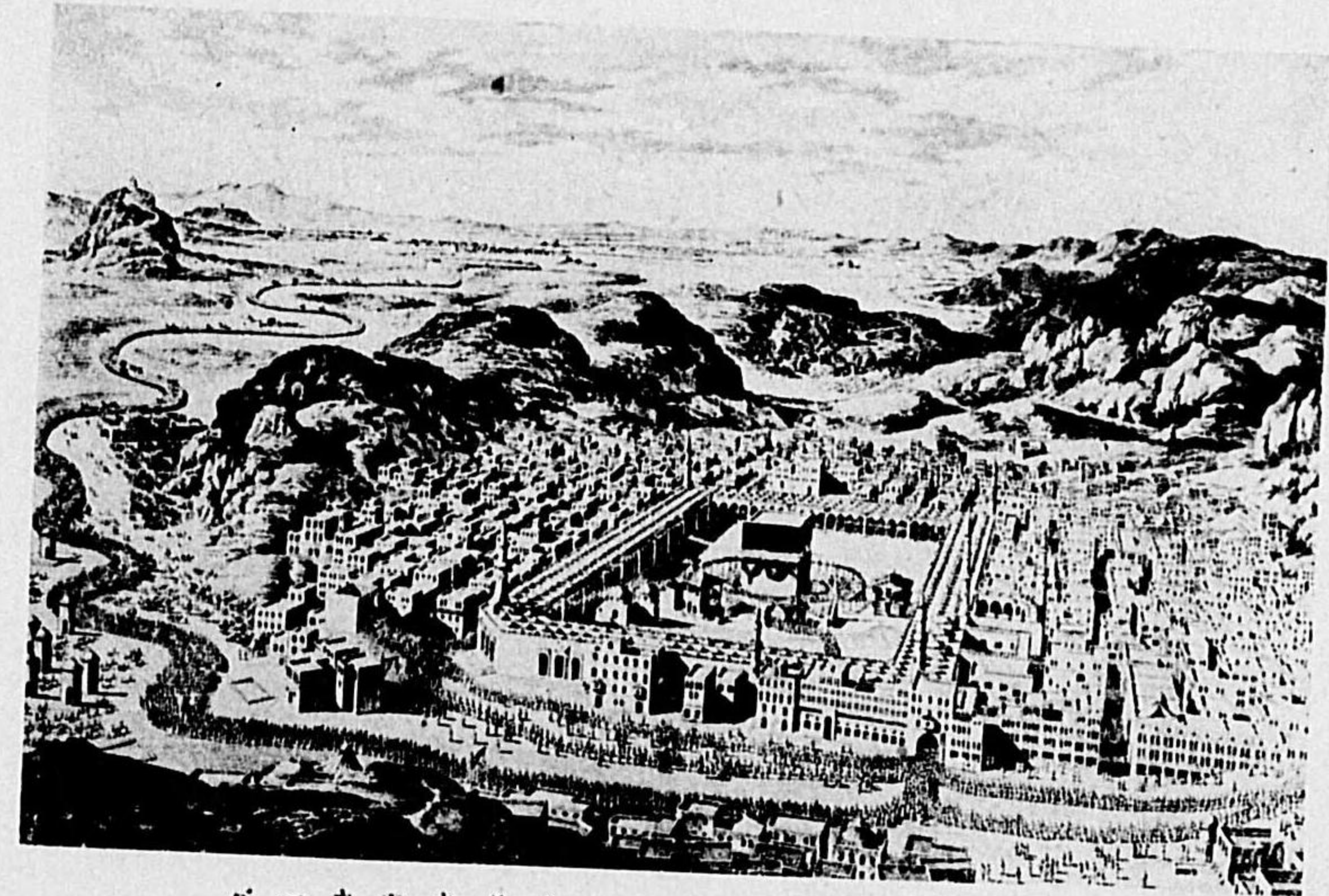


圖九二〇一第
寺ドツリワのスクスマダ亞利敘



庭内の子獅の殿宮ラブンハア牙班西 圖〇〇一第

(7) 圖 附 築 建 教 回



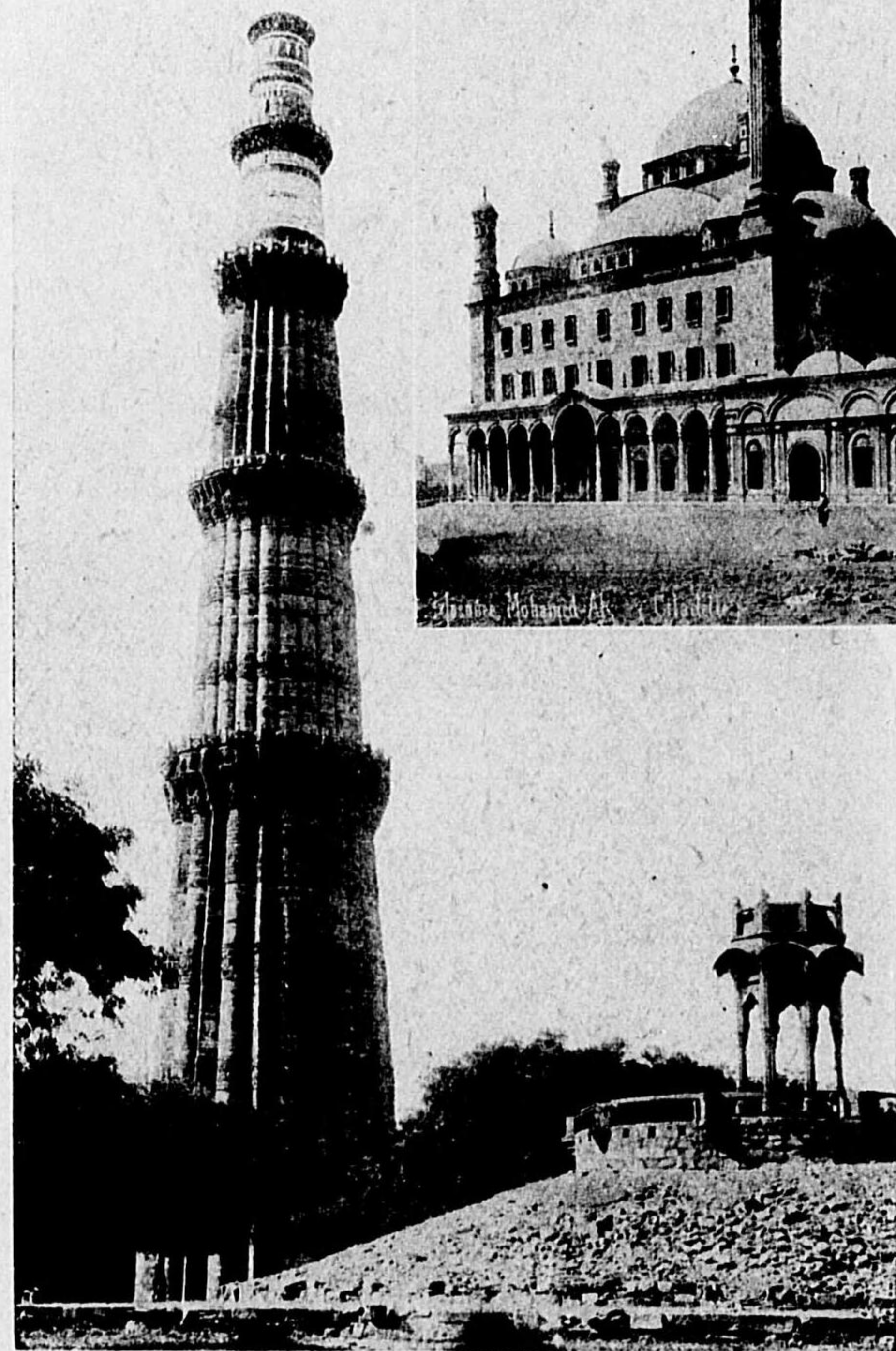
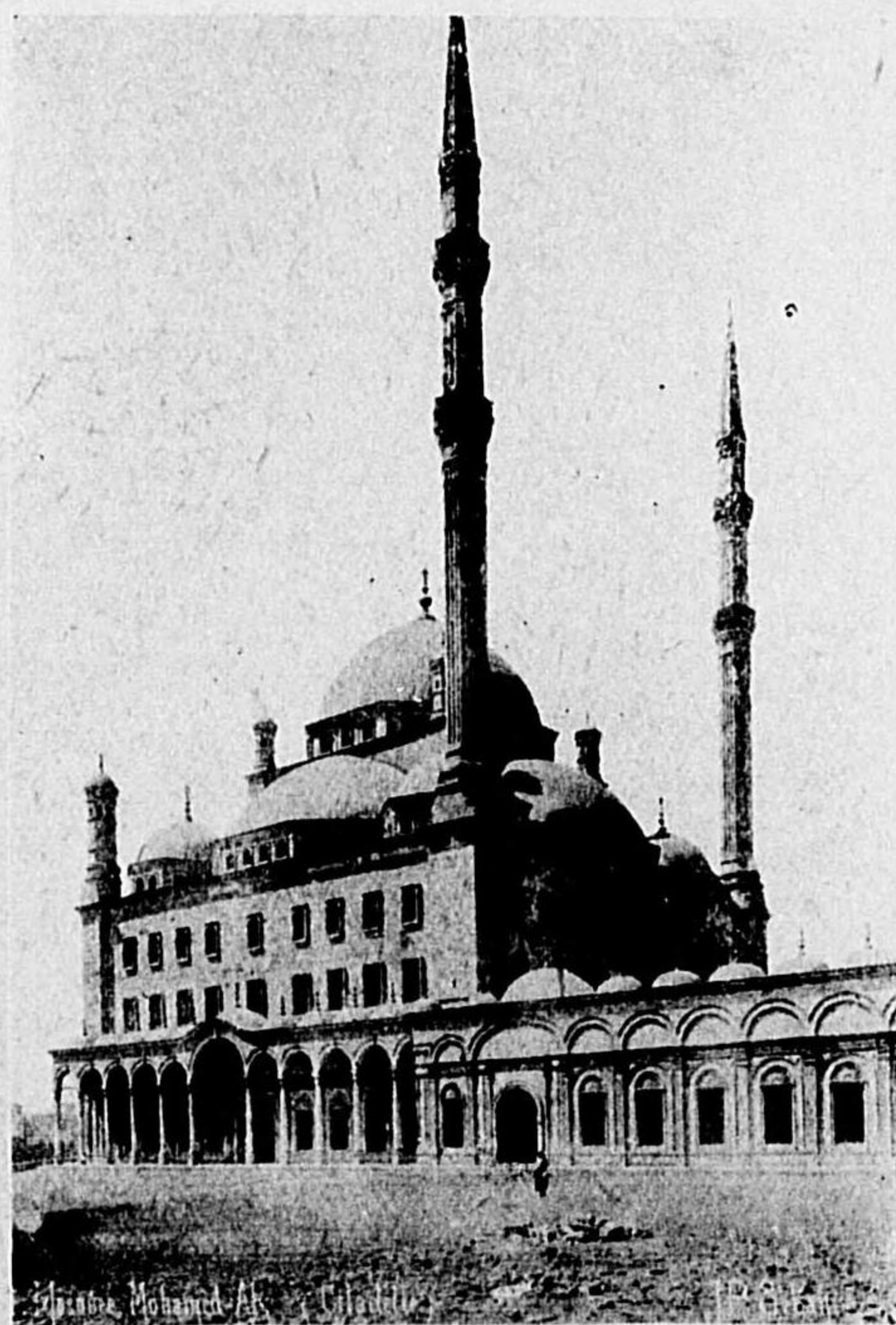
バーカのカツメ ヲビラア 圖七二〇一第



寺ムルアのロイカ及埃 圖八二〇一第

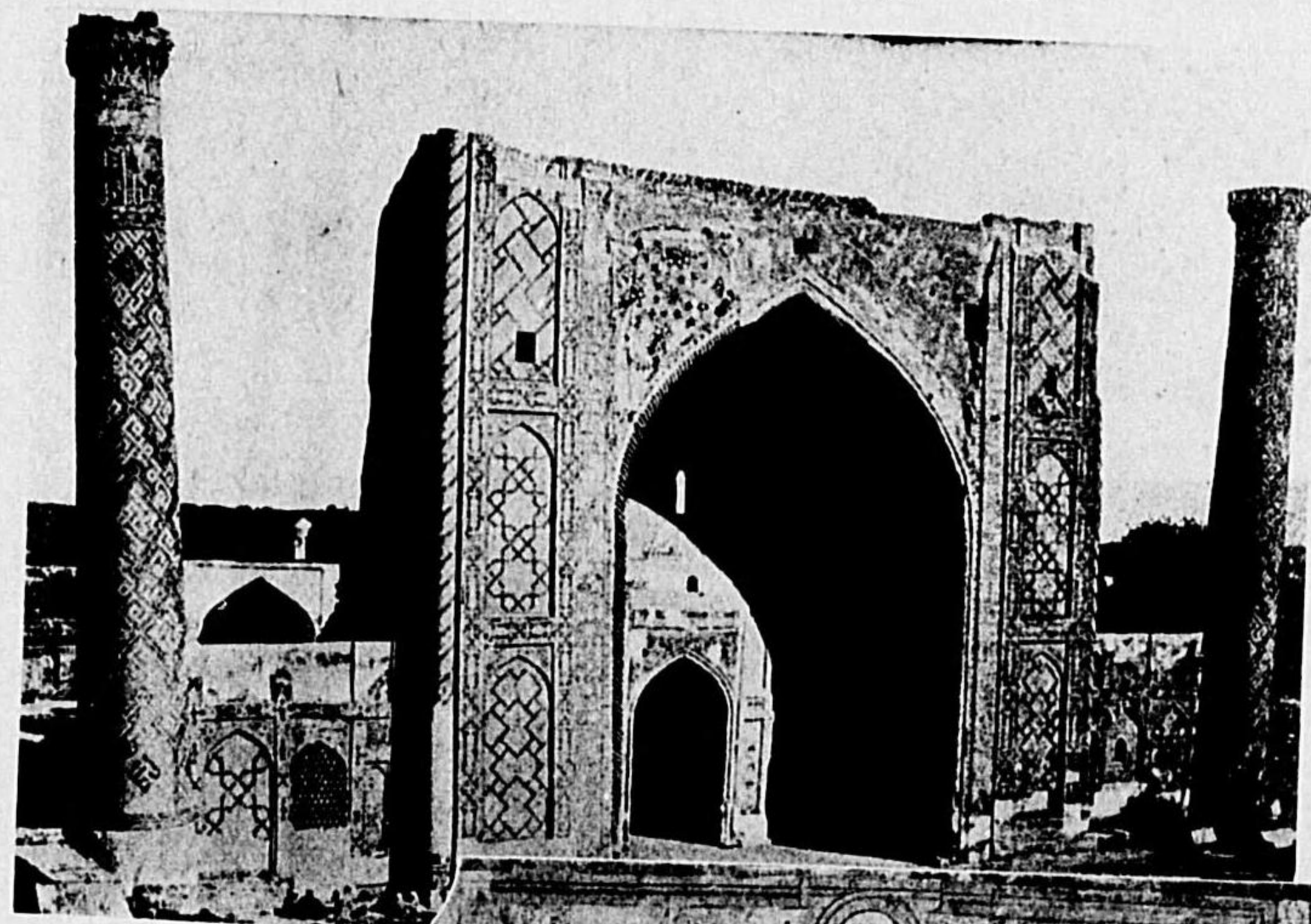
(10) 圖 附 築 建 教 回

第一〇三五圖
印度デリの
クトブ・ミナール



第一〇三四圖
埃及カイロ・ムハメウド・アリ寺

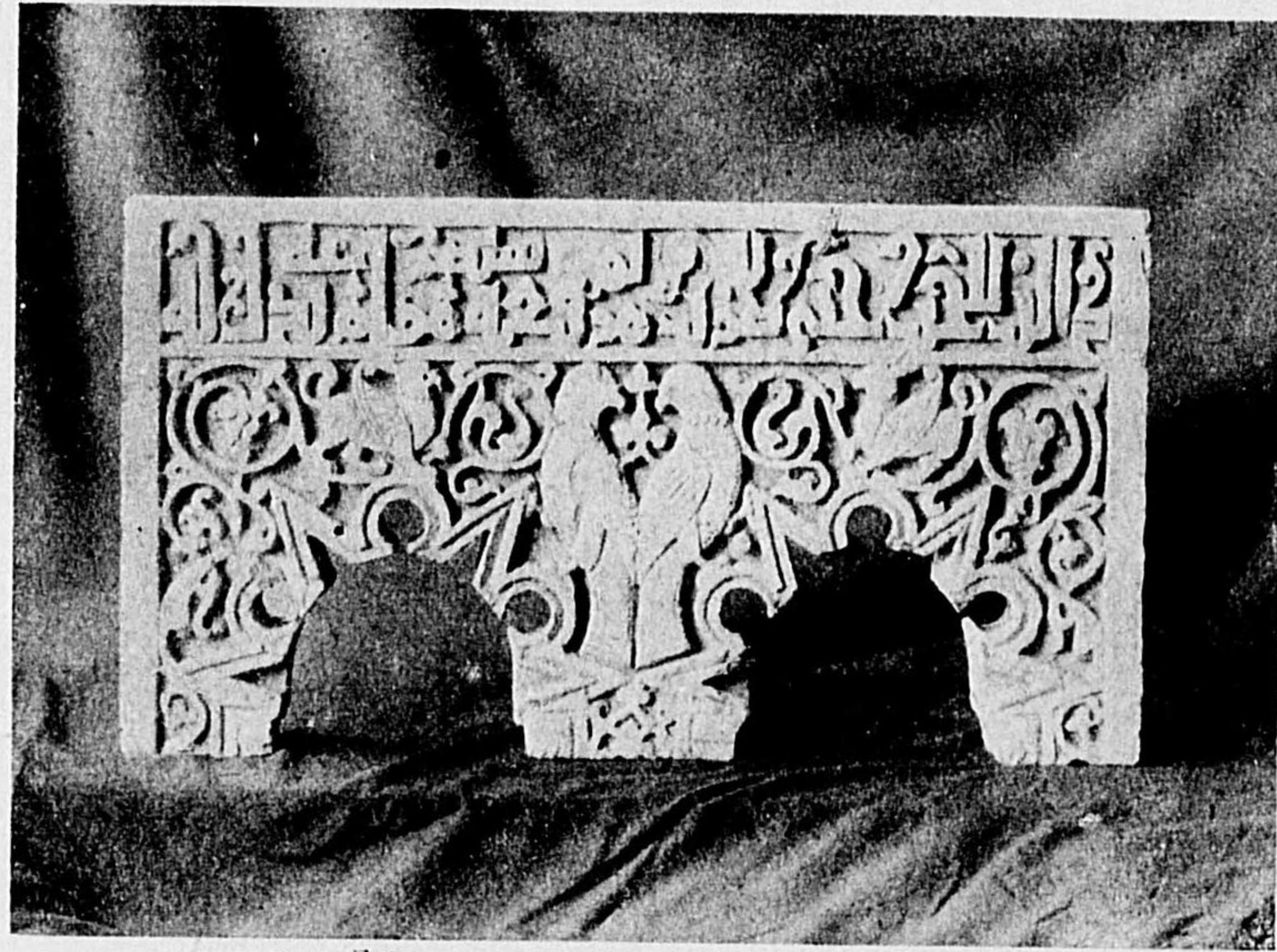
(9) 圖 附 築 建 教 回



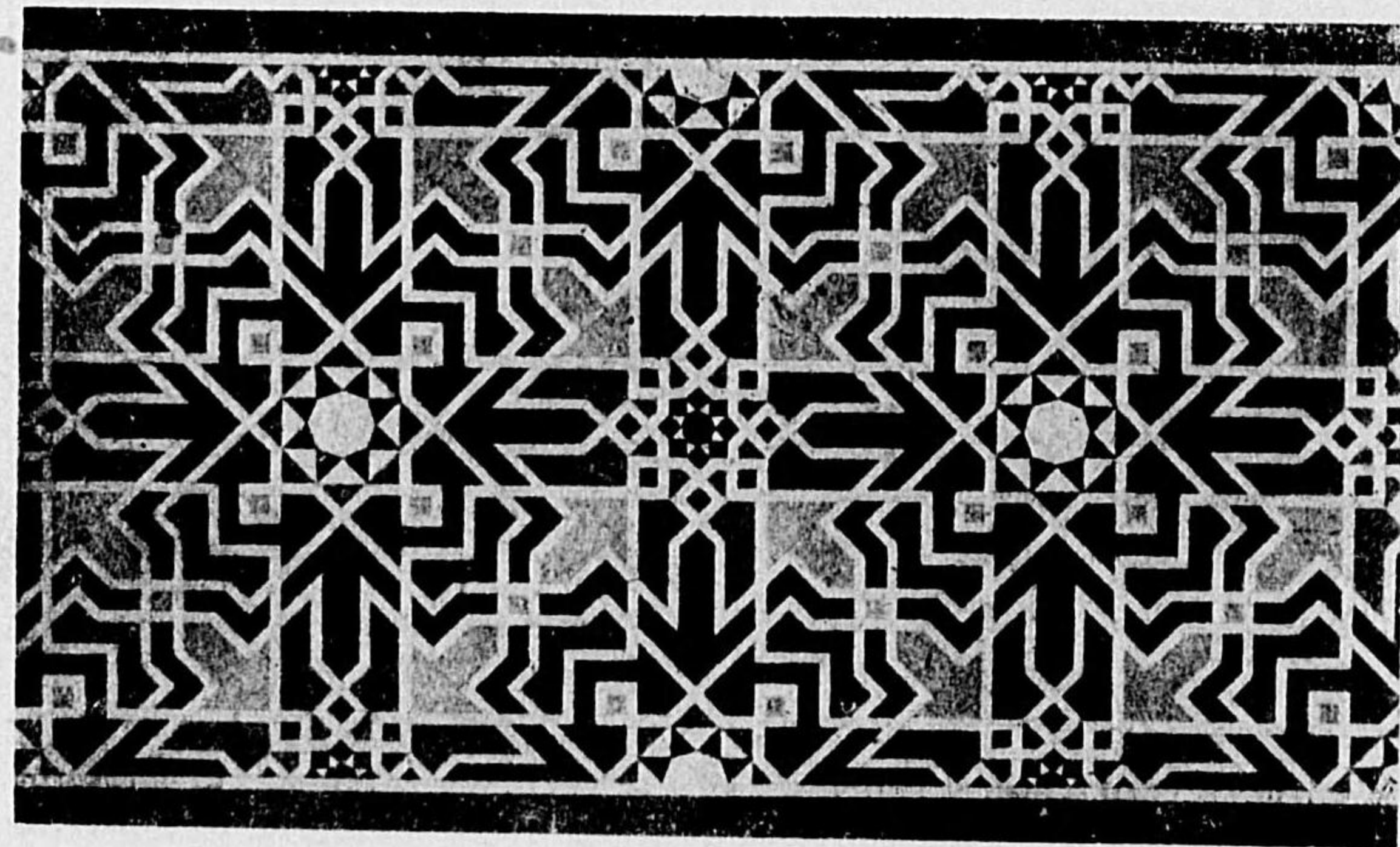
(上) 第一〇三二圖 土耳其斯坦 サマルカンドのウルグ・ベグ學院
(下) 第一〇三三圖 小亞細亞 コニアのアラ・ウツヂン寺



12) 圖 附 築 建 教 回

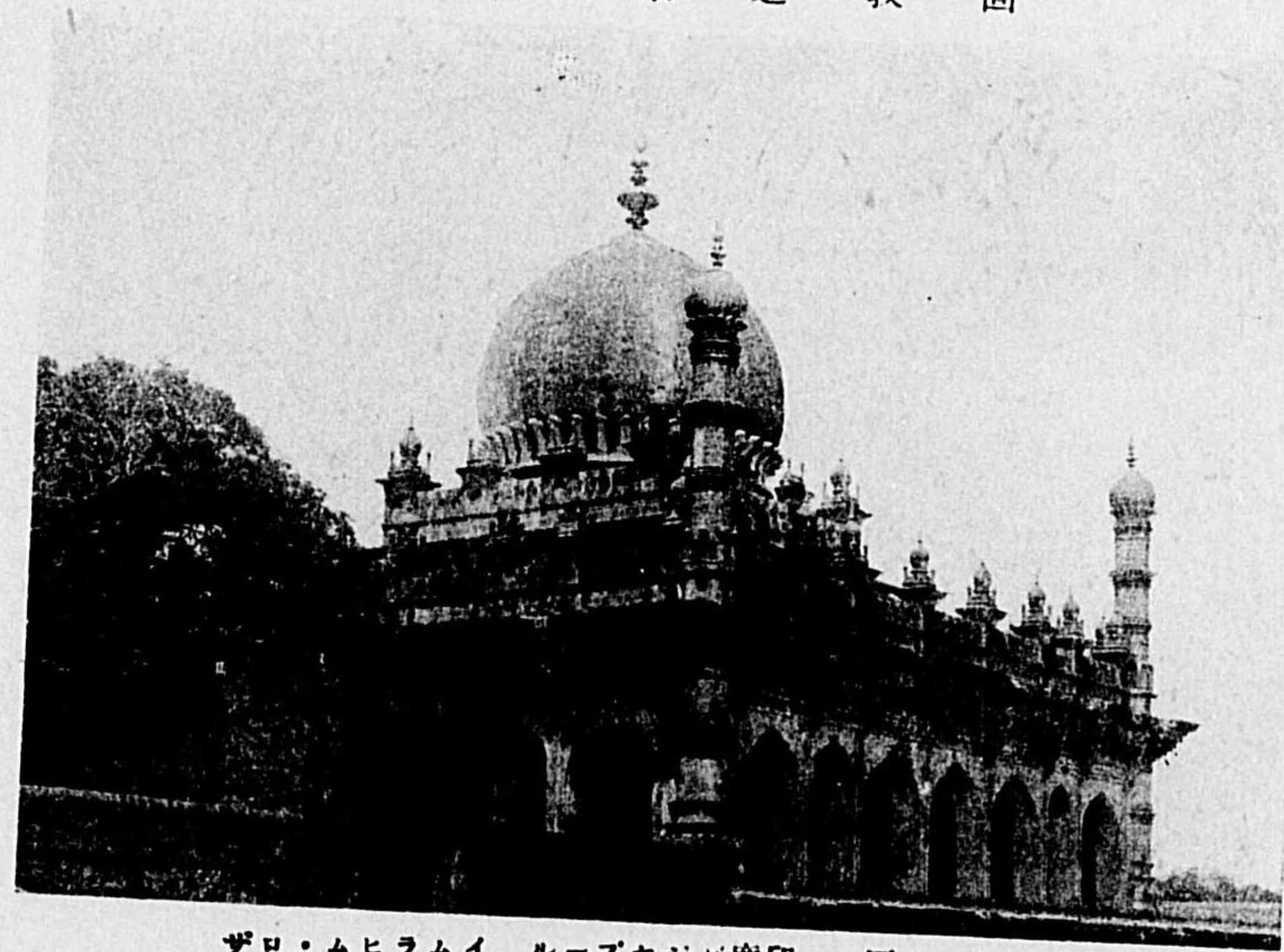


上正コツタスノ見鏡ルクベルアヂ シタスヂルク古耳上 圖八〇一第



種一の様文何幾及埃 圖九三〇一第

(11) 圖 附 築 建 教 回

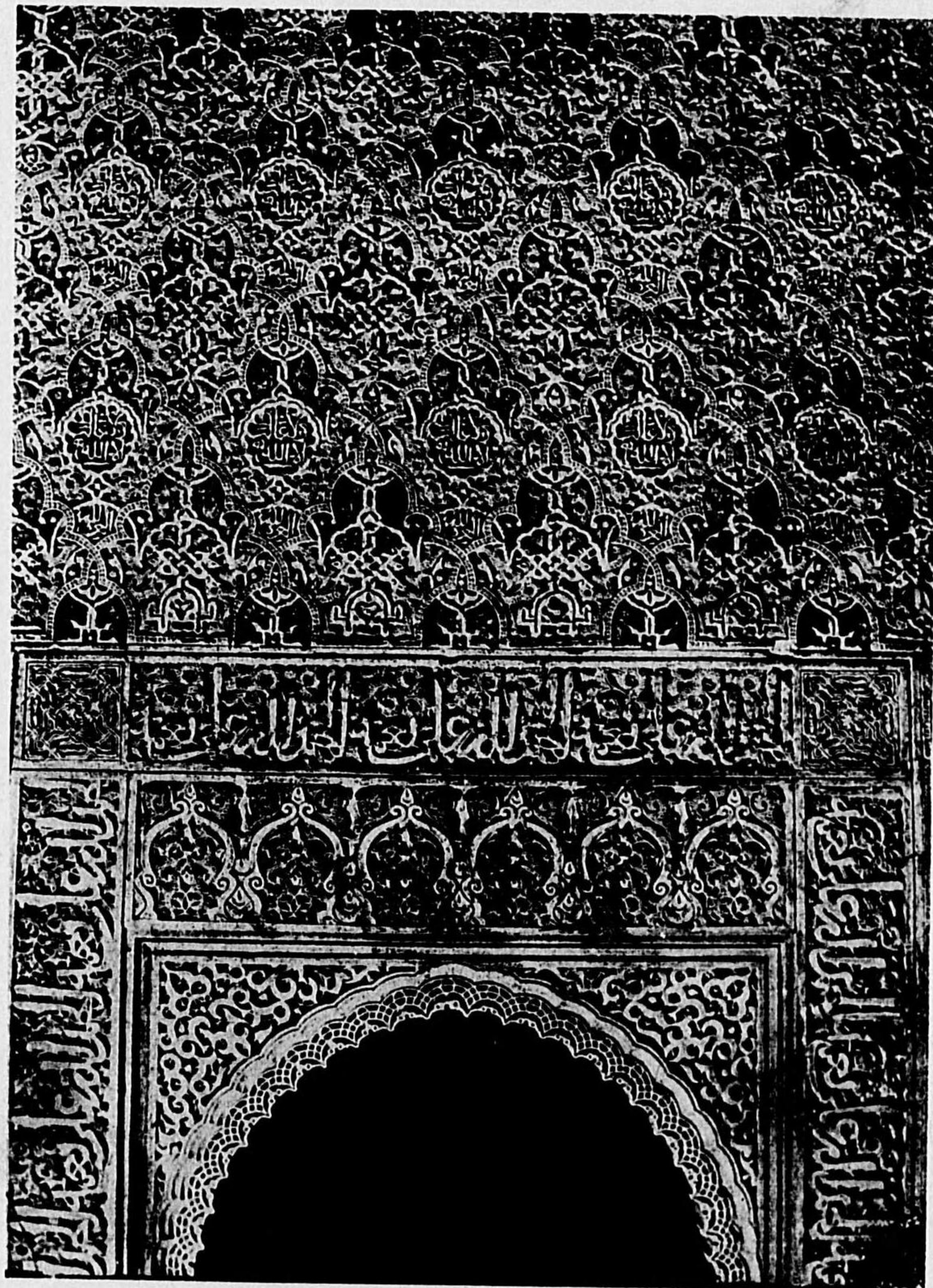


ザロ・ムヒラムイ ルーブヤジビ度印 圖六三〇一第



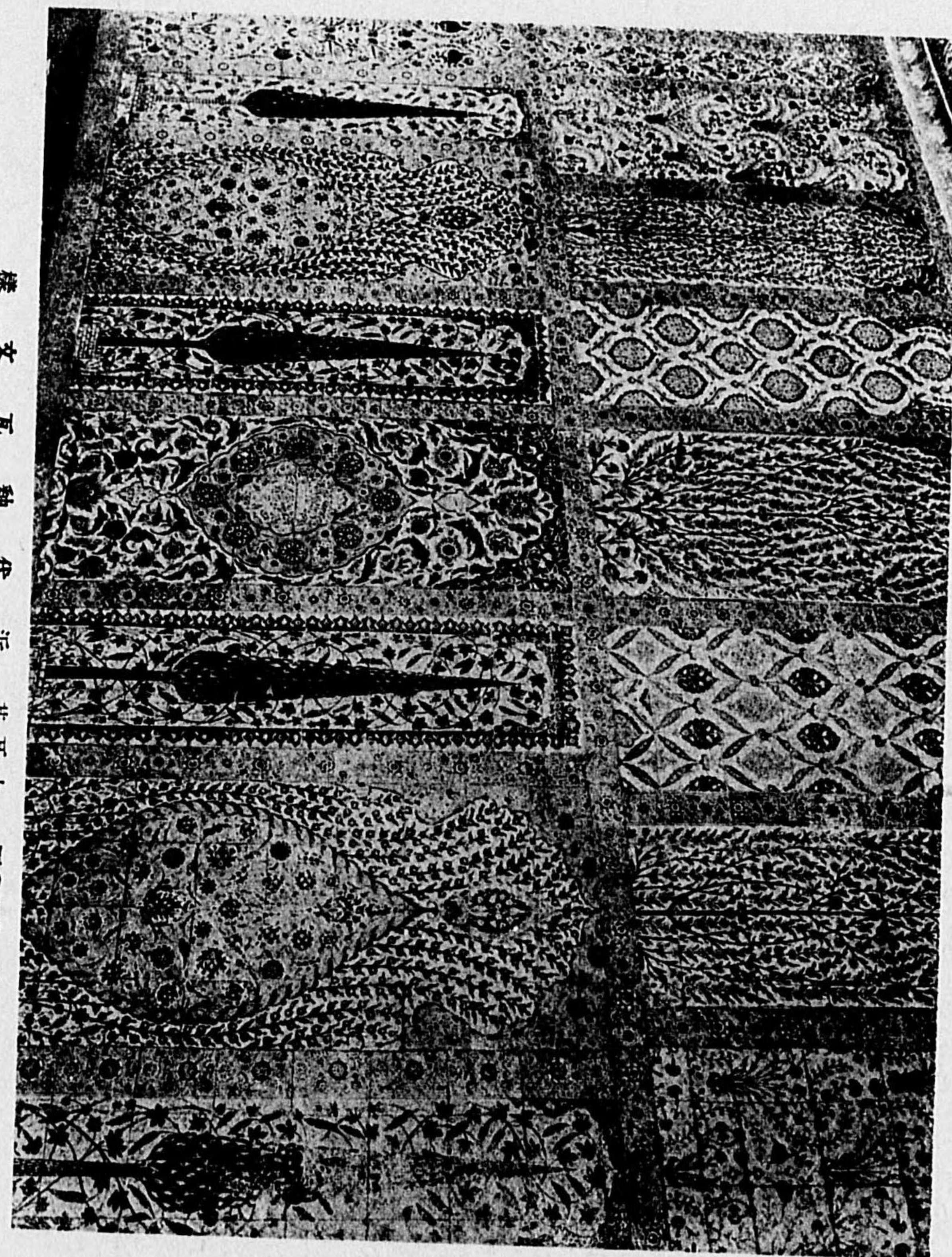
寺眞清原開國洲滿 圖七三〇一第

(14) 圖 附 築 建 教 回

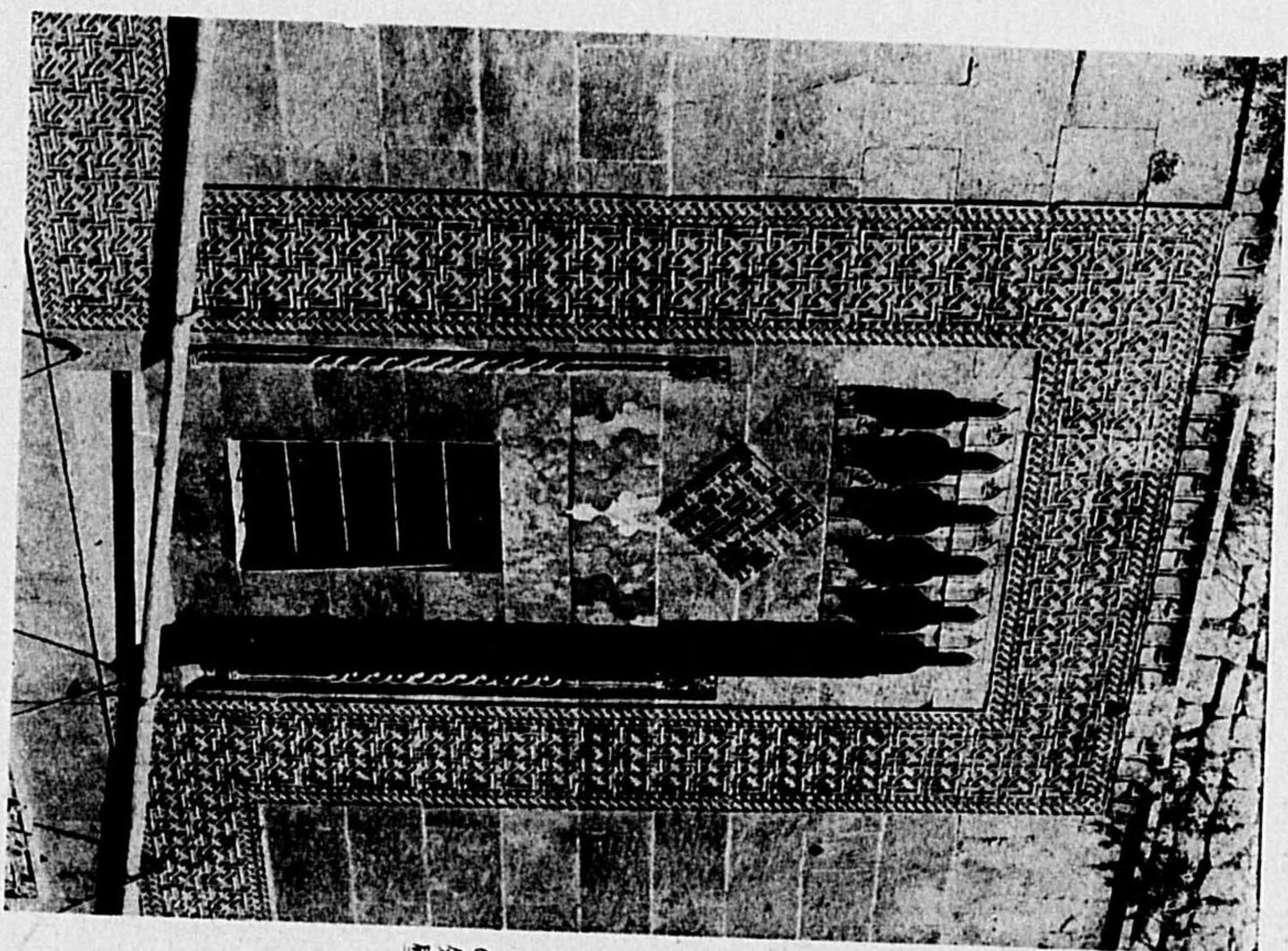


部内寺教回アヴドルコ牙班西 圖一四〇一第

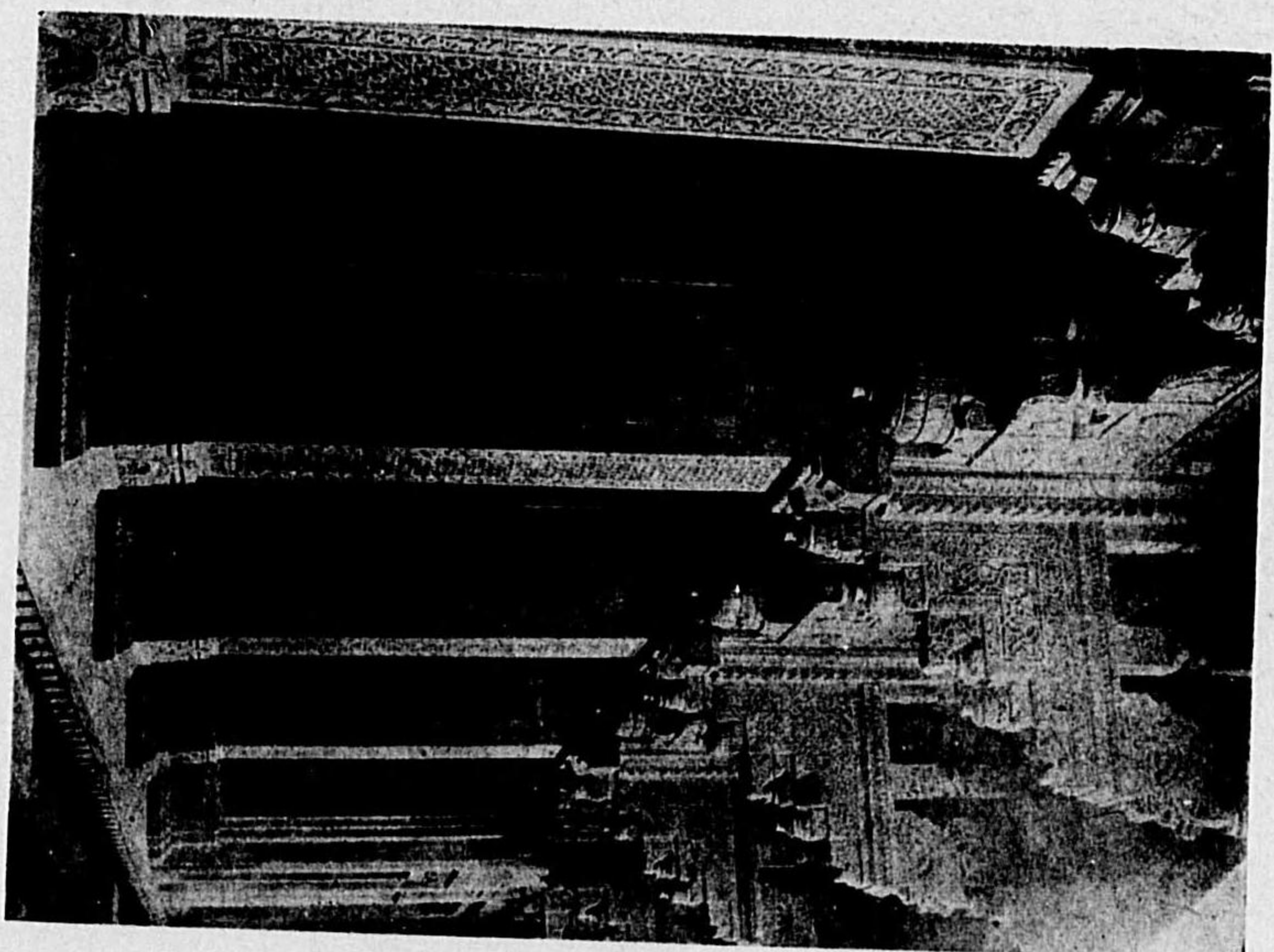
13) 圖 附 築 建 教 回



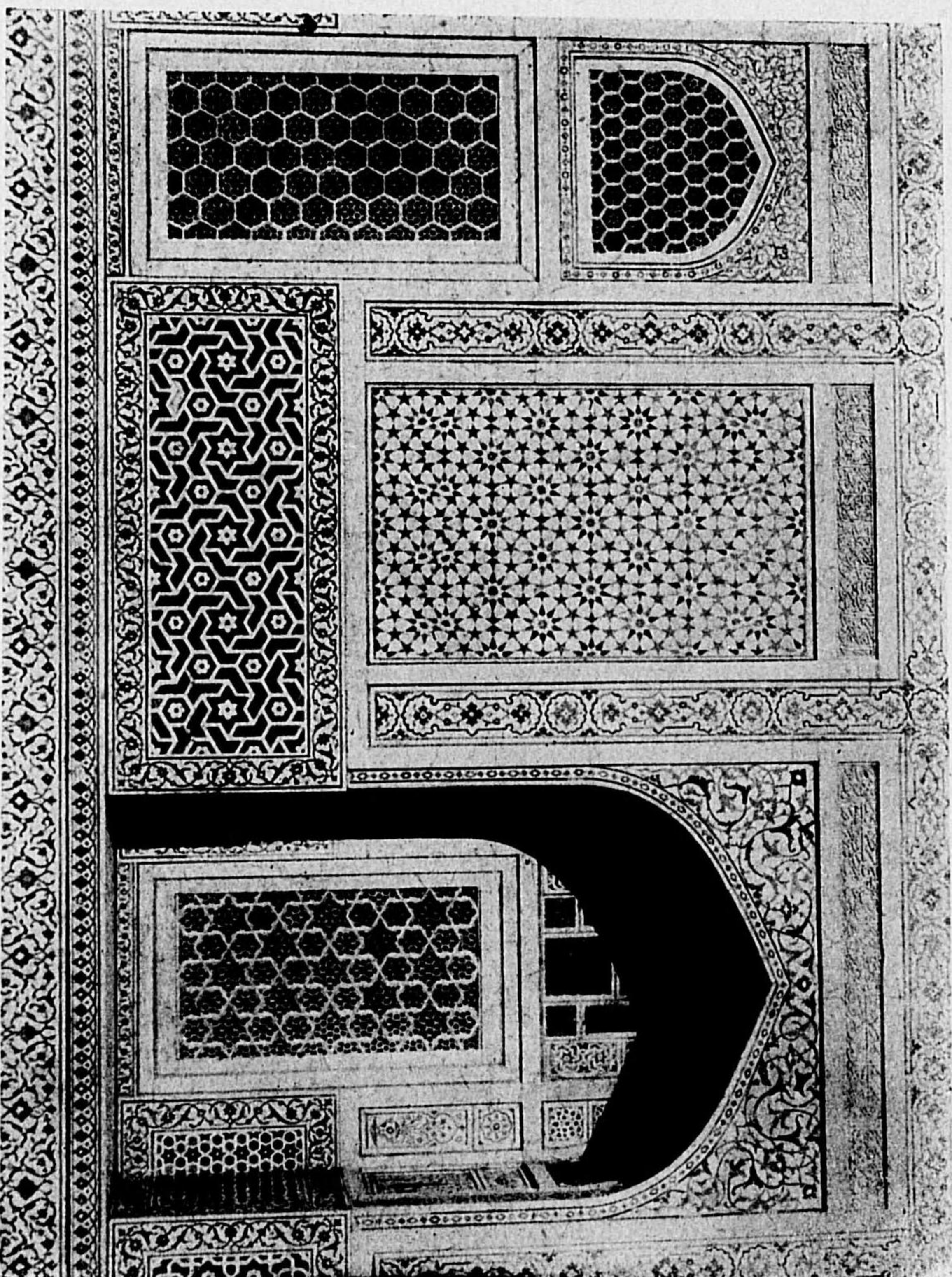
樣 文 瓦 軸 代 近 其 耳 土 圖〇四〇一第



第一〇四三圖 彼利亞・レナのハン・サフンの外壁



第一〇四二圖 印度アグラ、ジャハンギルの宮殿



第一〇四四圖 印度アグラ イト・クト・ワド・ダウラの墓堂

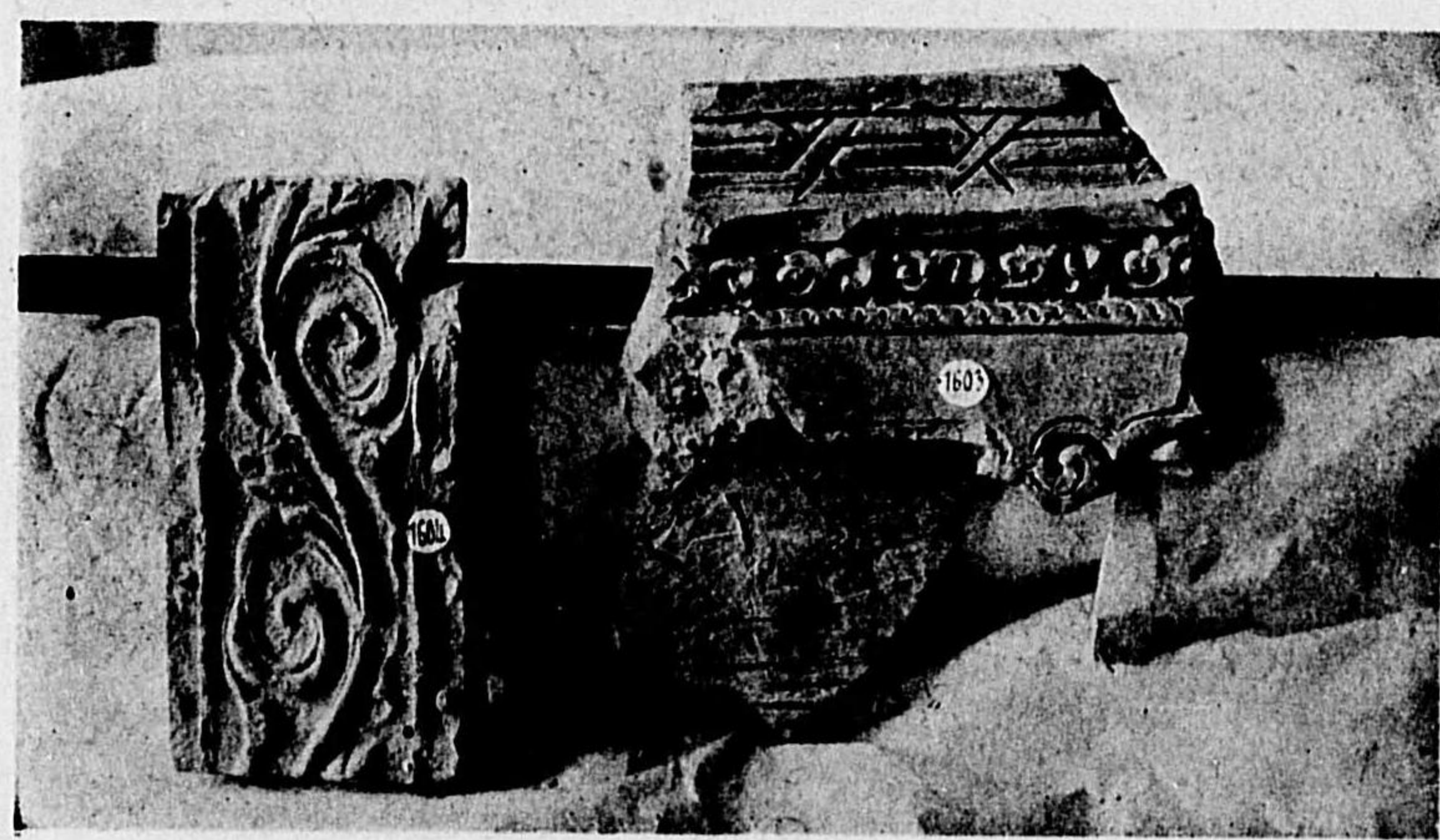
(1) 圖附瓦古ノ掘發成故磊大南安



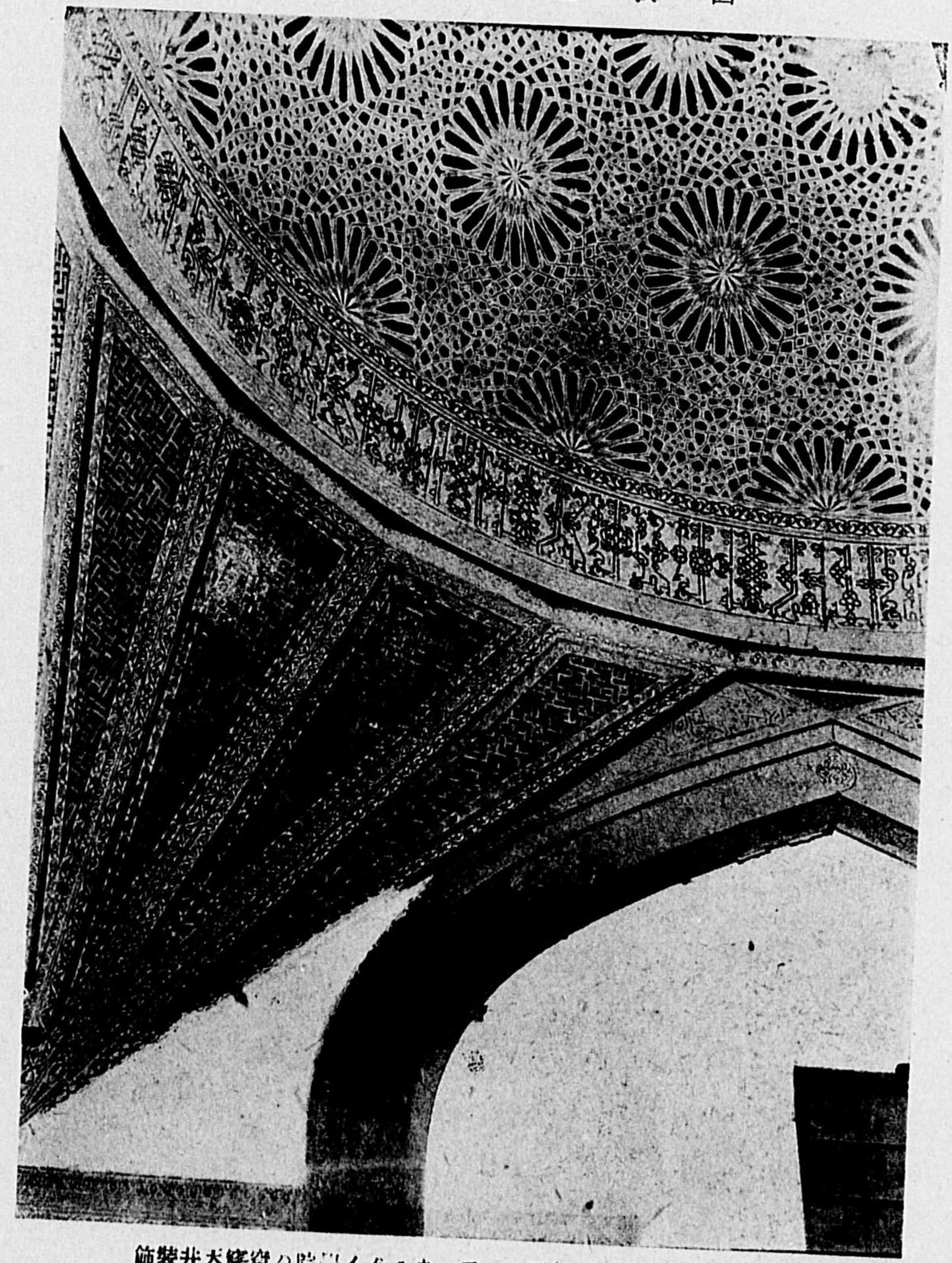
第一〇四九圖
屋根飾の一部



← 第一〇五一圖 裝飾瓦 ↓
第一〇五〇圖 巴瓦



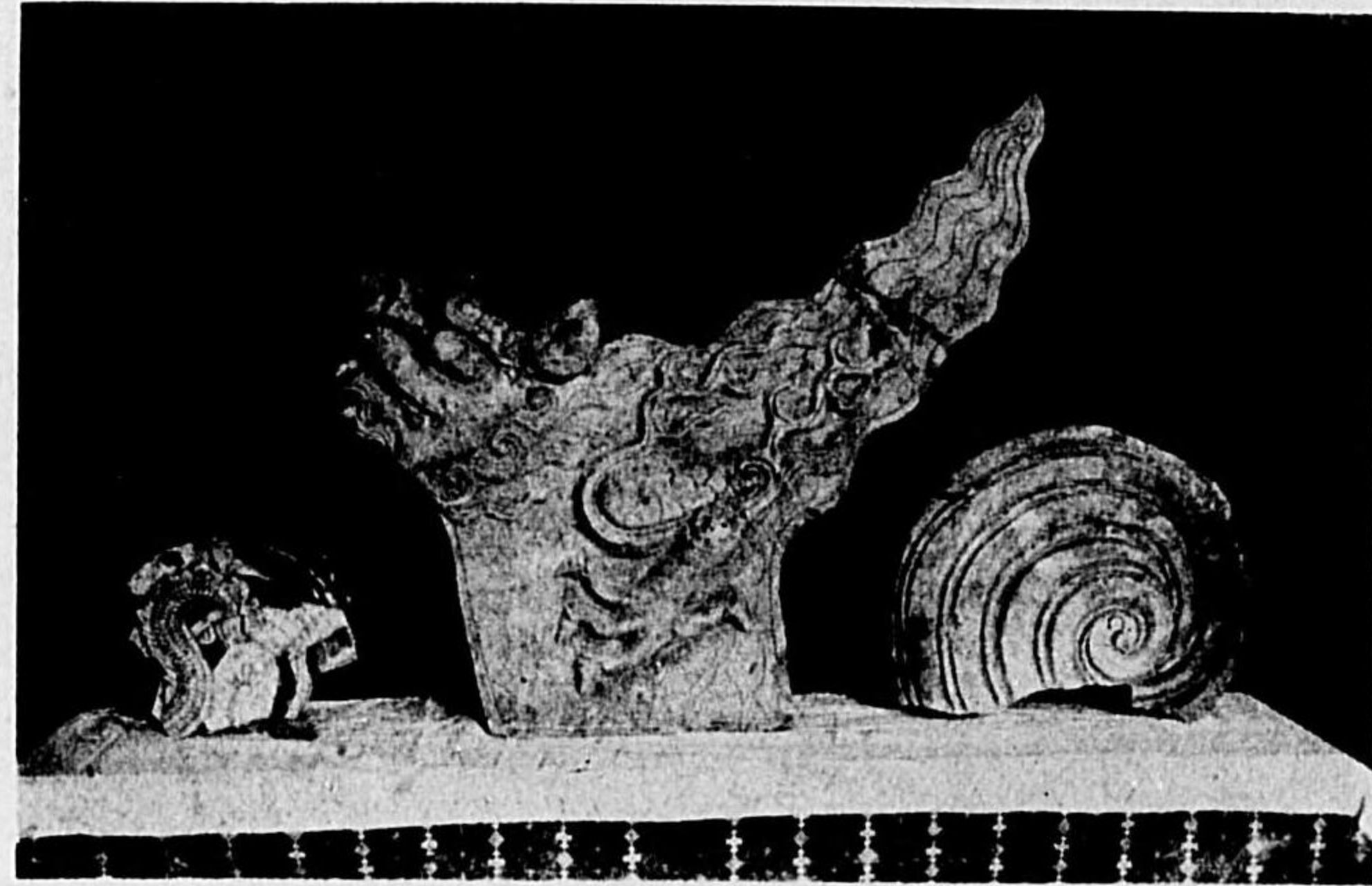
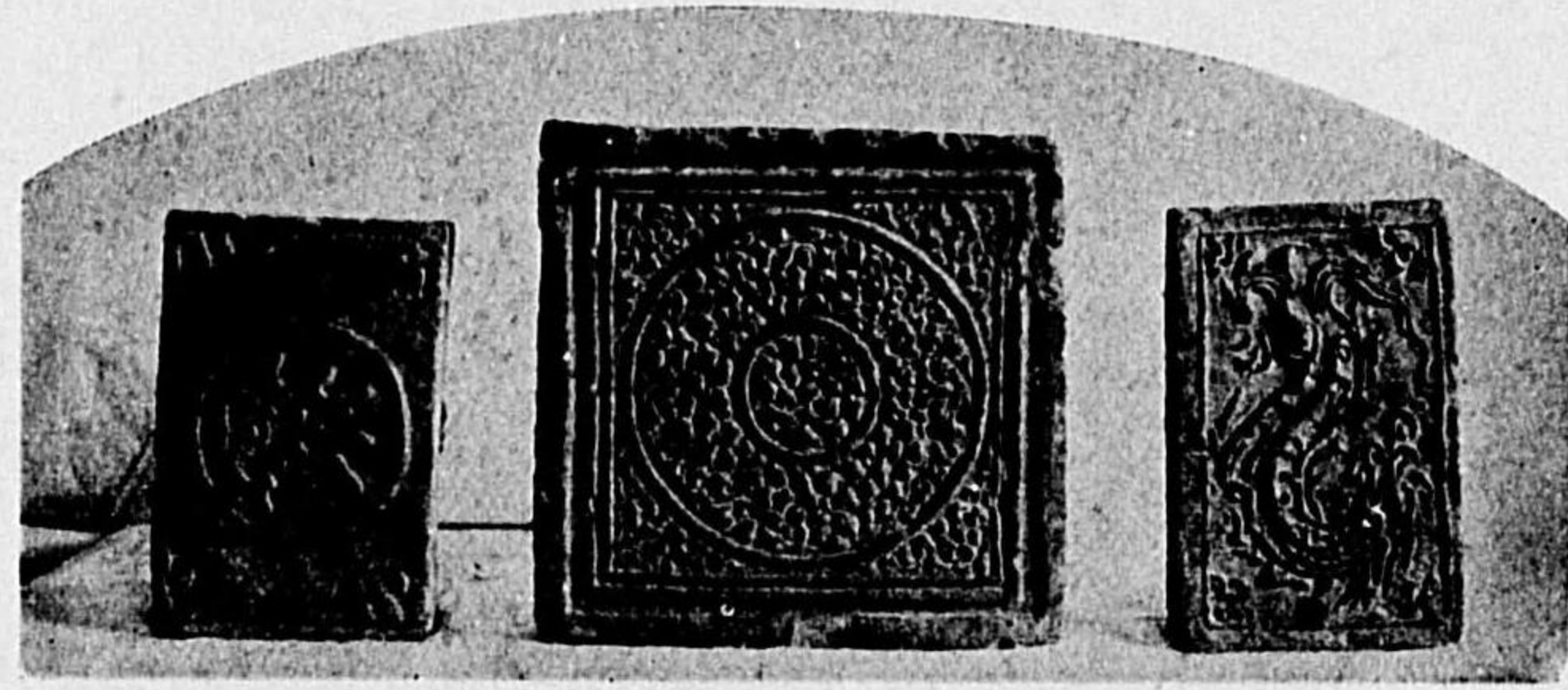
(19) 圖 附 築 建 教 回



飾裝井天穹穹り院學イタフカ・アニコ亞細亞小 圖八四〇一第

(3) 圖附瓦古の掘發城故磊大南安

第一〇五五圖



第一〇五六圖
裝飾瓦

第一〇五七圖
裝飾瓦



(2) 圖附瓦古の掘發城故磊大南安

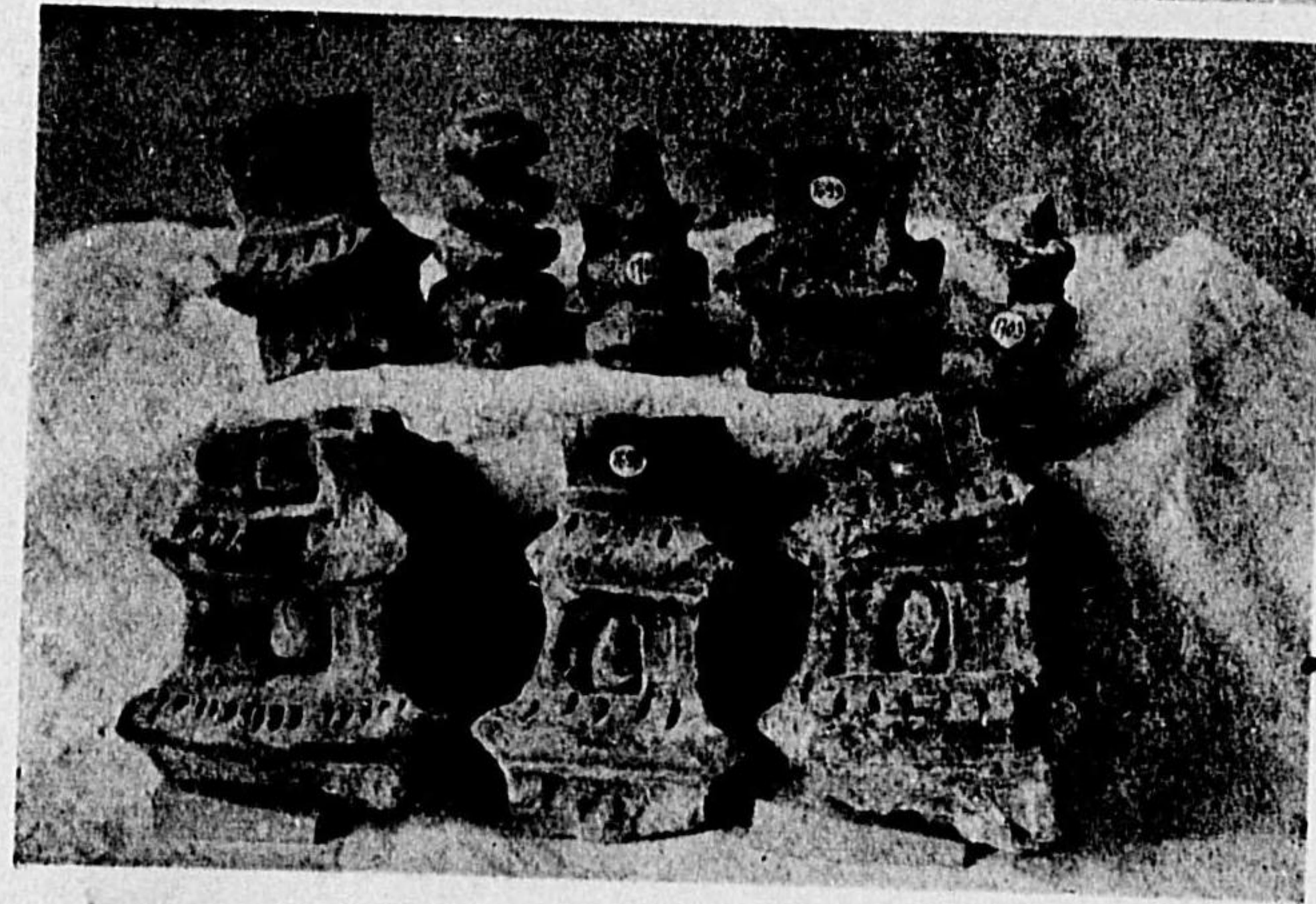
第一〇五二圖
道海形平瓦

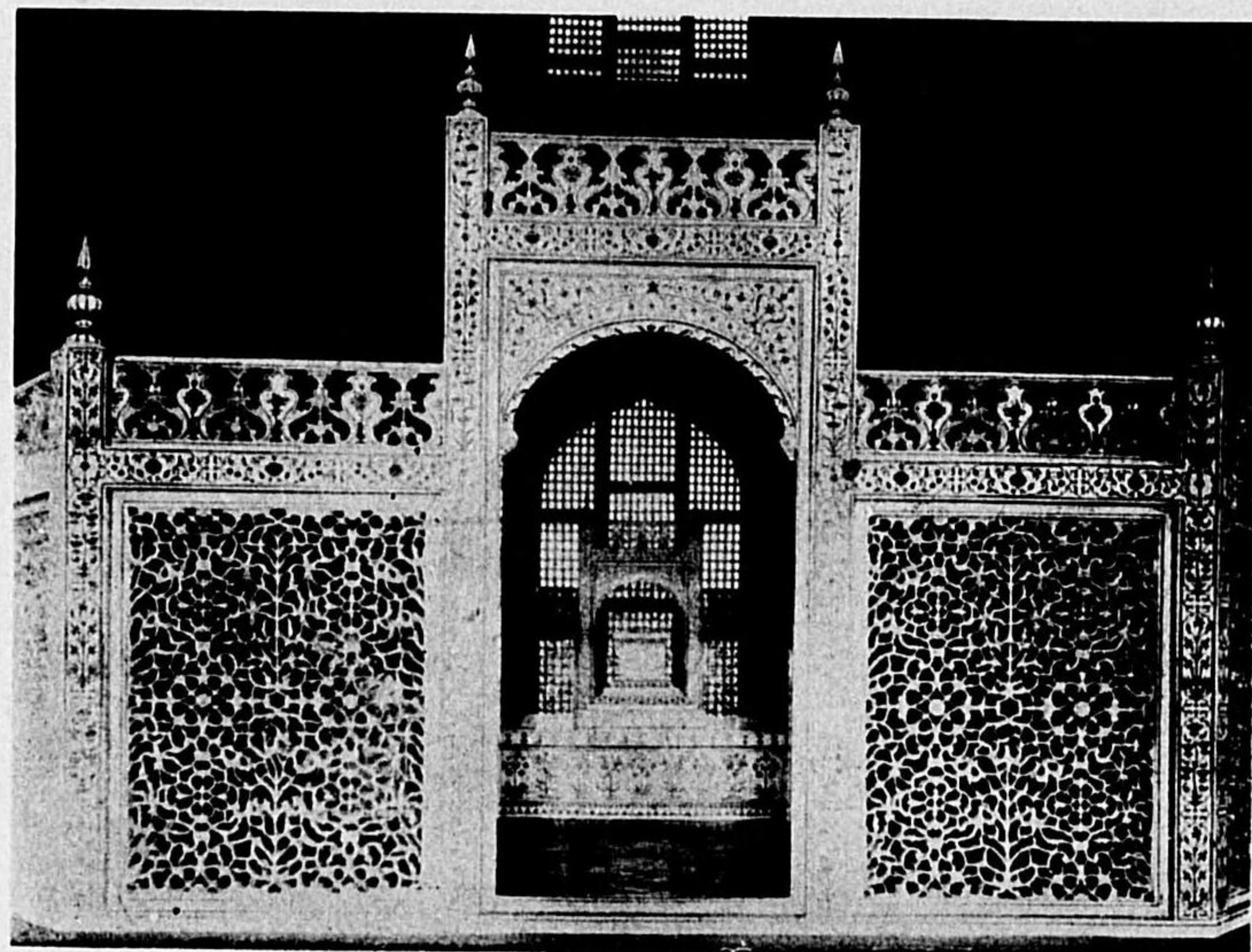


第一〇五三圖
瓦

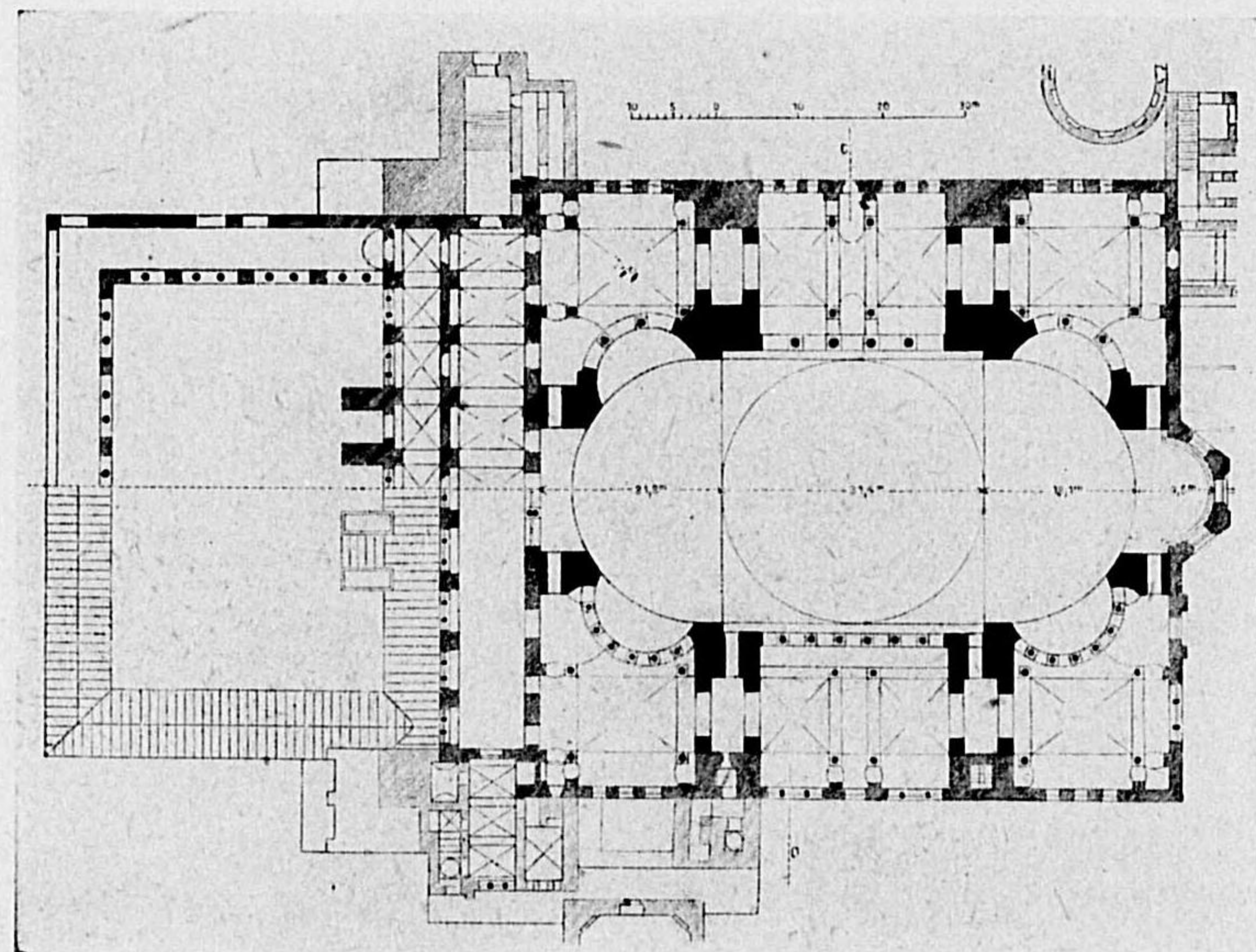


第一〇五四圖
小塔

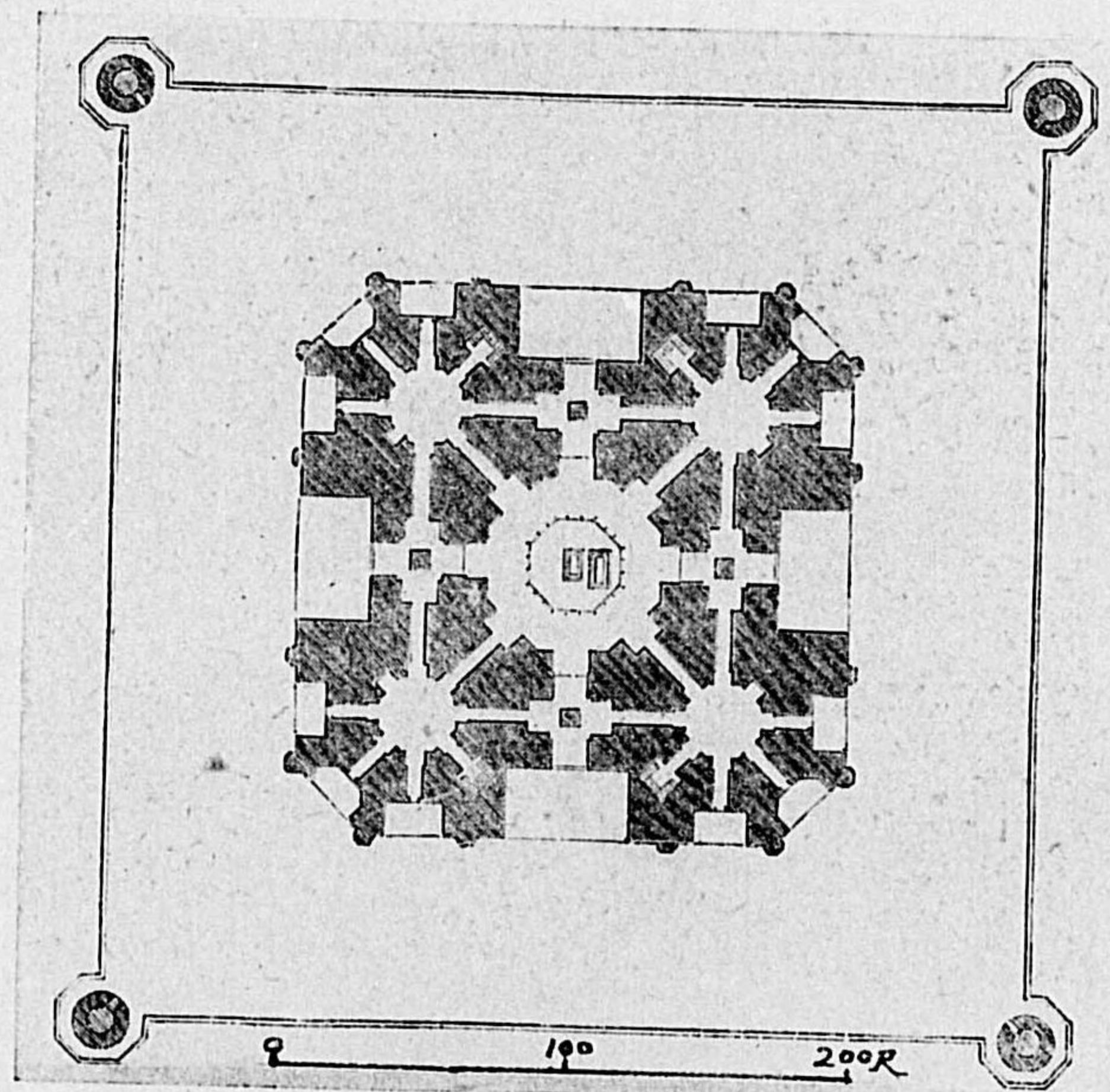




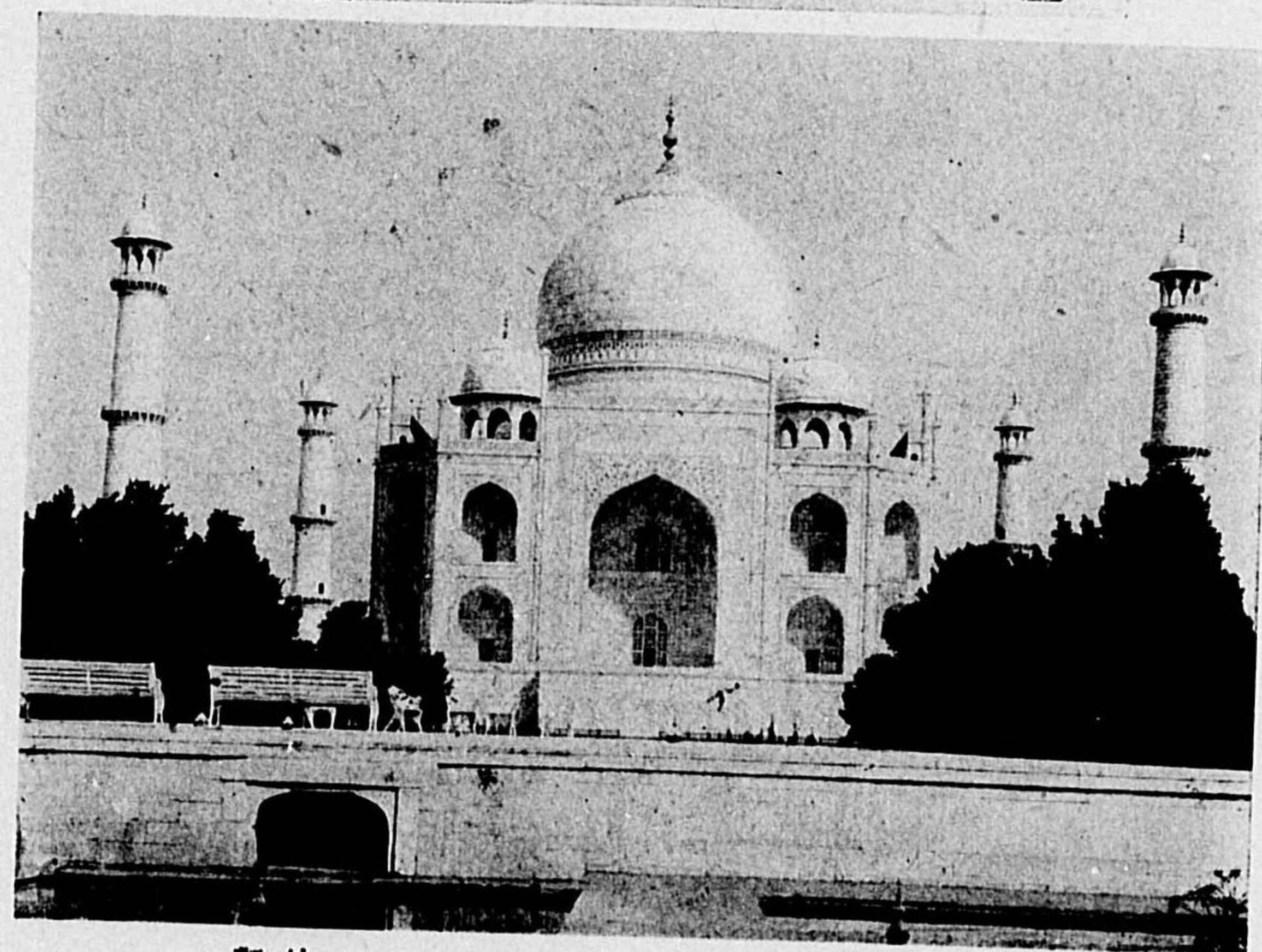
第一〇六〇圖 ター・ハマ・ジータ内陣石棺



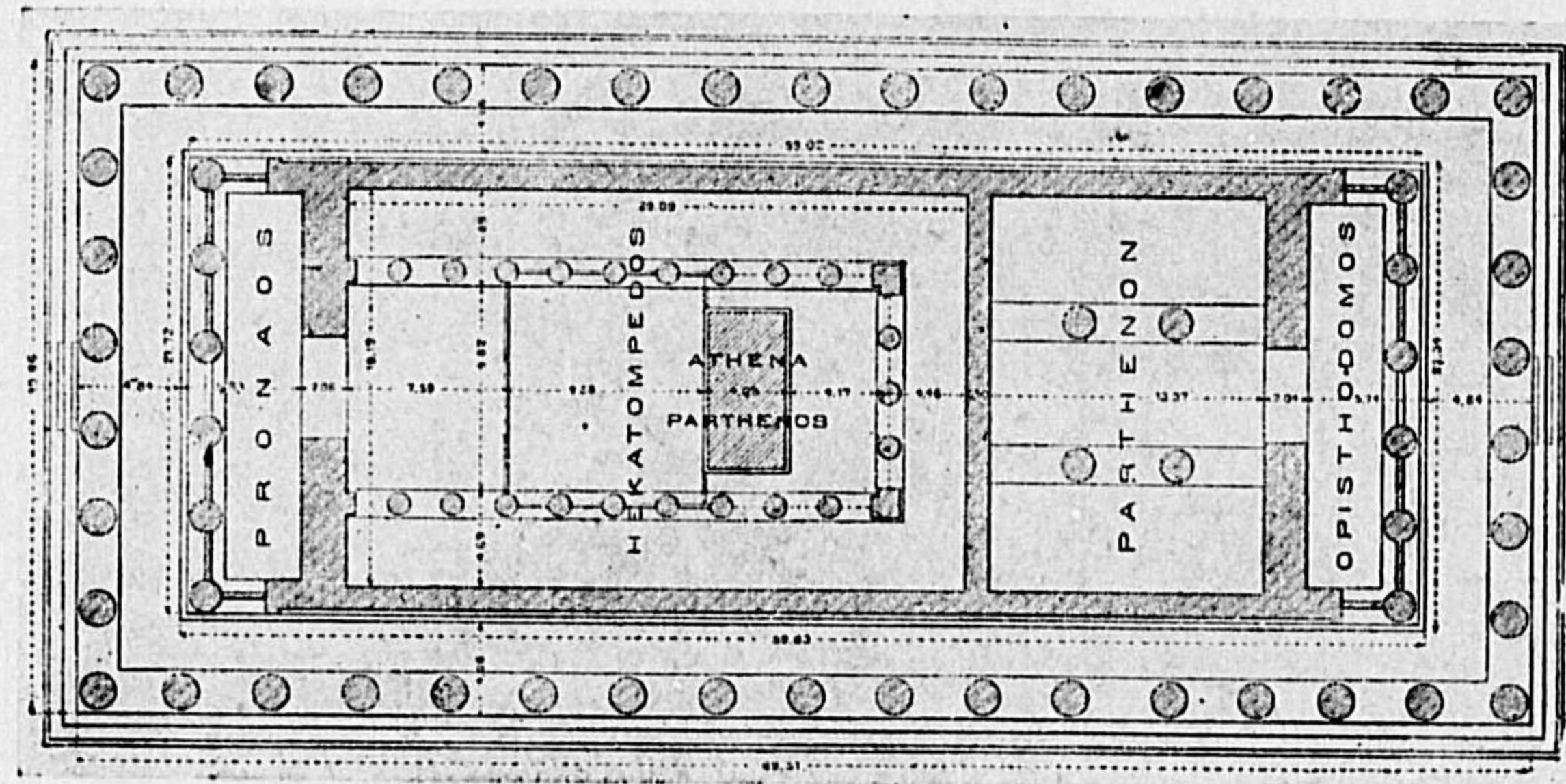
第一六一六圖 アヤソフン平面圖



第一〇五八圖 ター・ジ・マハール平面圖



第一九五C圖 ター・ハマ・ジータ外観



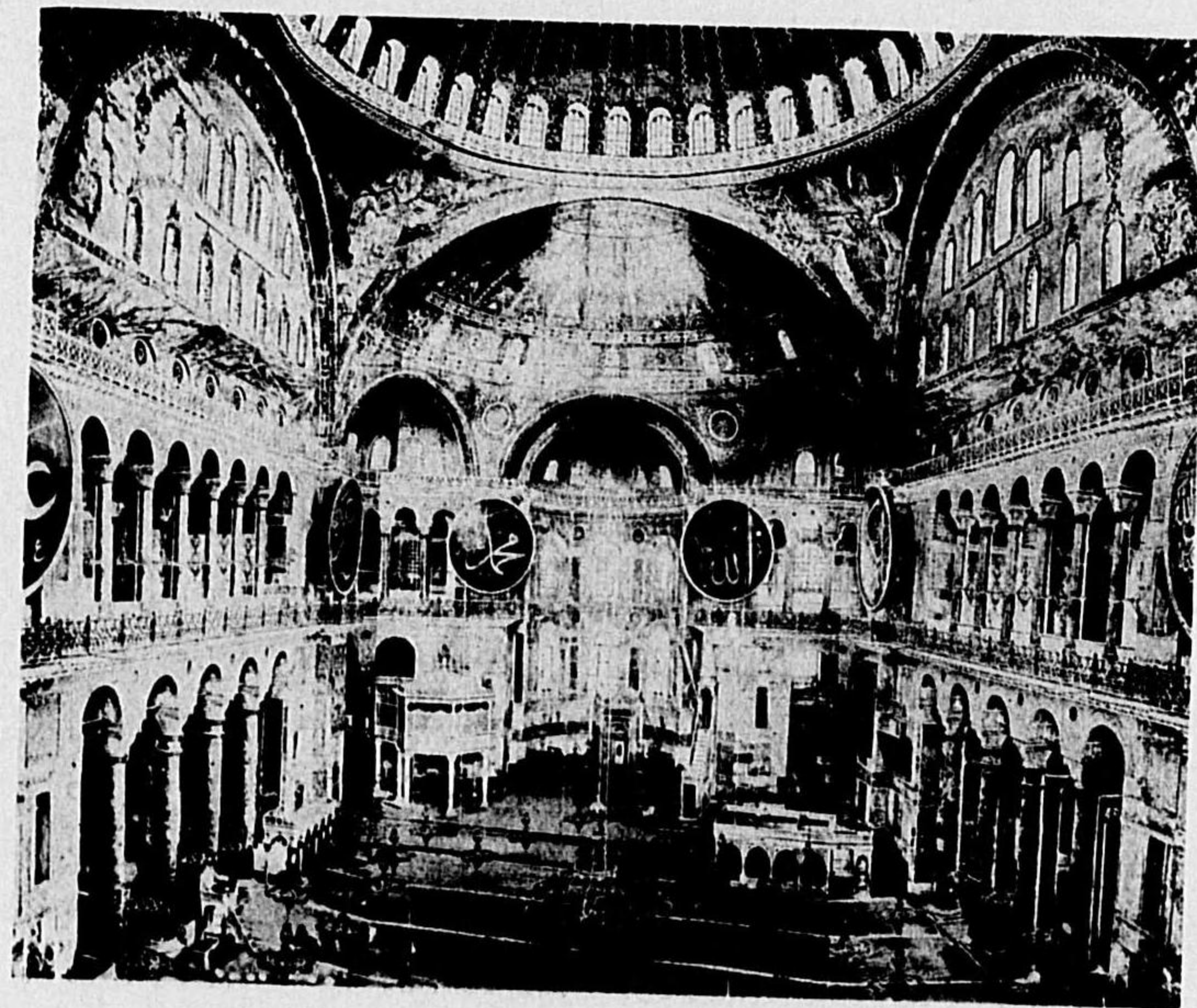
第一〇六四圖 パルテノン平面圖



第一〇六五圖 パルテノン外観



第一〇六六圖 アヤソフィヤ外観



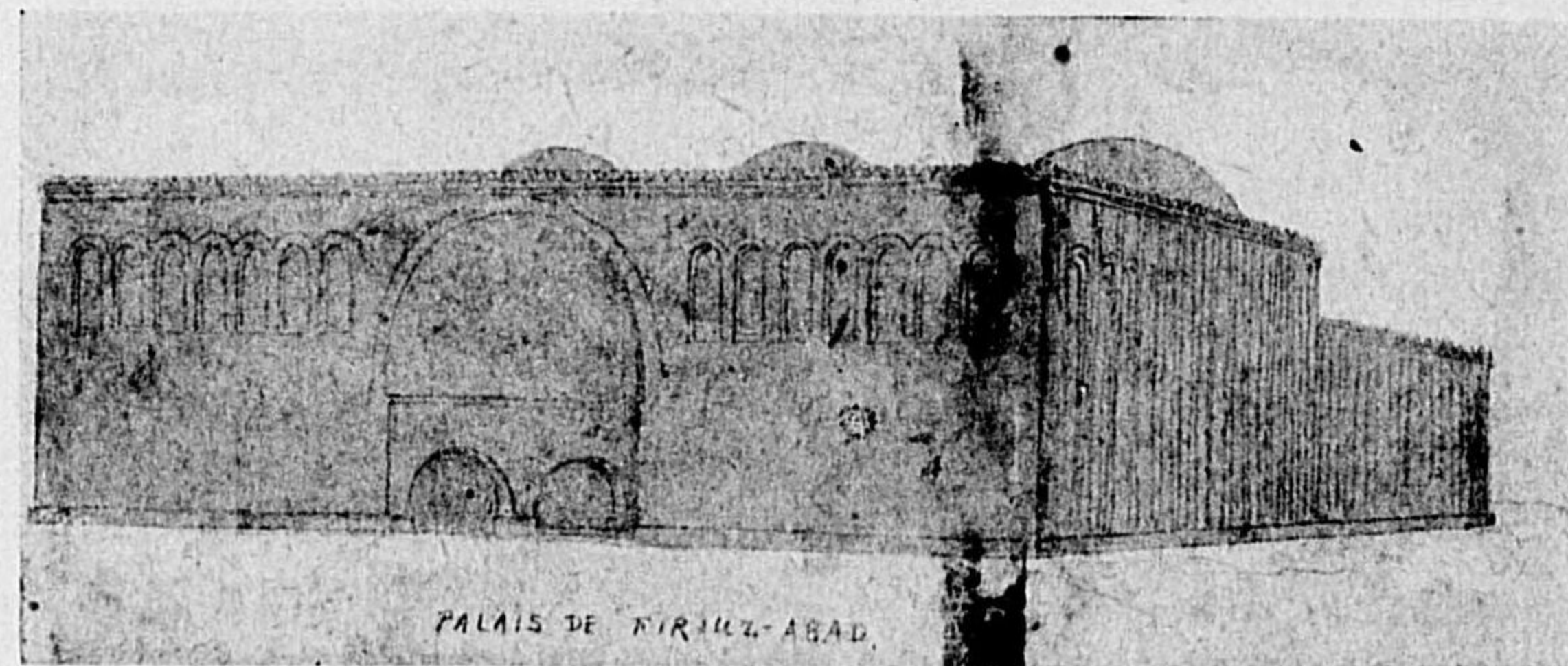
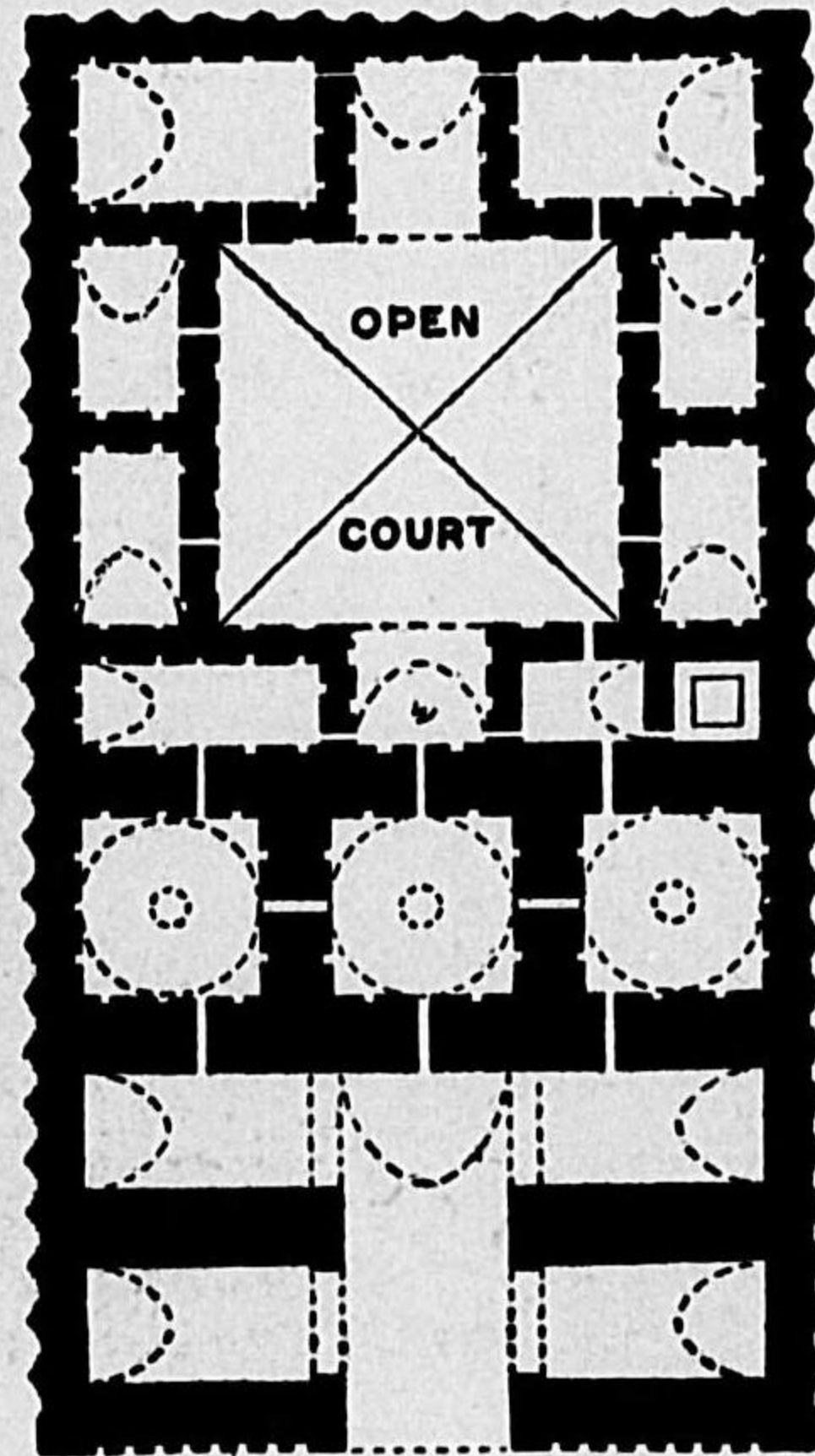
第一〇六六圖 アヤソフィヤ内部

(2) 圖附築建珊薩



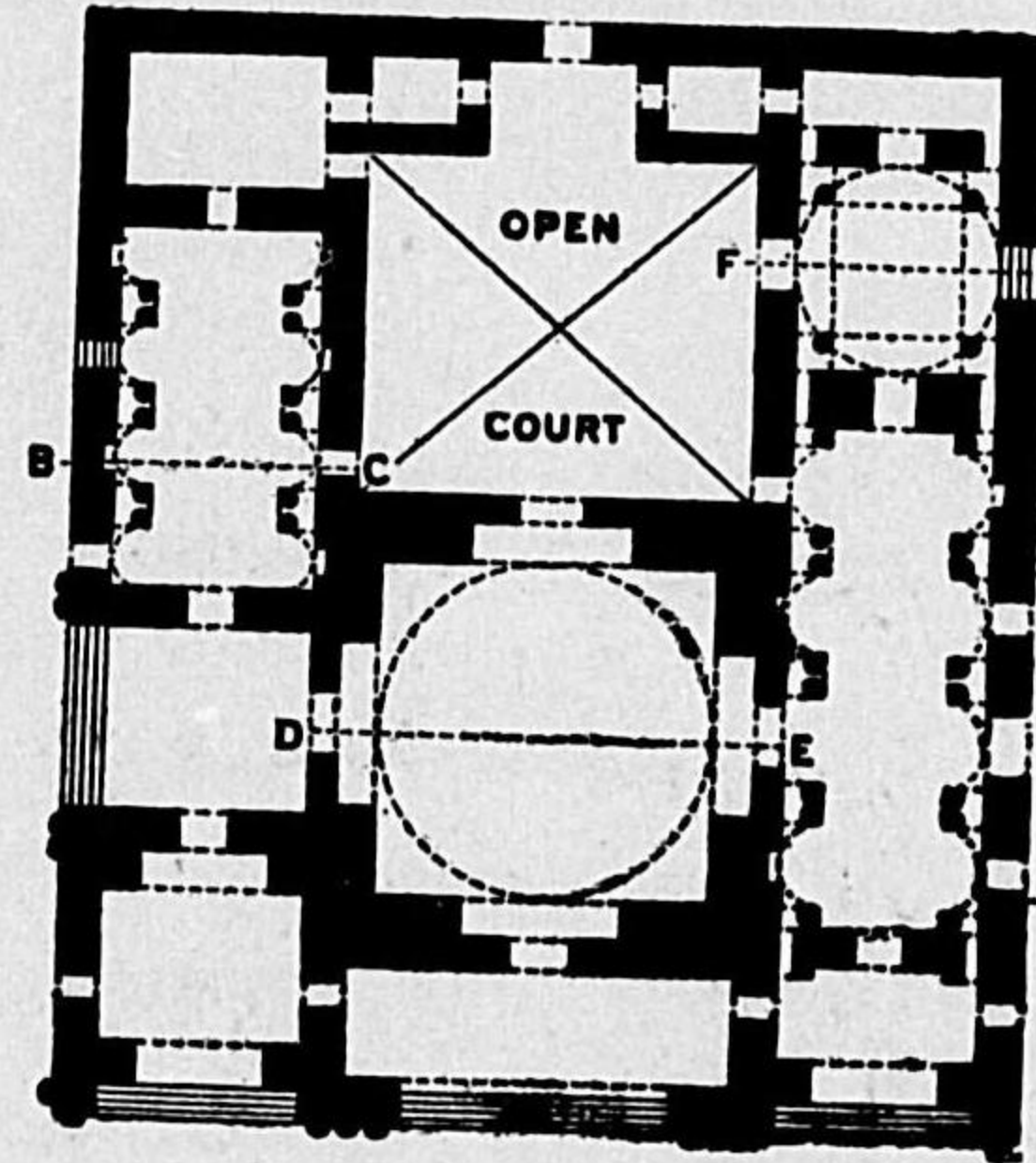
↑ 圖〇七〇一第
ドーバザルイフ 斯波
址廢の殿宮のヅルイフ

圖九六〇一第 ↓
のヅルイフ ドーバザルイフ 斯波
圖面平殿宮



(圖原復) 觀外上. 同 圖一七〇一第

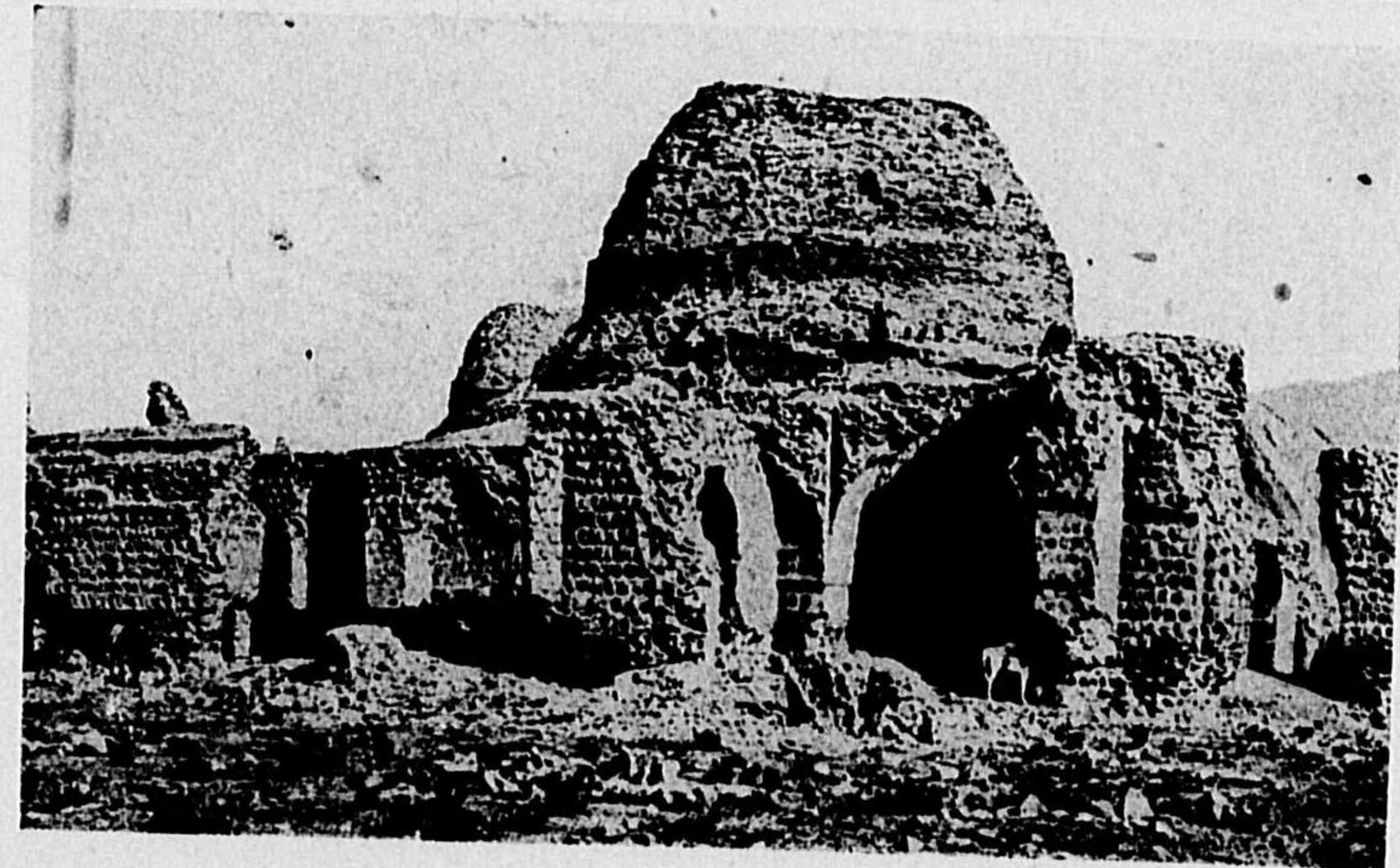
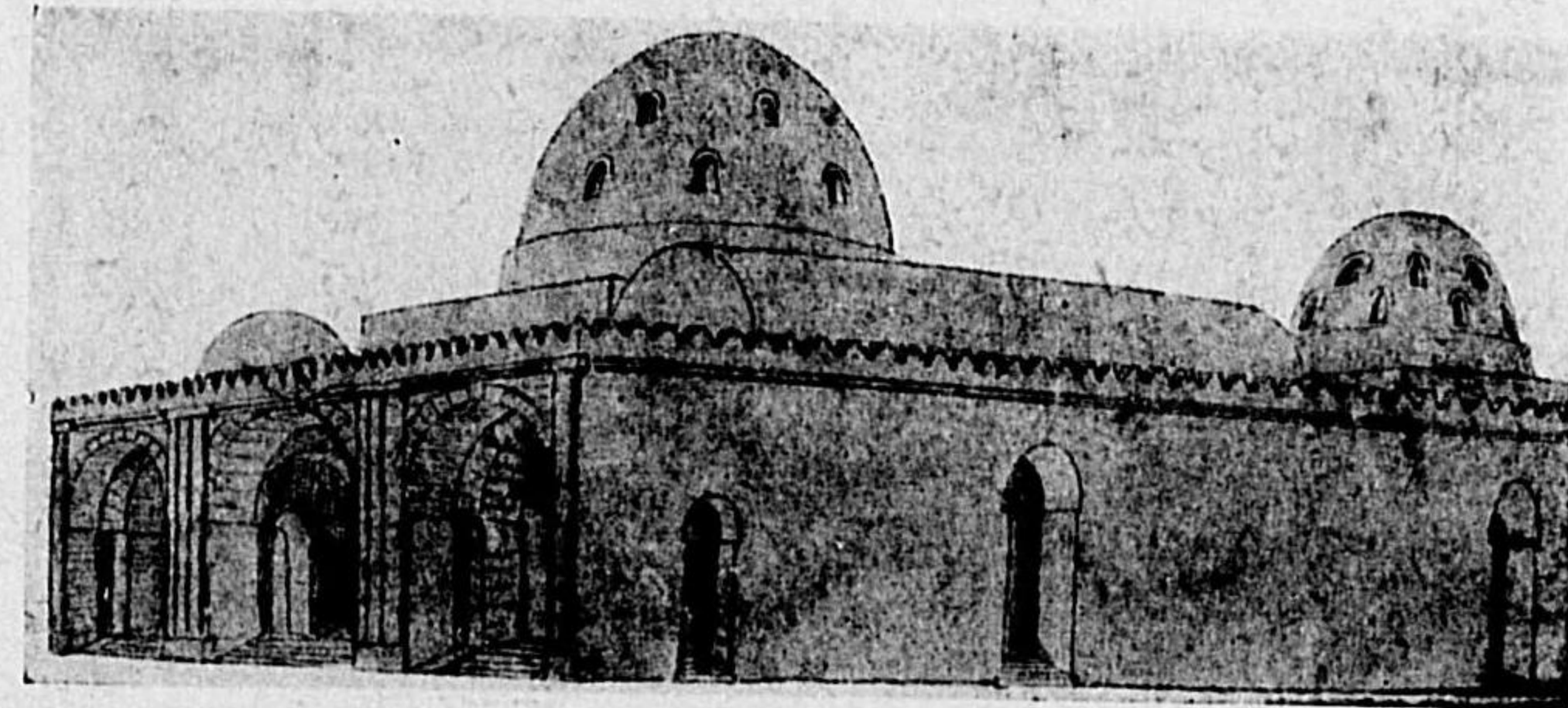
(1) 圖附築建珊薩



(上)
タスビルセ 斯波 圖六六〇一第
圖面平殿宮の世二第ルボサ・ン

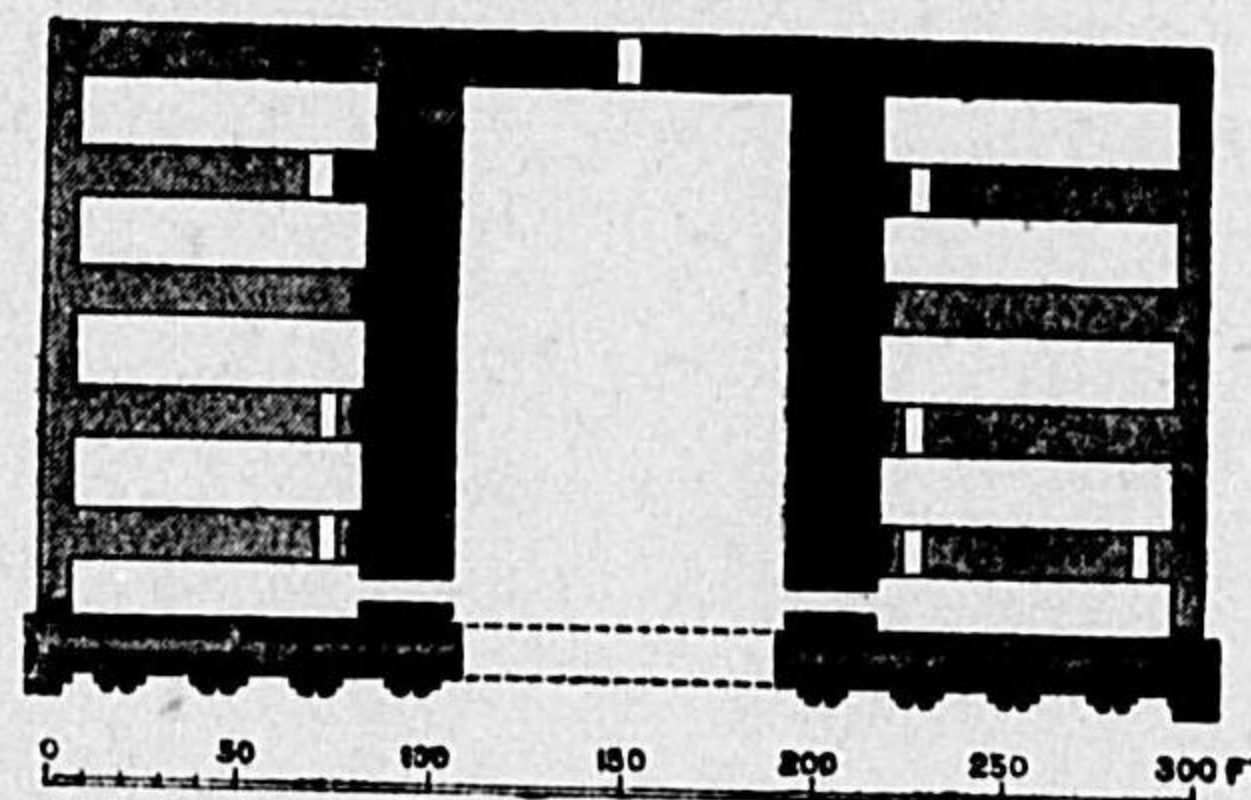
(中)
(圖原復) 觀外上同 圖七六〇一第

(下)
址廢上同 圖八六〇一第



欠

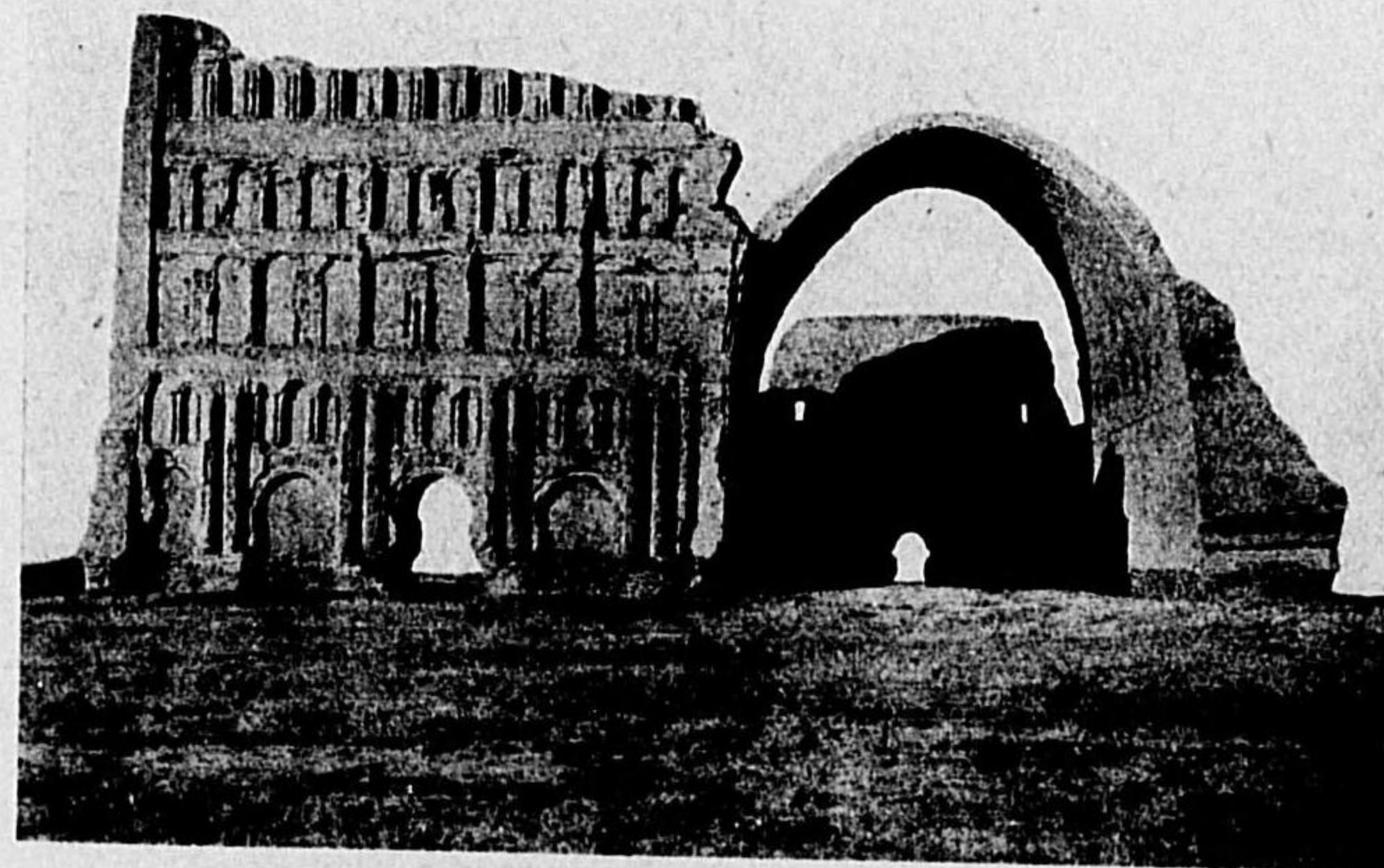
(3) 圖 附 築 建 珊 薩



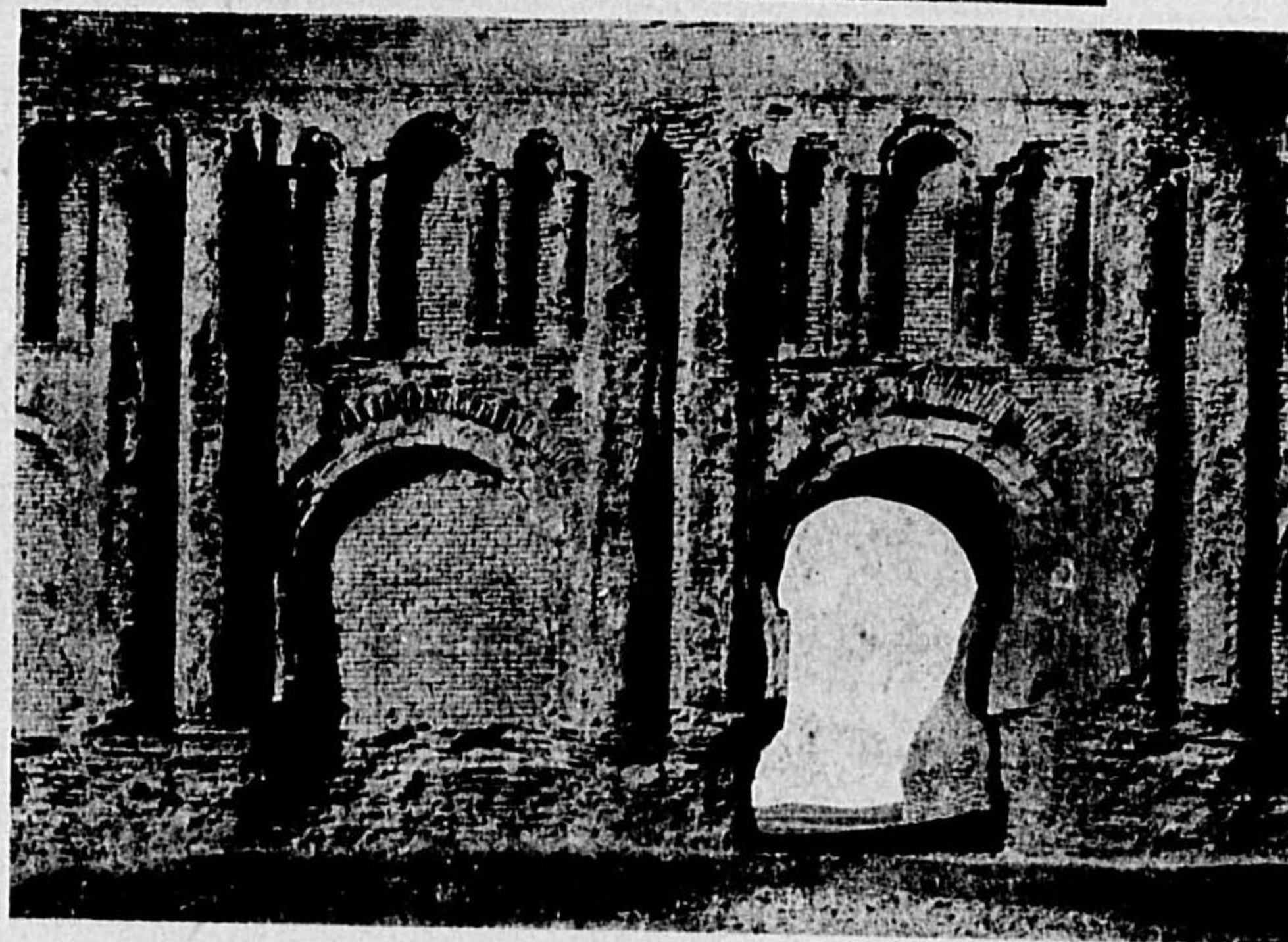
← 圖二七〇一第

スニロスホ・ンオシテク國クライ

圖面平址遺の殿宮の世一第



← 第一〇七三圖 同上廢址



→ 第一〇七四圖 同上廢址外壁の一部

欠

凡 例

997
180

- 一、本書は、「日本建築の研究」「見學紀行」「論叢・隨想・漫筆」と共に、曩に伊東忠太建築文獻編纂會に於て編纂せられた「伊東忠太建築文獻」全六卷中の二卷である。
- 一、上卷は、中華民國並に滿洲國に關するもの十一篇を以て編纂し、下卷は、佛領印度支那以西に關する論文十一篇を以て纂輯した。下卷々頭に採録せる「東洋藝術の系統」と「東洋建築史概説」とはその總論とも稱すべきものである。
- 一、就中「東洋建築史概説」は曾て「世界美術全集」の數卷に亘つて發表せる論文を整理せるもので、原文の標題をそのまま各項の見出しとして掲げ、これを西から東へ地理的に排列した。
- 一、タージ・マハール、アヤソフイヤ、パルテノンに關する論文は、都合上割愛したが、その平面圖及び建築物の寫眞は参考のため下巻口繪中に掲載しておいた。
- 一、圖版の上部には、當該論文の標題を掲出して兩者の連繫を示しておいたから、本文播讀に方つてその圖版を参照せらるれば幸ひである。
- 一、本書の圖版番號は、曩に發行せられた「日本建築の研究」(所載圖版自一圖至三三三圖)からの追番號で

凡 例

凡 例

ある。随て本文中に、本書所載圖版(自三七四至一〇八一圖)以外の番號の記載あるものに就いては、爾餘の四卷を参照せられたい。

昭和十八年七月

著 者

伊東忠太 建築文獻 東洋建築の研究(下)目次

東洋藝術の系統

(一一—一六)

一 序 言	三
二 藝術系統圖表	四
三 藝術波及の原則	六
四 東洋三大藝術の起點	八
五 西 亞 系	一〇
六 印 度 系	一一
七 支 那 系	一三
八 希 臘 系	一三
九 薩珊波斯及び東羅馬系	一六
一〇 回 教 系	一七
一一 波斯部の一(西亞及びコフテック)	一八

目 次

◇圖版目錄◇ 自七二圖 至一〇二圖

七二圖	サーンチーの大塔北門
七三圖	アブー山テジャールパラー廟
七四圖	印度バジヤの支提前面
七五圖	同パールフット玉垣の一部
七六圖(甲)	エル・ボルデニ寺の禮拜龕
七六圖(乙)	グジャラーラト式裝飾文様
七七圖	佛陀伽耶の大塔
(以上玻璃版口繪)	
七八圖	印度式尖拱圖
七九圖	同上
八〇圖	ハヴェル氏説の印度建築柱
八一圖	印度古建築に残る柱四種
八二圖	建築の細部に現れたる印度信仰の表象
八三圖	鹿野苑の古址
八四圖	印度塔の原型
八五圖	亞育王石柱
八六圖	亞育王石柱の柱頭三種
八七圖	パールフット玉垣の一部
八八圖	サーンチーの大塔

一

東洋建築の研究(下)

二

一 亞細亞に於ける希・羅系藝術……………三

二 初期サラセン建築……………三

三 サラセン建築……………三

四 マウル建築總説……………三

五 突厥民族の藝術……………三

六 莫臥兒朝の印度建築……………三

七 古代極西亞細亞建築……………三

東洋建築史概説

(一〇一—一〇八)

八 薩珊建築總説……………三

九 北シリア建築總説……………三

一〇 印度建築の發生と發達……………三

二 印度教建築總説……………三

三 ガンダーラ藝術總説……………三

三 耆多朝以前の印度建築……………三

四 耆多朝及び其の以後の印度佛教藝術……………三

五 緬甸建築總説……………三

六 暹羅建築總説……………三

七 カンボジア建築總説……………三

八 チャム建築總説……………三

九 ジャヴァ建築總説……………三

一〇 安南建築總説……………三

一一 西藏建築總説……………三

印度建築史

(一〇九—一二二)

目次

七三〇圖 鹿野苑の大塔表面の文様

七三一圖 佛陀伽耶の供養塔

七三二圖 各種精舎平面圖

七三三圖 ベドサの精舎

七三四圖 ナーシクのナハバナ精舎

七三五圖 同上ゴータミプトラ精舎

七三六圖 アジャンタ石窟配置圖

七三七圖 同上第二號精舎

七三八圖 同上窟内文様

七三九圖 エローラのチンタル

七四〇圖 チンタル第三層佛像

七四一圖 支提の平面圖五種

七四二圖 テールの支提

七四三圖 ロマス・リシ窟の入口

七四四圖 ベドサの支提前面

七四五圖 同上内部

七四六圖 ナーシクの支提前面

七四七圖 同上内部

七四八圖 アジャンタ第十號支提内部

七四九圖 カールラの支提前面

七五〇圖 同内部 七五〇圖 同柱

七五一圖 カネリの支提内部

七五二圖 アジャンタ十九號支提内部

七五三圖 同上二十六號支提内部

七五四圖 エローラ犀首羯摩支提前面

七五五圖 同上内部

七五六圖 ルソソウエリ塔平面圖

七五七圖 同正面 七五八圖 同下部

七五九圖 無畏山の塔

七六〇圖 祇園寺の塔

七六一圖 ツバラマの塔

七六二圖 イスラムニの塔

七六三圖 ランカラマの塔

七六四圖 ミヒンタレの塔

七六五圖 マハーウイハラの遺址

七六六圖 佛牙殿の遺址

七六七圖 同上平面圖

七六八圖 菩提樹院入口

七六九圖 セイロンのボクナ(貯水池)

七七〇圖 ランコット塔

七七一圖 ワツテ・ダゲ

七七二圖 ガル・ウイハラ

七七三圖 祇園寺

七七四圖 ヘツチ・ウイハラの平面、

七七五圖 断面圖

七七六圖 同側面 七七七圖 佛牙殿

七七八圖 サイト・マハール・ブラサダ

七七九圖 カンデー佛牙殿

七八〇圖 ガンダーラの柱頭

七八一圖 同上

七八二圖 バトナ出土柱頭

七八三圖 アリ・マズジッドの塔

緒言

第一章 總論 一一

第一節 國土 一一

第二節 民族及び歴史 一四

第三節 宗教 一七

第四節 建築の發生と發達 一九

第五節 印度建築の特性 二三

第二章 佛教建築 二四

第一節 總論 二四

第二節 印度本部 二九

 其の一 石柱 三〇

 其の二 門 三三

 其の三 玉垣 三三

 其の四 塔 三五

 其の五 ヴィハラ 三七

 其の六 支提 四二

七三圖 マンキアラの塔

七四圖 同上細部

七五圖 タキシラのクナラ塔

七六圖 タキシラの雀離塔所屬の小塔

七七圖 タキシラのヒラ・モラー

七八圖 ヅ精舎中庭の小塔

七九圖 信度地方ダウラトプール附近の塔

八〇圖 タクチ・パハイの精舎平面

八〇圖 同上現狀

八一圖 七九圖 健駄羅彫刻殘片

八二圖 迦濕彌羅建築細部の手法

八三圖 マルタンド祠堂平面圖

八四圖 同全景 八二圖 同正面

八五圖 同上廻廊内面

八六圖 パイエッチの祠堂

八七圖 パンドレタンの祠堂

八八圖 パニヤルの祠堂

八九圖 タダークのレーの寺院

九〇圖 五臺山極樂寺の塔

九一圖 北京紫禁城永安寺の塔

九二圖 同上寶華殿内の小塔

九三圖 ラダークのレー市全景

第三節 錫蘭

其の一 アヌラダプラ時代 一五

其の二 ポロンナルワ時代 一五

其の三 カンデー時代 一六

第四節 健駄羅

其の一 地理と歴史 一五

其の二 健駄羅建築の特性 一六

其の三 健駄羅の窠塔婆 一六

其の四 健駄羅の精舎 一六

其の五 健駄羅彫刻 一六

第五節 迦濕彌羅

其の一 總説 一七

其の二 實例 一七

第六節 西藏

其の一 總説 一七

其の二 塔 一七

目次

次

八三圖 同アルチのスム・ツアゲ寺

八四圖 同レーの王宮の狻猊門

八五圖 ラハサ布達拉の嚩囉喇嘛の伽藍

八五圖 同上平面圖

八六圖 熱河離宮の布達拉廟

八七圖 札什倫布伽藍

八八圖 北京西黃寺嚩囉喇嘛廟

八九圖 蒙古陶代屯の喇嘛廟

九〇圖 北京黃寺班禪喇嘛の墓

九一圖 八寶の圖

九二圖 ネパール、バタン市大街

九三圖 同バトガオン、デヴィ・バウアーニー廟

九四圖 バガンの古塔

九五圖 バガン、ガウダバリン塔

九六圖 ランゲリン、シユウエダゴ

九七圖 ン正面の獅子

九八圖 同シユウエダゴ塔

九九圖 同上基部

一〇〇圖 同上バイヤサット

一〇一圖 ベグー、シユウエマウダウ

一〇二圖 ランゲリン、スレー塔

一〇三圖 マンダレー四百五十塔

一〇四圖 王妃院平面圖

一〇五圖 マンダレー王妃院

其の三 伽藍及び宮室……………一七九

第七節 涅槃婆羅……………一八三

第八節 緬甸……………一八五

其の一 總説……………一八五

其の二 前期……………一八六

其の三 後期……………一八七

其の四 僧房・住家……………一九〇

第九節 暹羅……………一九二

其の一 總説……………一九二

其の二 實例……………一九三

第十節 老撾……………一九六

第二節 東甬塞……………一九六

其の一 總説……………一九六

其の二 實例……………一九六

第二節 占波……………二〇〇

第三節 爪哇……………二〇六

六

一八五圖 ランゲーン僧院

一八六圖 ランゲーン王宮

一八七圖 パーモ附近の民家(平面と外面スケッチ)

一八八圖 後印度建築史蹟圖

一九〇圖 ロアプリの古建築

一九一圖 フイマイの古建築

一九二圖 アユチアの塔

一九三圖 バシコックのワット・チン

一九四圖 フラ・トンマセヂ

一九五圖 ワット・アンマ・リンの鐘堂

一九六圖 バンコック・ワット・ジュエンの佛堂

一九七圖 同ワット・スータートの僧房

一九八圖 河内東洋學院所藏の老櫓の塔

一九九圖 同上

二〇〇圖 ウイエンチャンの塔

二〇一圖 チョム・ヨンの塔

二〇二圖 バヨンの平面圖

二〇三圖 同上壁面浮彫

二〇四圖 アンコール・ワットの細部

二〇五圖 ベン・メアレアの祠堂平面圖

二〇六圖 フノンペンンの龍橋

其の一 總説……………二〇九

其の二 プロ・ブドル……………二一一

其の三 自餘の實例……………二二三

第三章 闍伊那教建築……………二二六

第一節 古代闍伊那教建築……………二二六

第二節 北方闍伊那教建築……………二二八

其の一 建築の構造様式……………二二八

其の二 實例……………二二九

第三節 南方闍伊那教建築……………二二九

第四節 近代闍伊那教建築……………二三六

第四章 印度教建築……………二三九

第一節 總説……………二三九

第二節 インド・アールヤ式……………二四三

其の一 オリッサ地方……………二四三

其の二 中印度地方及びダルワル地方……………二四五

其の三 近代式……………二四六

二〇九圖 ボ・ロメの佛寺

二一〇圖 ボ・クロンガライの佛寺

二一一圖 ヴァア・ツォンの佛寺

二一二圖 爪哇建築史蹟圖

二一三圖 (A・B) プロブドルの圖

二一四圖 プロブドル全景

二一五圖 同中央及び周圍の塔

二一六圖 プロブドルの細部

二一七圖 プロブドルの彫刻

二一八圖 プロブドル彫刻に現はれたるスツーパー及び佛具類

二一九圖 チャンヂ・メンドット

二二〇圖 チャンヂ・ジャパン

二二一圖 チャンヂ・ロロ・ジョケラン

二二二圖 チャンヂ・ショウの平面圖

二二三圖 チャンヂ・バナタラン

二二四圖 ウダヤギリのラ・ニグムファ

二二五圖 同上ガリネサ・グムファ

二二六圖 カンダギリのアナンタ・グムファ

二二七圖 マトラ發見ジャイナ教所屬の石彫

二二八圖 同上石欄

二二九圖 エローラ第三十一窟インドラ・サプハ

二三〇圖 闍伊那教本殿拜殿の断面及

其の四 非宗教建築……………二四〇

 第三節 チャルキア式……………二四二

 其の一 總説……………二四二

 其の二 實例……………二四四

 第四節 ドラヴィダ式……………二四九

 其の一 總説……………二四九

 其の二 初期……………二五二

 其の三 後期……………二五五

 其の四 非宗教建築……………二六〇

佛領印度支那

(二六一—二六六)

一 緒言……………二六五

二 地理……………二六六

三 歴史……………二七〇

四 航路……………二七二

五 各種建築と風俗……………二七三

八

八七九圖 び平面圖

八八〇圖 闍伊那教本殿天井伏の圖

八八二圖 闍伊那教建築特殊の手法

八八三圖 バリタナ、アーチナート祠

八八四圖 堂

八八五圖 ギルナル山、ネミナート祠

八八六圖 同上、ウエストツバーラの祠

八八七圖 堂拜殿の天井

八八八圖 同上、サムプラチ・ラージャ

八八九圖 祠堂廻廊の格子

八九〇圖 アプー山、維摩の祠堂平面

八九一圖 同上細部

八九二圖 同上細部

八九三圖 カジュラーハ・バルスワナ

八九四圖 祠堂

八九五圖 チットール、名譽の塔

八九六圖 チットール、勝利の塔

八九七圖 スラヴァナ・ベルゴラの巨

八九八圖 像

八九九圖 カシ・ヴィシワナート祠堂

九〇〇圖 ハチ・シンの祠堂

九〇一圖 アイホレの祠堂平面圖

九〇二圖 バタダカルの祠堂平面圖

九〇三圖 印度教建築の剝形

九〇四圖 バルスラメスワル祠堂のシ

印度建築と回教建築との交渉

(二六七—三〇八)

六 東洋學院……………二六六

七 安南風物……………二六八

八 占城と東埔寨……………二七〇

九 アンコル・ワット……………二八二

一〇 結尾……………二八四

一 緒論……………二八九

二 従來の印度建築の分期及び回教建築との關係説……………二九〇

三 従來の回教建築と印度建築との關係説……………二九四

四 ハヴェルの印度建築觀……………二九七

五 印・回の拱の比較……………三〇四

六 印・回の球蓋の比較……………三〇六

七 印・回の構造の比較……………三〇九

八 印・回裝飾の文様比較……………三三〇

九 結論……………三三三

九

九〇五圖 カラの細部

九〇六圖 ムクテスワルの門

九〇七圖 リンガラージ・マハーデー

九〇八圖 ヴァの本殿

九〇九圖 ラージャヤ・ラーニの壁面

九一〇圖 ジャガンナートへの平面圖

九一一圖 同上本殿

九一二圖 同上西大門

九一三圖 バロリの祠堂

九一四圖 グオリオルのテリカマンチ

九一五圖 カジュラホのカンダラヤ・

九一六圖 マハーデオ

九一七圖 エレファンタ島の窟祠

九一八圖 ビドラバンの大祠堂入口

九一九圖 ベナーレスの黄金祠堂

九二〇圖 ベナーレスの近代式祠堂

九二一圖 ラムナガルの祠堂

九二二圖 同上細部

九二三圖 シヤットトの祠堂

九二四圖 シングラム・シンの廟

九二五圖 グオリオルのマン・シンの

九二六圖 宮殿

九二七圖 マトラのサチ・ブルジ

九二八圖 アムベルの宮殿

九二九圖 イッタギの古祠

健駄羅地方の建築

(三九—四四)

- 一 健駄羅の地理及び玄井の行程……………三二
- 二 健駄羅寺塔の遺址……………三二
- 三 健駄羅建築の性質……………三三
- 四 健駄羅建築の起原及び年代……………三四
- 五 健駄羅建築の影響範圍……………三六

祇園精舍圖とアンコル・ワット

(三五—四〇)

- 緒言……………三七
- 第一章 祇園精舍の由來及び歴史……………三六
- 第二章 所謂祇園精舍圖と稱するものにして……………三七
- 第三章 島野兼了の祇園精舍圖……………三八
- 第四章 アンコル・ワットの歴史……………三九
- 第五章 島野の圖とアンコル・ワットの對比……………四〇
- 結論……………四〇

- 九一八圖 ハナムコンダの大祠堂
- 九一九圖 同上内部
- 九二〇圖 ウオランガルのキルチ・スタンバ
- 九二一圖 ハナムコンダ及びウオランガルの建築細部
- 九二二圖 ベルールのウイシタ祠堂平面圖
- 九二三・九二四圖 同上壁部の細部
- 九二五圖 ハレビッドのケタレシユルの細部
- 九二六圖 ハレビッドのホイサレシユル
- 九二七圖 同上壁面彫刻
- 九二八圖 同上基壇彫刻
- 九二九圖 ハレビッドのホイサレシユル柱の断面
- 九三〇圖 同上細部
- 九三一圖 ダルソルの古祠の内部
- 九三二圖 マーメラグラムの石寶殿
- 九三三圖 同上、アレソ祠堂
- 九三四圖 カイラーサの平面圖
- 九三五圖 同上全景
- 九三六圖 同上廻廊の内部
- 九三七圖 タンジオール大祠堂平面圖
- 九三八圖 同上第二門

安南大磊故城發掘の古瓦

(四七—四四)

- 一 大磊の遺跡……………四九
- 二 大磊の年代……………四〇
- 三 古瓦の種類及び性質……………四二
- 四 安南藝術の系統……………四三

回教建築

(四五—四六)

- 緒論……………四七
- 第一章 回教建築の發生と其の發達……………四八
- 第二章 回教建築の特性……………四二
- 一 材料……………四二
- 二 構造……………四五
- 三 壁面裝飾……………四六
- 第三章 回教建築の種類……………四三
- 一 宗教建築……………四三

- 九四〇圖 同上本殿
- 九四一圖 スプラーミア祠堂の本殿
- 九四二圖 同上拜殿の細部
- 九四三圖 チルバル祠の第一門
- 九四四圖 同上神輿
- 九四五圖 スリランガム大祠堂平面圖
- 九四六圖 同第一門 九四七圖 同彫刻柱
- 九四七圖 同上全景
- 九四八圖 チダンバラムの祠堂内院
- 九四九圖 同上南門
- 九五〇圖 チダンバラム祠堂
- 九五二圖 マツラ大祠堂の廊
- 九五三圖 同千柱殿 九五四圖 同ゴブラ
- 九五五圖 同上平面圖
- 九五六圖 ヴェロールの祠堂の中門
- 九五七圖 クンバコナムのラムサミ祠堂
- 九五八圖 ヴェロールの祠堂のカナラムの柱
- 九五九圖 ヴイジャヤナガルの大祠堂の門
- 九六〇圖 同ウイトーバ祠堂
- 九六一圖 同上祠前の小祠
- 九六二圖 同上王宮庭園内亭子
- 九六三圖 同上王宮の象舎
- 九六四圖 マツラの王宮

二 非宗教建築

第四章 回教建築の様式

一 ムハメット以前のアラビア建築

二 アラボ・ビザンチン

三 純正回教式

四 混合回教式

第五章 回教建築裝飾

一文 様

二色 彩

第六章 細部の手法

薩珊建築

一 總論

二 各論

塔

(以上印度建築史附圖)

- 九六五圖 佛領印度支那地圖
- 九六六圖 安南人 九七〇圖 老樹人
- 九六八圖 交趾支那人
- 九六九圖 東甯塞人
- 九七〇圖 河内佛蘭西街
- 九七一圖 一柱亭
- 九七二圖 白梅の蓮派寺
- 九七三圖 道觀 九七四圖 孔子廟
- 九七五圖 安南の女優
- 九七六圖 大南皇帝の宮殿
- 九七七圖 安南明命帝の陵
- 九七八圖 安南地方の農家
- 九七九圖 占城國の遺址
- 九八〇圖 占城國ミソンの古址
- 九八一圖 安ンコル・ワット第一廊
- 九八二圖 第二廊間に在る 形廊
- 九八三圖 東甯塞の舞妓
- 九八四圖 安ンコルに於けるプライヤの石彫斷片
- (以上佛領印度支那附圖)
- 九八四圖 印度建築細部に現れたる信仰の表象
- 九八五圖 タージ・マハール

(四五五—四六二)

(四六三—五〇〇)

緒論.....四六五

第一 佛塔の由來と原型.....四六八

第二 中印度の佛塔.....四七一

第三 錫蘭の塔.....四七四

第四 緬甸の塔.....四七九

第五 暹羅及び老樹の塔.....四八五

第六 東甯塞(眞臘)、占城及び爪哇の終.....四九〇

第七 健駄羅の塔.....四九五

- 九八六圖 パールフートの玉垣の彫刻
- 九八七圖 同上 九八八圖 支那五塔寺
- 九八九圖 印度拱の手法發達圖
- 九九〇圖 印度球蓋發達圖
- 九九一圖 埃及球蓋の幾何文様(十五世紀)
- 九九二、九九三圖 關伊那教建築に現れたる幾何文様(アブ山)
- 九九四圖 莫臥兒朝に現れたる幾何文様(ムハメッドガウスの墓)
- 九九五圖 回教建築に於ける窓十二種(以上印度建築と回教建築との交渉附圖)

- 九九六圖 パールフート玉垣の浮彫(祇園精舎の緣起)
- 九九七圖 天竺様悉曇伽藍平面圖
- 九九八圖 給孤獨園圖
- 九九九圖 鳥野兼了の祇園精舎見取圖
- 一〇〇〇圖 宋元時代の眞臘
- 一〇〇一圖 安ンコルの古址
- 一〇〇二圖 安ンコル・ワット平面圖(ガルニエーに依る)
- 一〇〇三圖 安ンコル・ワット平面圖(フアーガッソンに依る)
- 一〇〇四圖 安ンコル・ワットの前景

東洋建築の研究(下)目次終

東洋藝術の系統

東洋藝術の系統

一 序 言

此のたびの啓明會主催の展覽會の意義につきましては、只今平山理事長より御聽取下さいました通りであります。私共は此の展覽會に關係いたしました上より一應皆様に今日御來會下さいましたことのお禮を上げ、同時に又私のおまゝな話をお聴き下さることについてお禮申上げます。

今回の展覽會の出品目録は、お手許に印刷物としてお廻ししてある筈ですが、琉球、朝鮮、中央アジア、波斯及び一般部と断り五部になつてをります。其の中で一般部と云ふのは少しく種類が違ひますが、其の外の四部は殆ど總て藝術品であります。而して其の四つの部門の中に含まれてをります品物の中には、参考品として四つの地方以外のものも含まれてゐるのであります。其の地方を試みに舉げて見ますと、西はエチプトより東は日本、琉球まで、殆ど總てのアジア大陸各地方に亘つてゐるのであります。事實に於きましては全アジア藝術展覽會であります。随分範圍の大きなものであります。それ等につきましては、何れ皆様がゆつくり御覽を下さることと思ひます。今日はそれ等の澤山の品目について一々お話をする時間はありません。又不可能でもありません。私のお話しようといふのは「東洋藝術の系統」といふ題であります。つまり總論のお話であります。

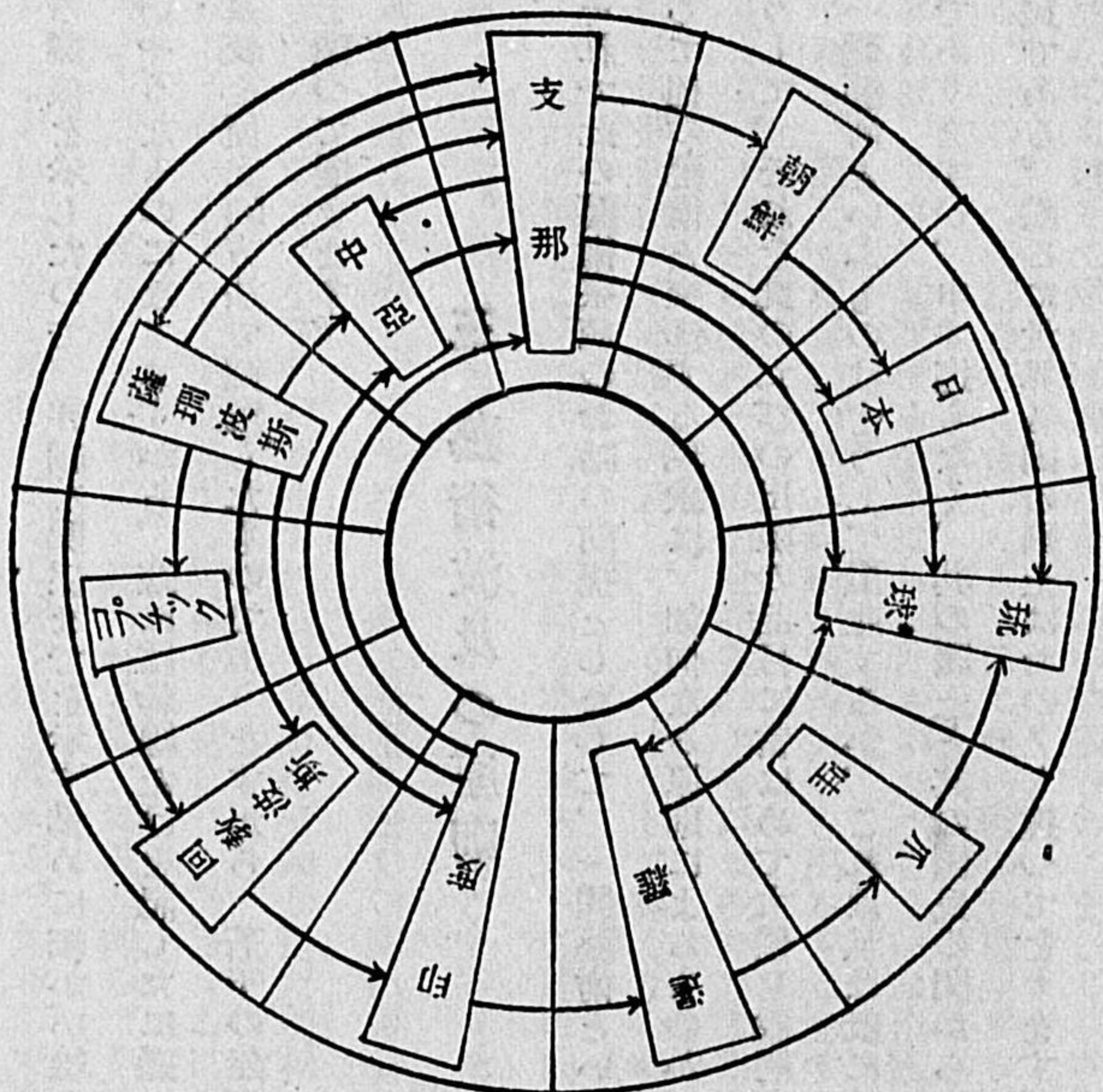
各部門の専門的の詳細なことは、其の道の専門の方々により三日間に亘つて精しいお話があるのではありませんから、私は其の總論の意味に於いて、極く簡単に大體論を申上げるに過ぎないのであります。それを豫め御諒解を願つて置きます。

二 藝術系統圖表

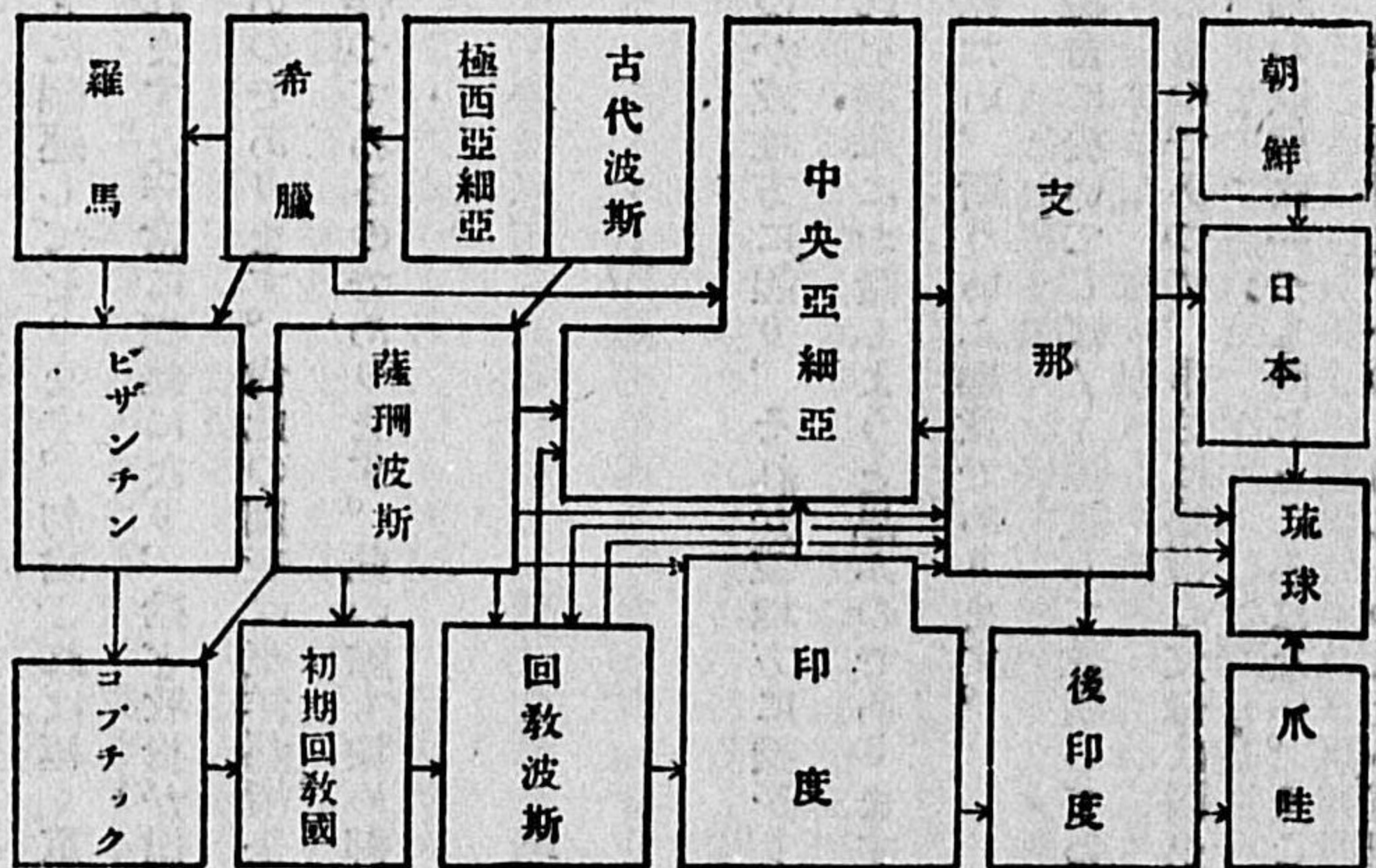
只今申しました通り、此のたびの出品の品目はエチプト以東、アジア全體に亘つてゐると申しましたが、試みにこれを地方的に分けて見ますと、次頁圖表に掲げて置きましたが、尠くもこれ程の地方が含まれてゐるのであります。それは様式から見れば、支那、朝鮮、日本、琉球、ジャヴァ、シヤム、印度、回教波斯、古代波斯及び古代西亞、コブチック、トルコ、中央アジアであります。これが地理の上でどういふ配置になつてゐるかと思はしますと、西の方から數へますとエチプトから起り、コンスタンチノールに参り、波斯全體、西トルケスタンの品物も若干あります、印度の物もあります。それからシヤム、爪哇、琉球、日本後へ戻つて中央アジア、支那、朝鮮、これだけの地方の品物が含まれてゐるのであります。結局今申しました通り、アジア全體、斯ういふ大きなことになる。それ等の各藝術は互にどういふ關係を持つてゐるか、其の系統はどうであるかこれが今日私の申上げようとする主題であります。

此の圖に東洋藝術の各様式の關係、連絡の方向を矢線で現はして置きましたが、これを細かにお話する時間は

覽會陳列品系統圖



東洋藝術系統圖



ないてゐるのであつて御覽下されば分りますが、大體に於いて斯様に互に關連してをります。勿論これは極く重要な關係を示したので、詳細な關係までを示す爲めに細かい線を入れますと非常に複雑になり、殆ど收拾が出来ないやうなものになりますから、茲には幹線だけを記したに過ぎないのであります。尙此の圖表は東洋藝術全體の系統を便宜的方法で圖解したものでありますから、若干の無理が伴つてゐるのであります。此の點も豫め御諒解を願つて置きます。

三 藝術波及の原則

それで此の藝術系統のお話の前提としまして、一體藝術といふものが或地方に起り、それが或地方に擴がり、而して他の藝術と交渉する現象は、如何なる原則によるものか、それを簡單にお話しようと思ふのであります。さうして、それを此のたびの出陳の品目に當はめて大體を説明して見たい、斯ういふ趣意であります。

一體藝術といふものはどうして發生するか、これは私は既に他の機會に於いてしばしば繰返して説明してゐるのであります。申す迄もなく、其の國土と其の國民の間から生れるものであつて、申さば藝術の父母は國土と國民である。然るに世界各國の國土はおの／＼違つてをります。土地の状態は一つも同じところはない。そこにあるところの國民も亦それ／＼違つてをります。故に世界の各地方に起る藝術は、一つも同じものはない道理であります。それ／＼違つた性質を持つてゐるのであります。併しながら其の土地と國民の状態に依つて、藝術

には自ら優劣が生じ、程度の差が生ずる譯であります。若しも其の土地が氣候も良く、土地も豊饒であり、民衆の生活にも適して居れば洵に都合の好い状態でありまして、さういふところからは美しい藝術が生れる可能性がある。此の二つが都合好く合つたところに良い藝術が發生するのであります。それが、不幸にして都合好くいかなければ、其處に發生する藝術は低級なもので、さういふ價値の乏しいものは、我々はあまり考慮しないことにしてゐる。若しも相當の力ある藝術が或地方から出るとしますと、それが波紋を描いて四方に傳播するものであります。丁度水の上に一個の石を相當の力を以て投じますと、其の投ぜられた地點を中心として波紋が起り、それが圓狀を描いて周圍に波及して行く。さうして遠くなるに従つて其の波が薄くなつて、しまひには消えてしまふ。それと同じことであつて、藝術も亦一地方から四周に向つて波及して行く。さうしてしまひには薄くなり消えてしまふ。然るに世界の地勢は平かな水とは同じではありません。さういふ／＼な障礙物がある。是に於いてそれが無窮に變化して行く。例へば一方には非常に峻しい高い山があつて交通が遮斷される。或は又涯のない沙漠のやうなものがあつて行路が絶たれる。今日は交通が甚だ便利になつて、大海でも沙漠でも突破して參りますが昔はさうはいかない。藝術の波は障礙物を避けつゝ波及するに都合の良い方向を擇んで、其の方へ擴がつて行くのであります。然るに又或他の一點に他の第二の波が起る。更に又或場所に第三の波が起る。さうするとどうなるか。これは物理學の原則に依つて其の波と波がぶつかるのであります。ぶつかつたらどうなるか。さうするといろ／＼な現象が起つて来る。もしも二つの波が都合好くうまく重なりますと、其の波の高さがずつと高くなる

ことがある。即ち藝術が高調するといふことがある。或は又其の二つの波が相消殺して無くなることもある。又は其の二つの波の何れにも似ない違つた波に變化するといふ場合もあります。或は其の波の方向が急に變つて行くといふやうなこともあり得るので、非常に複雑な現象を起すのであります。藝術も矢張り其の通りでありまして、二つの藝術が重なり合つて發達することもあり、相消殺することもあり、違つた形になることもあり、いろいろな現象が出て來るのであります。

これは天然の地理的の關係からさういふことが出て來るのであります。茲に面倒なことは人爲的の素因でありまして、人間の力でそれをいろいろに變化せしめることがあるのであります。例へば或は戰爭に因り、或は通商に因り、其の他種々なる動機から人爲的に其の波が變化されて行く。それが縦になり、横になり、織り混ぜられて非常な錯雜な難解なものになつて來ます。それを適當に解釋し、研究するのが即ち藝術史の使命とするところでありまして、これは最も興味あり、且つ最も難解な學問であるだらうと思つて居ります。

四 東洋三大藝術の起點

これは大體の藝術波及の原則とでも申してよいのであります。先程説明しました極西エチプトより、極東の日本、琉球、朝鮮に至るところの藝術は、然らばどういふ事情で、どういふ波の動き方をしたか、これが當面の問題になります。此のお話を申し上げるには少しく廻り遠いやうではありますが、先づ古來東洋に存在したところの

三つの大きな藝術の起點から説明して參ります。

東洋には、藝術の大きな起點が三つあります。東洋と申すと其の範圍は甚だ曖昧であります。姑くアジア大陸を東洋と視て置くのであります。そこには三つの大きな系統がある。それは何であるかと云ふと、年代の順に申せば、第一が西方アジア藝術、其の發祥地はメソポタミア即ちチグリス、エウフラテス流域であります。即ち此の土地が豊饒であり、氣候も甚だ温かであつて、今日は大分茫漠とした荒れた土地になつたかの如くであります。太古に於いては此の地方は極めて豊饒であつて、洵に藝術發生に都合の好い状態にあつたのであります。第二の起點は何處に在るかといふとそれは印度であります。これは御承知のシンド及びガンガの流域で、恐らくメソポタミアの沃野よりも更に都合の好い状態であるかも知れませぬ。氣候は温暖と云うよりも炎熱であり物資は豊富である。さうして水が潤澤であるために灌漑の便があり、非常に土地が穰つてゐる。此處に發生したのが印度藝術であります。第三の系統は、支那の黄河及び揚子江の流域に發生したものであります。黄河の流域は氣候は大して良くもないが、藝術の發生には決して悪い状態ではなかつた。揚子江流域に至つては氣候も良く、物資も豊でありますから、藝術の發生には都合が好かつたのであります。それが支那系統の藝術であります。これが即ち東洋の三大藝術であるが、これが同時に出來たかといふとさうでもない。今日の考古學者及び藝術史家の研究に依れば、申すまでもなくチグリス、エウフラテスの流域が一番古いのであります。其の研究を積めば

積む程古くなつて行くので、何萬年に遡るか殆ど分らないことになつて來た。印度と支那とは共に有史以來五千年と言はれてをりますが、私共の想像ではそんな新しいものではない。まだ古いものに相違ないのでありますが、遺憾ながら具體的に其の數字を擧げることが出來ないのであります。兎に角既に西曆前五千年に於て見るべき文化があつたと考へて差支ないのであります。

五 西 亞 系

アジアに於ける此の三つの大藝術の以外には特筆すべき種の藝術はなかつた。假令あつてもそれは小さい藝術か低級な藝術で、多く問題とするに足らないものであつた。なぜかといふと彼の三大藝術以外の地は、多くは荒蕪たる不毛の地であり、或は山だらけで平地のない所であり、然らざれば非常に氣候の悪い所である。さう云ふ所には藝術が發達しない。それでは彼の三つの大藝術がどういふ風に擴がつたかといふことのお話に移りますが、西部アジアの藝術はメソポタミアを中心として、圓を描いて四方に擴がらうとしたのであるが、さう注文通りにはうまく擴がらない。何となれば、西北に向つて擴がらうとすれば、希臘を中心としてこゝにヘラス民族が頑張つてゐるのであつて、彼の波と此の波はうまく調子が合つてくれないで、小アジアの内地まで行つて止つてしまつた。それでは西南はどうかといふとエチプトが控へてゐる。エチプトとメソポタミアとは類似の性質がありますが、エチプトはこれよりも先輩であります。或は先輩でない同輩だといふ人もあり、どつちか分らないが、エチ

プトが既に優先権を持つてこゝに控へてゐるのでどうもうまく調和しない。僅にシリア地方に於て兩方の妥協藝術が生れた譯でありまして、所詮西亞藝術がエチプト藝術に打勝つて、それを突破して進むといふことは出來なかつた。然るに東の方はどうであつたかといふと、此處は未開の蕃族のゐる地方で、對抗すべき藝術がなく即ち白紙である。であるから西亞藝術は勢ひ東の方に發展するのは當然であります。西亞藝術東漸といふことは地理的から出て來た當然の結果である。さうしてメソポタミアに發達した藝術はトルケスタンに入り、印度にも若干入つて來てゐる。そして其の餘波は極東にまで流れたのであります。

六 印 度 系

それから第二の印度に發生した藝術はどう擴がつたかといふと、矢張りシンド及びガンガの流域を中心として四方に圓を描かうとしたがさう注文通りに行かない。なぜなれば、南は無抵抗で押切ることが出來たが、陸地が盡きて仕舞つたので行止りの姿で自然消滅になつた。北へ行かうとすればヒマラヤといふ非常に高い山脈が屏風の如くに聳えてゐるので、往昔に於いてはそれを越すことが困難であつた。然るにビルマ、シヤム地方は比較的平地続きであるから、遠慮なしに進出したのでありまして、其の飛火は爪哇まで來てゐるのである。

さて一方北の方に向つて行つた波紋はどうしたかといふと、ヒマラヤの山麓を繞つて西部に迂回した。さうして其の餘波は中央アジア即ち露領及び支那領トルケスタンを通つて支那に入つた。これに就いて少しく説明を加

へる必要があるのであります。それは少しくお話が細かい所に涉り過りますが、印度から露領トルキスタンへ通ずる道とても決して容易な道ではない。殊にヒンヅークーシューといふ、二萬尺もある高い山脈が其の間を遮ぎつてゐる。併しながらヒンヅークーシューの山の間には比較的交通に都合の好い道が一本ある。其の道が東西交通の最も重要な線でありまして、歴史家、藝術家の最も珍重してゐるところのものである。此の峠を越へてトルキスタンのアム・ダリヤの流域に下り、これを廻つてもう一遍葱嶺の嶮を越へて、支那トルキスタンに入るのであります。可なり迂回した難儀な道であります。印度からヒマラヤを攀ち、西藏の不毛無人の地を過ぐることは更に都合が悪いのであります。即ち印度藝術が大迂回して支那に入つたのは、成るべく抵抗の少い路を求めた結果であります。此の路が當然西亞藝術東漸の路と一致したのであります。

斯くて印度藝術も亦東へ波及したが、同時に西の方へも波及した形跡がある。それは佛教弘布の目的で、遠く埃及や希臘まで進出したので、其の遺跡もほゞ徴することが出来ると謂はれてをりますが、まだ的確なることは分つてをりませぬ。

七 支 那 系

それから支那はどうかであつたかといふと、黄河、揚子江の流域に發達した漢民族藝術は、勿論四方に燃へ擴がる傾向があつたのであります。先づ東は朝鮮、日本、琉球と思ふ存分に擴がつた。其の他北は蒙古の沙漠があつ

て、燃える草がないからこつちには燃え延びないが、南は安南を通つて交趾支那の端までも來てゐるのであります。それから西はどうであるかといふと、太古に於いては西の方へは發展しなかつたやうであるが、漸く漢の時代に張騫が西域に使用してより、漢民族の勢力は西域に及び、爾來佛教傳來と共に支那西域の關係は益々親密となり、唐時代に至つては漢藝術の勢力は西亞全體に及んだのであります。當時の波斯藝術には明かに漢趣味が現はれて居り、更に遠く東ローマにまで其の影響が認められて居ります。

此の東西交渉の通路は前述の葱嶺越えで、他に適當の路はありません。西藏越えは峻嶺重疊の險阻であり、蒙古路は不毛の沙漠地で頗る困難である。結局天山南北兩路に據るの外は無かつたので、此の地方に漢藝術が扶殖されたのであります。

要するにアジアの藝術といふものは、勿論極めて錯綜したものであるが、大體に於いては所謂東漸、西から起つて東に波及する。これはアジアの地理の關係から見ても當然の結果であります。

然るにこゝに重大な問題は、以上三つの系統の外に更に他の系統がこれに干渉をしまして、此の關係を更に複雑ならしめ大波紋を描いたのであります。それは第一に希臘系の藝術であります。

八 希 臘 系

希臘系藝術即ちヘラス民族の藝術は、ペロポネス半島を中心としまして、それから四方に波紋を描いて擴が

らうとした。西の方はイタリア、シチリア島及び地中海沿岸の地方にも少し擴がつて居ります。併しながら東の方に進出することは容易でなかつた。東方進出の経路に就ては、既に白鳥庫吉博士が其の卓見を公表して居られます。其の要領を御紹介致せば、前にも言ひました通り、東の方には太古からアジア藝術が頑張つて居りまして容易に其の通過を許さない。南にはエジプトがアレキサンドリアを中心として商權を握つてゐるからどうすることも出来ない。東南はフェニキアが牛耳を取つて貿易の利を壟斷してゐる。そこで希臘人は僅に小亞細亞の西部を占有するに過ぎないので、別に東方進出の策を構する必要に迫られた。彼は東北迂回の路を求め、先づビザンチウム即ち今のコンスタンチノープル、こゝを足溜としまして、水路に由つて黒海を渡つてクリミア半島に殖民しました。此處には今日ギリシヤ人の遺跡が澤山發見されてゐる。それからアソフ海に入り、ドン河を廻り、それから極く僅く陸路を経てヴォルガ河の下流に出て、ヴォルガを下つて裏海に入り、裏海を横斷すれば即ちキルギーズの大平野となる。これを縦斷するには殆ど無抵抗で山もなければ沙漠もない、又頑強なる敵もない。即ち希臘本土からアルタイの地帯に至るまでは、大部分は水路に由つて達することが出来、其の他も全く坦々たる平地であります。希臘人が此の通路を知つてゐると思はるゝことは、彼が裏海のことをよく知つてゐたことに徴しても明かであると思はれる。ヘロドトスの書いた文獻には、裏海は縦に長い海である。南北十五日餘、東西は八日間の航海に依つて渡ることが出来るといふことが記録されてゐる。でありますから、希臘人は此の邊を通つてアジア内地に進出したことが想像される。さてキルギーズの平野を究めれば、バルハシ湖に沿つて多く峻嶺を

越ゆることなくして、直に今の新疆省の北部に入ることが出来る。希臘人の此の遠征の動機は何であるかといふと、それは支那の物資の豊なることを知つて、それを取りに來たに相違ないのであります。

希臘人は一方小亞細亞からメソポタミヤ、波斯を経て中亞に進出する計畫も企てました。しかし此の方は道も嶮阻であれば敵も多いので、容易に此の道は通れなかつたのであります。これを強行したのが即ちアレキサンダー大王で、大王の遠征は世界歴史、交通史、藝術史等に最も大なる關係を有つてゐる。此の地圖(巻頭所載)の上に黒い線で示したのがアレキサンダー大王の遠征の道筋でありまして、今の西トルケスタンのシル・ダリア河の上流まで進入し、更にヒンズークーシを越えて印度のパンジャブまで侵入しました。こゝに於いてギリシヤ藝術は一方に於いては印度系と融和して所謂希臘印度藝術を混成し、それが逆戻りして彼の葱嶺を越えて支那に波及したのであります。斯くて希臘系の藝術は裏海横斷の北路と、波斯横斷の南路と兩方から中亞に進入したものと認められ、北路は恐らくは蒙古方面に波及し、南路は今の長城以南に傳播したものと考へられます。

希臘印度系が支那に入つて來たのは、どういふ動機かといふとこれは佛教の關係で、東洋の藝術史の上に於て非常に重大なものになるのであります。此の佛教は申す迄もなく中印度に發祥し、パンジャブ地方に於いて希臘系の文化と混和し、それから例のヒンズークーシを越え、更に葱嶺を越え一路長安に向つたので、即ち唐の玄奘三蔵が渡天の路を逆に行つたのであります。玄奘以前にも此の路を通つたものが少くありません。就中東晉の法顯などは其の著しいもので、これはタクラマカンの沙漠の南を繞り、和闐を経てカラコルムの峻嶺を越え直に印

度に入つたのでこれは間道でありました。

茲に興味ある事實は、アレキサンダーの東征の路と、法顯や玄奘の西遊とが互に切り合ふ點が印度のパンジ・フ地方である。當然こゝには希臘、印度、支那等各種の藝術の混合物が出来ねばならぬ。いろ／＼な藝術の波が此處に重なり合ひ、一種特別な藝術の波がこゝに發生したのであります。それが又新しい波の中心となつて又四方に擴がつて來て、其の影響を受けたのが中央アジア、トルケスタンの一部、印度の北部等で、其餘波は支那まで入つて來たといふことになる。即ち藝術の波は幾度も繰返して同じ地方を浸すのであります。

九 薩珊波斯及び東羅馬系

今お話しました希臘系統の他に、まだ重大なものがある。それは何であるかといふと第二期の波斯藝術であります。第一期の波斯藝術はアケメニードの波斯藝術といふので、バビローニア、アッシーリアと同じ系統であります。それがアレキサンダー大王に亡ぼされた後、間もなくバルチア國即ち安息國が起り、其のバルチア國を亡ぼして再び興つた新波斯國が、即ち第二期のサ、ニード波斯即ち薩珊波斯でありまして、これは支那の後漢末から唐にかけて、文獻に波斯國と記録されてゐる。これは藝術的には天才的な民族であり、其の獨特の意匠は藝術界に異彩を放つてゐる。これが西の方に行つては東羅馬、即ちビザンチン藝術の基を成し、東の方に來ては支那に入つて活動し、それが又日本にも入つて來てゐる。一方には又印度にも影響を及ぼし、其の勢力の及ぶ處

實に廣大であります。

少し餘談になりますが、波斯人は其の國が唐の高宗の時に回教徒に亡ぼされた際、多數支那に歸化しました。或は其の前から支那の一部に殖民してゐたと認められます。其の波斯人は直接に日本と交渉があるのであります。私の承知して居ります範圍では、天平八年遣唐使が唐から波斯の醫者を連れて歸つたと云ふことがありましたが、或は唐の鑑真大和上が日本に参りました時の從者に波斯人の如實と云ふ者が居つた。その波斯人が奈良に唐招提寺の金堂を造つたといふことになつてゐる。最も天平時代の波斯は既に回教徒の領土でありましたが、前記日本に來た波斯人は薩珊波斯人の後裔であります。我が正倉院御物や東大寺の寶物に波斯式の圖案が澤山現はれてゐるのは決して偶然ではありません。

薩珊藝術はエジプトに入りてはコプト藝術の基礎を作り、それが又歐羅巴に普及して、今日に至るまで其餘波を失ひませぬ。東羅馬の美しい藝術は明かに東洋的氣分を示して居りますが、それは殆ど總て薩珊波斯から傳承したものであります。斯くて薩珊波斯と東羅馬とは骨肉の關係となり、相率ゐて東西兩洋に其の偉大なる勢力を思ふ存分に發展したのであります。

一〇 回教系

最後にもう一つある。それは回教藝術でありまして、これは薩珊波斯の後に興つた藝術で、其の發祥地はアラ

ピアにある。それからシリア、エジプトに進出し、それから波斯、トルケスタン邊の全部に波及してしまつた。さうして一方はアフリカの北海岸を傳はつてスペインまでも行つてゐる。これは藝術の力が強かつたのと地理と歴史の關係から理想的に四方に擴がつた。回教は、東洋藝術が主として東漸である現象に反しまして四方に擴がつた。西はスペインまで、東は今日ではフィリピン群島まで、南はアフリカの赤道以南まで、北はロシアの内地まで入つてゐる。分布の面積の廣いことでは回教藝術が世界第一であります。

其の回教藝術の中心は元來西亞及び埃及でありましたが、前述の次第で各地方に多數の特殊の中心が出来ました。即ち西班牙回教、波斯回教、土耳其回教、印度回教、支那回教等が其の重要なものであります。

大體に於きまして亞細亞大陸には、以上申上げた六つの藝術の系統が互に錯綜して共存してゐるといふことになる。もう一度繰返しますと、東洋に於いては元來メソポタミア平野の極西藝術、ヒンドスタン平野の印度藝術、及び黄河揚子江平野の支那藝術の三つがあつたのであります。それに交渉した外來藝術、及び内發藝術が更に三つあるのであります。それはヘラス民族のクラシック藝術、イラン民族の薩珊波斯藝術、及びアラブ族の間に發生した回教藝術でありまして、合せて六つの系統の藝術が、アジア中に縦横無盡に擴がつて居るのであります。

一一 波斯部の一 (西亞及びコブチック)

以上極く大體の東洋藝術の主要なる系統を述べたのでありますが、さて此のたびの展覽會に出陳されて居りま

す品目、それは今申しました系統の中のどれに當るかといふことを申上げて、皆様がこれ等の品目を御覽になります御参考の一端に致したいと思ふのであります。

西の方から申上げますと、エジプトに於けるコブチック藝術、これは波斯部の方に便宜上編入してあります。恐らく日本に於きましてコブチックの優秀なる藝術品が斯くの如く多數出陳されたといふことは、此のたびが始めてでないかと思ふのであります。既に御覽になつた方もあるかも知れませぬが、私は始めてと洵に珍らしく感じました。コブチック藝術は即ちコプト藝術で、コプトはアラビア語のエジプトといふことであります。エジプト藝術には宗教上三つの時期があり、古代エジプト藝術は古代宗教に屬し、次のコプト藝術は基督教に屬し、最後の回教藝術は云ふ迄もなく回教に屬するのであります。

さてコプト藝術は埃及が東羅馬の領土となり、キリスト教が行はるゝやうになつた時から、回教徒に占領されるまで、即ち西曆紀元後三百年頃から、七世紀の初に至る間の藝術でありまして、東ローマと薩珊波斯から影響を受けて發達したのであります。其の作品は御覽になりますと分りますが、如何にも古雅な東洋趣味の香ひの高いものであります。これが十數點あります。それから別に古代波斯に屬するものには、黒板博士將來のヘルセボリス及びパサルガデ採集の石片數點、及び出所不明のアッシーリア的の石彫とヒッチャットのものと思はれるテラコッタの浮彫が各一點あります。前者に於いては私は確信がありませんが、後者のヒッチャットであることは若干自信があります。若しさうであれば世にも稀有なもので、當然小アジア内地から發見されたものに違ひないの

であります。

一二 波斯部の二(回教波斯)

それから回教波斯、こゝには極めて優秀なものが多いのであります。波斯藝術品は日本にも若干あるとは聞いて居りましたが、こんな優秀なものが澤山あるとは私は想像して居りませんでした。幸ひにして珍藏家の御好意に依つてそれを出陳することが出来、皆様にも見て頂くことの出来るやうになりましたことは、私共の非常に喜ばしく思ふところであります。併し不足を申せば回教以前の薩珊の藝術品がないのであります。併し回教以後のものは染織、陶器を主とし小畫、金工、圖書等が多數に上り、年代も凡そ第十乃至第十一世紀頃から現代の代表的物件が揃つて居りまして、其の中には世界的逸品とも云ふべきものがあります。一々説明は致し兼ねますが、兎に角回教波斯藝術の一般の氣分を味ふに充分であると思ひます。

それからコンスタンチノープルに於いて造られた織物もありますが、それは場所はトルコであります。其の系統は無論波斯である。波斯の感化は随分廣いのでありますから、波斯以外の地方の作品でも、其の性質が波斯式であれば波斯の部に出陳したのであります。西トルケスタンの小畫數點も、此の意味に於いて波斯の部に列つて居ります。

一三 中央アジア部

それから中央アジアの方に這入つて参ります。中央アジアの品物としては主に敦煌の石窟寺の壁畫の模寫及び矢吹博士の寫して來られるは經典のポートグラフが多數にあります。マルコックが新疆のホッチ・ウといふ所で發掘しました壁畫の色刷寫眞などもあります。敦煌は併し嚴格に言へば中央アジアではない。現に今日でも甘肅省の西の端にあつて、昔から支那の重要な地點である。つまり支那と中央アジアの境であります。便宜上中央アジアの部に編入するのであります。此處の藝術はどういふ系統に屬するかといふと、敦煌は無論支那系統である。前漢の頃から敦煌の名は歴史にも出て居るのであります。古代から漢民族の文化のあつた處であります。どういふ譯で重要なるところかといふと、西の方から支那に入るには否でも此の敦煌を通過しなければならぬ。實は敦煌の東北近距離の安西を通過するのであります。姑らく敦煌を安西の郊外と見て宜しいのであります。西部アジアから支那に通ずる道は三つあります。それは一つは中央線で、疏勒、庫車に由るもの、第二は北線で、綏定、迪化に由るもの、第三は南線で和闐に由るものでこの外にはない。それが甘肅省の安西といふ所で落合ふのであります。これから先は一本道でありまして一路長安に達します。此の安西の直ぐ傍に敦煌があるのでありまして、それ等のことは何れ矢吹博士からお話になりませうから、私は申上げませぬがさういふ重要地點に在る。随つて、昔から此處は文化の發達があつたかと考へられます。其の系統は、支那系統に若干の印度系統

が加はつてゐる。佛畫を御覽になると、勿論それは支那式の畫でありますけれども、中には純支那ではない印度趣味の入つた畫が少からずある。日本の法隆寺の壁畫などにも、何處か似たやうな所があるのであります。極く僅かであるが極西の影響も認められるのであります。庫車や和圓の藝術になりますと、可なり顯著なる印度乃至西亞の氣分が現はれて來るのは申す迄もありません。

一四 琉球部

琉球部は染色を主とするのでありますが、其の系統を研究すべき参考資料として印度、暹羅、爪哇等の染色が出陳されて居ります。それ等は何れも回教以後のものでありますから、古代印度系の藝術ではない。印度藝術と云ふものは、大別しますと、古代印度回教印度との二つに分けることが出来る。其の印度の回教藝術は波斯に負ふ所が非常に多い。印度回教はアフガニスタンのマームッドが印度を侵略し、アフガン王朝が印度の過半を支配し、引きつゞいてモグル王朝が殆ど印度の全部を統一したので、回教が全土に擴がりましたが、元來が波斯系の傳來でありますから、當然波斯趣味が濃厚であります。或は印度の織物を御覽になれば、印度ではない、波斯であらうと仰しやる方があるかも知れぬぐらゐりますが、それが琉球と關係があるのであつて、琉球の方の参考資料に出て居ります。

それからシヤムの染工が二點あります。これも琉球染色の参考資料となるのであります。シヤムは申す迄もな

く印度系統である。併しながらシヤムにはシヤム特有の癖がある。而して又一方には支那の感化も可なり多いのであります。それから爪哇、これは印度と同じやうな性質であります。無論地方的特色はあるのであり、支那氣分も大いに漂つて居り、シヤムの色彩も濃厚であります。

此の参考資料を御覽になつて、今度は琉球の方にお出でになると此の聯絡がよく分るので、琉球の藝術は印度系の藝術に負ふところが少くない。なぜかと申せば、それは此の前の琉球藝術展覽會の節に、私が簡単に申上げたことを記憶して居りますが、琉球は貧弱な境土でありますから物資に乏しい、其の物資を得る爲めに遙々と安南、ボルネオ、爪哇、マラッカ、更に遠くビルマ邊まで出稼ぎをしまして、其處から珍らしい物資を仕入れて支那に献上したり、自分の國に供給したりしてゐたからであります。琉球と支那の關係は勿論更に親密であります。今回は支那の品物は只だ一點参考資料として出品してあるに過ぎませぬが、これは支那のものは餘りによく分つて居りまして、皆さんも十分に御承知でありますから、今更多くの實例を申上げる必要がないからであります。支那系の藝術は東洋に於いて嶄然一種の特色を發揮するものであります。元來黃河、揚子江の流域に發達したので、それが東漸したものが朝鮮に入り、又日本にも入り更に又琉球にも入つた。加之更に發展して南洋にも印度にも入り、別に又西亞にも進出したことは既述の如くであります。今回出品されたものは矢張り支那の染工であります。琉球の染工との關係がよく説明されて居るのであります。終りに日本の参考品も出陳してあります。説明は省略致します。

一五 朝鮮部

朝鮮の方は陶工として出陳してあります。これもどなたもよく御承知のことです。私がかゝで申し上げる必要はないやうであります。朝鮮の藝術は殆ど支那の藝術と同じといつても宜い、所謂同巧異曲である。漢時代の朝鮮藝術は樂浪の遺跡に見るが如く、それは勿論純然たる漢藝術であります。それから三國時代になりましては百濟も、新羅も皆支那の六朝時代と殆ど同じであります。それから新羅統一時代のものは唐の系統、高麗時代のものは宋元の系統、李朝のものは明、清の系統であります。此のたび出陳されたものは、これは餘程優秀なものであつて、支那に於いても容易に見られないものであります。其の藝術的性質から申せば、支那系統と同じものと云つても差支ないのであります。なほ所藏者の倉橋さんの考案で、日韓支三國の製品を一時の下に比較研究し得るやうに陳列してありますから御注意を願ひます。何れ精しいことは倉橋さんから御話があることと思ひます。

以上出陳の物件に就いて、大體系統的にお話を申し上げましたが、私からはこれ以上詳しいお話をする時間がありません。此の邊で止めて置きますが、最後に此のたびの展覽會に對する私の感想を少し申し上げ、さうして特に此の點に就いて皆様のお考へを煩はしたいと思ふのであります。

一六 アジアは一なり

それは此のたびの三千點に餘る多數の品目は、アジア全體に互り、アフリカの一部分に及ぶ廣汎なものであつて、これを御覽になれば一眸の下にアジア全體の藝術の古今の狀態が分るのであります。洵にこれは啓明會の御催しに對して感謝措く能はざるところであります。さて其の品目をずつと見渡しましたところで、斯う云ふことを私は感ずるのであります。それは古い昔話であります。嘗て美術學校長であられた岡倉覺三氏が「The Ideals of the East」と云ふ英文の本を著はされました。其の劈頭第一に何と書かれたといふと、Asia is one.「アジアは一なり」、斯ういふ文句であります。それから諄々として東洋の理想といふものを述べられたのである。其の時は只だ軽く面白いことを言はれたと思つただけで、左まで深く感じませぬでしたが、今日にして始めて岡倉氏の書かれた巻頭の三字が意味の甚だ深いことを知るのであります。今日エチプトから日本、琉球までの藝術をずつと見渡しますと、果してアジアは一なりであります。無論其の間に種々なる變化があつて、千紫萬紅とでも言ひますか、いろ／＼異つたものがありますけれども、どこか貫通した一つの精神が徹つて居るといふことをどうしても感ぜずには居られないのであります。其の私の感想の一例としまして、最も極端な例は、西のはづれのエチプトから出ましたコブチックのついで織が、其の圖案といひ色合といひ、私の直感に、これは東のはづれの日本の法隆寺の一隅にある中宮寺の天壽國曼陀羅と、そつくりだといふことを感じたのであります。多分御同

感だらうと思ひますが、どうぞ特に注意して御覽を願ひたい。もし私の感じが誤りでないとしますと、コブチ・クと日本と東西幾千里かけ離れて居つて、しかも同じやうな氣分の、同じやうな性質のものが存在するといふことは實に奇蹟であります。此の兩國の間には大沙漠もあり、峻嶺もあり、其の間に無数の異なつた民族が國を立て、異なつた文化を保つて居るのに、どうして日本へ飛んで來たのであるか謎かにこれは奇蹟である。畢竟中間諸國の文化に、彼我交渉を媒介する所の精神があるからで結局アジアは一なり。アジア藝術を貫く精神は一つではないかと思ふ。これが私の第一の直感であります。

一七 アジア古藝術の保存

更に斯ういふことを感じます。私が見ましたところでは、先づ第一に波斯品、實に世界にこんな結構な美しいものがあらうかと思ふ位、又朝鮮の陶器類を見ても同じ感じが起る。又琉球を見ると、こんな美しい染物は世界中何處にもなからうと思ふ。さう感服して居つては感服し切れないのでありますが、實際感服し切れないくらゐに思ふ。併しながらそれが今後どうなるであらうか、それは時と共にだん／＼失はれて無くなつて行くのであります。世の文明は時々刻々に進んで行くと言ひますが、それと逆比例に古藝術の方は時々刻々に消滅して行くやうに感じられないことはない。いかにも皮肉な現象であります。例之ば現にコブチ・クの優秀なる藝術は疾うの昔に死んでしまつて居る。回教藝術は残つて居るけれども、回教諸國は殆ど總て亡國であり、其の藝術は昔日

の俤を止めないまでに衰へてゐる。次に印度はどうであるか、印度も亡國であつて、其の藝術も振はない。支那はどうか、支那も私は亡國と言ひたい、亡國と言ふと支那人に怒られるかも知れないが亡國と言ひたい。そして其の藝術も唐の全盛時代に比べれば謂ふに足らぬ。朝鮮も國としては亡びてしまつて、其の藝術は甚しく低下してゐる。要するに古代に於いて藝術の發達した國は亡びて居り、其の藝術の遺品は漸次に失はれて行く。私はどこまでも其の優秀なる古代藝術は保存して行かなければならぬと思ふ。此の貴い藝術品は今にしてこれを保存しなければ取返しつかないことになる。此の古代藝術、殊に東洋を一貫する精神を有つてゐる東洋藝術を保存し、これを永遠に傳へることに努力するのが日本人の責任である。思へば今東洋に於いて生きてゐる國は獨り日本ばかりである。其の他は皆死んでゐると云つて差支はないやうである。然らばアジアを一貫する精神を代表し、其の精神に由つて造り出された古代藝術を永遠に保存するのは日本の使命でもあり、又それを遂行することが日本の誇りでなくてはならぬと思ふ。

一八 日本藝術振興

又更に他の一面から考へて見れば、此の如く東洋に優秀なる藝術が澤山あるのに、我々は何を苦んで日本の藝術が振はないといふことを憂ふる必要がありますか。ヨーロッパの新しい藝術ばかりを追ひかけるのが能ではない。靜かに東洋の全局面を見渡せば、とても學びきれない程多量の資料が遺つてゐる。それを棄て、ヨーロッパ

アメリカの最近の藝術のみに没頭する——ヨーロッパ、アメリカの藝術を尊重することは勿論悪くないが、併しながら一面に於いて東洋に斯ういふ立派な、古代藝術があるのを棄て、顧みないといふことはいかにも残念である。作家の立場から見れば、尙更これが好い参考資料になるだらうと思ひます。種々なる意味に於いて此の有意義なる展覧會を開催されました啓明會に對して私は厚く感謝すると同時に、皆様方に此の展覧會をどうか有意義に見て頂きたいといふことを希望致します。波斯の物は珍らしかつたとか、朝鮮の物が面白かつたとか、琉球の物が美しかつたとか、只それだけでは洵に物足らぬのでありまして、どうかそれだけでなく更にこれ等の藝術品を御覧になつて、東洋の一貫した精神を此の藝術品の中から感得して頂いて、さうして日本の將來の藝術の發達、更に進んでは日本の將來の國運の發展の爲めに、其の精神を發揮する事に御考慮を煩はし度い。斯くして始めて啓明會でお催しになつた此の展覧會の意義といふものが徹底するのではなからうかと思ふのであります。豫定の時間になりましたからこれで御免を蒙ります。

(啓明會第二十八回講演集所載)

東洋藝術の系統終

東洋建築史概説